山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第45集

花鳥山遺跡
水呑場北遺跡

笛吹川農業水利事業に伴う発掘調査報告書

1989.3

山梨県教育委員会
関東農政局笛吹川農業水利事業所

花鳥山遺跡
水呑場北遺跡

笛吹川農業水利事業に伴う発掘調査報告書

1989.3

山梨県教育委員会
関東農政局笛吹川農業水利事業所

序

1976年度から始まった笛吹川農業水利事業に伴う事前調査も、本年度の水呑場北遺跡の調査で終了致しましたが、この13年間に26遺跡が調査・報告されました。本報告書は、その最後の報告書となるもので、1987・88両年度に実施した同水利事業による管水路埋設工事に伴う事前発掘調査の結果をまとめたもので、対象遺跡は花鳥山・水呑場北の両遺跡であります。

花鳥山遺跡は甲府盆地の南東部、山梨県東八代郡八代町と御坂町とにまたがる花鳥山丘陵上に位置し、縄文時代前期後半の遺跡として、旧来より本県のみならず全国的にも著名なものとなっております。調査の歴史は古く、大正年間あるいはそれ以前から遺物が多く採取されており、また本県考古学界の先駆者である仁科義男氏・野沢昌康氏・山本寿々雄氏などにより数回の調査が行われ、一部の資料は京都大学の収蔵資料ともなっております。さらにこれらの調査が契機となって1954・55両年には国学院大学による発掘調査が行われ、住居址3軒と膨大な出土遺物が得られ、その一部は『八代町誌』にも掲載されております。今回の調査はそれ以来、実に30余年振りということになります。幅2m程ではありますが、遺跡を縦断するかたちで調査が行われ、およその遺跡の広がりを確認することができました。また、多くの遺構・遺物が確認されておりますが、とくに大地上の前期の住居址では初めての、栽培種と考えられるエゴマの確認を始め、球根類やドングリ類、あるいはシカ・イノシシといった獣骨、魚骨など「食生活」にかかわる部分で多くの成果が得られました。また水呑場北遺跡は甲府盆地の南東部に連なる曽根丘陵の西端部、西八代郡三珠町に位置し、縄文時代早期の押型文土器を出土する遺跡として知られておりますが、今回の調査では該期の土壙1基のほか、縄文時代の土壙や古墳の周溝などが確認されております。

本報告書は、縄文時代の食生活に関する部分に重点をおき、とくに笠原安夫・藤沢浅・渡辺　誠・松谷暁子の四人の先生方にご執筆戴きました。

本報告書が、多くの方々の研究資料としてご活用いただければ幸甚です。

末筆ながら、種々ご協力を賜った関係機関各位、並びに直接調査に従事していただいた方々に厚く御礼申し上げます。

1989年3月

山梨県埋蔵文化財センター
所長　磯貝正義

例　　言

1．本報告書は、昭和62年度に笛吹川農業水利事業国営副幹線管水路敷設工事に伴って発掘調査された東八代郡御坂町・八代町の花鳥山遺跡、ならびに昭和63年度の同事業に伴って発掘調査された西八代郡三珠町水呑場北遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は、農林水産省関東農政局の委託と文化庁の国庫補助金を受けて、山梨県教育委員会が実施した。

3．発掘調査および出土品の整理は山梨県埋蔵文化財センターで行い、長沢宏昌が担当した。

4．本報告書の編集は長沢が行い、第Ⅰ章を長沢が、第Ⅱ章を埋文センター臨時職員高野玄明が執筆した。第Ⅲ章には前岡山大学農業生物研究所教授　笠原安夫・前同研究所技官　藤沢浅・名古屋大学助教授　渡辺誠・東京大学総合研究資料館　松谷暁子の先生方にご執筆戴いた。

5．写真撮影は、遺構を長沢および塚原明生（日本写真家協会会員）が、遺物を塚原が行った。また、展開写真は小川忠博氏によるものである。

6．本報告書にかかる出土品ならびに記録図面、写真等は一括して山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。

7．出土品整理参加者

石川操　松野和美　遠藤映子　内藤真千子　後藤良美　山路宏美　雨宮穂波　山本恵子　石田文治郎

8．発掘調査及び本報告書の作成にあたり、下記の方々のご協力を得た。記して謝意を表する次第である。

笠原安夫（前岡山大学農業生物研究所教授）
藤沢　浅（前同研究所技官）
渡辺　誠（名古屋大学助教授）
松谷暁子（東京大学総合研究資料館）
金井安子（調布市郷土博物館）
小野正文（釈迦堂遺跡博物館）
斎藤修二（八代町教育委員会）
野田明人（御坂町教育委員会）
奥山和久（八王子市教育委員会）

目　　次

第Ⅰ章　花鳥山遺跡の調査
第1節　調査状況 …… 1
1　調査に至る経過 …… 1
2　調査組織 …… 1
第2節　遺跡概況 …… 2
1　遺跡の位置 …… 2
2　遺跡周辺の地理的・歴史的環境 …… 2
3　花鳥山遺跡研究史 …… 3
4　調査方法 …… 6
5　標準層位 …… 6
第3節　遺構と遺物 …… 9
1　概要 …… 9
2　住居址と出土土器 …… 9
3　土壙と出土土器 …… 39
4　包含層出土土器 …… 54
5　石器 …… 61
6　特殊遺物（土製品・石製品・その他の特殊遺物） …… 99
7　グリッド出土土器 …… 105
8　土器内面のオコゲ …… 105
9　自然遺物 …… 108

第Ⅱ章　水呑場北遺跡の調査
第1節　調査状況 …… 111
1　調査に至る経過 …… 111
2　調査組織 …… 111
第2節　遺跡概況 …… 112
1　遺跡の位置と周辺の環境 …… 112
2　調査方法と標準層位 …… 112
第3節　遺構と遺物 …… 113
第4節　調査区域周辺分布調査 …… 124
第Ⅲ章　考察
第1節　花鳥山遺跡出土の炭化種実塊ならびに微小種子の同定 …… 129
第2節　花鳥山遺跡出土の自然遺物 …… 137
第3節　水呑場北遺跡出土土器付着球根状炭化物の識別について …… 143
第4節　花鳥山遺跡の諸問題 …… 146

挿 図 目 次

第 1 図　花鳥山遺跡位置図
第 2 図　昭和30年調査区と位置関係図
第 3 図　昭和30年確認の住居址と今回の調査区位置図
第 4 図　調査全体図
第 5 図　1号住居址
第 6 図　1号住居址貯蔵穴断面図
第 7 図　1号住居址炉
第 8 図　2号住居址
第 9 図　3号住居址
第 10 図　3号住居址炉
第 11 図　3号住居址出土土器
第 12 図　4号住居址
第 13 図　4号住居址炉
第 14 図　4号住居址出土土器その1
第 15 図　4号住居址出土土器その2
第 16 図　4号住居址出土土器その3
第 17 図　4号住居址出土土器その4
第 18 図　5号・10号住居址
第 19 図　5号住居址炉1
第 20 図　5号住居址炉2
第 21 図　5号住居址炉3
第 22 図　10号住居址炉
第 23 図　5号住居址出土土器
第 24 図　10号住居址出土土器
第 25 図　6号住居址
第 26 図　6号住居址炉
第 27 図　6号住居址出土土器
第 28 図　7号住居址
第 29 図　7号住居址炉
第 30 図　8号住居址
第 31 図　8号住居址炉
第 32 図　9号住居址
第 33 図　9号住居址炉
第 34 図　9号住居址サンプリング位置図
第 35 図　9号住居址出土土器その1
第 36 図　9号住居址出土土器その2
第 37 図　11号・12号住居址
第 38 図　11号住居址炉
第 39 図　11号住居址出土土器
第 40 図　13号住居址
第 41 図　13号住居址炉
第 42 図　13号住居址出土土器その1
第 43 図　13号住居址出土土器その2
第 44 図　14号住居址
第 45 図　14号住居址出土土器
第 46 図　15号・18号住居址
第 47 図　15号住居址炉
第 48 図　18号住居址炉
第 49 図　15号・18号住居址出土土器その1
第 50 図　15号・18号住居址出土土器その2
第 51 図　16号住居址
第 52 図　16号住居址出土土器
第 53 図　17号住居址
第 54 図　17号住居址出土土器
第 55 図　19号・20号・21号・23号住居址
第 56 図　20号住居址炉
第 57 図　21号住居址炉
第 58 図　23号住居址炉
第 59 図　20号住居址出土土器
第 60 図　21号住居址出土土器
第 61 図　23号住居址出土土器
第 62 図　22号住居址
第 63 図　22号住居址出土土器
第 64 図　24号住居址
第 65 図　住居址出土土器その1
第 66 図　住居址出土土器その2
第 67 図　住居址出土土器その3
第 68 図　1号・2号土壙
第 69 図　1号土壙微細図
第 70 図　3号～6号土壙
第 71 図　3号土壙微細図
第 72 図　7号土壙微細図
第 73 図　8号～11号土壙
第 74 図　13号・15号土壙微細図
第 75 図　16号土壙位置図
第 76 図　16号土壙微細図
第 77 図　18号土壙微細図

第 78 図　23号土壙微細図
第 79 図　24号・25号・27号～30号土壙
第 80 図　32号・33号土壙および96グリッド包含層下土器出土状況
第 81 図　33号土壙微細図
第 82 図　土壙出土土器その１
第 83 図　土壙出土土器その２
第 84 図　土壙出土土器その３
第 85 図　包含層平面図および断面図
第 86 図　包含層出土土器その１
第 87 図　包含層出土土器その２
第 88 図　包含層出土土器その３
第 89 図　包含層出土土器その４
第 90 図　包含層出土土器その５
第 91 図　打製石斧その１
第 92 図　打製石斧その２
第 93 図　打製石斧その３
第 94 図　打製石斧その４
第 95 図　磨製石斧
第 96 図　石皿その１
第 97 図　石皿その２
第 98 図　石皿その３
第 99 図　磨石・凹石その１
第100図　磨石・凹石その２
第101図　磨石・凹石その３
第102図　磨石・凹石その４
第103図　磨石・凹石その５
第104図　磨石・凹石その６
第105図　石鏃割れパターン模式図
第106図　石鏃その１
第107図　石鏃その２
第108図　石鏃その３
第109図　石鏃その４
第110図　石鏃その５
第111図　石錐その１
第112図　石錐その２
第113図　石匙その１
第114図　石匙その２
第115図　軽石製品
第116図　その他の石器
第117図　土製円盤
第118図　人形状土製品・土器片錘
第119図　ミニチュア土器
第120図　関西・東海系土器
第121図　玦状耳飾り
第122図　その他の土製品
第123図　石製品
第124図　グリッド出土土器その１
第125図　グリッド出土土器その２
第126図　水呑場北遺跡位置図
第127図　調査全体図
第128図　１号住居址
第129図　１号・２号土壙
第130図　３号土壙位置図
第131図　３号土壙微細図
第132図　５号・６号土壙位置図
第133図　５号・６号土壙微細図
第134図　７号～10号土壙
第135図　７号土壙
第136図　８号土壙
第137図　９号土壙
第138図　11号土壙
第139図　12号・13号土壙
第140図　１号溝位置図
第141図　号溝微細図
第142図　２号溝・４号土壙
第143図　７号土壙出土土器
第144図　縄文土器
第145図　縄文土器拓本
第146図　１号溝出土土師器・須恵器
第147図　出土石器その１
第148図　出土石器その２
第149図　出土石器その３
第150図　調査区周辺分布調査地点
第151図　調査区周辺表採資料
第152図　エゴマ断面模式図
第153図　花鳥山遺跡展開推定図
第154図　天神遺跡調査全体図
第155図　釈迦堂遺跡群Ｓ－１区調査全体図
第156図　諸磯式土器編年図

図 版 目 次

図版１　花鳥山遺跡と一本杉
図版２　１号住居址
図版３　上　１号住居址　下　２号住居址
図版４　３号住居址
図版５　４号住居址
図版６　上　６号住居址・13号土壙　中・下　７号住居址
図版７　上　８号住居址・14号土壙　中　９号住居址　下　８・９号住居址
図版８　上　５号・10号住居址　中　11号・12号住居址　下　15号・18号住居址
図版９　上　17号住居址　下左　17号住居址から下部　20・21号住居址
図版10　上　１号土壙　中　３号土壙　下　１号～６号土壙
図版11　上　18号土壙　中　32号土壙・96Ｇ包含層下土器出土状況出土　下　33号土壙
図版12　４号住居址出土土器
図版13　４号住居址出土土器
図版14　上　５号住居址出土土器　中　９号住居址出土土器　下　10号住居址出土土器
図版15　上・中　13号住居址出土土器　下　14号住居址出土土器
図版16　15号・18号住居址出土土器
図版17　上左　23号住居址出土土器　上右　１号土壙出土土器　中　16号土壙出土土器　下左　18号土壙出土土器　下右　32号土壙出土土器
図版18　上　包含層出土土器　中　96Ｇ包含層下出土土器　下　グリッド出土土器
図版19　打製石斧（上　住居址　下　包含層）
図版20　磨製石斧（上・中　住居址　下　グリッド）軽石製品
図版21　石皿（上左　５号住居址　上右　７号住居址　中　９号住居址　下左12号住居址　下右上　13号住居址　下右下　28号土壙）
図版22　石皿（右上　包含層　その他　グリッド・表採）
図版23　石鏃（上左　住居址　下左　包含層　右グリッド）　ドリル（左　住居址　右　グリッド）　石匙（左　住居址　右　グリッド）
図版24　磨石（上　稜磨石　下　磨石）
図版25　磨石（凹石）　小型磨石　その他の石器
図版26　上　土製円盤　中上　人形状土製品　中下　土錘　下左　土製玦状耳飾り　下右　ボタン状貝製品
図版27　関西・東海系土器
図版28　上　異色粘土使用土器　中　石製品　下　網代痕モデリング陽像
図版29　土器内面オコゲ
図版30　展開写真
図版31　展開写真
図版32　水呑場北遺跡全景
図版33　上・中　１号住居址　下　１号・２号土壙
図版34　３号土壙
図版35　上左　５号・６号土壙　上右　７号土壙押型文土器　中　８号土壙　下　９号土壙
図版36　上・中　１号溝　下　２号溝・４号土壙

図版37　上　３号土壙出土土器　中　同内面オコゲ　下　５号土壙出土土器
図版38　１号溝出土須恵器・土師器
図版39　花鳥山遺跡出土炭化種子塊
図版40　現生エゴマ
図版41　現生エゴマ
図版42　出土エゴマ
図版43　出土エゴマ
図版44　出土エゴマ
図版45　出土エゴマ
図版46　出土エゴマ
図版47　出土ミズキまたはクマノミズキ
図版48　出土アブラナ類
図版49　出土エノキグサとシロザ
図版50　出土スベリヒユとニワトコ
図版51　出土シダの胞子とスゲ類
図版52　動物遺体１
図版53　動物遺体２
図版54　植物遺体１
図版55　植物遺体２
図版56　植物遺体３
図版57　植物遺体４
図版58　植物遺体５
図版59　水呑場北・花鳥山・釈迦堂遺跡群出土鱗茎状炭化物の実体顕微鏡写真
図版60　現生ユリ科およびヒガンバナ科植物の鱗茎の実体顕微鏡写真
図版61　水呑場北遺跡出土鱗茎状炭化物の走査型電子顕微鏡写真
図版62　炭化した現生ユリ科鱗茎の走査型電子顕微鏡写真
図版63　炭化した現生ユリ科とヒガンバナ科の走査型電子顕微鏡写真

表　目　次

表 1 表　打製石斧一覧表 …… 66
第 2 表　磨製石斧一覧表 …… 68
第 3 表　石皿一覧表 …… 72
第 4 表　磨石一覧表 …… 79～81
第 5 表　石鏃一覧表 …… 87～90
第 6 表　ドリル一覧表 …… 90・92
第 7 表　石匙一覧表 …… 95
第 8 表　軽石一覧表 …… 96
第 9 表　その他の石器一覧表 …… 96
第 10 表　使用痕ある剥片数量表 …… 98
第 11 表　土製円盤一覧表 …… 100
第 12 表　人形状土製品・土器片錘一覧表 …… 100
第 13 表　関西・東海系土器出土位置表 …… 104
第 14 表　8号住居址出土炭化種子 …… 129
第 15 表　9号住居址出土炭化種子 …… 129～130
第 16 表　包含層出土炭化種子 …… 130
第 17 表　ミズキの大きさ …… 130
第 18 表　骨類一覧表 …… 139
第 19 表　オニグルミ一覧表 …… 139～140
第 20 表　クリ一覧表 …… 140
第 21 表　ドングリ類一覧表 …… 140～141
第 22 表　ドングリ類の分類 …… 141
第 23 表　球根一覧表 …… 142

第Ⅰ章　花鳥山遺跡の調査

第１節　調査状況

１　調査に至る経過

昭和62年９月17日	文化庁に発掘通知を提出する。
昭和62年10月５日～９日	調査予定地内７ケ所にトレンチを入れる。
昭和62年10月12日	発掘調査を開始する。
昭和62年12月26日	発掘調査を終了する。
昭和63年１月12日	石和警察署に遺物の発見通知を提出する。

２　調査組織

調査主体	山梨県教育委員会
調査機関	山梨県埋蔵文化財センター
調査担当者	長沢宏昌（県文化財主事）
調査員	高野玄明（現　山梨県埋蔵文化財センター） 林部　光（現　境川村教育委員会）
作業員	斎藤つね子　江川勝子　斎藤多喜子　高橋英子　角田濃子　長尾美子　大沢恵美子　角田寛子　荒川奈津江　渡辺徳子　花田恵美子　金子正子　藤巻みち子　長田久美子　矢崎ます子　矢崎喜美江　高橋周子　大鷹よし子　志村智恵子　星野松子　堀内とし江　畑山民代　杉岡みつ子　藤巻公恵　山下恒子　田中富江　河野堯江　笠井けい子　出月遊亀子　矢崎よ志子　長田和子　長田可祝　長田純子　山本幸江　鈴木寿美恵　弦間タツ子　堀内政子　池水やす子　加藤高尾　岩間洋子　岩間とく子　岩間幸子　弦間洋子
調査協力機関	八代町教育委員会 御坂町教育委員会

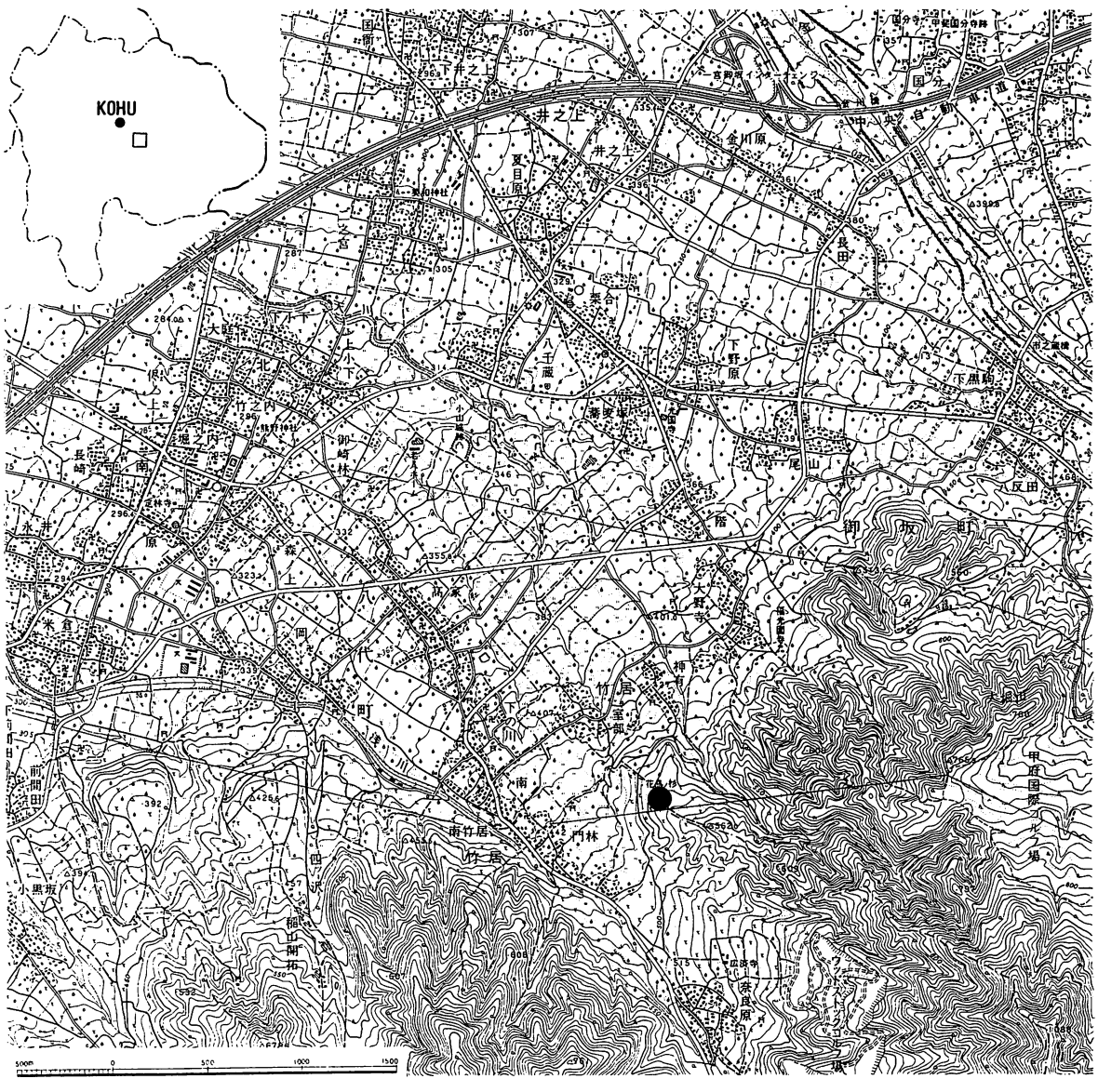
第２節　遺跡概況

１　遺跡の位置

山梨県東八代郡御坂町・八代町竹居字花鳥に所在する。

２　遺跡周辺の地理的・歴史的環境

花鳥山は御坂山塊の北麓に位置する丘陵である。花鳥山山頂は、標高564.9ｍを計るが、ここからは急激に傾斜がきつくなり、御坂山塊へと続いて行く。花鳥山丘陵は北北西方向に傾斜しており、丘陵上には傾斜と起伏はあるものの、200ｍ四方程の平坦部が存在する。この平坦部の先端部に「花鳥の一本杉」がある。一本杉は花鳥山のシンボルでもあるが、この地は以前より景勝地として知られており、甲府盆地が一望できる。一本杉を中心としたこの一帯は、中世から近世にかけて幾度か合戦の舞台となっており、とくに大永三年には小山城主穴山伊予守信永と南部下野守が戦ったと伝えられている。このように、当地域は古戦場として知られ、史蹟名勝天然紀念物保存法により、大正十三年には史蹟花鳥山として指定されている。現在は史跡には指定されていないもの



第１図　花鳥山遺跡位置図

の、前述したような景勝地であり、桜の季節などには家族連れで賑わっている。

さて、遺跡は一本杉から上の平坦部に展開し、分布調査の結果からもこの平坦部一帯に広がっていると推定される。遺跡の立地状況を詳細すれば、花鳥山山頂から、標高530m位までは急傾斜となっており遺物の分布も見られない。その部分から一本杉（標高約490m）までが比較的起伏の少ない平坦部となり、そこからは再び急傾斜となって盆地へと下ることになる。この平坦部の北東側は沢となって神有川が北流している。また、南西側約800mには浅川がやはり北流している。さらに遺跡と浅川の中間点には信濃沢と呼ばれる伏流水の湧出点（標高510m）があると言うことであり、水の確保は容易である。

このように遺跡の立地条件としては申し分のないものである。山本氏は花鳥山について全山遺物の包蔵地であるとし、前期だけでなく、早期〜晩期までの良好な資料が得られるとし、国学院大学の調査でも早期、中期、晩期の土器を僅かながらも含んでいることから前期以外の時期の居住の痕跡も明らかである。付近の遺跡について見れば、西方約600mの地点には後期を中心とする三光遺跡があり、ここでも早期〜晩期までの遺物が確認されている。また、この付近からは加曽利B式の注口土器完形品が出土している。前期の遺跡としては、花鳥山遺跡の西方約2kmのところに銚子原遺跡が知られている。この遺跡も花鳥山遺跡同様、北方向に延びる台地上に立地しており、東西・南北とも400m程の平坦地を有する。この部分の標高は400〜420m程を測り、諸磯式土器片が濃密に分布している。台地先端部には県指定史跡である岡銚子塚古墳があるが、その墳丘上からも埴輪に混じって諸磯式土器が採集されるほどである。この遺跡の発掘調査は長らく行われていなかったが、昨年八代町教育委員会による調査が行われ、ごく一部を調査しただけであるが、諸磯式期の住居址数軒が重複して確認されている。遺物の分布が広く、かつ、密度が濃いことからすれば、この遺跡が、花鳥山遺跡に匹敵する規模のものであることが推定される。さらに周辺の前期遺跡の調査例としては、東北東約3kmに横堰遺跡があり、諸磯b式期の住居址と多量の土器が確認されている。また、西約3.5kmには一の沢遺跡群や京原遺跡が知られている。前者は過去の3回の調査で2軒の住居址（共に諸磯b式期）が確認され、後者はごく一部の調査であるにもかかわらず、諸磯期の住居址3軒と土壙数基が確認されており、出土遺物も諸磯期に限られるという良好な状態であるため、規模の大きな、拠点的集落の可能性も考えられよう。

以上の諸遺跡は台地上の遺跡として知られたものであるが、この時期の遺跡は扇状地の低い部分にも営まれている。花鳥山遺跡の付近で見ても、金川扇状地上の数箇所で該期の土器の出土が確認されている。金川左岸だけでも御坂町二之宮・石和町日之出などで工事中に発見されたものや表採されたものが資料として報告されている。この地域の標高は260〜280m程で、甲府盆地で最も低い部分がおよそ250mであることを考慮すれば、この時期の遺跡が盆地及びその周辺全域に広がっていることが予想される。

このように、花鳥山遺跡の周辺には諸磯期の比較的大規模な集落が点在する一方で、小規模な集落もまた存在している。言い換えれば、現在確認されている遺跡の数と位置から、中期が最も繁栄した本県の縄文時代ではあるが、既に諸磯期には中期と同じような遺跡の展開の仕方をしていると言える訳で、その中でもとくに本遺跡の様な大規模な集落は、抜群の生活環境であったことが窺われるのである。さらに生活環境だけでなく、拠点的集落としての機能を備えていたと言えるものであるかもしれない。

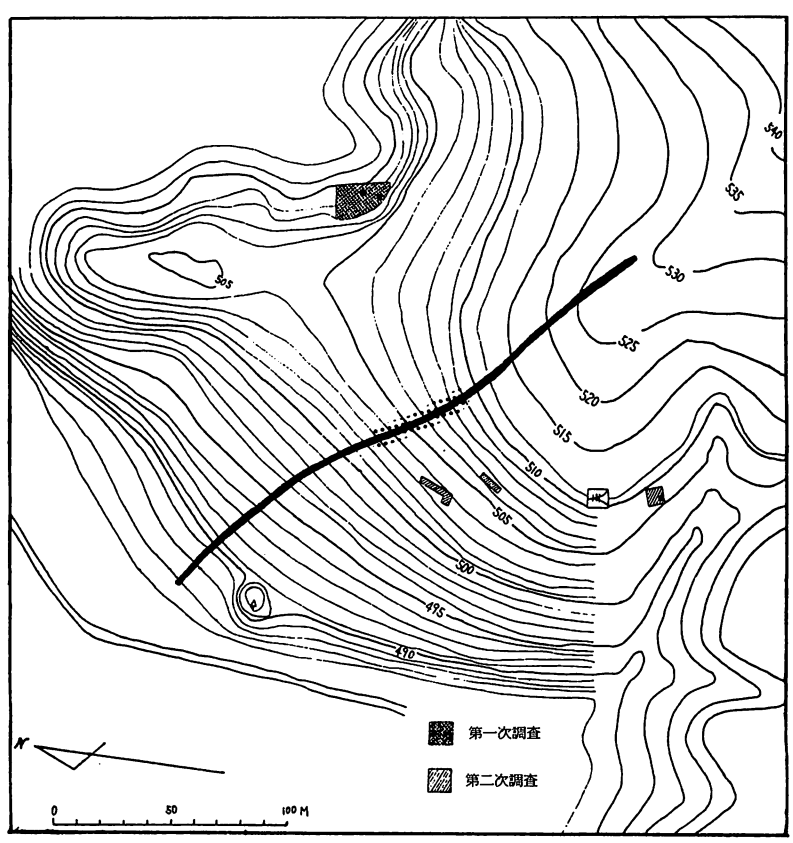
3　花鳥山遺跡研究史

本遺跡は山梨県内で最も古くから知られていた遺跡の一つである。この地から土器片が出土するということが意識されたのは古く、明治27年に発行された『山梨懸市郡村誌』には、当時の東八代郡竹野原村の古跡として花鳥山が紹介されており、その部分の記述に「今モ畑ノ中ヨリ往々甕砕瓦片槍刀ノ腐触セシモノヲ出スコトアレハ」とある。これはこの地が古戦場であることの記述の一部であるが、文中の甕や瓦片とは土器片のことと思われる。このように明治時代以前から花鳥山から土器が出土することは意識されていたのである。しかし、これはあくまでそれだけに過ぎず、先史時代の遺物として認識されるようになるのは大正時代になってからと思われる。本県

考古学界の先駆者である仁科義男氏は、大正年間には本遺跡を調査し、土器片などを採集されたとのことである。しかしながら、この調査結果の詳細は明らかにされておらず、仁科氏の執筆による「先史並原史時代の遺物・遺蹟より復原したる生活形態」（『山梨懸総合郷土研究』1936　所収）にも東八代方面出土として諸磯式土器拓本が載っているものの花鳥山遺跡出土とは書いてない。確実な花鳥山遺跡の資料が文献に紹介され始めるのは戦後のことである。昭和23年には山本寿々雄氏らによる調査が行われており、出土遺物の報告も行われている。山本氏は、諸磯式土器を中心に、その前後の含繊維土器、十三菩提式土器なども含めた資料を７分類し、同時に諸磯式土器に混ざって関西系の土器が見られることも指摘している。この資料の一部は京都大学考古学資料館にも保管されている。このころ、全国的趨勢として、縄文土器の編年を組み立てることが急務とされていた。山梨県では中期以外の資料は確認例も少ないものであったため、前期、とくに諸磯式期の好資料として花鳥山遺跡が注目されたのも当然と言えるものであろう。山本氏によれば、昭和22～23年にかけて、花鳥山遺跡の一本杉付近で前期後半の竪穴３個を確認したとのことであり、すでにこの時期には住居址の存在が確認されていたことになる。これについての詳細は不明であるが、昭和26年の山本氏の報文では、１基についての形状・大きさなどについて触れられている。その表によれば、８ｍ程の楕円形を呈する住居址で、炉は住居址中央部に安山岩を用いているとのことであるから、かなり大型の、しかも石囲炉のある住居址と推定される。

さて、本遺跡の調査は山本氏以外にも、松田保彦氏、野沢昌康氏などにより行われ、出土遺物は石和高等学校に保管されていたようであるが、出土状況その他の詳細は不明であるるしかし、それらが契機となって、昭和29年には国学院大学樋口清之教授が現地を訪れ、その重要性に鑑み、昭和29年～30年の二度にわたる発掘調査が行われることとなった。この調査の正式な報告書はまだ出されていないが、概略が樋口教授により『八代町史』にまとめられている。

それによれば、第１次調査で３ケ所、第２次調査で１ケ所の、計４ケ所が調査されている。第１次調査では近接した２軒の住居址（１・２号）が、第２次調査は鉄塔近くを調査したもので、１軒の住居址（３号）が確認されている。１号住居址は径４ｍの円形を呈し、壁高約60cmと深い。炉は床面中央に５個の礫を用いた石囲炉である。内部施設として壁際に周溝と貯蔵穴が確認されているが、柱穴は確認されていない。２号住居址は１号住居址の南約10ｍに位置する。径2.3ｍの円形を呈し、壁高は40cm弱である。炉は内部に見られず、周溝も存在しない。また、柱穴は３基確認されているが、斜面に作られた水平な床面の中でも、傾斜の下側部分に集中している。この竪穴は、一時的な仮小屋か、住居以外の目的で造られた可能性が推定されている。３号住居址は、径約５ｍの円形を呈し、壁高70cmを測る柱穴は12基確認されているが、主柱穴は８基で、４基づつの使用、つまり建て替えが想定されている。炉は地床



第２図　昭和30年調査区と位置関係図

炉と思われる。以上が確認された遺構についての概要である。遺物については縄文土器、土偶破片、土製玉類、石斧、石鏃、皮剝、石槌、石皿、玉類などを主とし、骨角器、木製品、人骨などは遺存しなかったとされている。現地表から15㎝以下くらいのところから遺物の包含層が形成され、しかも厚いところではそれが70㎝にも及ぶことが指摘されている。包含層と遺構から出土した縄文土器は早期、中期、晩期のものも僅かに含まれるが、主体を成すのは、前期後半の諸磯式土器で、樋口博士はとくに花鳥山式土器という名称を用いている。前期土器では花鳥山式土器に伴って、北白川下層式土器や浮島式類似の土器も確認されている。なお、花鳥山式土器は諸磯ａ式〜十三菩提式までを含むものであり、花鳥山Ⅰ式〜同Ⅳ式までの４型式に分類された。石器は打製石斧が圧倒的に多く、一方で石鏃が少ないのが特徴であるとしている。打製石斧は10〜15㎝程度の大きさのものが多いとされ、現在では横刃形石器にも分類される石器も含んでいると思われる。以上が確認された遺構と遺物の概要であるが、遺跡の面積が広く、かつ、遺物の量が極めて多いことが特徴であるとし、これを繁栄時間の長さというより、人口の集約の多大であったことによるとされた。すなわち、当地域の自然環境が居住地として極めて良好であったため、自然物採集生活ながらも、安定した状況であったことが想定されるとしている。また、本遺跡については、縄文時代前期の遺跡として、全国的にも珍しい雄大で典型的な遺跡であり、出土土器は「花鳥山式土器」として、この時代の標式土器と考えなければならないとされた。

このように、当時の本県ではそれまで確認されたことのない大規模かつ内容の充実した遺跡であることが認識され、花鳥山遺跡は全国にその名が知られるようになったのである。なお、この報告は『八代町誌』に掲載するために執筆されたものであるため、町誌発行の昭和50年（1975年）までこの詳細は明らかにされていない。

さて、国学院大学による昭和31年の調査以降は本遺跡の発掘調査は行われていない。その間、土器が畑に落ち

第３図　昭和30年確認の住居址と今回の調査区位置図

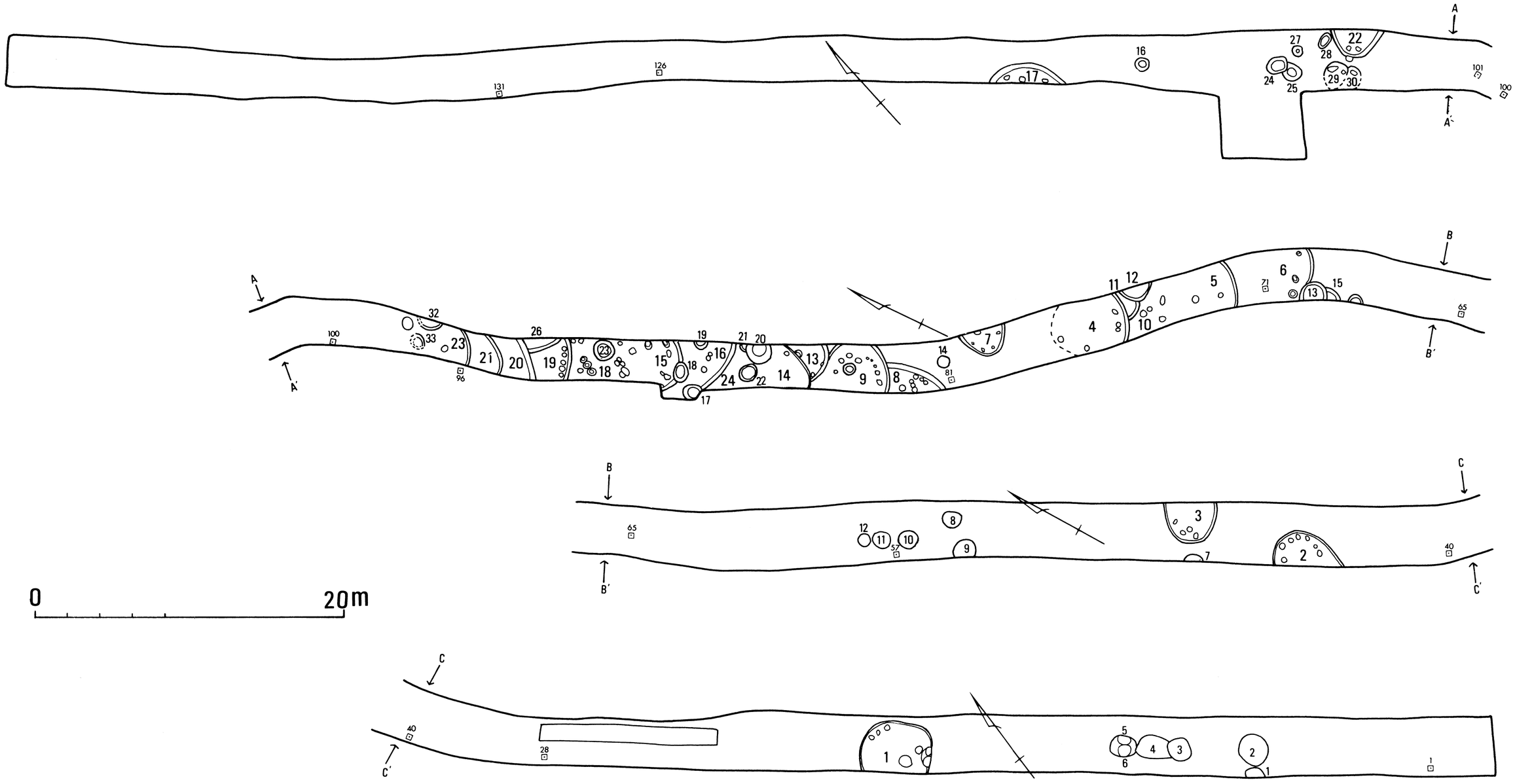
ており行けばいつでも拾えるということで、頻繁に表面採集が行われていたようである。また、その後の開墾も進み、現在では一本杉付近の殆どが桃畑となって、さらに改植の時期を迎えつつあることもあって、桃の抜根の際には完形にちかい土器が出土したこともしばしばであったと聞く。その後、昭和62年（1987年）に遺跡を縦断する農道下に水管を埋設することになり、今回の調査が行われたのである。山本氏の調査を第１次とすれば、国学院大学による第２次調査、そして今回が実に31年振りの第３次調査ということになる。

4　調査方法

今回の調査は、遺跡を縦断する農道下が対象であるため、前述した一本杉から上部の緩傾斜面について全面調査を行った。標高530ｍ～490ｍにかけての位置で、長さ約270ｍ・幅約３ｍの調査である。調査は、農道のコンクリート舗装とバラス混入部分を重機によってはぎ取り、以下を人力で掘り下げた。グリッドは調査幅３ｍと狭いため、２ｍとすることとし、傾斜上部から下部にに向かって１・2・3・・・144・145まで設定した。ただし、農作業用の進入道路部分は確保しなければならなかったため、杭番号28までで一端切って、その下は新たな杭番号40からとしている。したがって、29～39までは欠番となる。また、農道はかなりカーブしており見通しがきかないため、10カ所でグリッド設定の角度を変えてある。１～28、40～57・57～71・71～81・81～96・96～101・101～126・126～131・131～136・136～145で、それぞれ角度を変えた（全体図参照）。このグリッドをもとに全面調査を行った。

5　標準層位

今回の調査では、本遺跡の標準層位を見るための深掘りは調査範囲の制約もあって行っていないが、遺構の集中する部分において必然的に深掘りをすることとなった。とくに、98グリッド付近では、現地表から２ｍ程の掘り下げを行っている。もちろん、全面にわたってローム面までの掘り下げは行っているが、一部はロームを掘り下げている。調査区域上部では農道下のバラスを取り除くとすぐにローム面となり、バラスの一部がロームにくいこむ状況であった。また、下部（一本杉付近）でもバラス下に20～30cm程の褐色土（僅かに遺物を含む）が存在し、それ以下はロームとなる。中間部分がロームまで最も厚い堆積層をもち、最大１ｍにも及ぶ遺物包含層が認められた。



第 4 図　調査全体図

第３節　遺構と遺物

１　概　要

今回の調査では住居址24軒、土壙33基の遺構と遺物包含層が確認された。これらは総て縄文時代前期末、諸磯ｂ～ｃ式期に位置付けられるものである。今回の出土遺物中には早期の押型文土器や黒浜式併行と考えられる含繊維土器なども見られるが、その量はごく僅かである。

第４図に調査全体図を示した。調査区域は農道であるから、本来は一本の全体図とすべきであるが、調査幅が極端に狭いため、便宜上３ケ所で切ってある。図中のＡ－Ａ′・Ｂ－Ｂ′・Ｃ－Ｃ′で重なって一つの全体図となる。図では上段の左端が調査区下端、下段右端が調査区上端である。全体で270ｍ程の調査であるが、調査区域下部（一本杉寄りの部分：図の上段）約50ｍには遺構は確認されていない。また、上部（図の下・中下段）は遺構は存在するものの密度は濃くない。最も遺構・遺物の集中するのは調査区下端から90～150ｍにかけての約60ｍ（全体図中上段）であり、包含層が形成されているのもまたこの部分である。前述したように、今回の調査は花鳥山丘陵のうちの比較的傾斜の緩やかなテラス部分を対象としており、その意味では上端から下端まで条件的な差はない。それにもかかわらず、このような集中区域が確認されたことから、花鳥山遺跡の集落形態は馬蹄形を呈すると推測される。調査区域周辺の遺物分布調査でも、テラス部分のほぼ全域から濃淡はあるものの遺物が採取されていることや、国学院大学の調査で確認された３軒の住居址の位置関係からも推定が可能であろう。第２図は八代町誌に掲載された国学院大学の調査地点に今回の調査区を加筆したものである。ここに示したスクリーントーン部分が最も遺構・遺物の集中していた部分であり、国学院大学の調査した２地点の住居址を考え合わせれば、標高500～510ｍにかけての等高線に沿うような集落の展開が想定されると同時に、規模も非常に大きいことが考えられるのである。国学院大学の調査で確認された住居址のうち第１次調査で確認された２軒の住居址は現在痕跡を留めないが、最も深く掘り込まれ、かつ良好な状態で遺存していた住居址（３号住居址）は調査後埋め戻されなかったために、現在でも凹地となって残されている。その住居址と今回の調査区域との位置関係を示したのが第３図で、今回確認された住居址のうち最も近い住居址（２号住居址）とは直線距離で約50ｍである。この図中の調査区域は全体図中では中下段に相当し、遺構の集中区域とは100ｍ程の距離となる。

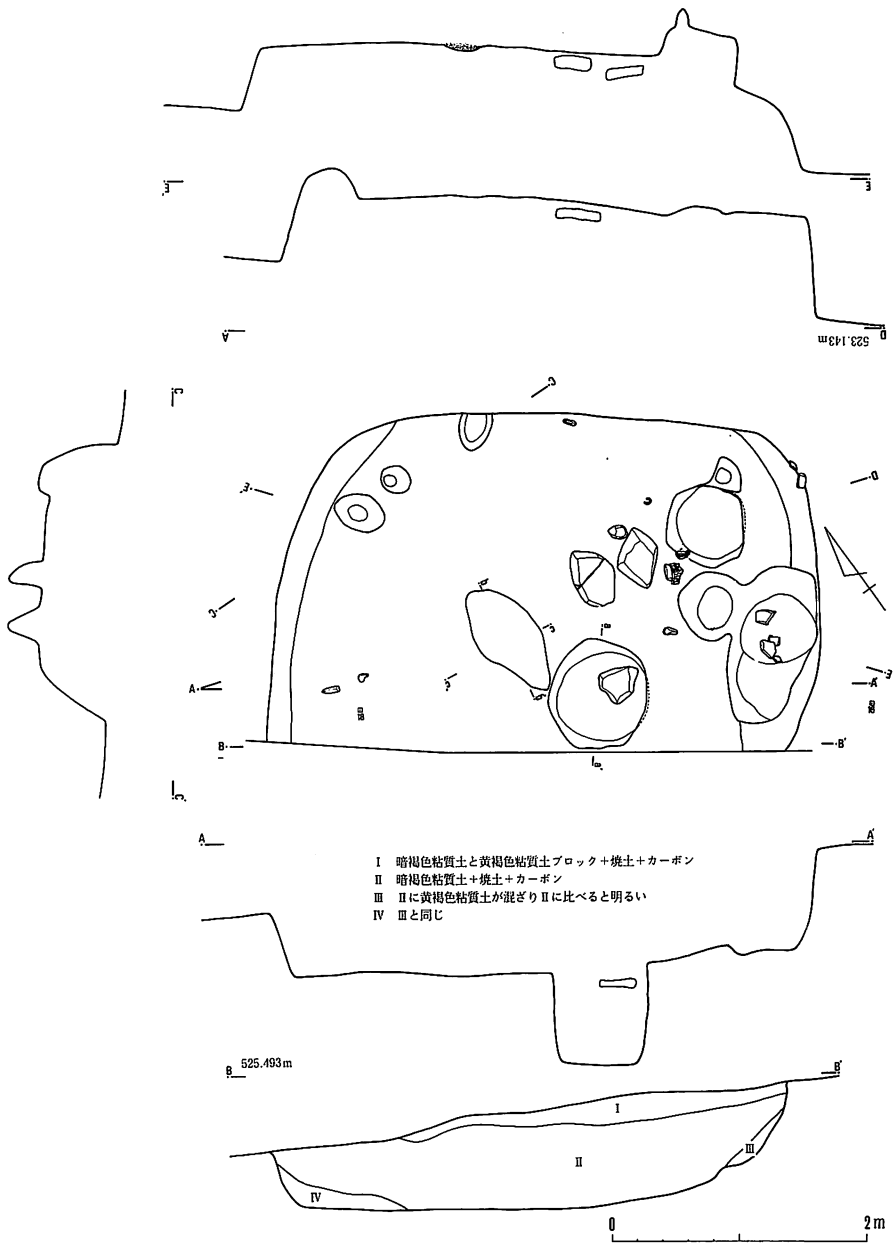
以下に各遺構、遺物について報告するが、遺構の時期を示すこともあって、出土土器だけを遺構とともに示し、それ意外のものはまとめて後述する。

２　住居址と出土土器

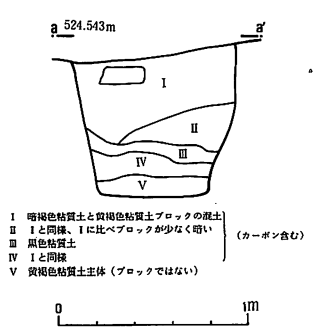
●１号住居址

今回の調査のうち最上部で確認された住居址である。標高は約525ｍを測る。住居址のほぼ中央部が調査できた訳であるが北側は農道建設の際の攪乱を受けていた。

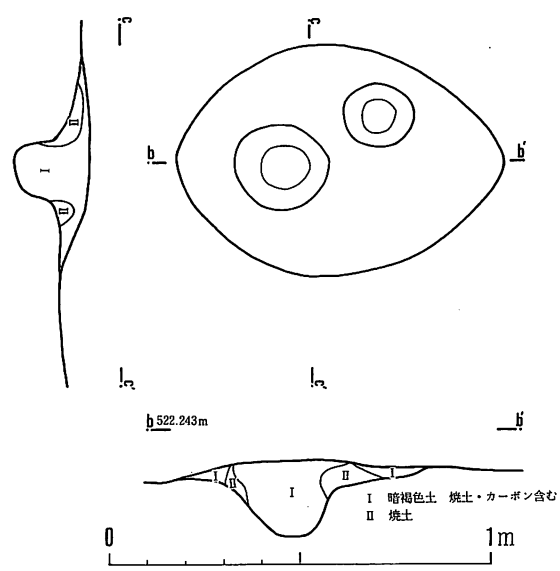
楕円形を呈すると思われ、確認部分での径は約4.3ｍを計る。傾斜面に位置するため床も緩やかに傾斜している。壁は東側（傾斜上部）で約80㎝、西側（下部）で約50㎝である。覆土は非常によく締まっており、焼土・カーボン粒子が多く含まれていた。床は炉付近以外は軟弱である。周溝は確認されず、柱穴と思われる小ピット５基と貯蔵穴と考えられるピット４基が確認されている。この貯蔵穴のうち壁際の２基については掘り込みも浅く、べつの用途を考えるべきであるかもしれない。残りの２基は、深く掘り込まれしっかりした作りのもので、特に炉脇のものは約80㎝の深さで内部にはカーボンが含まれていた。炉は今回確認された総ての住居址に共通するが、特に施設をもたない地床炉である。80×60㎝の楕円形を呈し、内部には20㎝大の掘り込み２ケ所が認められた。焼土はその掘り込みの周辺部にブロック状に確認されている。以上が住居址内の施設の概要であるが、床面には50㎝大の平石２個が置かれていた。これらの平石には明瞭な加工痕は認められなかったが、室内での作業用の台石の可能性もあろう。



第５図　１号住居址



第６図　１号住居址貯蔵穴断面図



第７図　１号住居址炉

遺物は殆ど覆土中からの出土で、土器は非常に少ない。床面直上からは、後述する玦状耳飾りが出土している。

土器（第65図　1～14）

いずれも小破片のうえ、出土量も少ない。諸磯ｂ式１点、十三菩提式２点の他は総て諸磯ｃ式である。沈線文が主体で、これに貼付文や結節状浮線文・沈線文が併用されるものが多い。

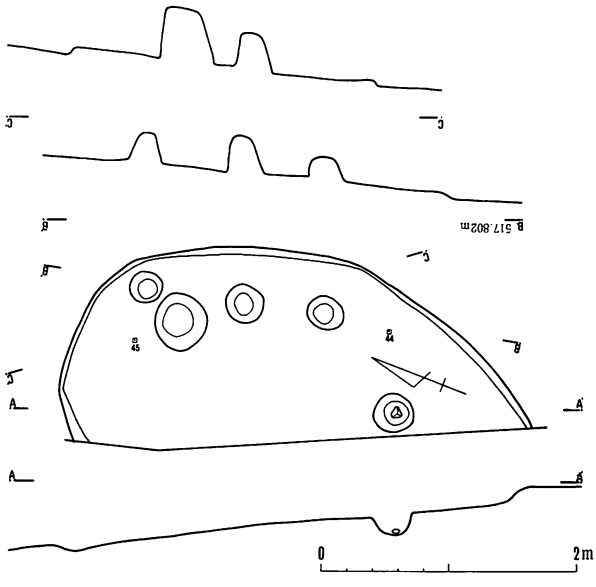
●２号住居址

１号住居址からおよそ40ｍの距離を置いて確認されている。北側半分だけの調査であるが、長楕円形を呈すると思われる。短径で３ｍ程度と推定される。掘り込みの浅い住居址であるため、壁は殆ど残存していない。床面も非常に軟弱である。傾斜に沿って床面が傾いているが、住居址内の東西でも約40cm高低差がある。内部には４基の小ピットがあり、20～40cmの深さである。このうちの１基から拳大の礫１個が確認されただけで出土遺物はない。炉は調査区域外に存在するのであろう。

遺物は殆ど無く、土器片がごく僅かに出土したに過ぎない。

土器（第65図　15・16）

６点の小破片が出土しているだけである。沈線による弧状区画をもつ諸磯ａ式、連続爪型とヘラ切りの見られる同ｂ式、沈線に貼付文の見られる同ｃ式が各１点、他には不明瞭な縄文の施文された小破片３点だけである。

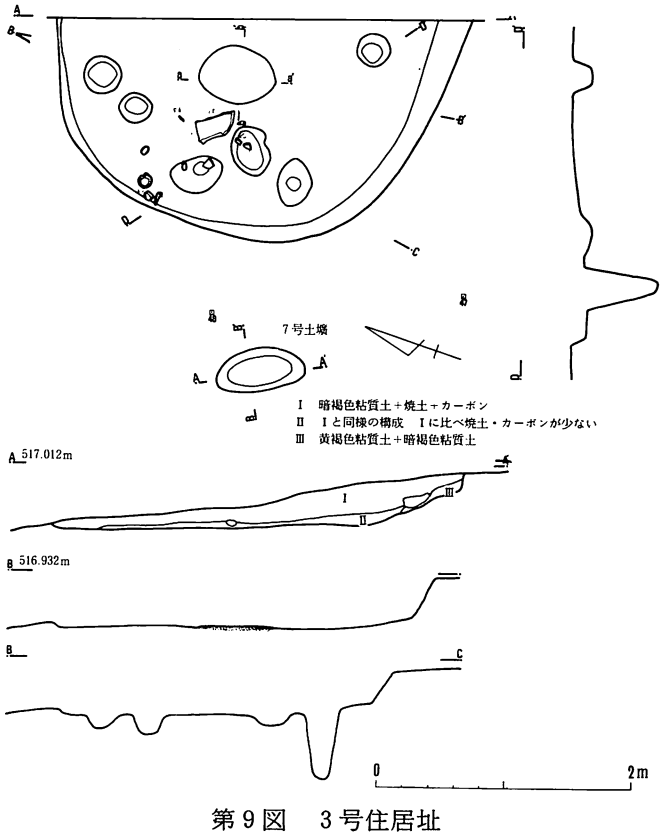


第８図　２号住居址

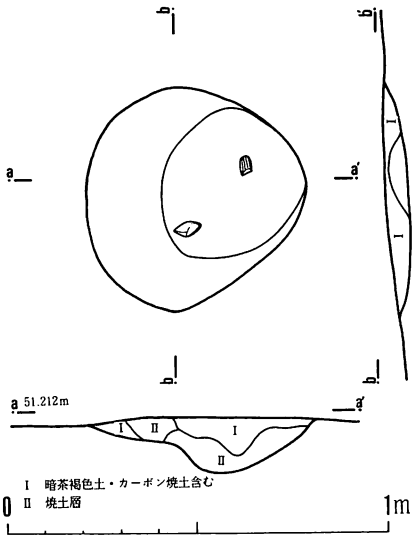
●３号住居址

２号住居址から５ｍ離れて存在する。これも南側半分だけの調査である。やはり楕円形を呈すると思われ、短径は３ｍ程度と推定される。傾斜部分に構築されているにもかかわらず、本住居址の床面はほぼ水平に作られている。覆土はやはり締まっており、焼土・カーボンを含む。比較的小型の住居址のうえ、確認部分のほぼ中央に炉が存在するためか、床は良く踏み固められている。内部には６基の小ピットと炉が確認された。小ピットはいずれも壁際に確認されているもので、柱穴として良いと思われるが、１基が50cm程の深さである他は、10cm程の浅いものである。炉は直径60cm程の円形の地床炉で掘り込みの深さは15cmである。本住居址でも炉の脇に40cm近い平石が置かれていた。これは表面に磨り面が認められるため板状石皿として報告するが、やはり室内での作業台（植物質食糧の潰し）という性格の強いものであろう。

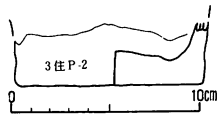
遺物はやはり少ない。



第９図　３号住居址



第10図　3号住居址炉



第11図
3号住居址出土土器

土器（第11図、第65図　17～24）

第11図は北西の壁際、床面直上から出土した、深鉢底部である。実測可能な資料はこの1点のみである。これ以外には拓本に示した8点の小破片があるだけで、諸磯b式が5点、同c式が3点となっている。b式は縄文を地文とし、沈線とヘラ切り浮線の2種類がある。c式は沈線とそれに貼付文がつくものがある。

●4号住居址

3号住居址から約50mの距離をおいて確認された。今回の調査区域中で最も遺物・遺構の集中する部分に位置し、1軒の住居址として最も出土遺物が多い。本住居址は住居址のほぼ中央部を調査した。10号・11号住居址と切り合っているが、調査幅が狭く、遺物の取り上げに追われたこともあって、切り合い関係は明瞭とは言えない。しかし、11号住居址との切り合いでは、北側壁において、11号住居址の炉を本住居址のピットが切っていることが確認されているため、11号住居址より新しいものであることは確かである。

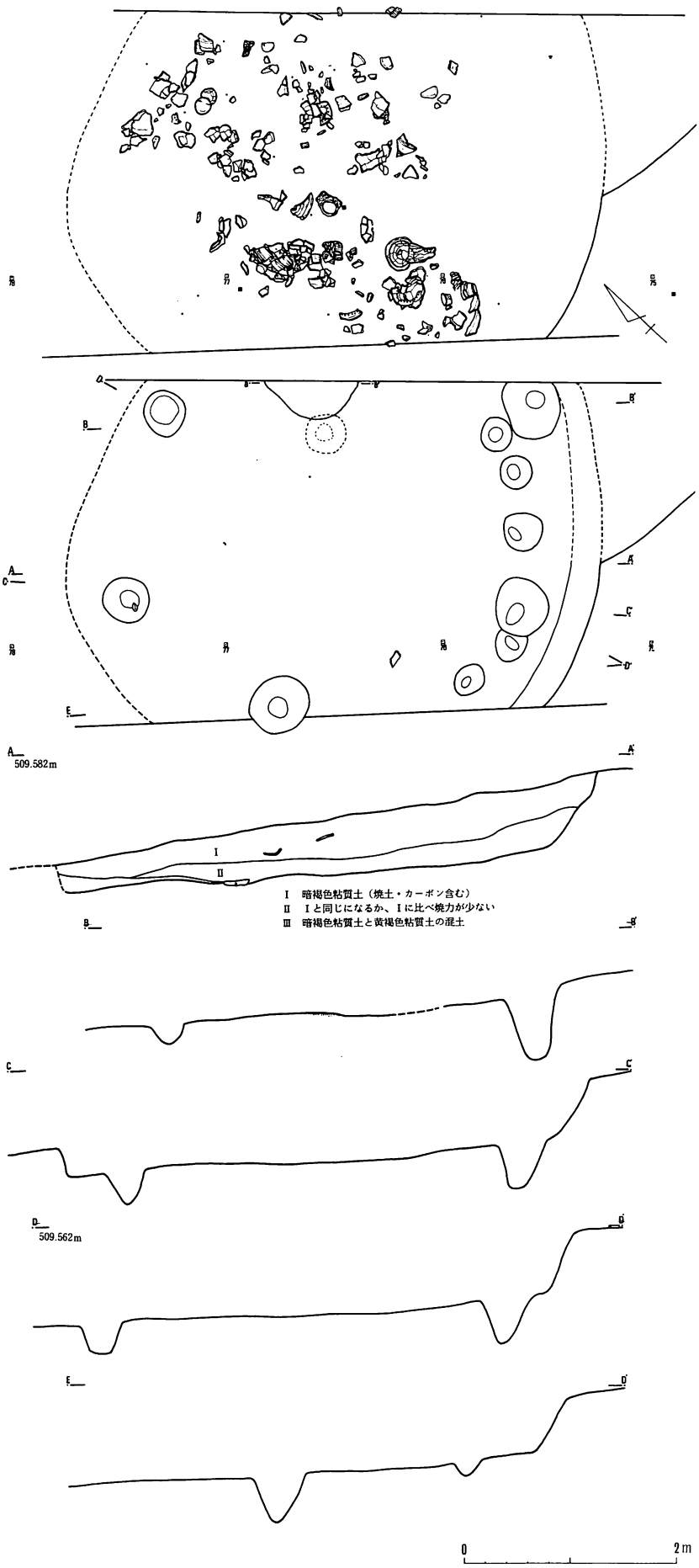
さて、本住居址は、規模が直径5m程度の円形を呈すると推定される。傾斜上部の壁はしっかりしていたが、下部ではごく一部に壁らしき立ち上がりが確認されたに過ぎない。上部での壁高約70cm、下部での壁高約20cmを計る。床もやや傾斜しているが、ほぼ平坦に造られており、特に炉のまわりは良く踏み固められている。覆土はやはり良く締まっており、焼土・カーボンが含まれている。住居内施設としては7基の小ピットと3基のピット及び炉とそれに付随するピットが確認されている。小ピットはいずれも壁際に存在するもので柱穴と考えられる。ただその配置に特徴があり、傾斜上部に5基が集中して並び、下部で確認されたのは僅か2基である。いずれも深さ20cm程度と浅い。他のピットは40～50cmの深さであり、貯蔵穴と思われるが、南壁際のピットは配列から柱穴である可能性が強い。炉は確認部分で90cm程の幅で焼土が確認されているが、焼土層は炉内上部に薄く形成されているだけで下部では焼土粒子・カーボンともに僅かであった。炉内の底部は平坦ではなく小ピット様の掘り込みが3ケ所認められ、また、床面調査の際には確認されなかった直径30cm・深さ50cmのピットが検出された。この内部には中段位まで焼土・カーボンが含まれており炉に伴うものと考えられる。

遺物のうち土器は非常に多いが、これらは総て床面より10cm以上浮いた状態で出土している。また、北壁寄りの貯蔵穴脇の床面直上からは後述するエゴマの炭化種子塊が出土している。

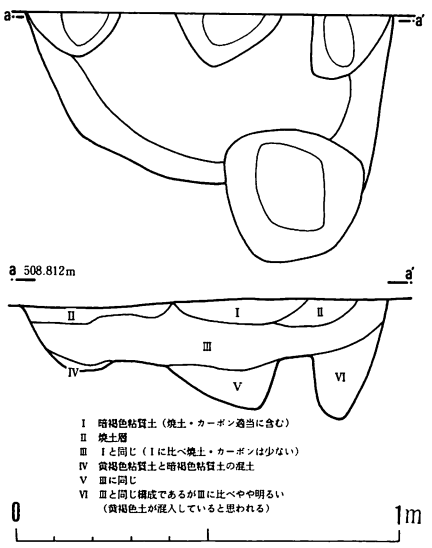
土器（第14～17図）

図化したものだけで32点、これに小破片を加えると夥しい量になる。図化したもののうち、諸磯c式は20の底部1点のみで、他は総て諸磯b式である。ただし、7は明らかに当地方で主体を成す該期のものと違っており、地域的な土着のものか、あるいは東海・関西方面からの搬入品と考えられる。本遺跡の今回の調査でも破片資料が見られるため、詳細はまとめて後述することとする。

さて、本住居址出土の諸磯b式土器は、器種には深鉢・浅鉢・有孔土器の3種類が存在する。深鉢では、口縁が内湾し胴部が縊れるキャリパー形が殆どで、口縁から底部まで真っすぐに延びるタイプは図化したものでは15に示した1点だけである。また、地文に縄文を施すものが圧倒的で、9・14のヘラ切り浮線文を主文様とするものには縄文が施されていない。5には縄文は表現されていないが同下半部には不明瞭ながら縄文が見られる。14に見られる口縁内面の細線張り付けは諸磯b式土器には少ないものであろう。浅鉢は少なく、大きな破片としては21に示した1点のみである。28に示した胴部破片は浅鉢の可能性もあるが、胴部が段状を成すことから有孔土器としておきたい。有孔土器は1軒の住居址としては異常に多く、図示したものだけで11点存在する。有文と無文の2種類が存在し、有文のものは総てヘラ切り浮線と沈線を併用するものである。22は口縁から屈曲部、23は



第12図　4号住居址

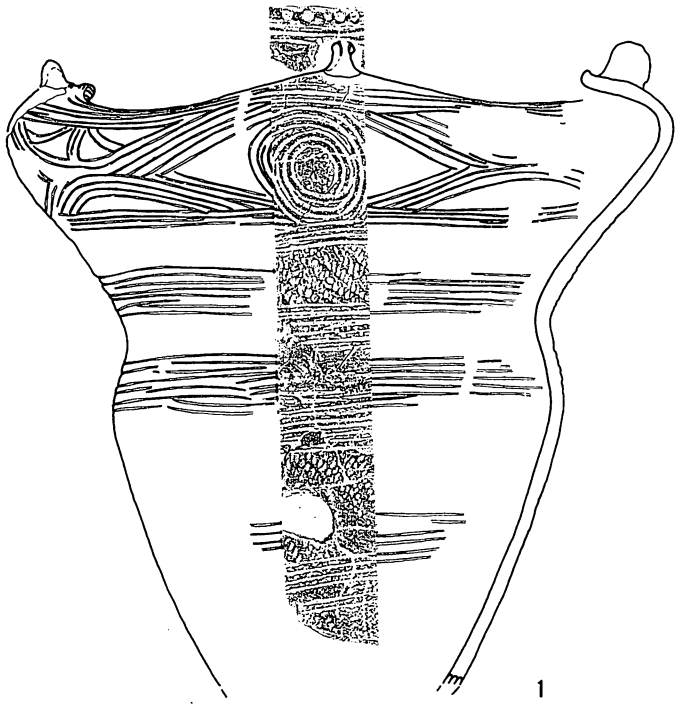


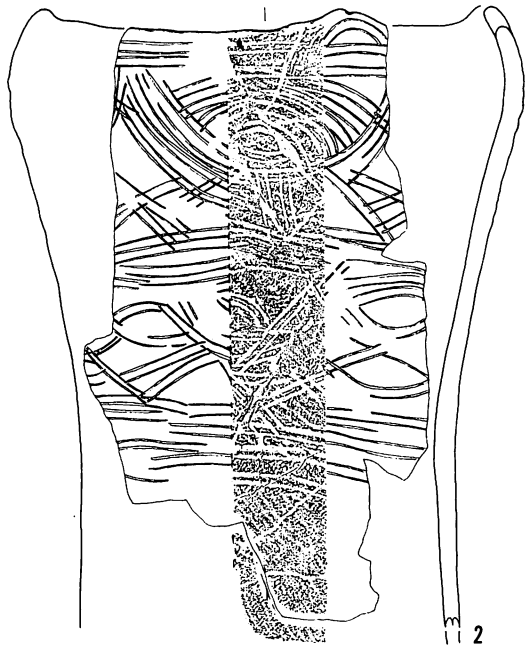
第13図　4号住居址炉

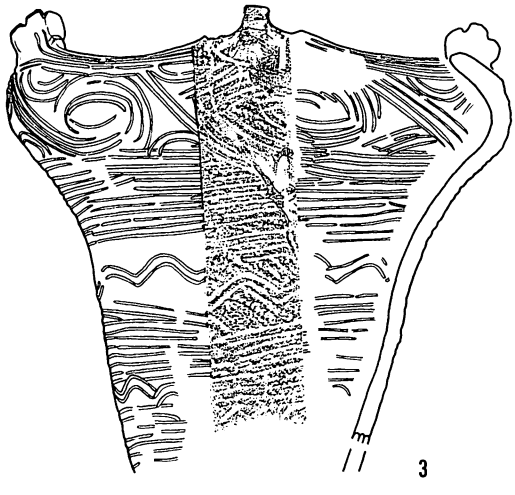
屈曲部から底部の資料である。共に、残損部分は完全に復元されており、径・胎土・施文とも同様であって、どう見ても同一個体としか考えられないが、両者の接合点は無く別個体であった。ちなみに両者はほぼ同一レベルで、1.5mの距離をおいて出土している。有文の有孔土器の底部には、やや上げ底ぎみで安定の良いものと、25に示したような底部中央に膨らみを持たせた不安定なものとがある。無文の有孔土器は口唇部分の立ち上がりが無く、平坦なものばかりであることから、諸磯b式期に位置付けて良いと思われる。なお、31は23の直ぐ横からほぼ同一レベルで出土している。また、29は、小孔の位置が屈曲部以下であることや、胴部の立ち上がりの角度が他のものと違っていることから、深鉢となるかもしれない。その意味で、有孔土器の範疇には入らないものであろう。

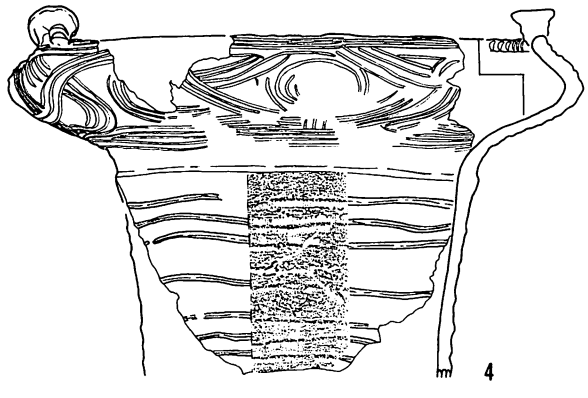
●5・10号住居址

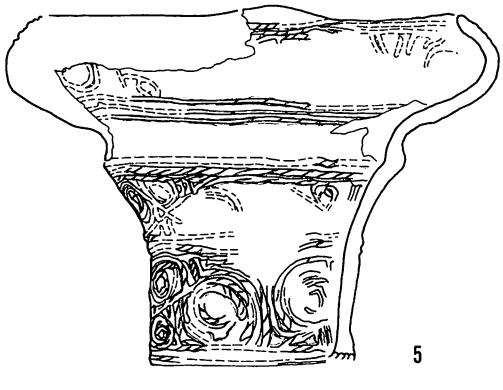
4号住居址の隣（傾斜上部）に位置する。傾斜上部で6号住居址、

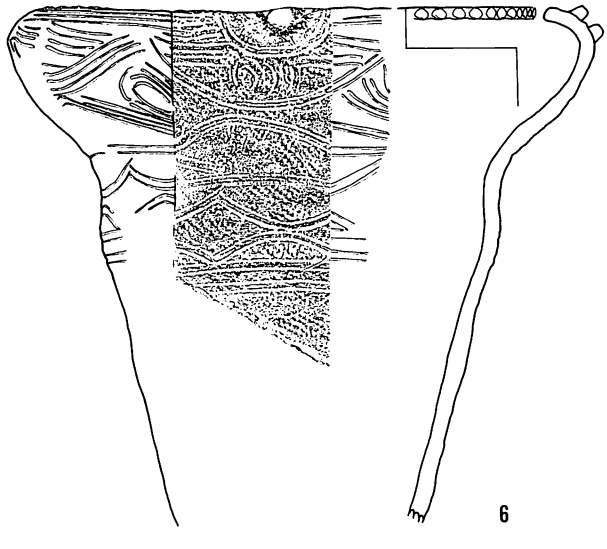






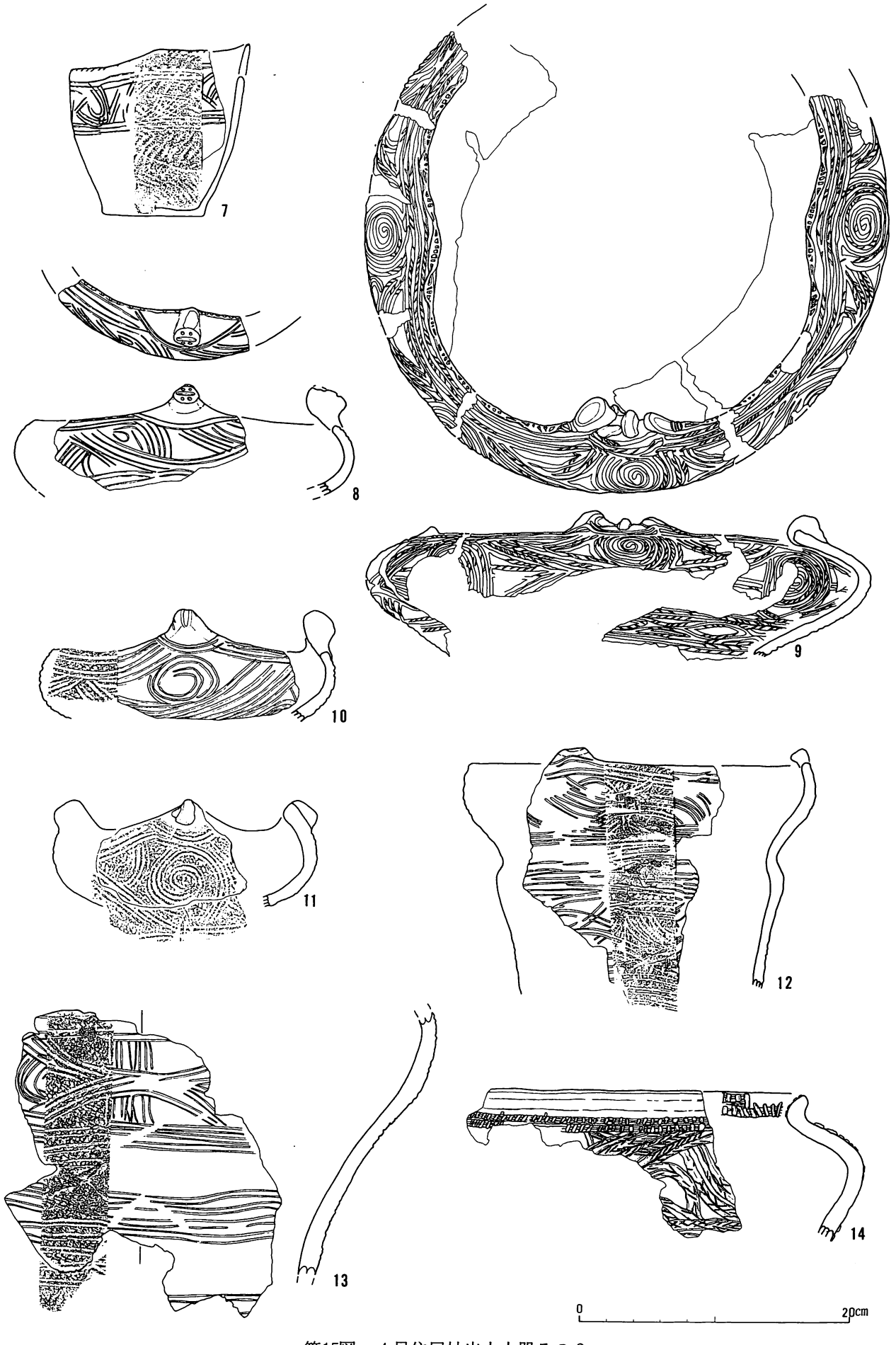




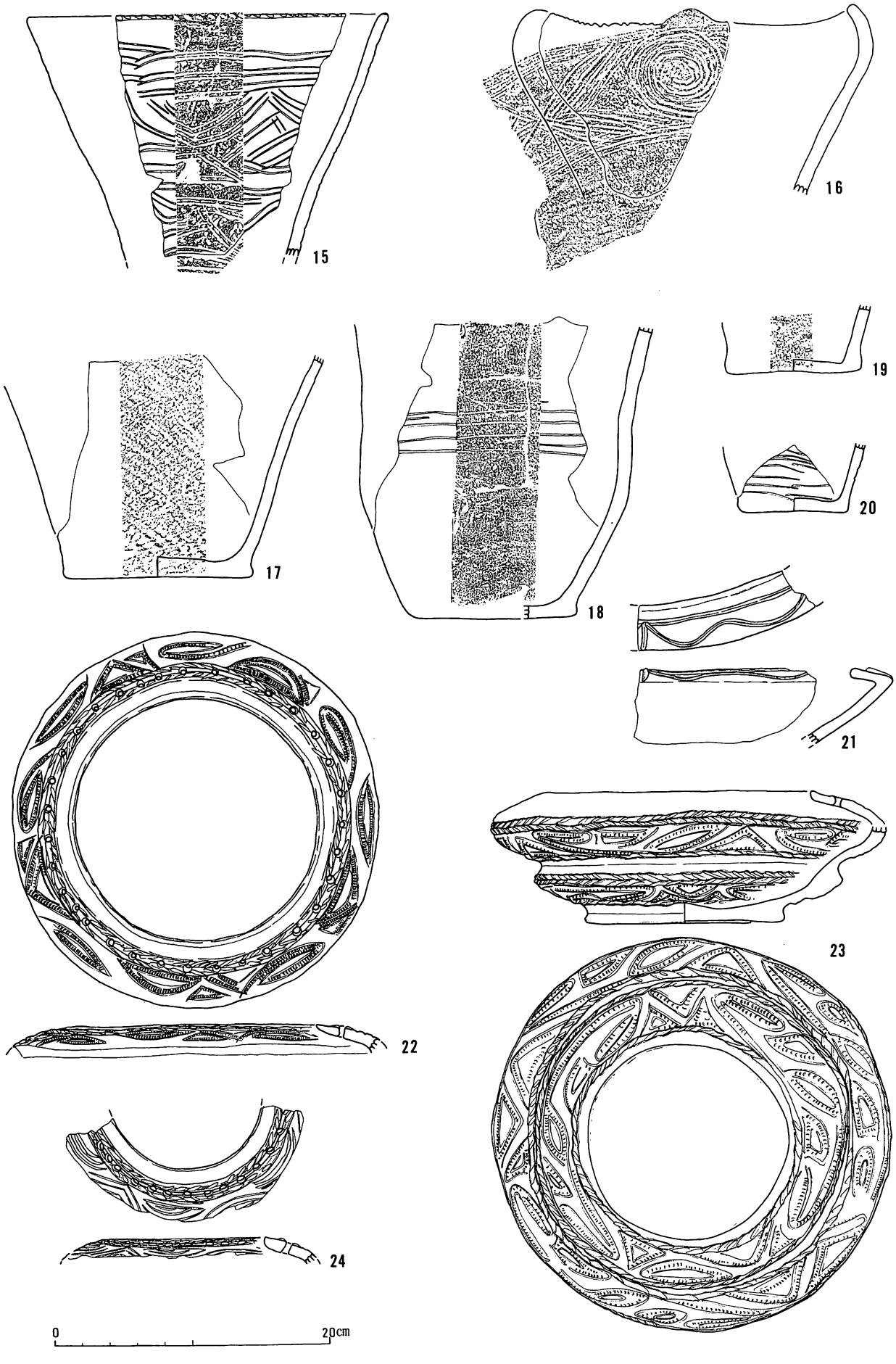


0 20cm

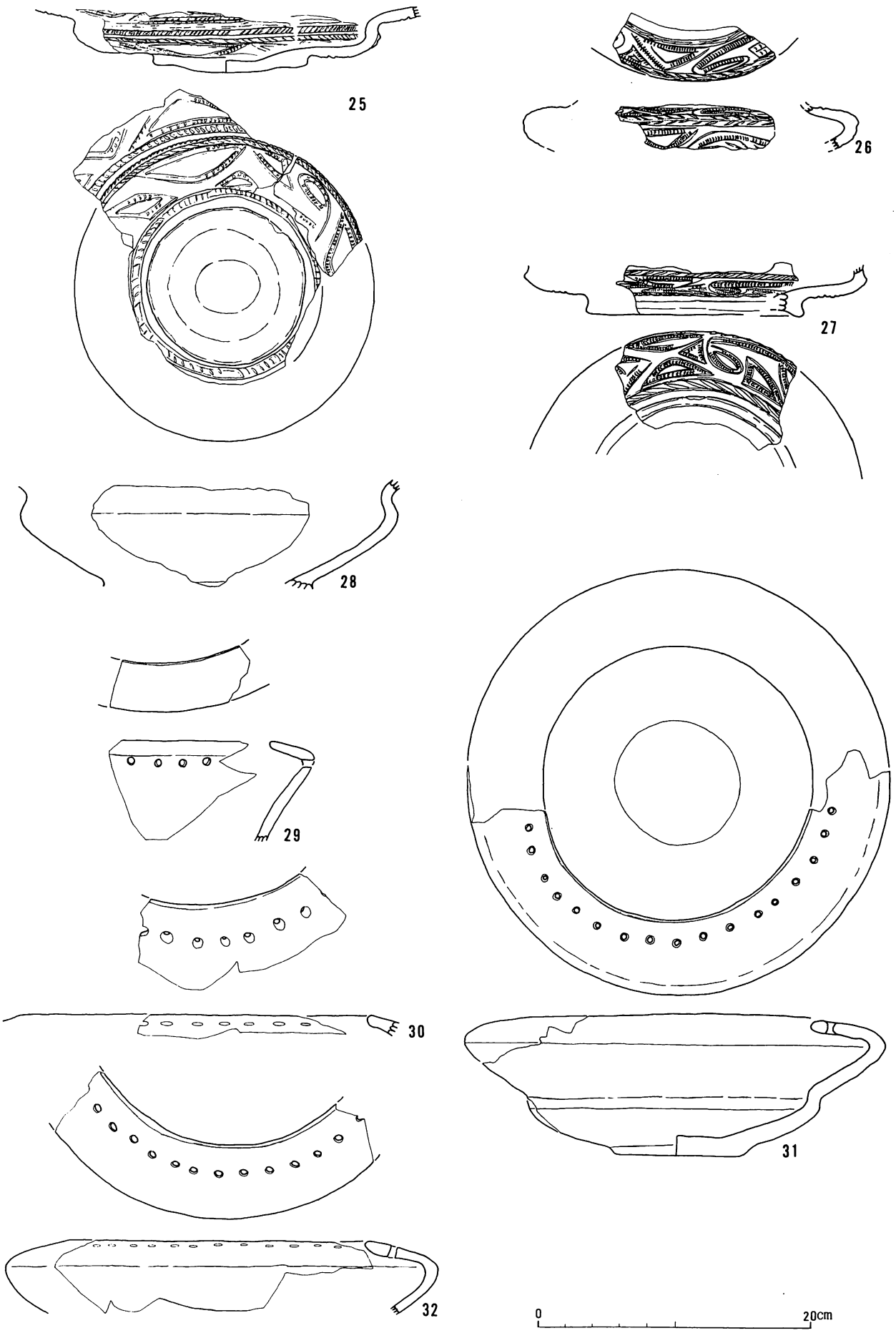
第14図　4号住居址出土土器その1



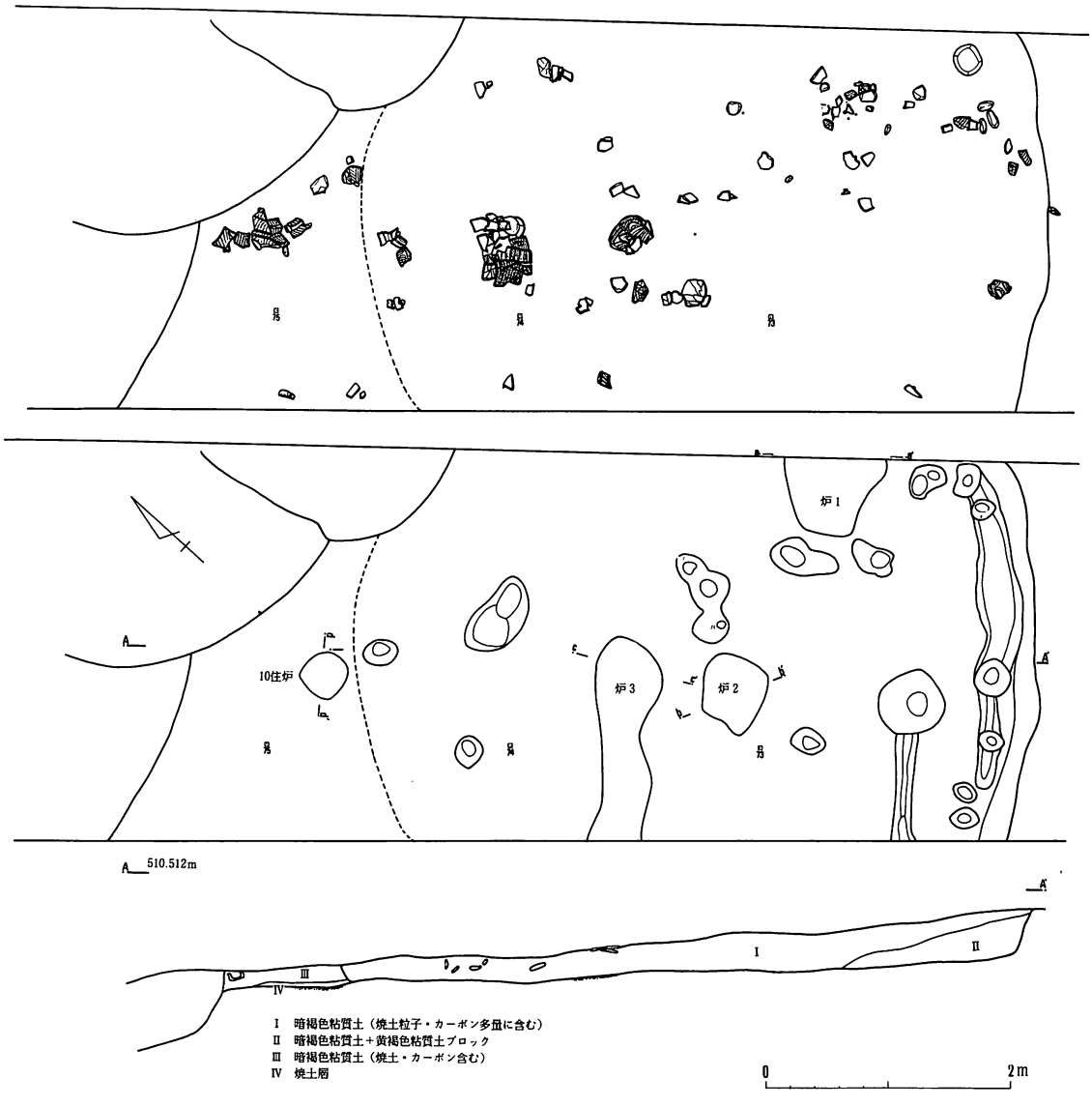
第15図　4号住居址出土土器その2



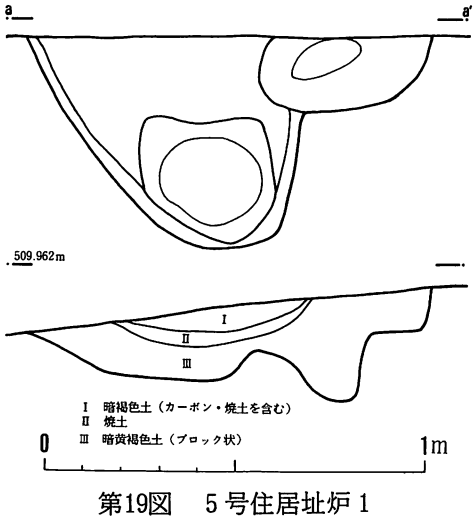
第16図　4号住居址出土土器その3



第17図　4号住居址出土土器その4



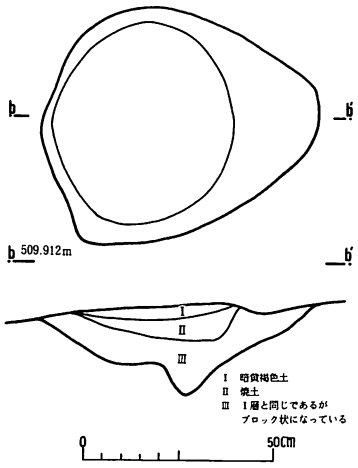
第18図　5号・10号住居址



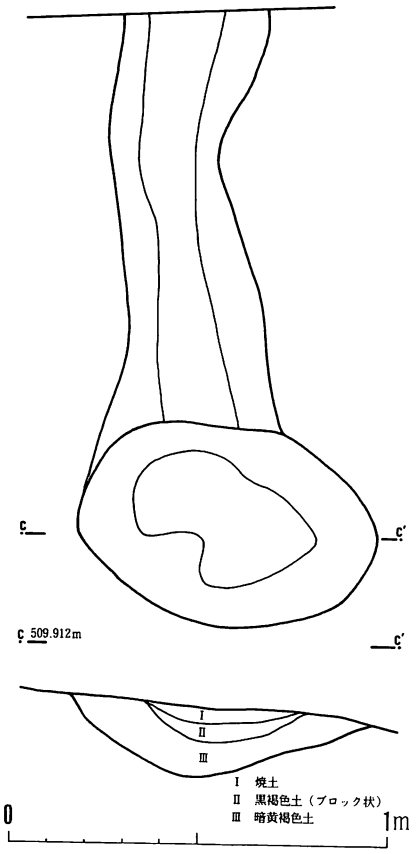
第19図　5号住居址炉1

下部では4号・11号・12号住居址と切り合っている。5号と10号の切り合い関係では5号を切るかたちとなっている。ただし、明瞭な壁の立ち上がりは傾斜上部で確認されているだけで、5号と10号の床面のレベル差が殆ど無いため、この切り合いは調査中央部に設定したセクションベルトだけが根拠となる。

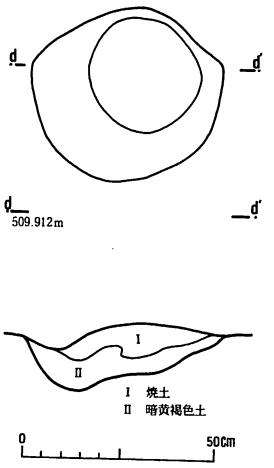
5号住居址は、ほぼ円形を呈すると思われ、直径5.5*m*を計る。傾斜上部での壁高は約40*cm*となっている。この部分には一部ではあるが周溝が2本確認されており、建て替えがあったことが想定される。壁際の周溝には4カ所の小ピットが確認され、またその付近には3個の小ピットが存在する。これらは大きさがほぼ一様で深さが10～35*cm*を計り、柱穴とその補助穴と思われる。内側の周溝端にもピットがあるが、直径も壁際のものに比べ大きく、60*cm*以上の深さであることから、この周溝に伴うものではなく、建て替え後の住居址貯蔵穴と考えられるものである。この住居址内で確認された他のピットは、いずれも規模が小さく、柱穴程度の大きさである。建て替えが想定されるため、やや複雑ではあるが、10号住居址との境界付近の2個は柱穴と考えて良いと思われる。覆土はやはり良く締まっており、焼土・カーボンを含んでいる。床は後述するように炉と考えられる焼土が



第20図　5号住居址炉2



第21図　5号住居址炉3



第22図　10号住居址炉

3カ所で確認されていることもあって、踏み固められた部分が多い。

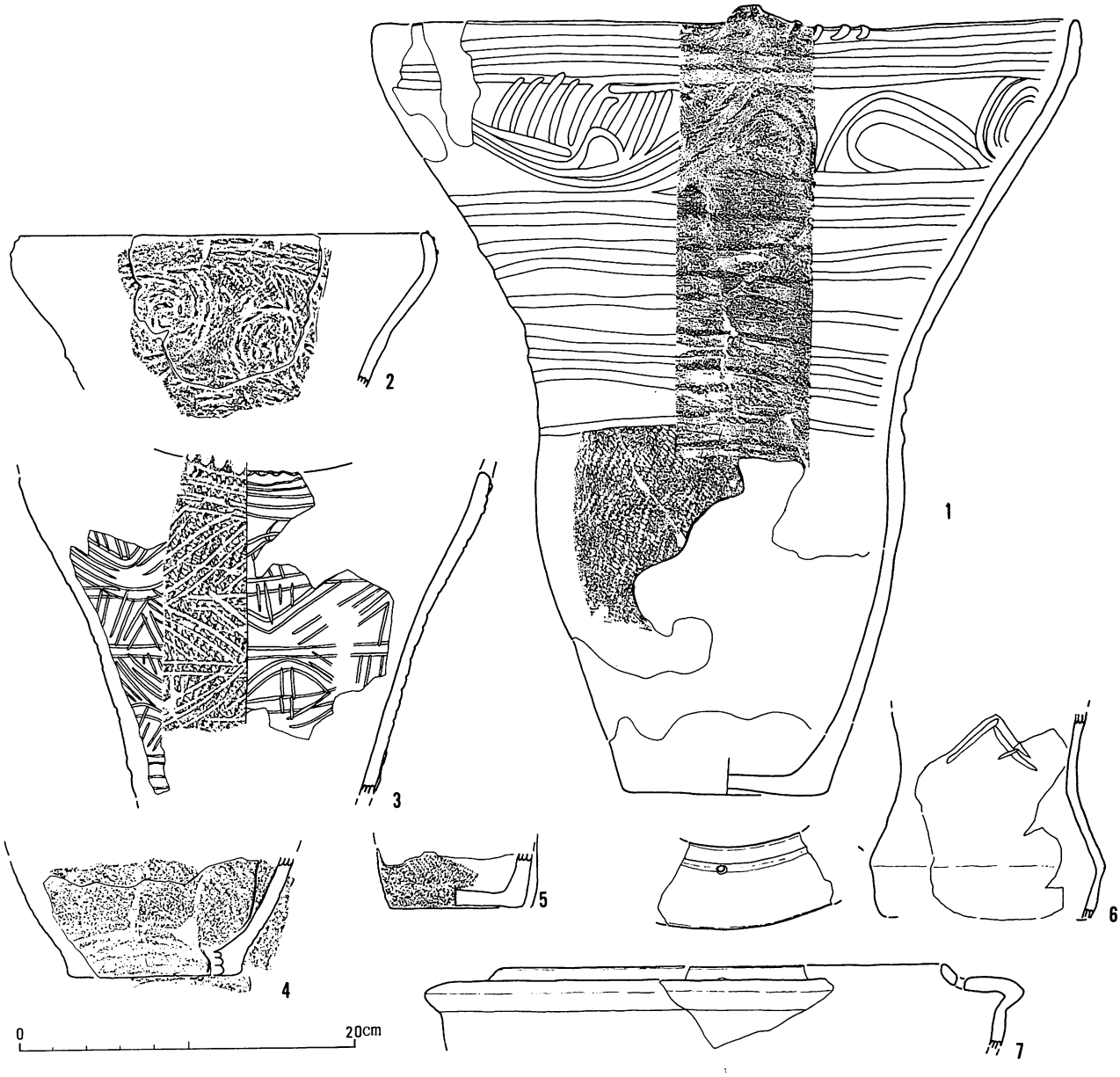
炉と思われる焼土溜まりは3カ所で確認されている。北側の調査区域境界に確認されているもの（炉1）が最も大きい炉であり、直径1m程の掘り込みをもつ。焼土層は直径50cmの円形に形成されており、厚さは約5cmを計る。この焼土層の存在からもこの掘り込みは炉として良いであろう。炉2は住居址のほぼ中央に位置し、楕円形で長径約70cm・深さ約20cmの掘り込みをもつ。これも焼土層は最大8cmの厚さとなっている。炉3は、炉2の直ぐ脇にあり、やはり楕円形を呈し、長径約80cm・深さ20cmを計る。焼土は30cm程の範囲に認められるが、掘り込みの最上部に3cm程の厚さで乗っていたにすぎない。また、この掘り込みからは南側に浅い溝状の掘り込みがみられ、この部分にも焼土が飛散していた。これらは、いずれも炉として良いと思われるが、位置からは炉2・3がこの住居址に伴うものとするのが妥当であろう。同時存在か、建て替えによる作り替えかは不明である。炉1は極めて壁に近く、炉2・3に伴うものとは考えにくい。別の遺構に伴うものとすべきであるのかもしれない。今回確認された住居壁が一続きの壁であり、炉2・3に伴うものという前提で述べてきたが、3m程の小型の住居址が存在することからも、確認された壁の一部が、炉1に伴う別の住居址の壁とすることも可能であると考えられる。しかし、調査幅が余りに狭く、調査中には別の遺構とする積極的な根拠も得られなかったため、ここでは一応1軒の住居址として報告することとする。

10号住居址は、前述したように、セクションベルトによる確認で、5号住居址に切られていることだけは確かである。ちょうどこの部分に本住居址の炉が掛かり、焼土が黒色土に切られていた。住居の規模等は一切不明で炉以外の住居内施設はない。床は、確認部分が炉の周辺ということもあって固く踏み締められていた。炉は50cm程の円形を呈し、深さは15cm程である。焼土層はほぼ全面に形成されており、最大10cmの厚さである。

土器

・5号住居址（第23図，第65図25～29）

本住居址出土土器も殆どが床面から20cmちかく浮いている。やはり諸磯b式土器が主体で、同c式に位置付けられるものは図示した6・7に示した2点である。6は沈線を胴部に施しただけのものであるが、胴部の立ち上



第23図　5号住居址出土土器

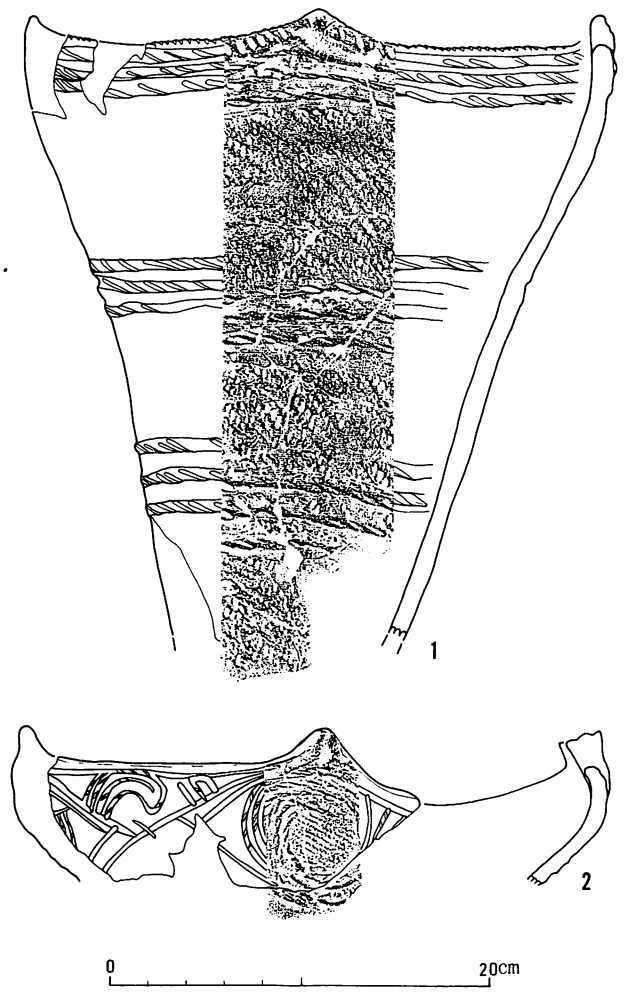
がりの角度がきつく、中期の屈折底に極めて類似する。また、7は口唇部が直立し、頸部の屈曲部が肥厚した、有孔土器と有孔鍔付土器との中間形態であり、諸磯c式以降に位置づけられる。さて、b式では1が類例が少ないものと思われる。この種の浮線文土器は一般的にはヘラによる刻みが施されるが、本資料は刻みは全く見られず、浮線上も含めて全面に縄文が施文されている。

・10号住居址（第24図，第66図50～52）

本住居址も出土遺物が少なく、図示した2点は共に床面から10㎝程浮いている。いずれも縄文を地文とし、ヘラ切り浮線文の付くものである。

●6号住居址

5号住居址の隣（傾斜上部）に位置する。楕円形を呈すると思われ、確認部分での径4.5ｍを計る。本住居址も傾斜上部の壁ははっきりしているが、下部（5号住居址寄り）の壁は推定である。ここでは1軒の住居址として報告するものの、確認された壁は直線的というよりも、むしろ外側に広がる傾向があり、一つの遺構としてよいか判断に迷うところである。覆土は上層から下層まで焼土・カーボンを含んでおり、よく締まっている。床は平坦であるものの、傾斜に沿って造られており、傾斜上部と下部では40㎝程の差がある。壁際に小ピットが2基確



第24図　10号住居址出土土器

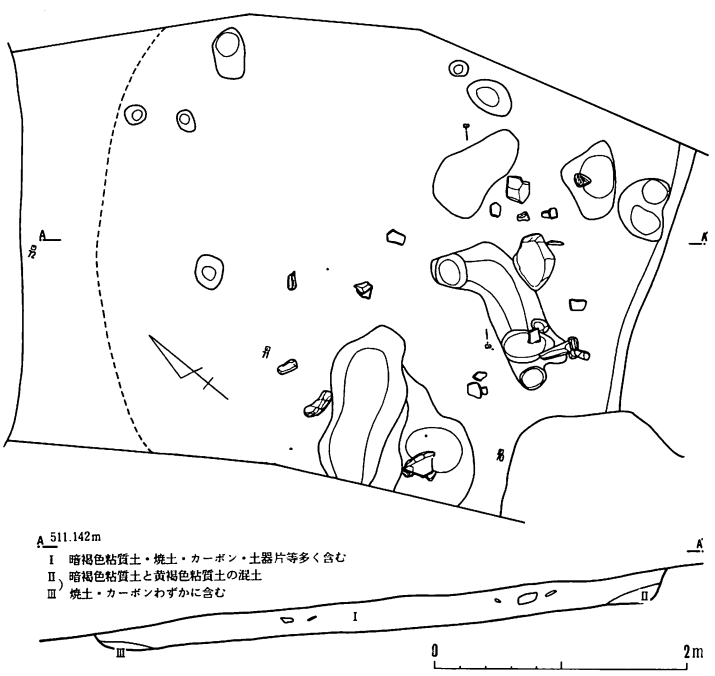
認されているが、それと同程度のピットが他に10基確認されている。これらは特に壁際に配列されることもなく、後述する炉との位置関係からも明確に柱穴とすることのできるものはない。このほかでは、図中のｆ・ｇ・ｈ等が大きさから明らかに柱穴と区別されるもので、ｆ（深さ60㎝）・ｈ（深さ30㎝）は、形状・深さからも貯蔵穴と考えられるものである。炉は住居址中央部ではなく、壁寄りの２カ所に見られる。これらはいずれも不整形で、焼土層は形成されていない。内部に焼土・カーボンを多量に含んだ黒色土が確認されている。

さて、明確な柱穴とされるものがないとしたが、図中のｂ・ｃ・ｄ・ｅは非常に規則的な配列となっている。深さはｂが40㎝・ｃが20㎝・ｄが20㎝・ｅが15㎝と一様ではないものの、ｂ－ｃとｄ－ｅの間が1.6ｍ、ｂ－ｅとｃ－ｄの間が1.8ｍとなっており、ほぼ長方形の配列である。確認された炉との位置関係からは、この規則的配列が生きるとすれば、全く別の遺構である可能性が強いと言わざるを得ない。

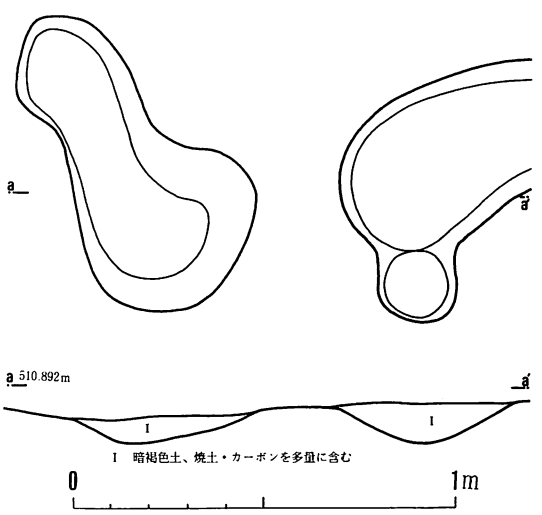
遺物は、ほとんどが覆土からの出土であるが、一部はピット内から出土している。

土器（第27図，第65図30～33）

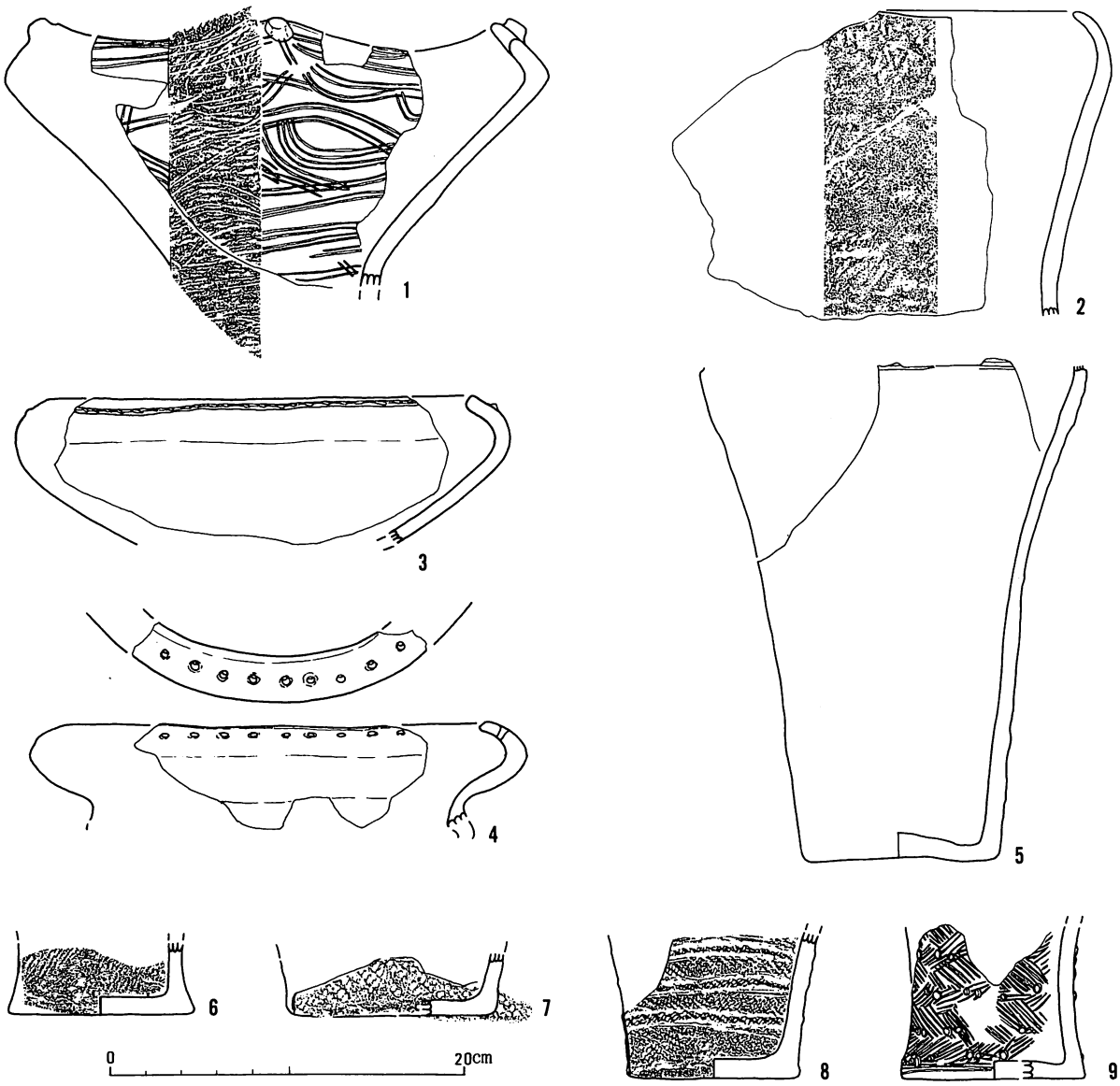
図示した９点のうち、諸磯ｃ式は９だけで、他は諸磯ｂ式である。いずれも床面から10㎝程浮いている。ただし、６はピットｅに隣接したピット内からの出土であり、本住居址出土土器中では最も住居址に伴う可能性の強いものであろう。



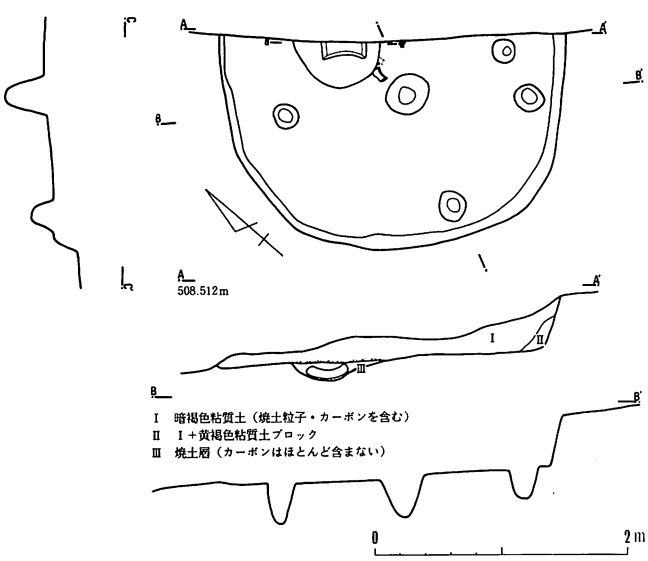
第25図　６号住居址



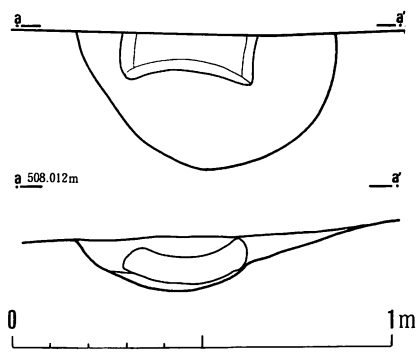
第26図　６号住居址



第27図　6号住居址出土土器



第28図　7号住居址



第29図　7号住居址炉

●7号住居址

4号住居址から傾斜下部方向に5 m の距離をおいて存在する。住居址の南側半分だけの調査である。比較的整った小判形を呈し、確認部分での径約2.7 m を計る。壁高は傾斜上

部で40cm、下部で5cmを計る。覆土はほぼ単一層で、焼土・カーボンを多く含んでいる。床は軟弱な部分が多い。壁ちかくに柱穴と思われる小ピットが4基確認されている。深さは、調査区境界寄りの1基が10cmと浅いが、他の3基は20〜30cmを計る。この柱穴の配列は5号住居址と同様で、傾斜上部に多く、下部には少ない。炉のちかくには径35cm程の小ピットがあるが、やはり30cm程の深さであり、貯蔵穴にしてはやや小振りである。さて、炉は、調査した範囲で見れば、住居址中央部ではなく、やや壁寄りとはなるものの、真南方向が入り口部であったのかもしれない。

さて、炉は確認部分で径約70cmの円形の掘り込みをもち、深さ20cmをはかる。内部は焼土で充たされており、カーボンは殆ど含まれていない。この炉で特筆されるのは、炉内底面に接するように、大型の割れた石皿を置いていることである。石皿の磨り面上にも焼土が存在したことから、石皿を置いたあともこの炉が使用されたことは明らかである。本遺跡ではこのような例は他には確認されていない。

本住居址からは土器は1点だけ出土している。

土器（第119図2）

1点だけの出土である。炉のすぐ脇から10cm浮いて出土した。非常に浅い沈線を弧状に配したミニチュア土器で、地文は無文である。このように浅い沈線施文の土器は他に例がないがおそらく諸磯c式に位置付けられるものであろう。

●8号住居址

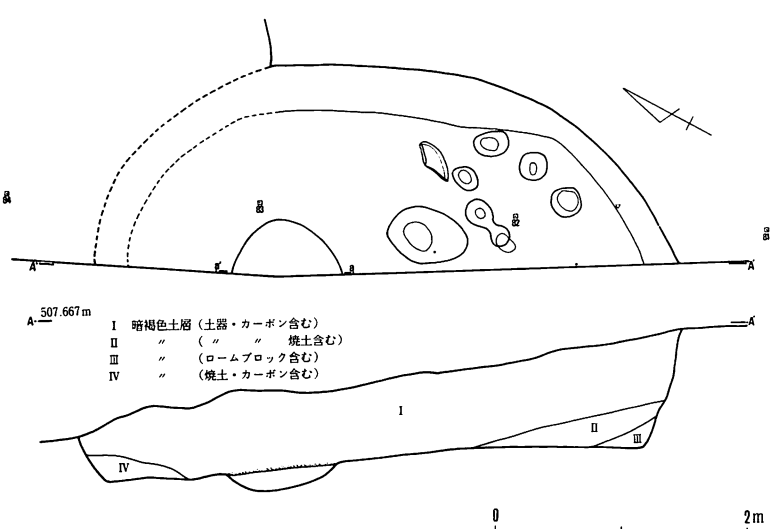
7号住居址の西約4mに位置する。本住居址も炉が中央に位置せず、北側にあることから南向きの住居址と思われる。セクションラインが住居址のほぼ長径に相当すると思われ約4.5mを計る。覆土は暗褐色土を主体とし、焼土・カーボンを多く含み良く締まっている。床はしっかりしており、平坦に作られている。本住居址は9号住居址と切り合っているが、セクションでの確認によれば、本住居址は9号住居址の廃絶後に構築されている。この部分での張り床も比較的良く踏み固められていた。本住居址は非常に深く掘り込まれており、傾斜上部では壁は1mちかい。住居内部では、やはり、傾斜上部側に小ピットが集中している。深さは20〜30cmを計り、柱穴として良いと思われる。炉の近くには径60cm・深さ50cmほどのピットが存在しており住居内貯蔵穴としておきたい。

炉は9号住居址との境界に位置する。調査が一部であるため全容は不明であるが、確認部分では楕円形を呈し、長径約80cm・深さ15cmを計る。焼土層は10cmの厚さで形成されており、掘り込み底面まで焼土・カーボンを多量に含む黒色土が見られた。

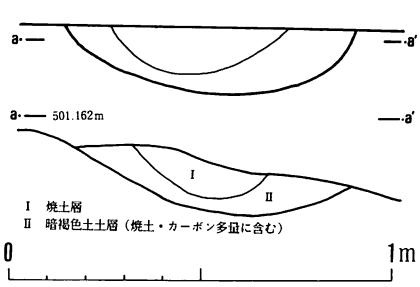
遺物は少なく、覆土からの出土である。

土器（第65図34〜41）

小破片だけであり、復元可能な土器はない。8点の拓本を示すが、諸磯a〜c式が見られる。このうち主体を占めるのは諸磯b式である。



第30図　8号住居址



第31図　8号住居址炉

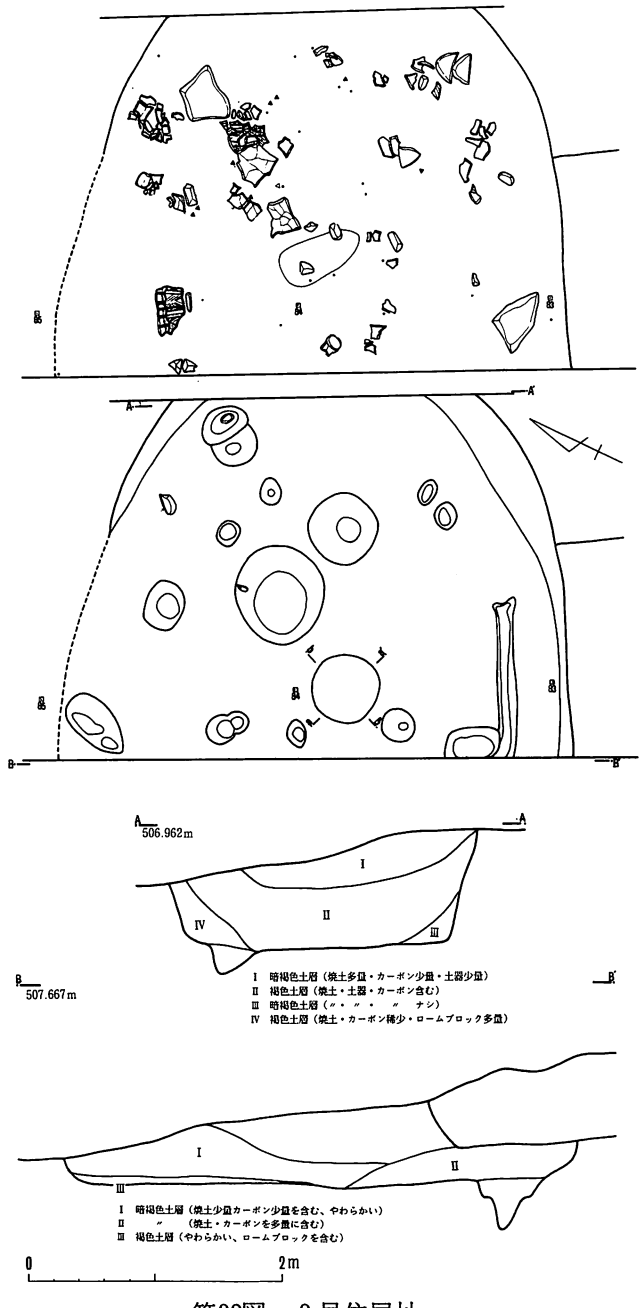
●９号住居址

８号住居址に切られている。これも非常に深く掘り込まれた住居址であり、傾斜上部での壁高は１ｍちかく、遺存状況も良好である。同じ傾斜部分に構築された住居址であるが、８号住居址の床面が傾斜に沿うように傾きをもつのに対し、本住居址の床面はほぼ水平に作られている。覆土は他の住居址と同様に焼土・カーボンを多量に含んだ暗褐色土で良く締まっている。本住居址には傾斜上部側壁際に周溝が確認されている。15cm程の幅で25cmの深さをもつもので、周溝としては非常に深い。これまでに記述した他の住居址と違い、本住居址は柱穴と思われる小ピットが傾斜上部側だけでなく、ほぼ全周するような状況で配置されている。これらは20〜50cmと深さは一様ではない。住居址のほぼ中央に炉があるが、この炉の近くに貯蔵穴と思われるピットが２基確認されている。大型のものは径80cm、深さ20cmの浅い皿状ピットであり、小型のものは径50cm、深さ60cmを計る。

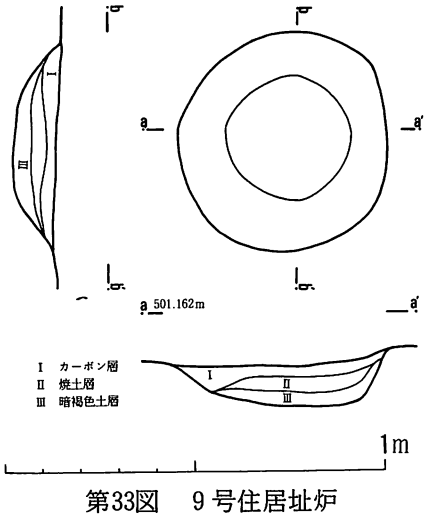
炉は径50cmの円形を呈し、掘り込みの深さは10cmである。焼土層は４cmの厚さで形成されているが、その上面には３cm程のカーボン層が存在した。このように明確に焼土層とカーボン層が分かれる堆積状況は他の遺構では確認されていない。

本住居址では覆土中に非常にカーボンを多く含んだブロックが確認されたため、第34図に示した位置で覆土を柱状に残し、各層位ごとに土を採取し水洗を行っている。

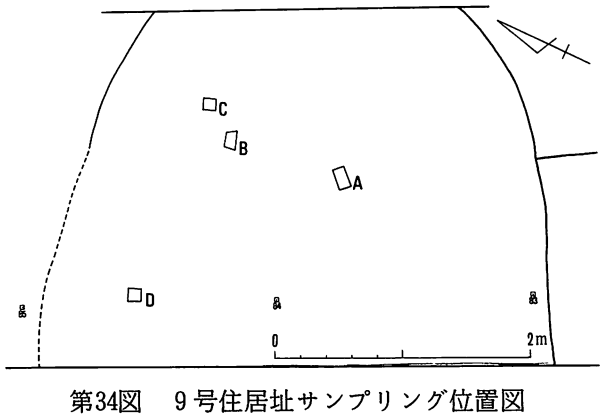
本住居址からの出土遺物は非常に多いが、総て覆土からの出土である。



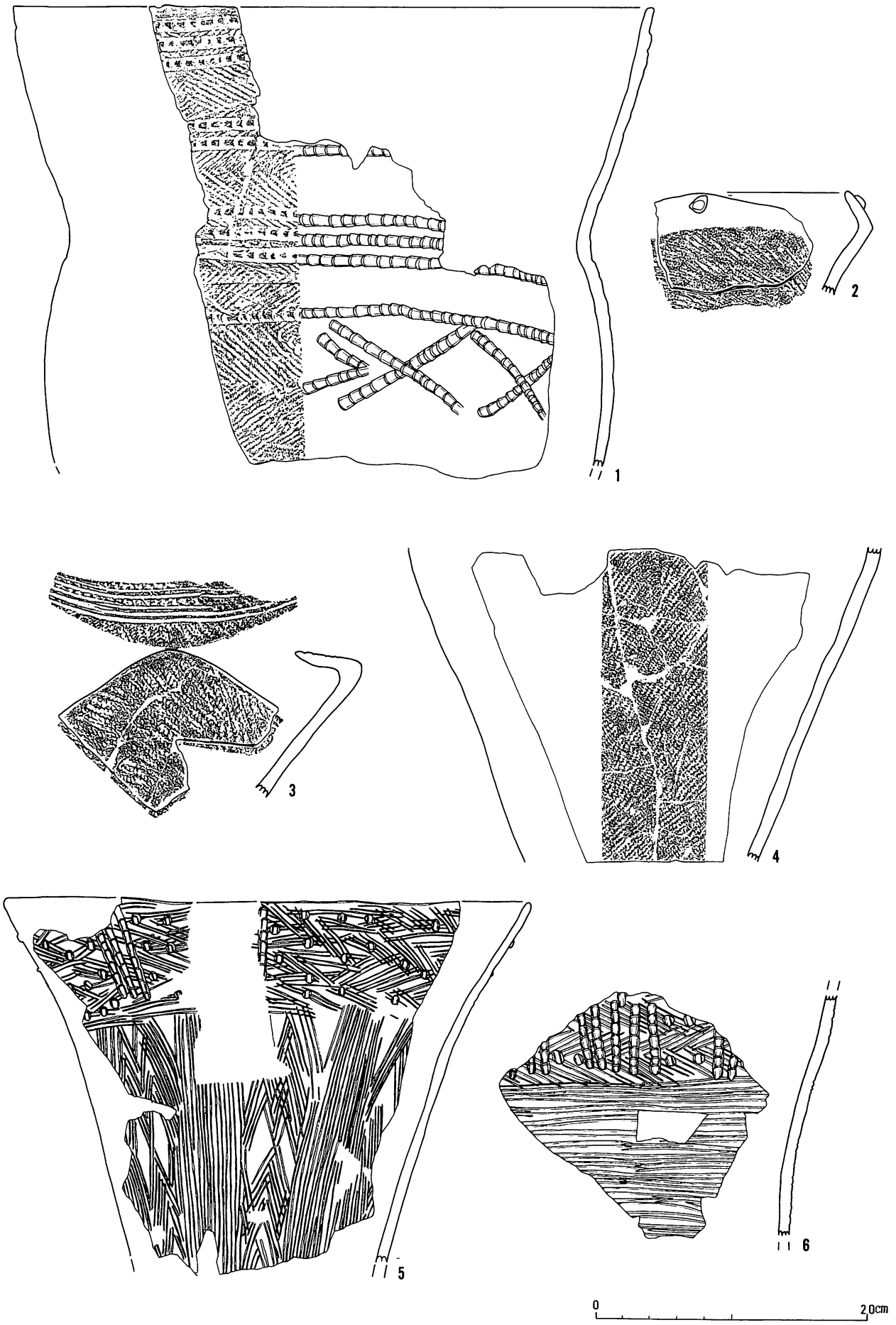
第32図　９号住居址



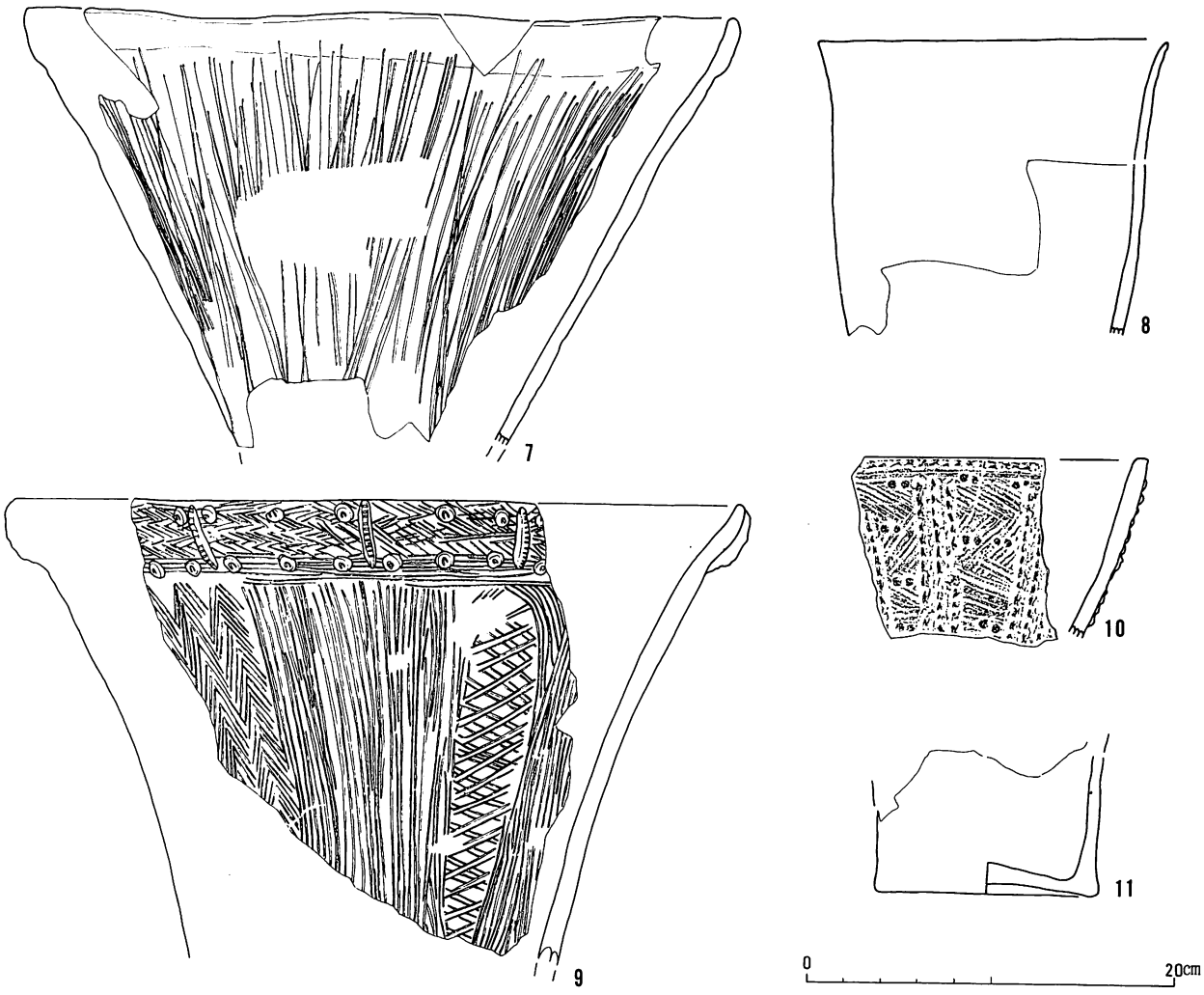
第33図　９号住居址炉



第34図　９号住居址サンプリング位置図



第35図　9号住居址出土土器その1



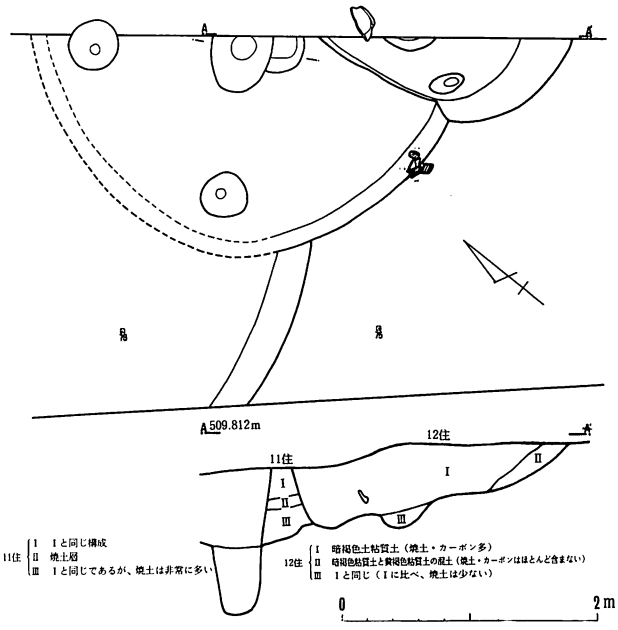
第36図　9号住居址出土土器その2

土器（第35・36図，第66図42～49）

復元可能な資料は図示した11点である。2～4は諸磯b式、5～11が同c式に位置付けられ、他の遺構でも一般的に見られるものである。ただ、諸磯c式が主体ではあっても、結節状浮線文で器面全面を覆うタイプは小破片の中にも見られない。さて、1は縄文を地文として、結節状沈線文（連続爪形文）を施文したものである。胴部下半の連続爪形文は直線的ではあるが、クロスさせており、県内でも類例のないものである。小破片ではa～c式すべてが出土していることもあって、本資料は諸磯a式もしくはb式としておきたい。

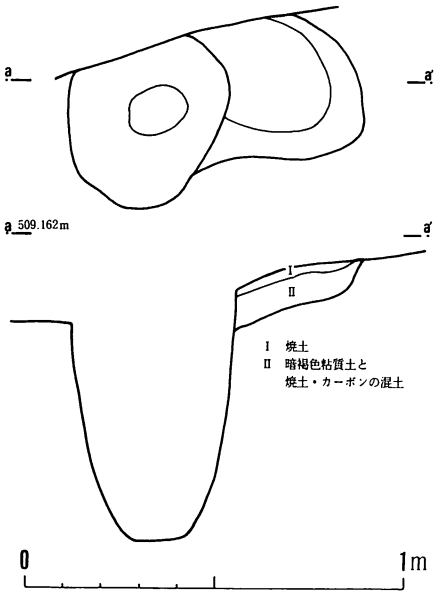
●11・12号住居址

4号住居址と切り合って確認された。残存部分が僅かであったこともあって、規模・形状等は不明である。11号住居址の炉は4号住居址のピットに切られていることがセクションからも明らかである。また12号住居址はごく一部の調査であり、確実に住居址であるか疑わしい面もあるが、この遺構に伴うと考えられるピットの存在や覆土の状況等から住居址として報告する。

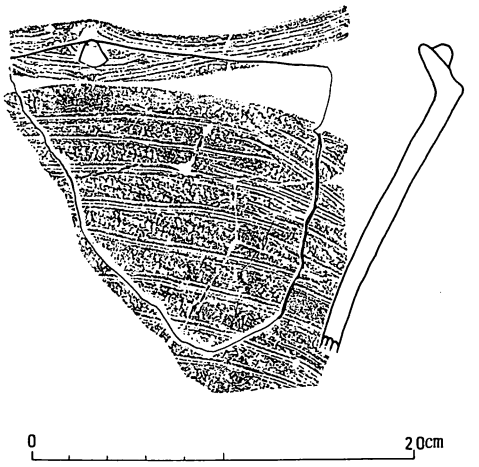


第37図　11号・12号住居址

11・12号住居址共に床は軟弱である。覆土はやはり焼土・カーボンを多量に含んでいた。11号住居址の施設では、位置から4号住居址に伴うとは考えられない小ピット2基が、柱穴とすることができよう。炉は推定で径50cm程の地床炉で、上面に3cmの厚さで焼土層が形成されていた。掘り込みそのものは1.5cmの深さを計り、焼土層下は焼土・カーボンの混ざる黒色土であった。12号住居址では壁際に浅い小ピットが確認されているが、柱穴とは考えにくいものである。



第38図　11号住居址炉



第39図　11号住居址出土土器

遺物はごく僅かで、覆土からの出土である。また、12号住居址からは後述するように前期としては非常に特殊な石皿が出土している。

土器（第39図，第66図53～55，56）

第39図は10号住居址との境界ちかくで確認されたものである。これと同じところで拓本に示した小破片が出土している。いずれも諸磯b式である。12号住居址からは小破片1点だけの出土で（第66図56）連続爪形文の施されるものである。やはり諸磯a式もしくはb式に位置付けられるものであろう。

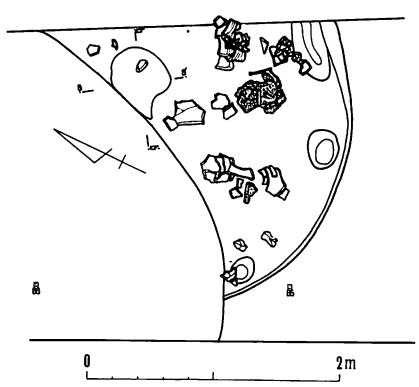
●13号住居址

9号住居址に接して確認された。本住居址付近から包含層が確認されており、本住居址から24号までの住居址（17・22号住居址を除く）のセクションは包含層セクション図（第85図）中に示すが、本住居址は14号住居址に切られている。

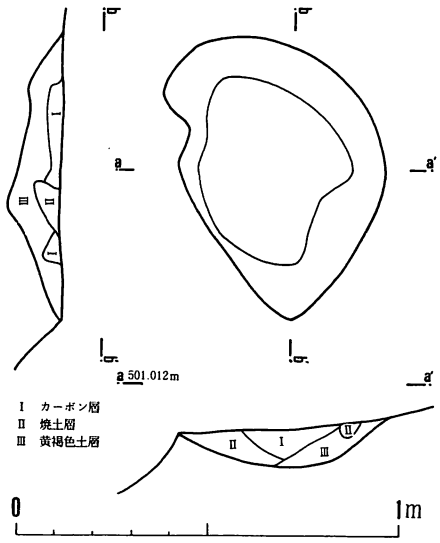
本住居址は比較的掘り込みが浅く、傾斜上部の壁も10cm程度である。床は踏み固められた部分が多く良好である。本住居址でも極一部ではあるが、周溝が確認されている。20cm程の幅を有するが、深さは約5cmと浅い。柱穴は壁に沿って2基確認された。いずれも小型で深さは周溝側が30cm、もう1基が20cmを計る。

炉は一部を14号住居址に切られている。推定で長径70cm程の楕円形の炉である。掘り込みは10cmと浅いが焼土は最大8cmの堆積である。この炉内でもカーボンだけが集中する部分が見られ、6cm程の厚さとなっている。

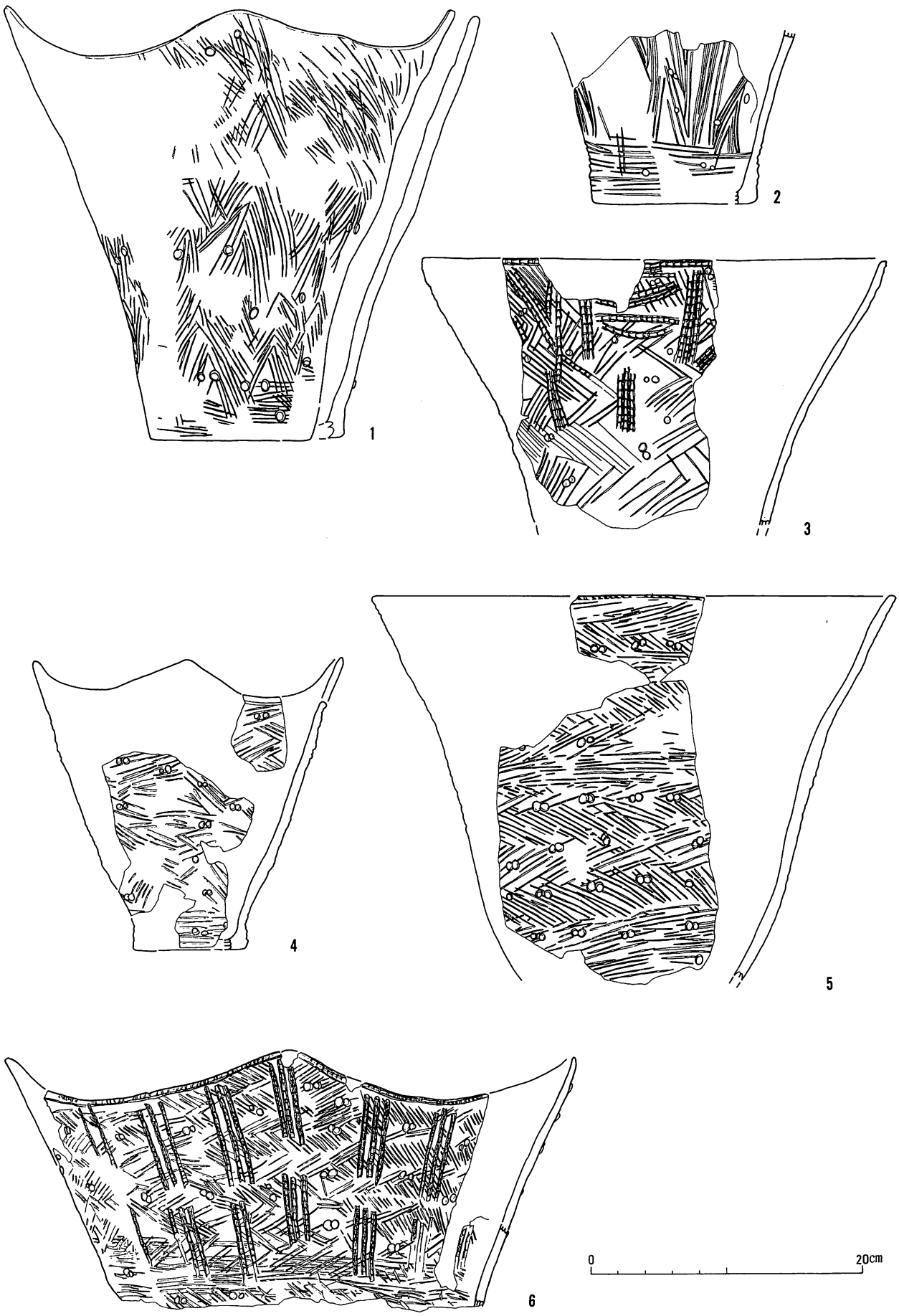
遺物は非常に多く出土し



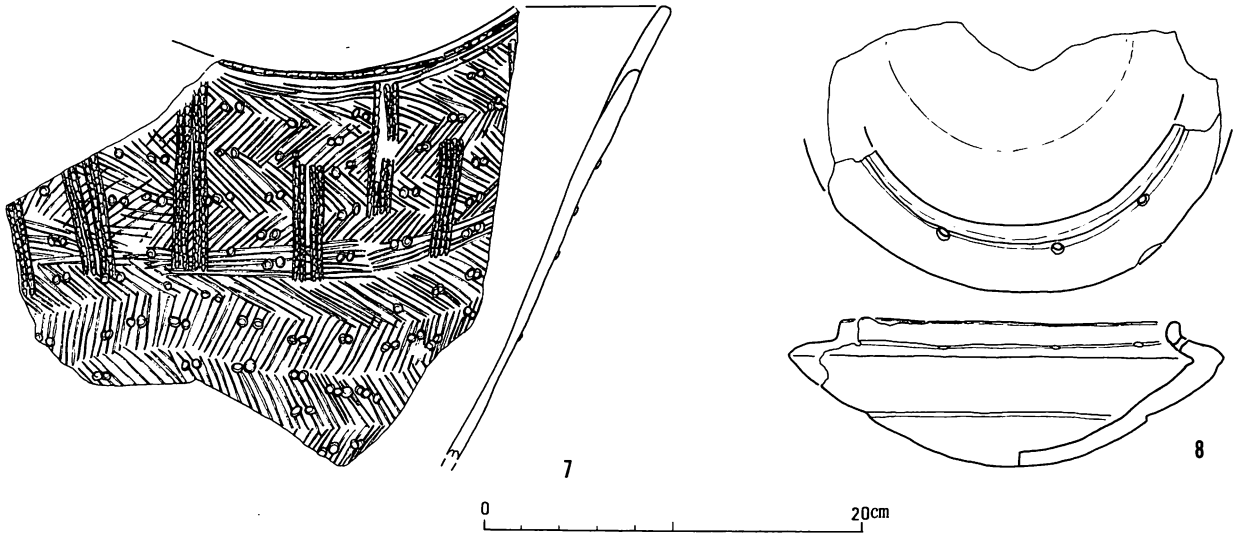
第40図　13号住居址



第41図　13号住居址炉



第42図　13号住居址出土土器その１



第43図　13号住居址出土土器その２

ている。土器は覆土からの出土である。

土器（第42・43図，第66図57～62）

復元可能な資料は８点である。総てが諸磯ｃ式である。８の有孔土器は口唇部分が直立し、屈曲部も肥厚していることから該期に位置付けられるものである。１～７までの土器は、地文に細い沈線を施文するもので、そこに円形貼付文を施すものと、さらにそれに加えて半截竹管による結節状沈線文を施文するものの２種類が見られる。他の遺構に見られる結節状浮線文の諸磯ｃ式土器はこの中には存在しない。なお、小破片中には諸磯ｂ式やｃ式の結節状浮線文土器なども確認されている。

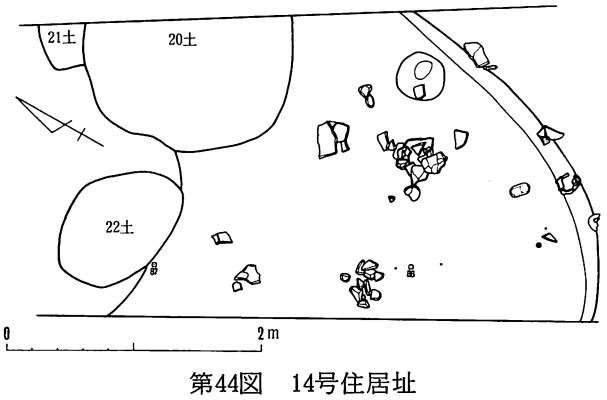
●14号住居址

傾斜上部では13号住居址を切って、また、非常に大きな21号土壙に切られている。下部では24号住居址との切り合いがあるが前後関係は不明である。本住居址も掘り込みは深くなく、傾斜上部での壁高は15㎝程である。炉は調査部分では確認されていない。住居址内部で確認された施設は、13号住居址炉の近くで確認された小ピット１基だけである。このピットは径40㎝を計り、深さは50㎝と深い。柱穴として良いであろう。炉が確認されていないにもかかわらず、床はしっかりしている。

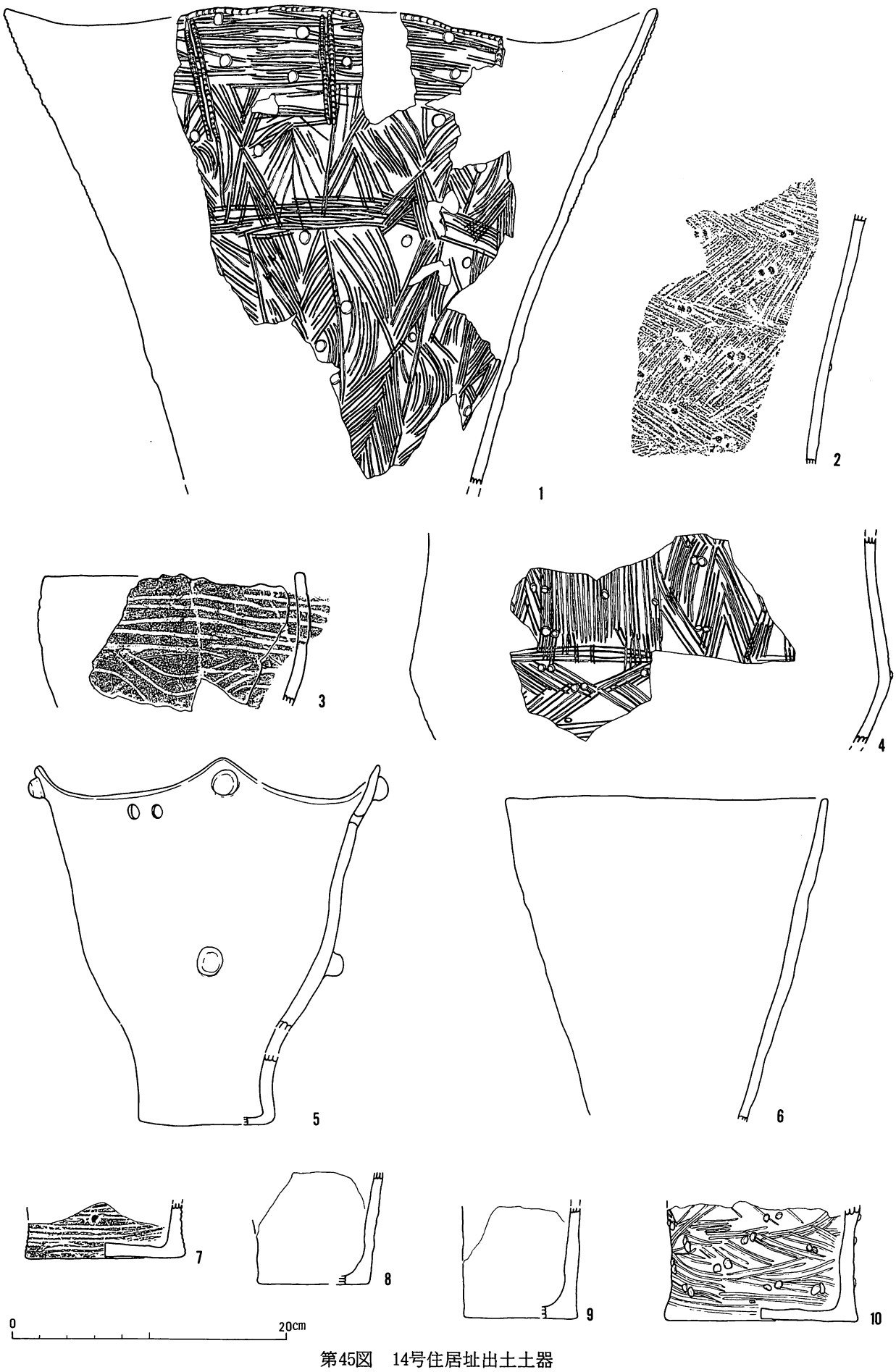
遺物は多いが、土器は床面より、10㎝程浮いて出土している。

土器（第45図，第66図63～66）

復元可能な資料は図示した10点だけであるが、やはり諸磯ｃ式が殆どである。３は小単位の波状口縁を有する土器で、施文は沈線だけである。口縁上部は直線、下部は弧状となっている。本資料は少なくとも諸磯ｃ式土器の範疇には入らないものと思われ、該期の異系統の資料としておきたい。これを除いた資料では、13号住居址と同様に沈線や円形貼付文を施文するものが主体である。本資料中にも結節状浮線文を有する土器は少ないが、１の口縁部には２条１単位の施文が見られる。しかし、この施文方法は結節状沈線文の施文と同様であり、また、「施文」に占める結節状浮線文の割合から考えても、同じ諸磯ｃ式の中での結節状浮線文を主体とする土器群とは時間的なズレがあるとすることが可能と思われる。なお、小破片資料中には諸磯ｂ式や



第44図　14号住居址

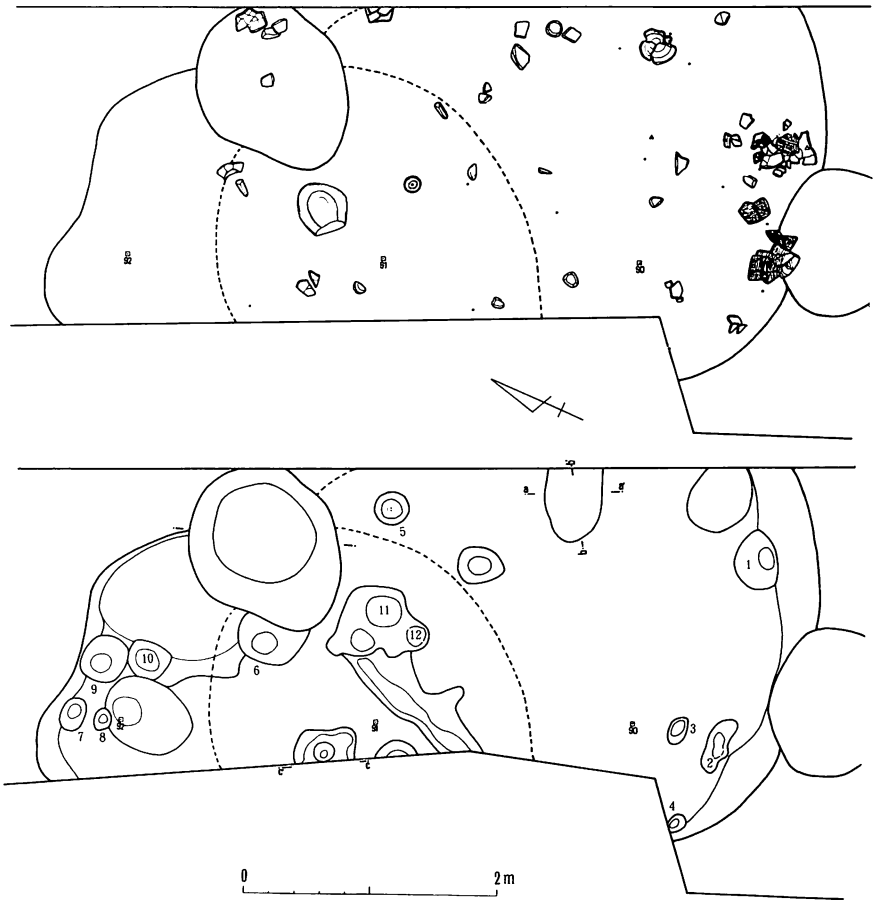


第45図　14号住居址出土土器

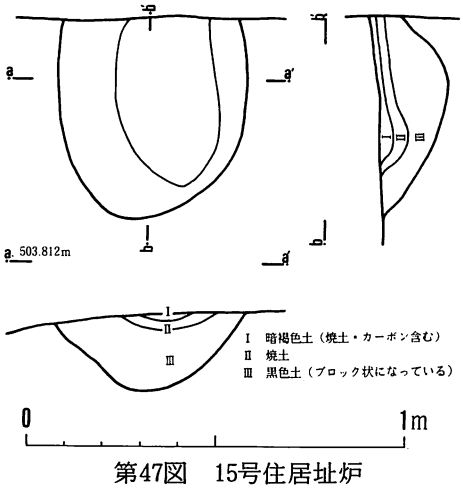
c式中の結節状浮線文を主体とするものも見られるが量は多くはない。

●15・18号住居址

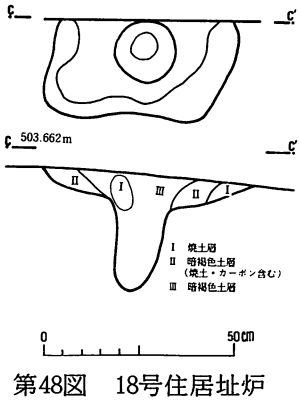
この2軒の住居址は傾斜上部側を16号住居址と切り合い、下部では19号住居址との切りあいがある。2軒は重複が多く、また調査区の幅もあって前後関係ははっきりしない。15号住居址の傾斜上部側の壁および18号住居址の下部側の壁は比較的はっきりしており、このラインから推定すると第46図中の平面図のような状態となる。円ないし楕円形を呈すると思われる15号住居址は4.5m、18号住居址は3.5mを計り、18号住居址はやや小型である。両住居址とも、床の状態は良好で、とくに炉の近くは良く踏み固められている。15号住居址の内部施設としては傾斜上部側壁際に柱穴と思われる小ピット4基（1～4）が配されている。この他に本住居址に伴うと考えられる小ピットは図中の5・6である。18号住居址では、傾斜下部側の4基（7～10）で、7と8、9と10がそれぞれ立て替えによるものであるかもしれない。また11・12は位置から15号住居址に伴うとは考えにくく、18号住居址の柱穴としておきたい。さらに18号住居址では、8のピットに接して長径70cm程の住居址内ピットが確認されている。深さは約40cmを計り、住居内貯蔵穴と思われる。なお、11・12小ピット付近から幅30cm、深さ10cmの浅い溝が確認されており、周溝と思われるものの、どちらの住居址にともなうものであるか特定できない。



第46図　15号・18号住居址



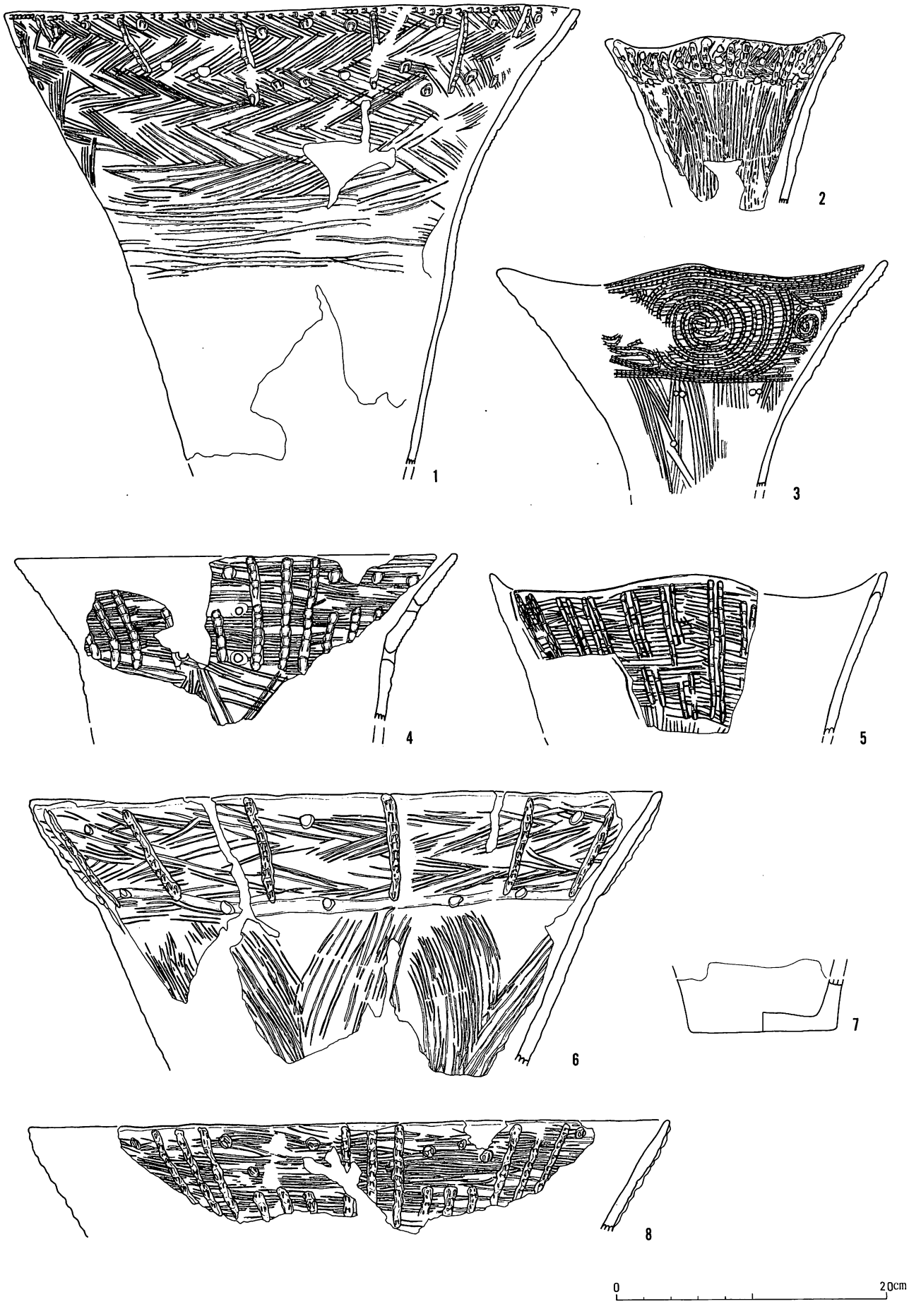
第47図　15号住居址炉



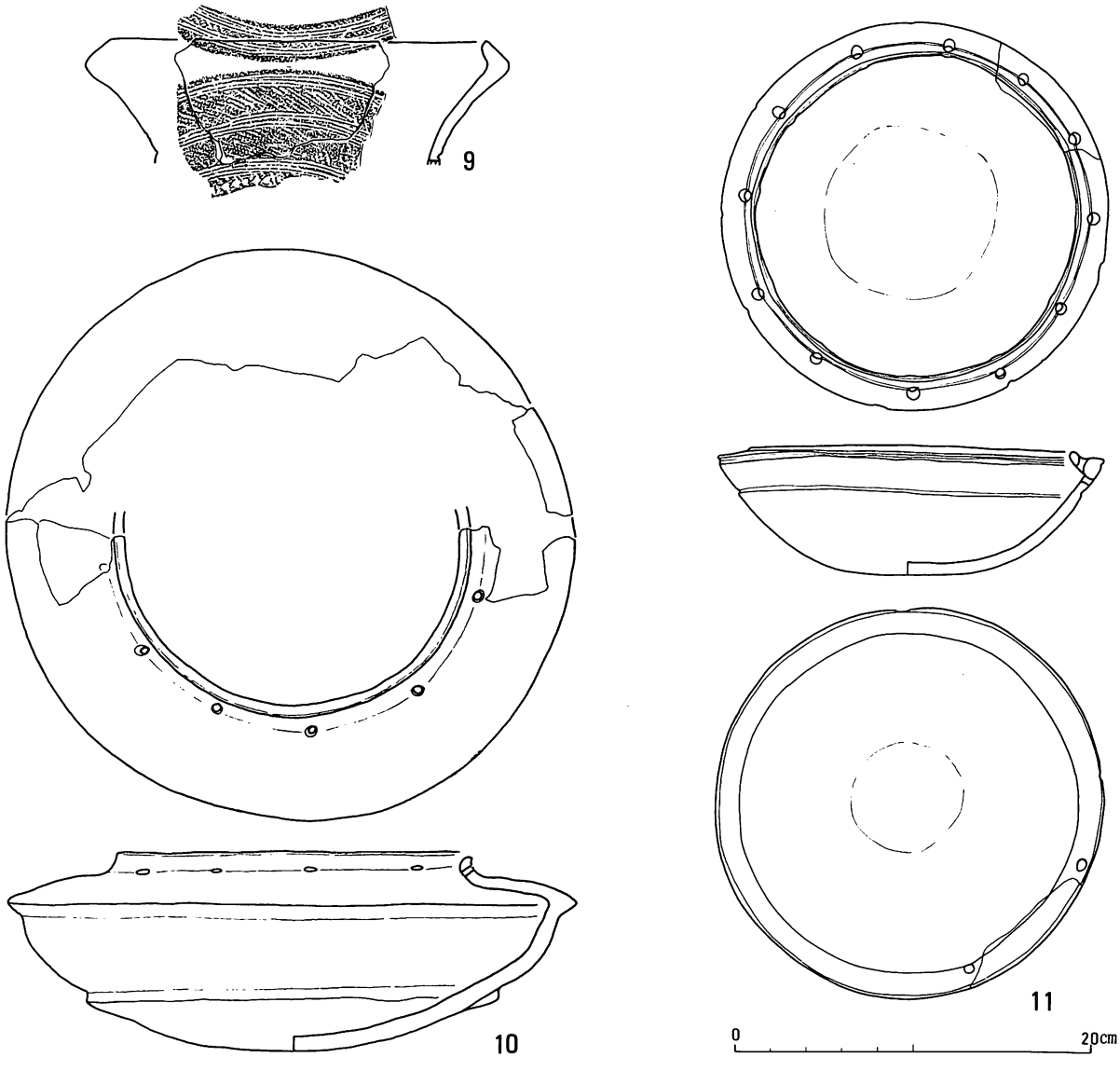
第48図　18号住居址炉

15号住居址の炉は調査区北側に接するように存在し、一部の調査であるが、短径50cmの楕円形を呈するもので、掘り込みの深さは20cmと深い。上部2cm程が焼土・カーボンの混土層で、その下部に2cmの焼土層が形成されている。なお、その下はブロック状の黒色土となり、焼土・カーボンは全く見られなかった。

18号住居址炉は調査区南側境界に接し、半分だけの調査である。径45cm程の方形を呈し、掘り込みの深さは10cm程であるが、中央部にさらに20cmのピット状の掘り込みが確認されている。焼土はこの掘り込みの中段にブロッ



第49図　15号・18号住居址出土土器その１



第50図　15号・18号住居址出土土器その２

ク状にあり、層を形成してはいない。

遺物は多く出土しているが、床面より10cm以上浮いている。また、15号と18号の遺物を分けにくいため、土器は一括して報告することとする。

土器（第49・50図，第66図67～70）

２軒の住居址の合計で、復元可能な資料として11点を図示する。９が諸磯ｂ式である他は、総て諸磯ｃ式に位置付けられる。出土量とすれば、圧倒的にｃ式が多いのであるが、出土位置では９が最も床面に近いところからの出土である。10は口唇部が直立し、屈曲部に張り出しが見られるタイプで有孔鍔付土器との中間形態、11は有孔鍔付土器と言えるもので、共に諸磯ｃ式もしくはそれ以降に位置付けられるものである。ここで出土した諸磯ｃ式土器は結節状沈線文の施されるものは５の１点だけで、他は総て結節状浮線文の付くものである。この中には３のような結節状浮線文を主体とするタイプも含まれている。なお、小破片では諸磯ｂ式とｃ式が確認されている。

●16号住居址

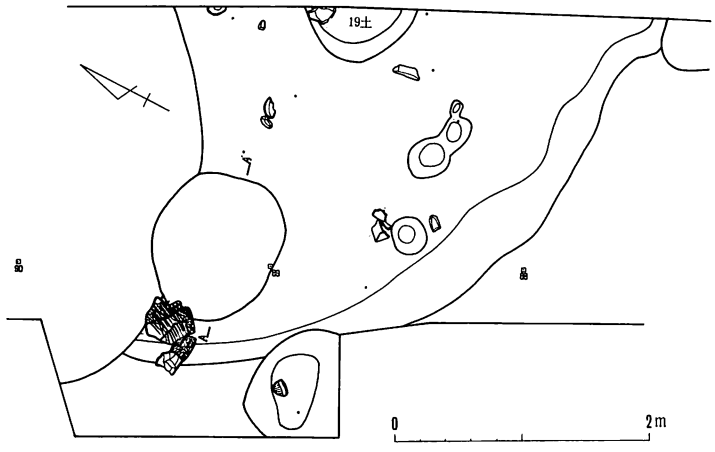
傾斜上部側は24号住居址と接し、下部は15号住居址と切り合う。この付近で切り合う住居址群の中では比較的深く掘り込まれており、壁高は40cmちかい。壁寄りに柱穴と思われる小ピットが４基確認されている。１基は単

独で壁際にあり、深さ20cmを計る。3基は接して存在し、深さは西側から50・60・30cmとなっており、いずれも深いものである。床はしっかりしている。調査部分には炉は確認されていない。

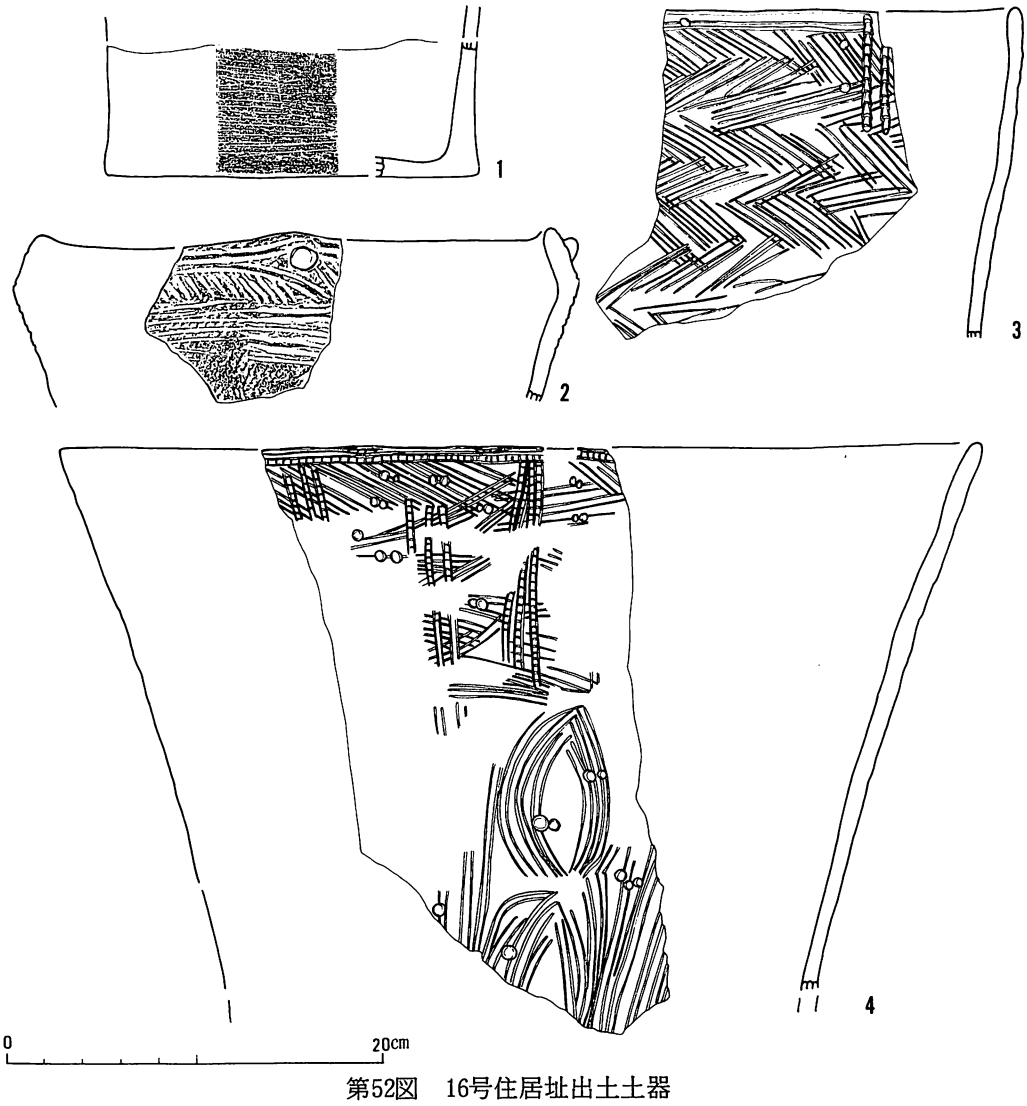
遺物は多くはなく、覆土からの出土が殆どである。

土器（第52図，第66図71・72）

復元可能な資料は4点だけである。このうち1が床面直上である他は、覆土からの出土である。3・4の諸磯c式土器には結節状浮線文を主文様とするものは含まれていない。小破片では諸磯a・b・c式総てが確認されているが、これらと共に第66図71に示した山形押型文土器の底部が出土している。押型文は尖底端部ちかくまで施文されている。



第51図　16号住居址



第52図　16号住居址出土土器

●17号住居址

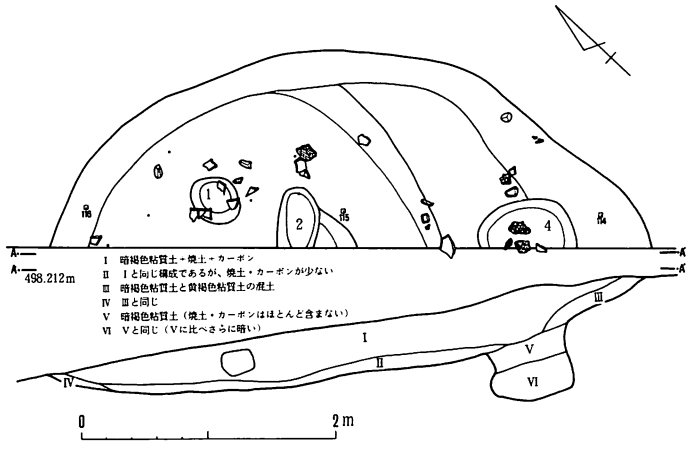
今回の調査では最も下部で確認された住居址である。住居址北側半分だけの調査である。楕円形を呈すると思われるが、確認部分での長径は4.7mを計る。床面そのものも傾斜に沿っており、傾斜上部側と下部側では20cm近い高低差がある。また、他の住居址と違って、掘り込みが簡単な造りとなっており、床面から壁への立ち上がりがはっきりしない。床は踏み固められた部分が多く、中央付近で緩やかな段を成す。覆土にはやはり焼土・カーボンが多く含まれている。小ピットは3基（1～3）確認されている。このうち1は40cm以上の深さがあり、壁に近いこともあって柱穴と思われる。2も深いピットで、部分的には60cmを越えるところもあるものであるが、床面のほぼ中央に位置し用途不明である。3は皿状の浅いピットで、これも中央部であることから用途不明である。4は径70cm、深さ50cmのしっかりしたピットで住

居内貯蔵穴と思われる。内部に遺物はなく、焼土・カーボンも含まれていなかった。

遺物は細片となって出土しているが、土器は総て5㎝以上浮いて出土している。

土器（第54図，第66・67図73～77）

復元可能な資料は4点だけである。1は位置的には貯蔵穴の中央部あたりからの出土となるが、貯蔵穴の掘り込み境界の床面レベルより5㎝浮いての出土である。2～4に示した資料はさらに浮いての出土である。なお、小破片では諸磯a・b・c式共に出土している。

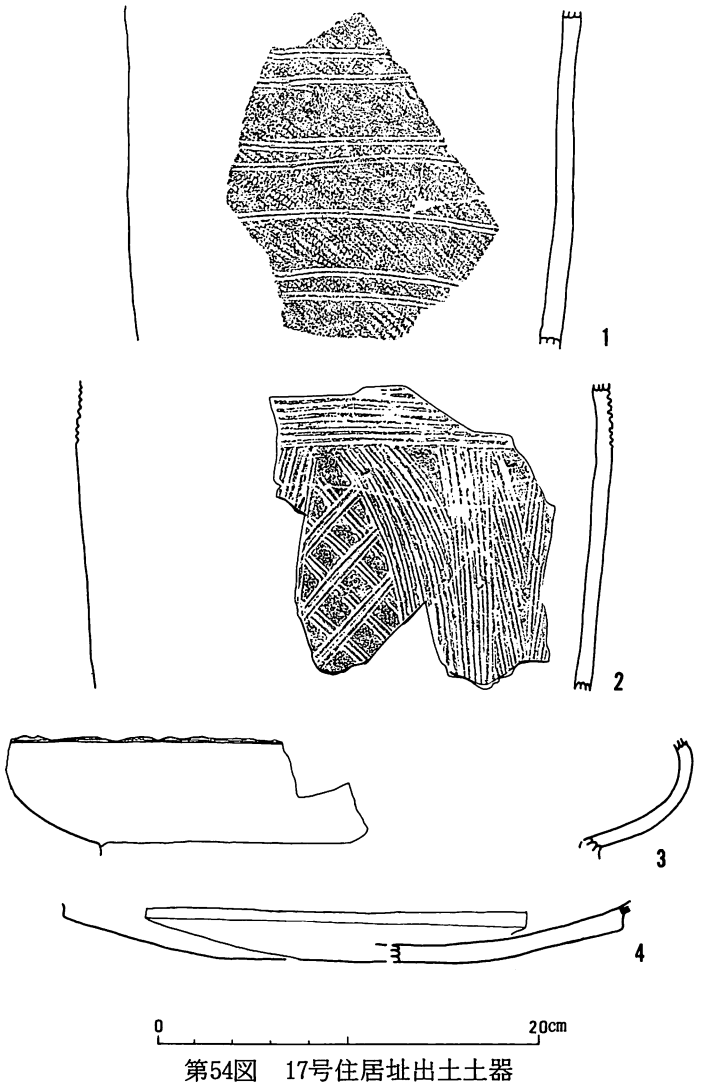


第53図　17号住居址

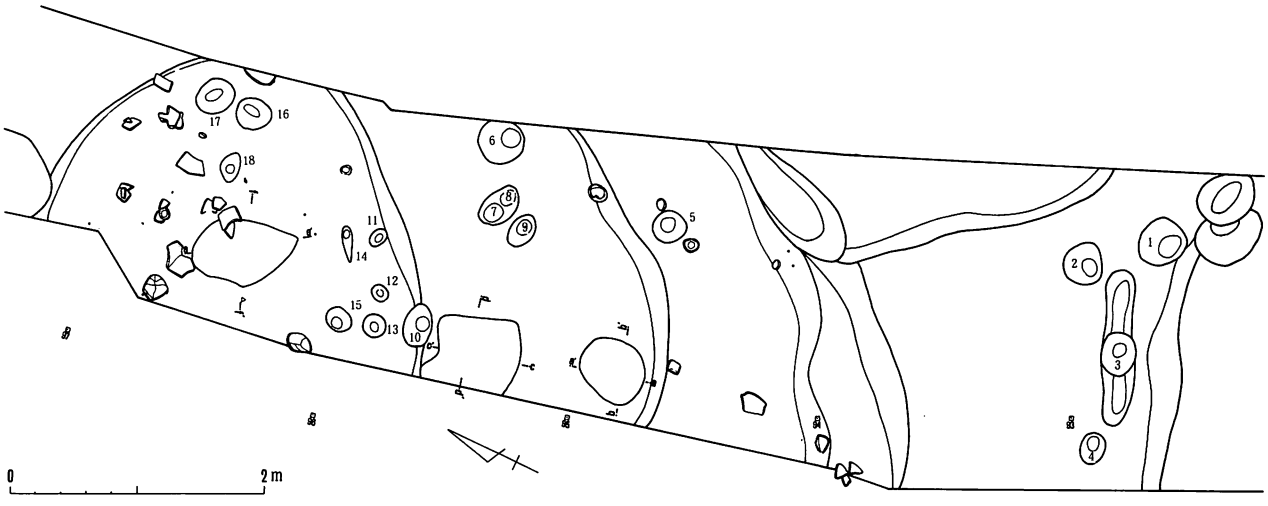
●19号・20号・21号・23号住居址

遺構集中部の内でも、最も住居址が集中していたのがこの4軒の住居址部分である。傾斜上部側に19号、下部側に23号住居址が存在する。なお、19号住居址の傾斜上部側壁の壁高が20㎝、20号住居址が40㎝を計り、この二つの壁についてははっきりと存在が確認されていることになるが、これら以外の壁はいずれも壁高10㎝以下程度のものであり、明確なものと言えるものでないことを記しておかなければならない。

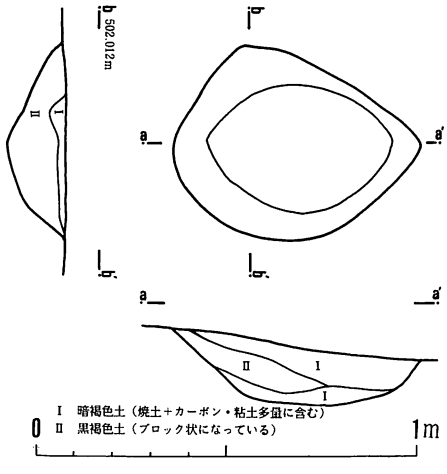
19号住居址は壁際に4基の小ピット（1～4）が存在する。1が40㎝、2が60㎝、3・4が共に20㎝の深さである。いずれも柱穴として良いであろう。また3は周溝と思われる溝中に掘り込まれたもので、周溝は幅20㎝、深さ15㎝を計る。炉は確認されていないが、床はしっかりしている。前述したように、21号住居址からは壁は総て推定であり、炉と壁の位置も推定による組み合わせである。また、これらの住居址はいずれも床は炉付近以外軟弱である。20号住居址の内部施設としては、柱穴と思われる小ピット1基（5）と21号住居址内に入り込む炉がある。20号住居址と21号住居址との境界となる壁は5㎝程の高さしかない。小ピットは位置的には壁に近く、深さ40㎝を計る。炉は、楕円形を呈し、長径65㎝を計る。掘り込みの深さは15㎝で、上部2㎝程に焼土・カーボンが確認されているが、焼土層は形成されていない。22号住居址には、5基の小ピット（6～10）と炉が確認されている。位置からは6～9の4基が本住居址に伴う可能性があるが、これらはいずれも20号住居址の柱穴とする



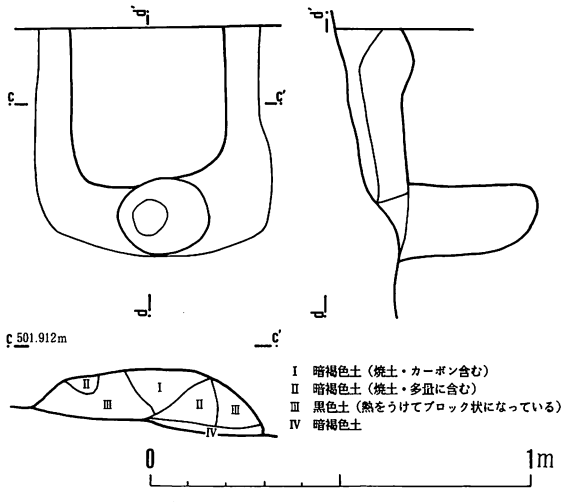
第54図　17号住居址出土土器



第55図　19号・20号・21号・23号住居址

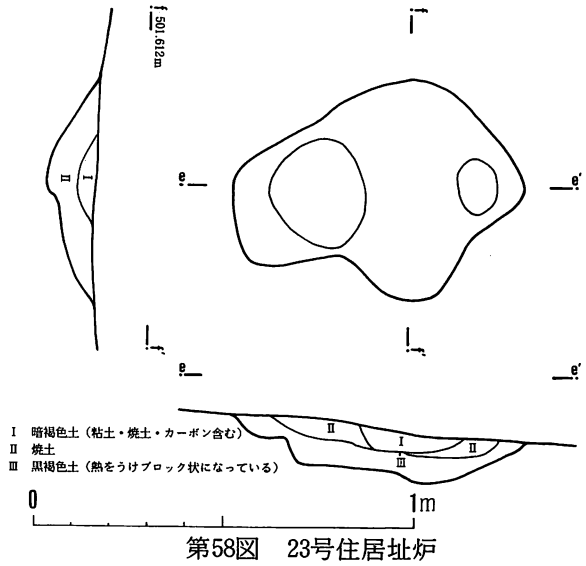


第56図　20号住居址炉

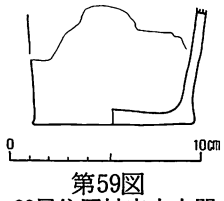


第57図　21号住居址炉

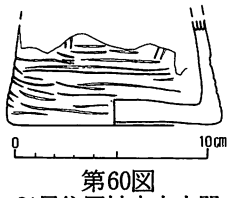
こともまた可能であろう。また、10は本住居址の炉のすぐ脇であり、本住居址に伴うとは考えにくい。20号住居址の炉と壁の距離からすれば、20号住居址の径を4 m程とすることができ、10のピットはこの範囲に収まるもので、ここでは20号住居址の柱穴としておきたい。それぞれの深さは6：50cm、7：30cm、8：20cm、9：40cm、10：50cmである。炉は短径60cmの方形を呈し、掘り込みは見られなかった。焼土・カーボンを含んだ黒色土が蒲鉾形に盛り上がっており、通常の地床炉の概念とはズレがある。ここでは、中段部に焼土・カーボンを多量に含んだ層が見られるが、焼土層は確認されていない。なお、この炉に伴うと考えられる径20cm、深さ35cmの小ピットが確認されている。23号住居址には、8基の小ピット（11～18）と炉が確認されている。21号住居址と23号住居址との境界となる壁は4～10cmを計る。壁際には、5基の小ピット（11～15）が確認されている。これらは極めて壁にちかく、このうちの11～13は配列の状況から本住居址に伴う可能性は強いと言えようが、14・



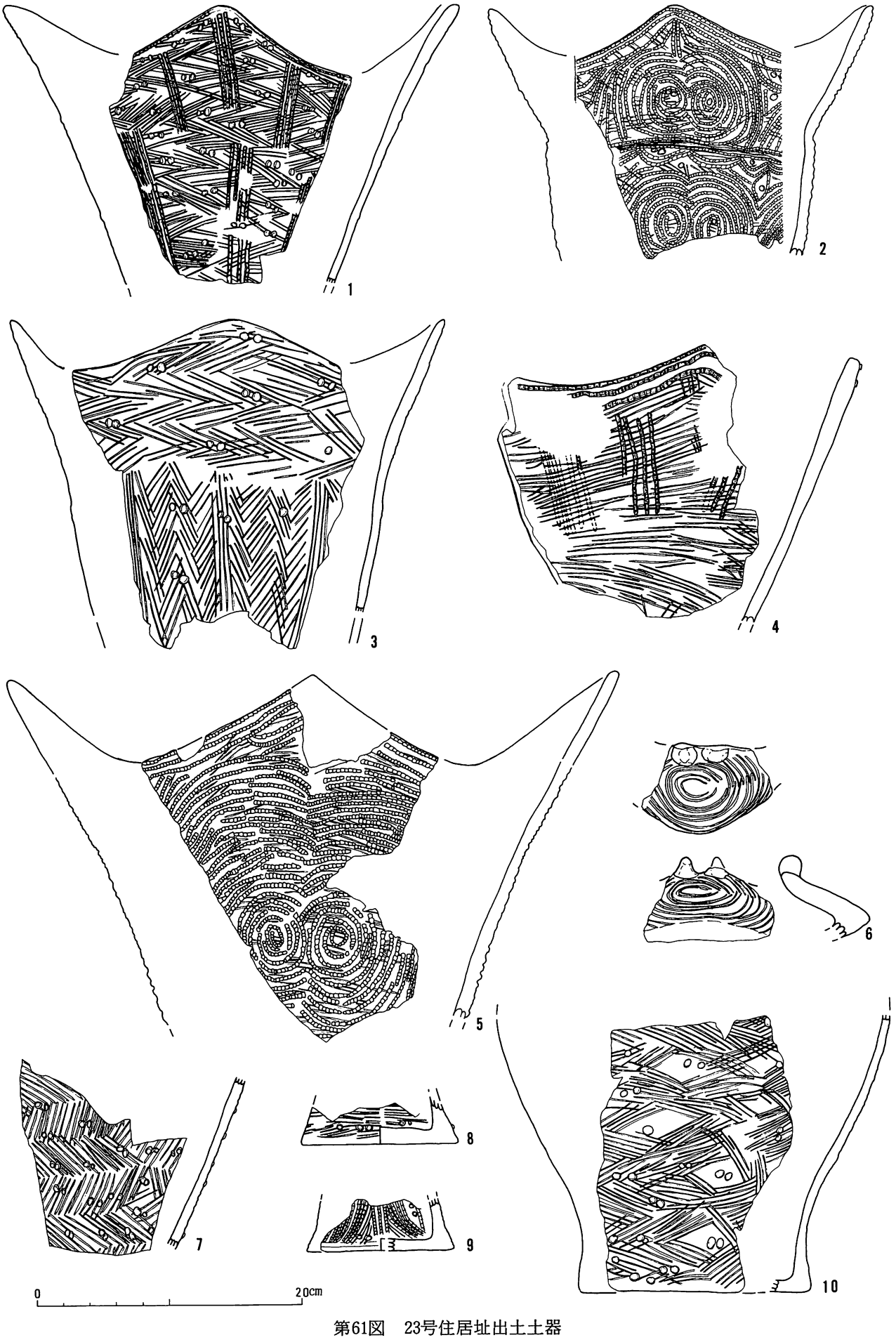
第58図　23号住居址炉



第59図
20号住居址出土土器



第60図
21号住居址出土土器



第61図　23号住居址出土土器

15は21号住居址に伴うものであってもおかしくない位置であろう。また、16・17も本住居址の柱穴とすることができると思われるが、18は炉のすぐ脇であり、柱穴とは考えられない。本住居址の炉は最大80㎝の不整形を呈し、掘り込みは約10㎝である。中央部に5㎝程黒色土が入り込むが、焼土層は5㎝の厚さで形成されている。

遺物は多く出土しているが、覆土からの出土が多い。

土器

20号住居址（第59図，第67図78～84）

図示できるのは1点だけである。無文の深鉢底部で、20㎝浮いて出土している。小破片では諸磯a・b・c式ともに出土している。

21号住居址（第60図，第67図85～88）

やはり図示できるのは1点だけである。本資料は壁に張り付いて出土したものであり、本住居址に伴うものとしておきたい。この他には床直の出土遺物はなく、小破片ではやはり諸磯a～c式土器が見られる。

23号住居址（第61図，第67図95～98）

本住居址では復元可能な資料が多いが、1が床面直上である他は、総て10㎝以上浮いての出土である。1は炉の東側の床上からの出土で、沈線地文に結節状沈線文と貼付文を施すタイプである。本住居址で図示したものは総て諸磯c式土器であるが、前述したように1と時期的にズレがあると思われる2・4・5・9などは覆土からの出土である。さて覆土中の資料では、沈線と貼付文主体の3・6・7・8・10と前述の一群とに分けられる。中でも、2・5・9は結節状浮線文を主体とするもので、諸磯c式土器の最も新しい部分に位置付けられるものであろう。この他の小破片では諸磯c式土器が多い。

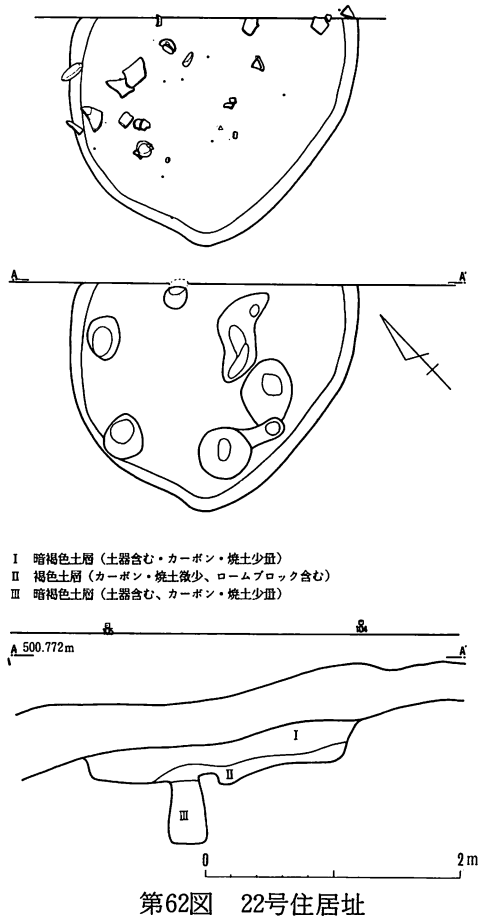
●22号住居址

17号住居址から傾斜上部方向20mに位置する。半分だけの調査である。壁は殆ど確認されていないが、セクションでは確認できる。覆土は焼土・カーボンを含むが、締まりのないものであった。床は全面軟弱である。調査部分には炉は確認されていない。内部には8基の小ピットがあり、配置からはこれらが一周することからも柱穴とすることもできようが、これで完結するとすれば、もともと炉が存在しなかったと同時に、2m程度の規模ということになり、あまりに小型すぎるきらいがある。形態からも推定されるように、長径2.7m程度の楕円形の住居址としておきたい。

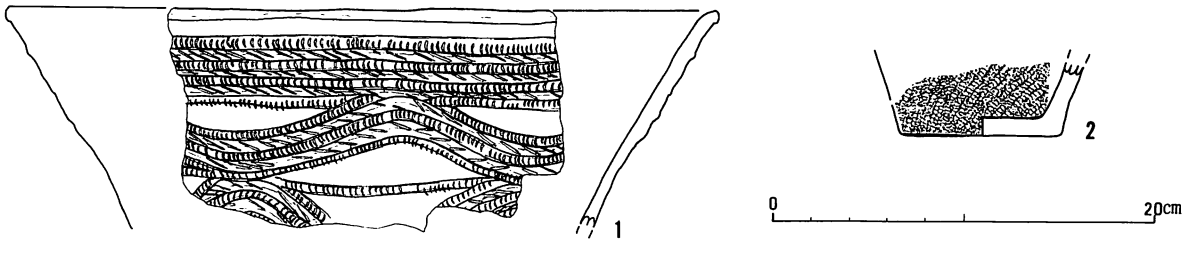
遺物は細片となって覆土から出土している。

土器（第63図，第67図89～94）

図示した2点はいずれも覆土からの出土である。小破片となって出土したものも諸磯b式土器が殆どである。



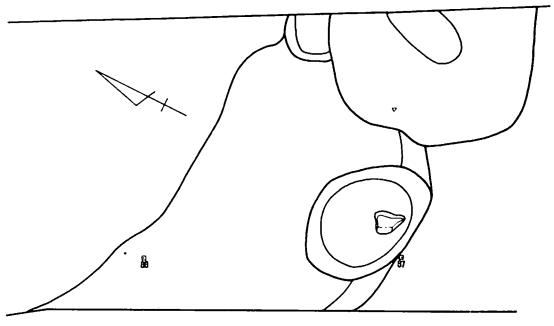
第62図　22号住居址



第63図　22号住居址出土土器

●24号住居址

傾斜上部に14号住居址、下部に16号住居址が在存する。ごく一部が残存するだけであり、傾斜上部側では30cmの壁高である。床面は軟弱で、調査段階ではこの部分の住居址は意識していなかったが、壁の確認により住居址とした。本住居址に伴うと考えられる施設や遺物はない。



第64図　24号住居址　0　2m

3　土壙と出土土器

今回の調査では32基の土壙が確認された。総てが諸磯期に位置付けられると思われる。土壙も調査区のうち傾斜上部から調査を行い、順次土壙番号を付けているが、調査の関係上未掘部分を飛び越して調査を行った部分もあり、31号土壙が欠番となっている。また、12号および14号土壙は全体図にのみ示してある。土壙番号としては1号から33号までである。

ここでは、完形もしくはそれにちかい破片（第82・83図）を出土したものについて先に記し、それ以外のものはまとめて後述する。

●1号土壙

調査区の最上部で確認された土壙で、楕円形を呈し、長径110cm、短径90cm、掘り込みの深さ25cmを計る。内部には幅50cm、厚さ20cm程の焼土が土壙底面より10cm浮いた状態で確認されており、意識的に入れたものと思われる。この焼土のすぐ脇には、10cmほど浮いて、ほぼ完形の諸磯c式土器が出土している。

土器（第82図1）

4単位の波状口縁を有する深鉢で、器面全面を沈線で充たし、一部に結節状沈線文を併用する。胴部下半には円形貼付文が見られる

●3号土壙

1号・2号土壙の傾斜下方4mに位置する。長径1.5mの楕円径を呈し、確認面からの深さ75cmを計る。今回確認された土壙の中では深い掘り込みと言える。遺物は細片となったものが、底面ちかくから上部付近までにわたって出土している。

土器（第82図2～4，第84図4・5）

復元可能な土器は3点出土した。2は沈線を主体とする大型の波状口縁を有する深鉢で、沈線を主文様とし、結節状浮線文・貼付文を施すものである。3はいわゆるトロフィー形土器の把手部分であり、細かな結節状浮線文が一周する。長野・山梨地方に多く見られる十三菩提式併行の土器である。

●7号土壙

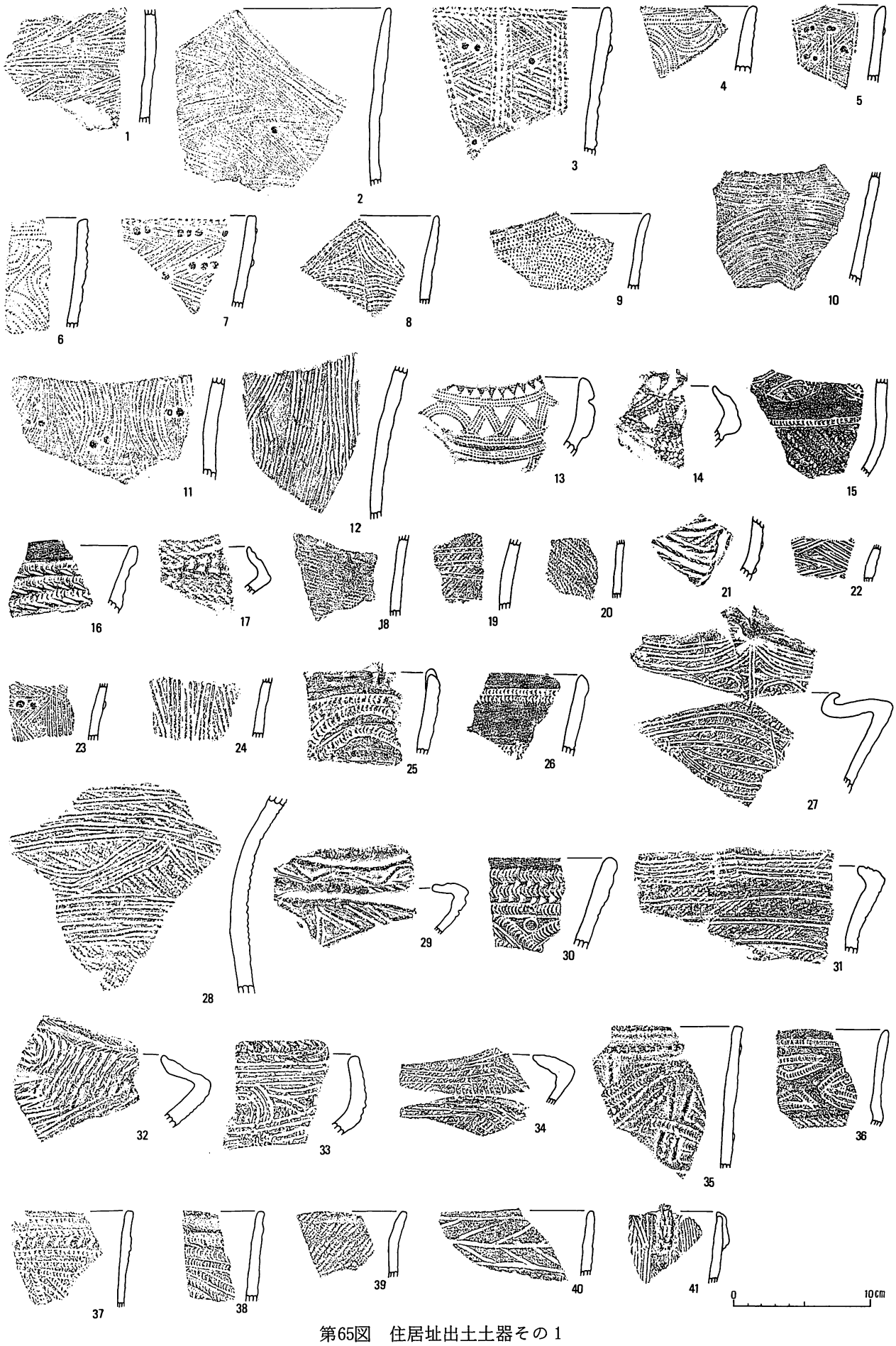
3号住居址のすぐ脇に位置する。長楕円形を呈し、長径80cm、短径45cmをはかる。掘り込みは非常に浅く約10cmである。掘り込みのほぼ中央より、床面から8cm浮いて有孔土器破片が出土している。

土器（第82図5）

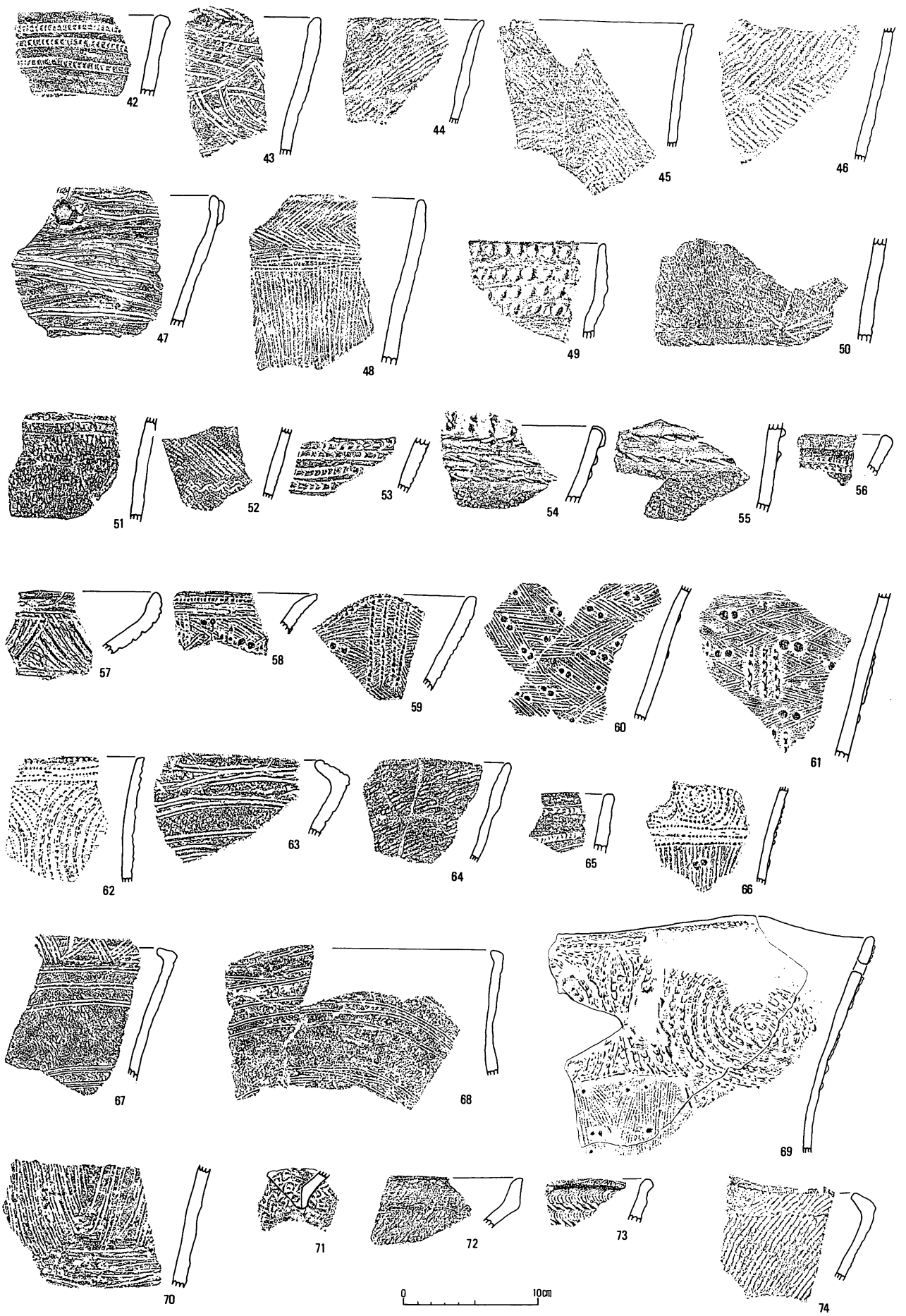
有孔土器破片である。口径20cmと推定される。口唇部は直立するが、屈曲部の肥厚（張り付け）はみられない。無文であることからも諸磯c式期に位置付けられる。

●8号土壙

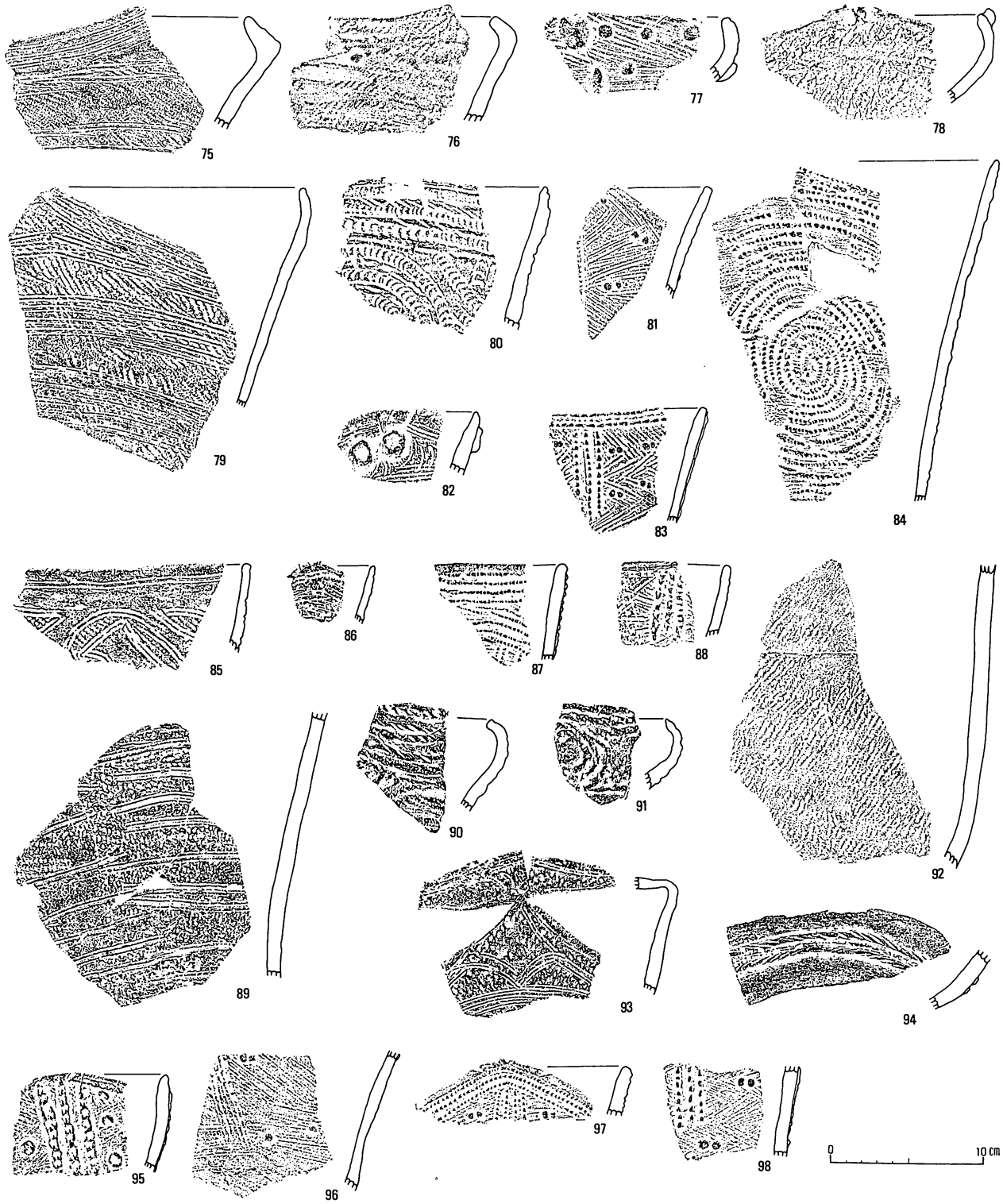
3号住居址から傾斜下部方向14mに位置する。径1.2mの不整円形を呈する土壙で、深さ50cmを計る。壁の中段



第65図　住居址出土土器その１



第66図　住居址出土土器その２



第67図　住居址出土土器その３

部が膨らみをもち、袋状土壙にちかい。土壙底面は平坦で、傾斜に関係なく水平に作られている。覆土は良く締まっており、上部から下部まで、主体となる暗褐色粘質土に混ざって焼土・カーボンが確認されている。

土器（第82図６，第84図６～８）

覆土中より諸磯ｃ式土器底部１点が出土している。

●９号土壙

８号土壙の直ぐ脇に位置する。８号土壙より一回り大きく、また形状も整っている。円形を呈し、径1.5m、深

さ80㎝を計る。本土壙には壁の膨らみは見られないが、やはり土壙底面は平坦で、傾斜に対し水平に作られている。覆土はやはり良く締まっており、焼土・カーボンが混ざるが、特に中層部では多量の焼土・カーボンが混入していた。

遺物は比較的多く、土器以外にも磨製石斧や磨石などの石器が入れられていた。

土器（第82図７，第84図９～12）

復元可能な資料は１点だけである。円形貼付文を主体とする諸磯ｃ式土器底部である。

●13号土壙

６号住居址に接して確認された。15号土壙と切り合い、セクションからは本土壙が15号土壙を切っていることが確認された。全掘ではないが、推定1.6ｍの不整円形を呈すると思われる。掘り込みも深く、確認面から80㎝を計る。本土壙も底面は平坦で、水平に作られている。覆土は良く締まっており、覆土の殆どを占めるⅠ層中に特に多くの焼土・カーボンが含まれている。また、遺物も多いが、殆ど総てがⅠ層からの出土である。

土器（第82図８～11，第84図16～19）

復元可能な資料は４点である。これらは総てⅠ層からの資料である。９は無文であり、時期的な位置付けはできないが、８・10は諸磯ｂ式である。11は直立口唇と屈曲部の肥厚状況から有孔土器と有孔鍔付土器の中間形態とされるものであり、諸磯ｃ式に位置付けられるものである。

●16号土壙

17号住居址の傾斜上部側５ｍに確認されたもので、今回の調査で確認された土壙では最も下側となる。確認面以下の掘り込みは非常に浅く、10㎝に満たない。本土壙調査時には土壙プランは不明ながら、土器の集中が見られたため遺物を残しながら掘り下げたところ土壙が確認されたもので、確認面よりも上部からの掘り込みは明らかである。確認部分では不整円形を呈し、直径90㎝を計る。土壙底面は丸みを帯び、傾斜に沿って緩やかに傾斜している。覆土は良く締まっており、特に土器を含む上層では焼土・カーボンが多く含まれていた。

土器（第83図12・13,第84図25）

本土壙では２個体の土器が確認された。前述したように本来の掘り込みからすれば、中段位に焼土・カーボンと共に埋められたものであろう。大型と小型の深鉢各１点である。12・13ともに縄文を地文とし、口縁部～胴部上半にかけて、沈線や連続爪形文を施文するものである。13の沈線は弧状に配されていることからも、本遺跡では数少ない諸磯ａ式土器である。なお、12の内面の磨きは非常に丁寧であり光沢がある。

●18号土壙

15号・16号住居址と切り合って確認された。この部分では非常に多くの遺物が出土しているが、レベルから確実に本土壙に伴うとすることができるものだけを18号土壙出土遺物としている。長径120㎝、短径100㎝を計り、確認面からの深さは70㎝と土壙の中では深いものである。掘り込みは深いが、底面は丸く掘られており、壁は緩やかに立ち上がっている。やはり遺物は浮いた状態での出土である。

土器（第83図14・15，第84図28～31）

復元可能な土器は２個体で、ともに無文である。15は有孔土器の底部と思われ、胴部に段を有するものである。14はほぼ完形の鉢である。薄手のうえ丁寧な造りで、内外面の磨きも非常に良好である。

●23号土壙

15号・18号住居址と切り合っている。楕円形を呈する土壙で、長径140㎝、短径110㎝を計る。確認面からの深さ60㎝の掘り込みであるが、土壙底面は丸く造られている。覆土は良く締まっており、３層に分けられる。このうち上部２層には焼土・カーボンが含まれ、最上層に多い。遺物は多くはなく、最上層からの出土である。

土器（第83図16，第84図39～41）

復元可能な資料は１点だけである。16に示した土器は、出土位置から本土壙に伴うと判断したものであり、出土レベルは土壙確認レベルよりさらに10㎝浮いた状態である。ただ、他の例にもあるように、実際の掘り込みは確認面よりも上であることは確実と思われることから、本資料を23号土壙に伴うものとしておきたい。４単位の大型の波状口縁を有する深鉢で、口縁部～胴部上半部をほぼ全面にわたって結節状浮線文で覆うタイプである。胴部下半は２ないし３条を単位とする結節状浮線文と円形貼付文を主文様とする。この種の土器は比較的多く見られるが、諸磯ｃ式期でも新しい部分に位置付けられるものであろう。

●32号土壙

23号住居址と切り合っている可能性があるが、23号住居址の傾斜下部側の壁が不明であるためはっきりしない。調査区の関係上、ごく一部を調査したに過ぎない。規模・形状ともに不明であるが、土壙底面は平坦に造られており、壁の立ち上がりがほぼ垂直であることなどは判明している。また、覆土には焼土・カーボンが含まれている。遺物は掘り込み上部からまとまって出土している。なお、ここで確認された土器と20㎝ほど離れただけで、しかもほぼ同レベルで同時期の完形土器２個体が出土していることを付記しておく。

土器（第83図17・18，第84図51・52）

本土壙からは２個体が出土した。うち１点はほぼ完形である。この２個体は重なるように出土しており、完形土器と大破片を埋納したものと推定される。17はごく一般的に見られるもので沈線地文に円形貼付文を施文するものである。18は胴部以下はごく一般的であるが、口縁部は結節状浮線文以外に、地文として、結節状浮線文に使用したものと同じ半截竹管をそのまま器面に押し付け、それも連続ではないため、結節状沈線文と言えるものでもない。１回の刺突で、１単位の平行沈線文を描いている。本遺跡の出土品中には他に見られず、類例の少ないものであろう。

●33号土壙

32号土壙のすぐ脇に位置する。本土壙も調査区の関係で、ごく一部を調査したに過ぎない。確認部分は円形を呈し、推定で径100㎝程と思われる。確認面からの掘り込みの深さは50㎝を計る。土壙底面は平坦に造られており、壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は良く締まっており、大きく二層に分けられる。ここでは焼土・カーボンは見られなかった。ただし、上層と下層の間に、部分的ではあるが最大８㎝に及ぶ炭化したクルミの層が確認されている。図中の細線がその推定範囲である。クルミは全部で124ｇちかくあり、本遺跡で出土したほぼ完形の殻果の重量から48個分に相当する（詳細は第Ⅲ章第２節参照）。このほかでは下層中より土器２個体が出土しているが、他の例と同様10㎝以上浮いている。

土器（第83図19・20，第84図53）

やはりこの２個体も重なるように出土している。19は結節状沈線文を有する大破片である。20には結節状沈線文は見られない。

●その他の土壙

・２号土壙（第84図１～３）

１号土壙のすぐ脇に位置する。不整楕円形を呈し、長径1.7ｍ、短径1.3ｍ、深さ40㎝を計る。確認面での掘り込み部分に50㎝程の平石がおかれていた。土壙底面は緩やかな段状を成す。諸磯ｃ式土器が出土している。

・４号～６号土壙

３号土壙から傾斜下部方向に４号、５号・６号と並ぶ。３基とも不整円形を呈する。４号土壙は径130㎝、深さ25㎝を計る。覆土には僅かではあるが焼土・カーボンが含まれる。５号・６号土壙は切り合っており、セクションから５号が６号を切っていることが確認されている。ともに径120㎝程度の不整円形を呈し、深さは20㎝であ

ある。これらも覆土には焼土・カーボンが含まれる。この3基からは土器は出土していない。

・10号～12号土壙（第84図13～15）

8号・9号土壙から傾斜下部方向2mに位置する。3基とも不整円形を呈するが、大きさは異なる。10は径120cm、深さ70cmである。底面はほぼ水平に造られており、壁は傾斜上部側では垂直に立ち上がるが、下部側では緩やかである。覆土中にはやはり焼土・カーボンが含まれている。本土壙からは諸磯b式土器が出土している。11号土壙は径100cm程の楕円径にちかい形状で、確認面からの深さは10cmと浅い皿状の土壙である。遺物は出土していない。12号土壙は径80cm、深さ40cmを計り、底面は丸く造られている。やはり遺物は出土していない。

・14号土壙（第84図20～22）

7号住居址と8号住居址の中間に位置する。図面が作成されておらず、規模・形状とも不明である。3点の土器小破片が出土している。いずれも諸磯b式土器である。

・15号土壙（第84図23・24）

13号土壙に切られており、ごく一部の調査である。平面形は円形を呈すると思われるが、規模は不明である。覆土に焼土・カーボンは含まれておらず、遺物は小破片が僅かに出土しただけで、諸磯b式である。

・17号土壙（第84図26・27）

16号住居址と切り合うが、切り合い関係は不明である。長楕円形を呈すると思われ、長径100cm、短径75cm、深さ40cmをはかる。壁の立ち上がりは緩やかである。土器は諸磯b式・c式が出土している。

・19号土壙（第84図32～34）

16号住居址内で確認された。およそ半分の調査である。円ないし楕円形を呈すると思われ確認部分では径90cm、深さ70cmを計る。セクションでは16号住居址を切っており、覆土には焼土・カーボンが多量に含まれていた。土器には諸磯b式とc式が見られ、図示していないが覆土中から深鉢底部が出土している。

・20号～22号土壙（第84図35～38）

14号住居址・24号住居址と切り合っている。20号土壙は今回の調査で確認された土壙のうち最大のもので、半分だけの調査である。円形を呈し、径160cm、深さ200cmを計る。セクションから、本土壙が14号住居址と21号土壙を切っていることは明らかである。深さ100cm程のところから堆積土が変わり、上層には焼土・カーボンが含まれるものの、下層では焼土は見られず、カーボンもごく僅かである。土器は出土していない。21号土壙は、20号土壙に切られており、ごく一部が調査されただけである。覆土にカーボンが僅かに含まれる。やはり土器は出土していない。22号土壙は、24号住居址と切り合う。楕円形を呈する土壙で、長径110cm、深さ70cmを計る。底部はほぼ平坦で壁の立ち上がりはきつい。内部から30cm大の平石が出土している。土器は小破片で諸磯b式・c式が出土している。

・24号・25号土壙（第84図42～45）

22号住居址の傾斜下側で確認された。ともに不整円形を呈し、24号土壙は長径110cm、短径90cmを計る。浅い皿状の土壙で深さは最深部で25cmをはかる。土器は諸磯a式・b式が出土している。25号土壙は、100cm程の長径と思われる。これも深さ20cmと浅いものである。土器は諸磯b式である。

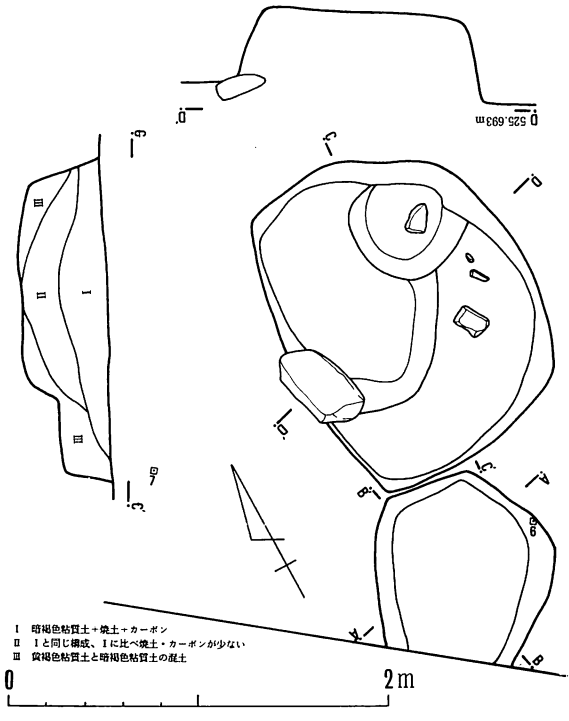
・26号土壙

19号住居址と切り合う。また、セクションから20号住居址に切られている。非常に細長い溝状の土壙で、覆土には焼土・カーボンを含んでいる。ごく一部の調査であるため、規模・形状は不明であるが、確認された部分だけでも2.3m以上ある。あるいは全く別の住居址であるかもしれない。遺物は全く出土していない。

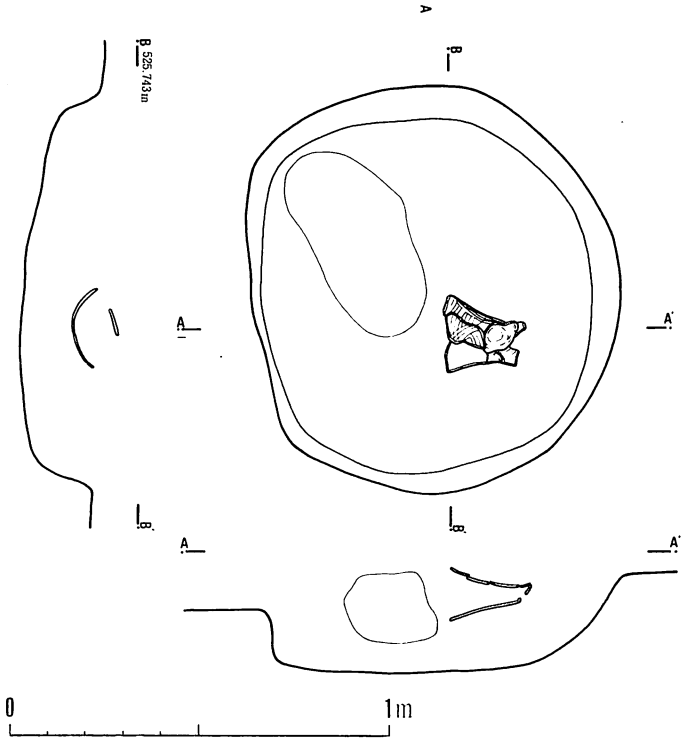
・27号～30号土壙（第84図46～50）

いずれも22号住居址のすぐ脇で、24号・25号土壙とも近い。27号土壙は、楕円径を呈し、長径80cm、深さ10cmの浅い皿状の土壙である。長軸端に小ピットを有する。28号土壙は、半分だけの調査であるが、短径100cm、深さ10cmの、これも浅い皿状土壙である。底面は平坦であるが、小ピット2基を有する。土器は小破片1点だけで、ヘラ切浮線文を有する諸磯b式土器である（第84図46）。29号土壙は、やはり一部だけの調査であり、不整楕円

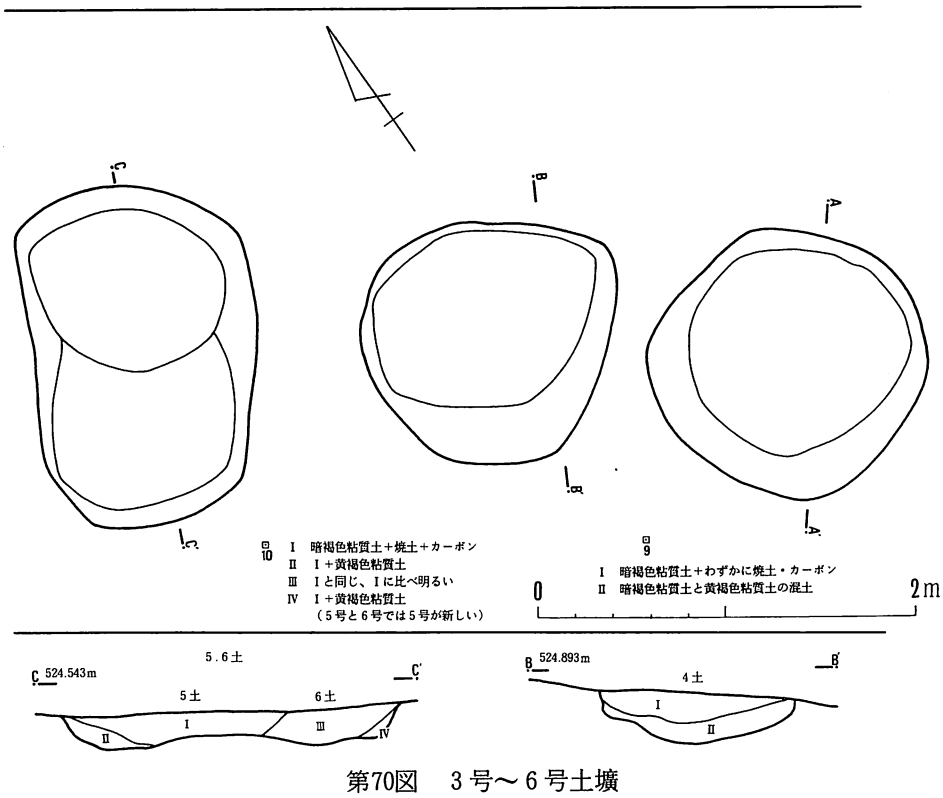
形を呈す。長径140cm、深さ20cmを計り、長軸両サイドに小ピットを有する。本土壙からは数点の小破片が出土しているが諸磯ａ式とｂ式が見られる（第84図47～49）。30号土壙も一部だけの調査であり、規模は不明である。やはり浅い土壙で、底面に小ピットを有する。縄文の施された小破片１点が出土しているが、諸磯ｂ式と思われる（第84図50）。



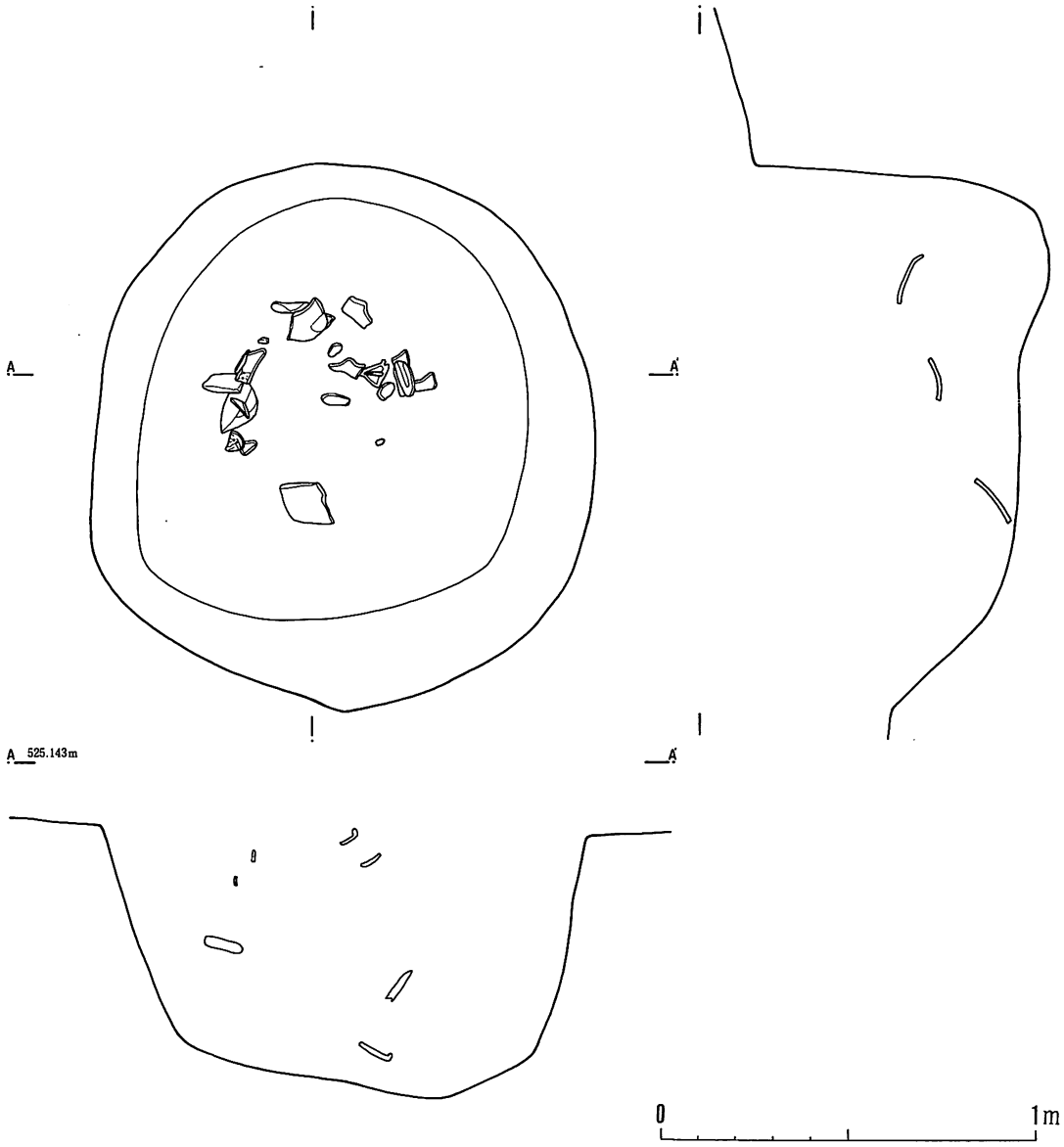
第68図　１号・２号土壙



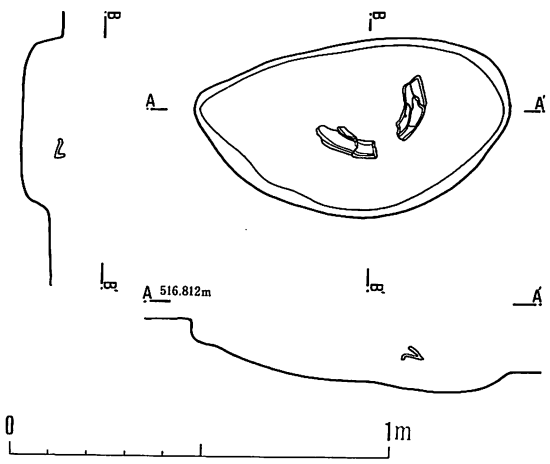
第69図　１号土壙微細図



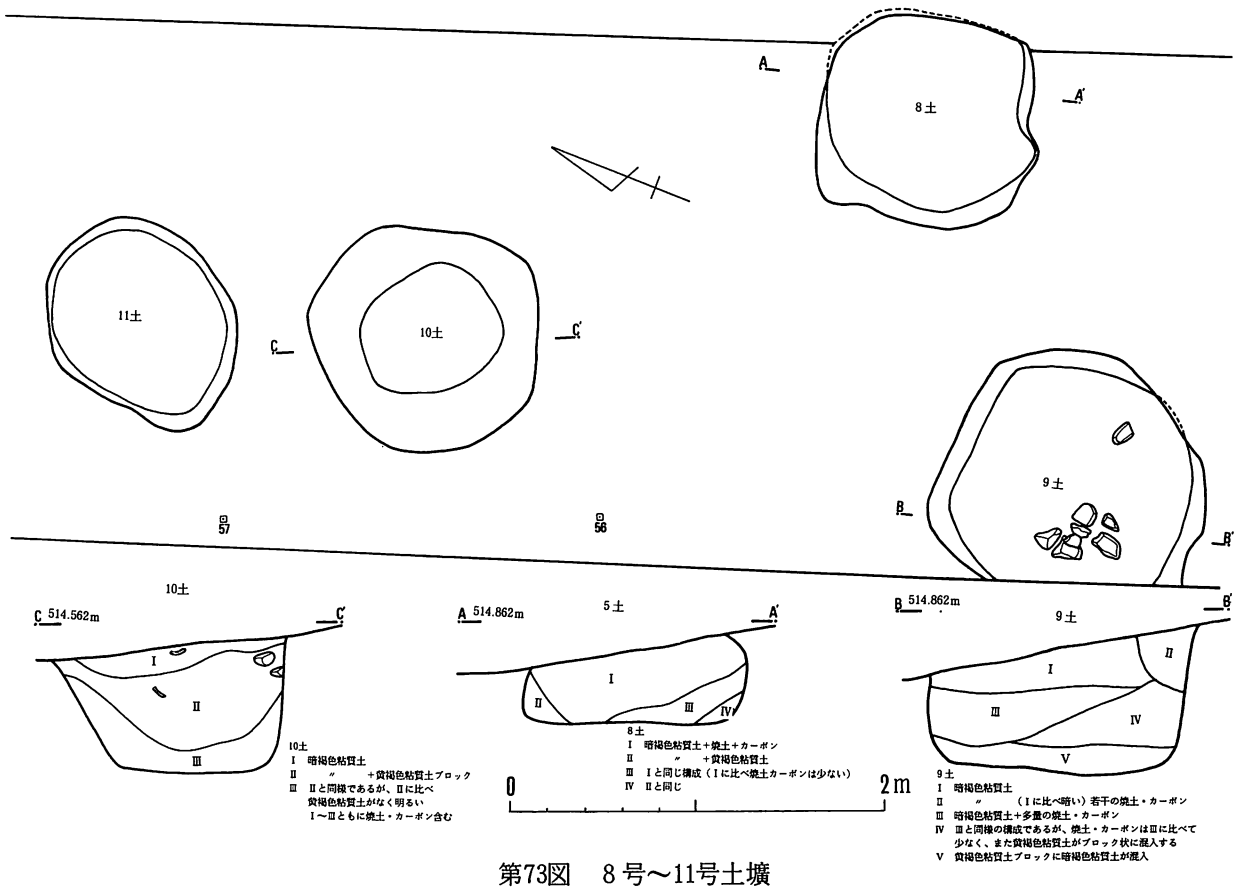
第70図　３号～６号土壙



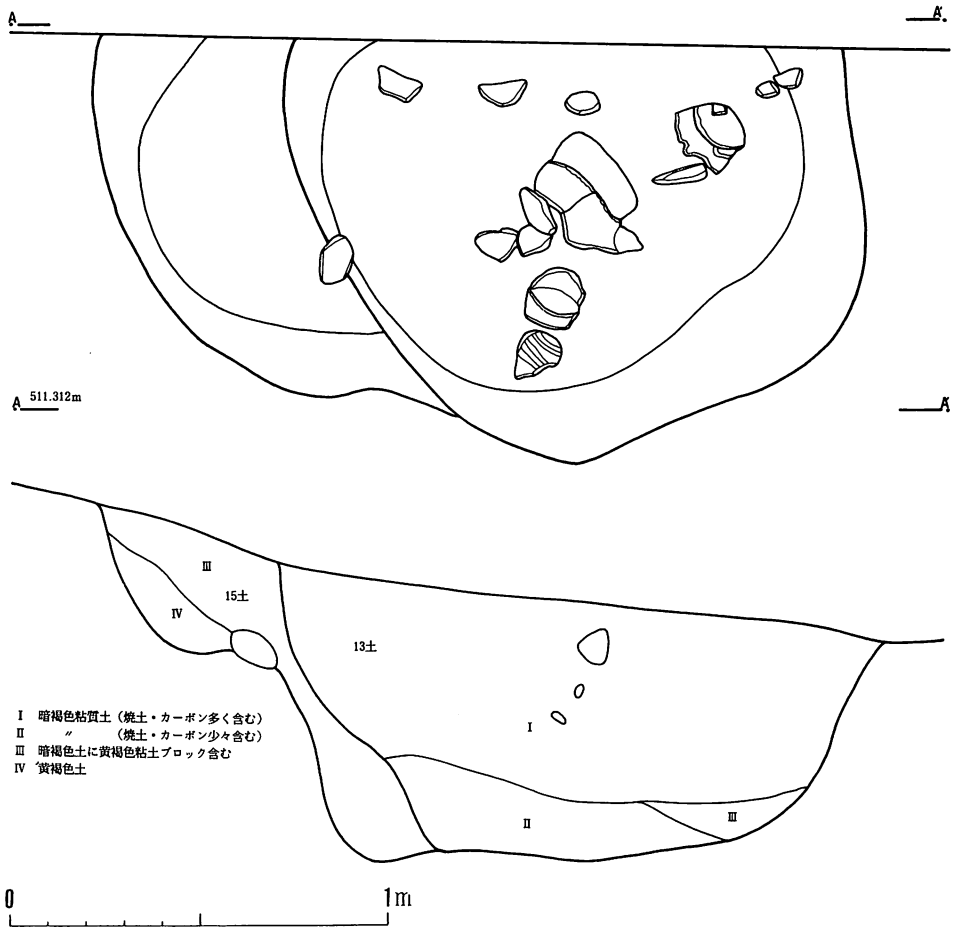
第71図　3号土壙微細図



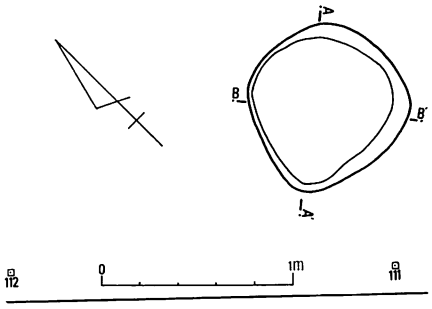
第72図　7号土壙微細図



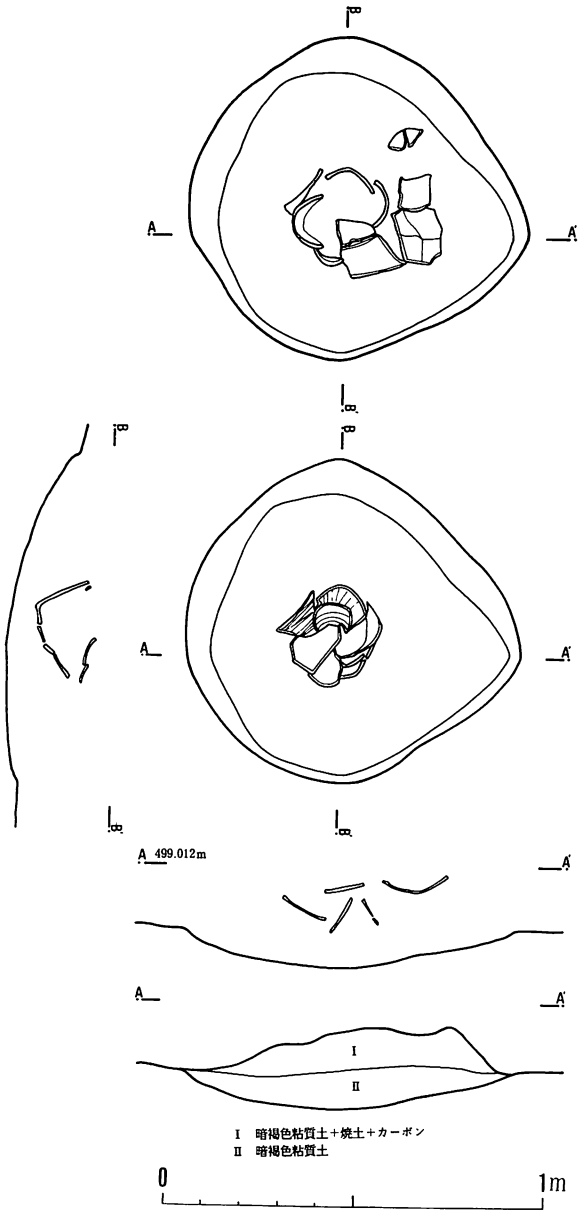
第73図　8号～11号土壙



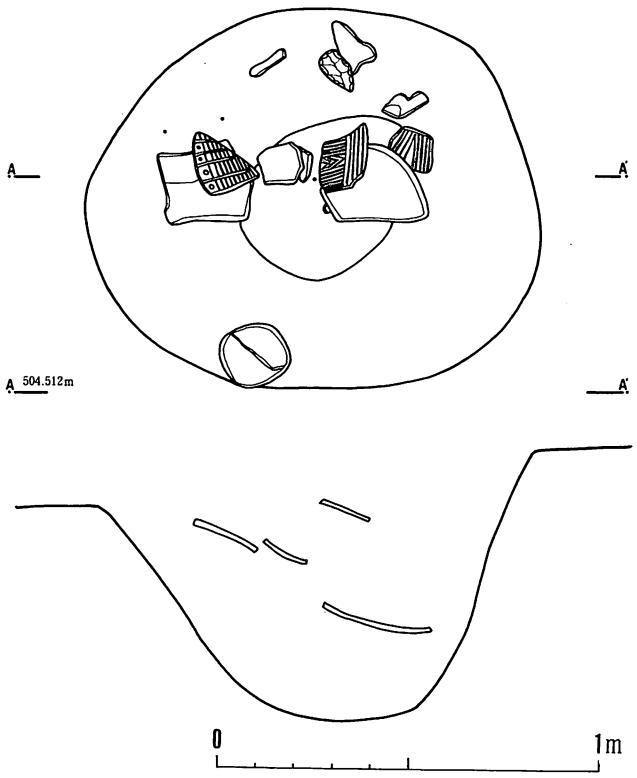
第74図　13号・15号土壙微細図



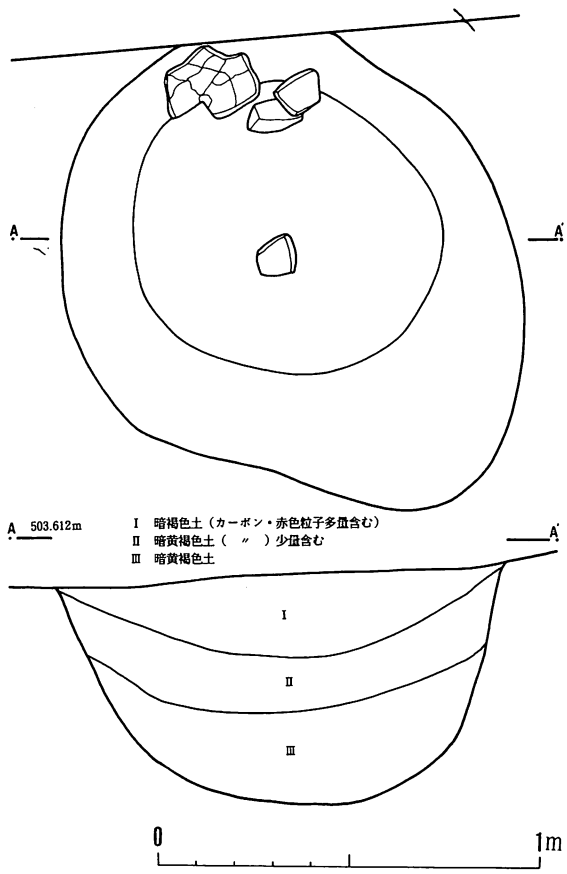
第75図　16号土壙位置図



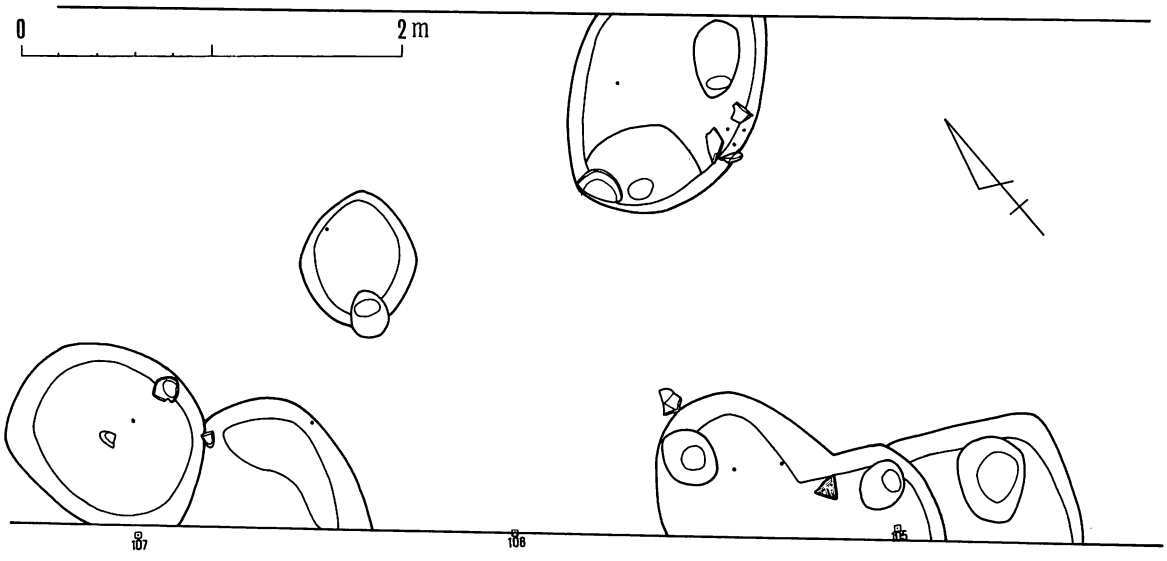
第76図　16号土壙微細図



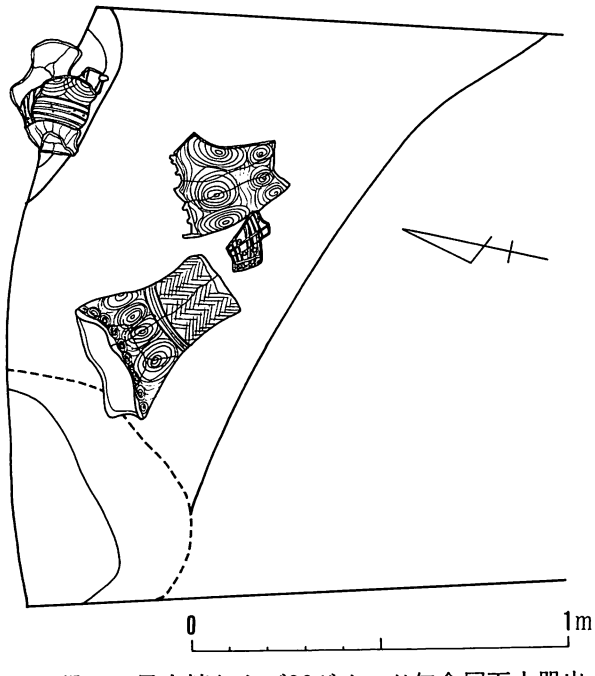
第77図　18号土壙微細図



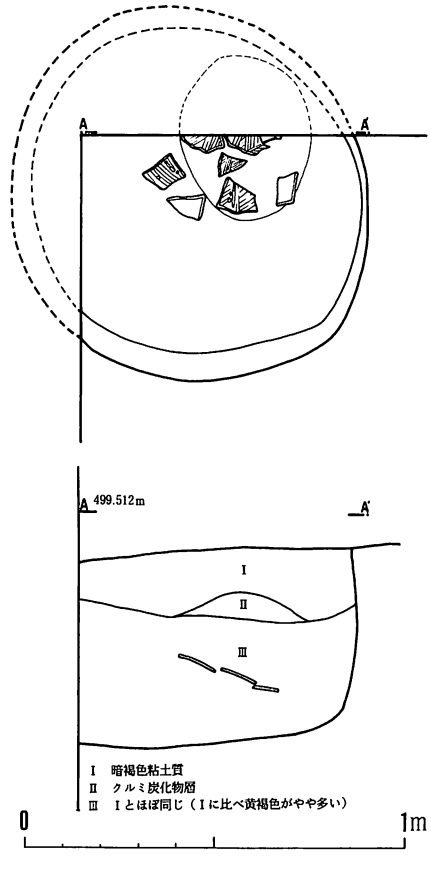
第78図　23号土壙微細図



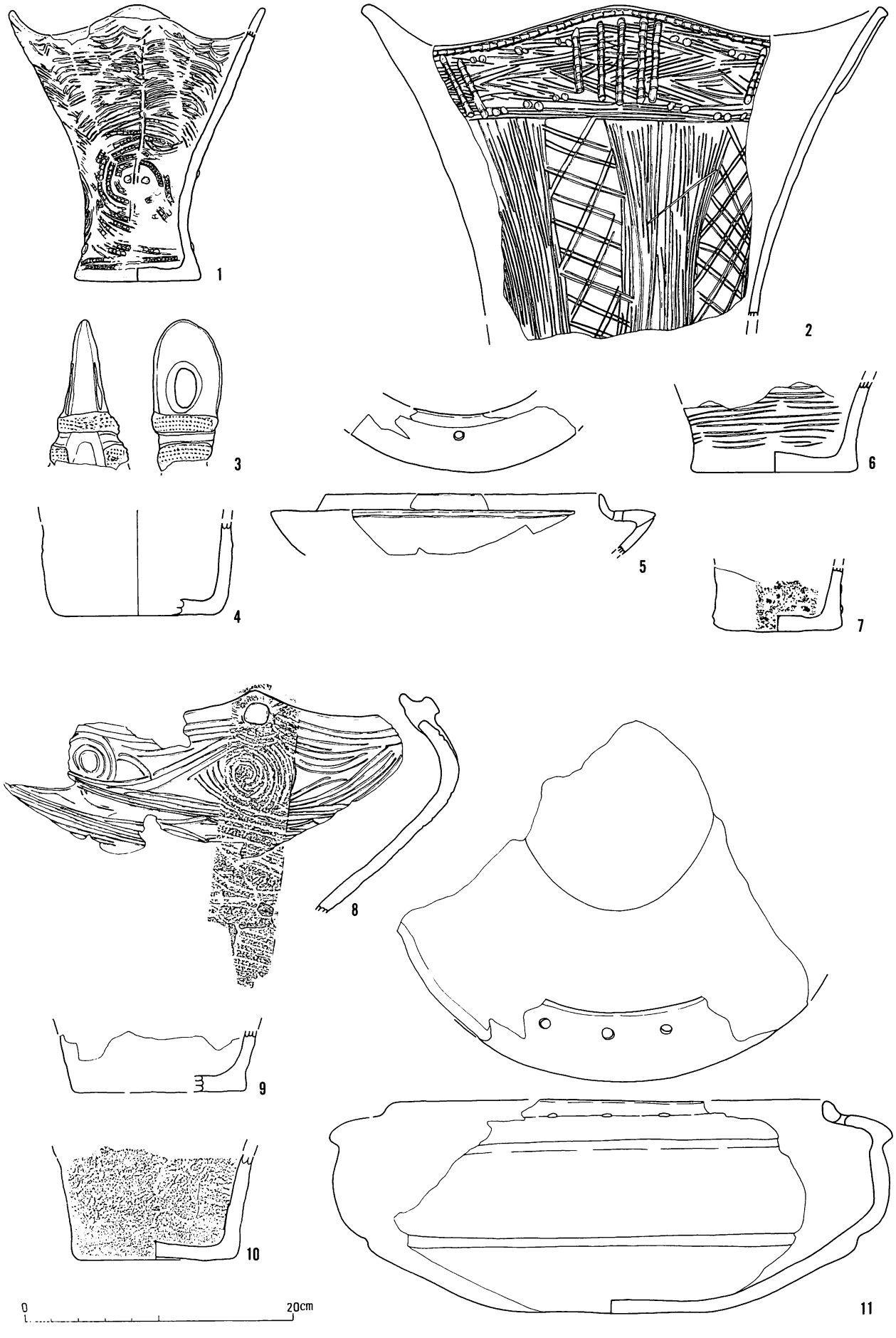
第79図　24号・25号・27号～30号土壙



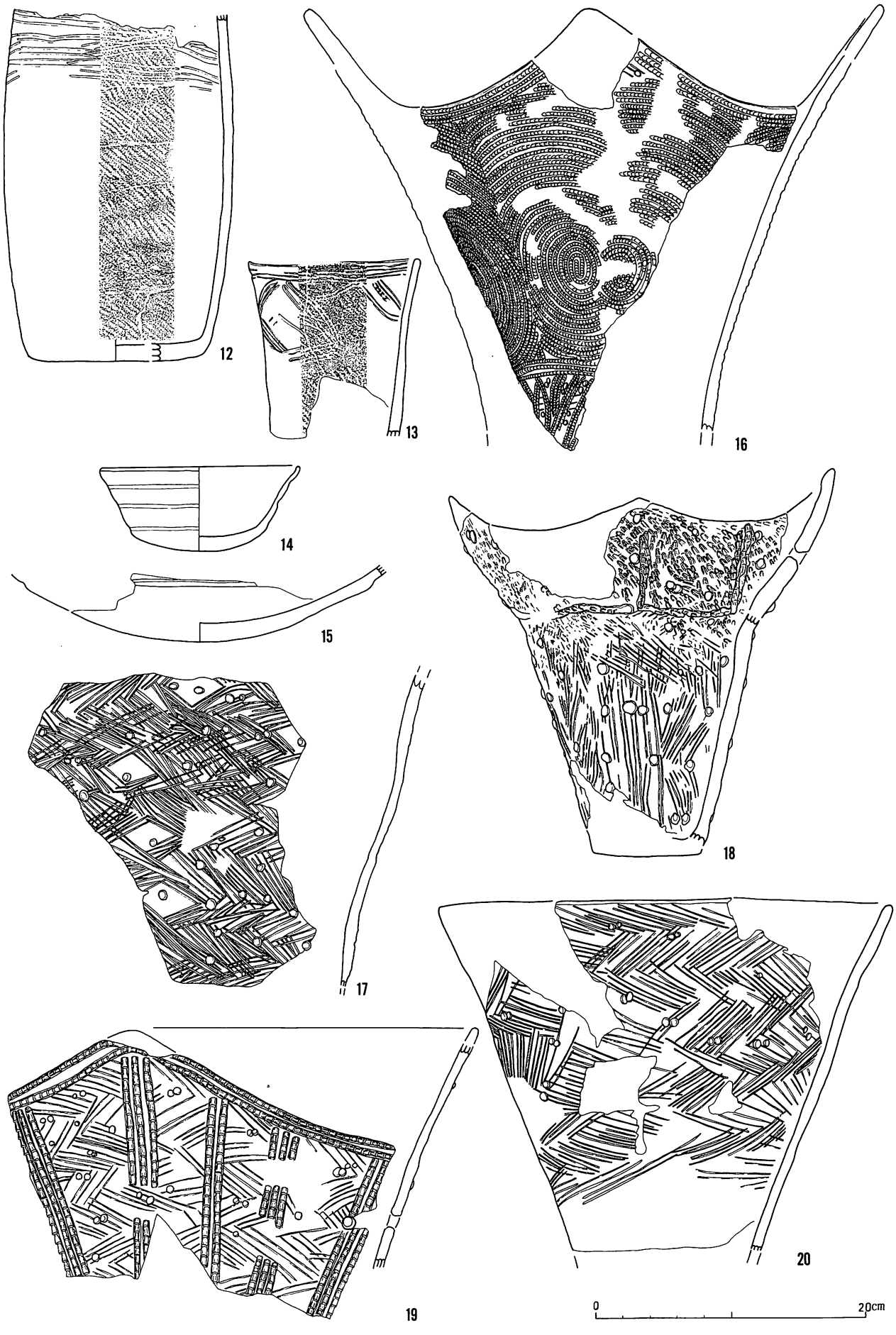
第80図　32号・33号土壙および96グリッド包含層下土器出土状況



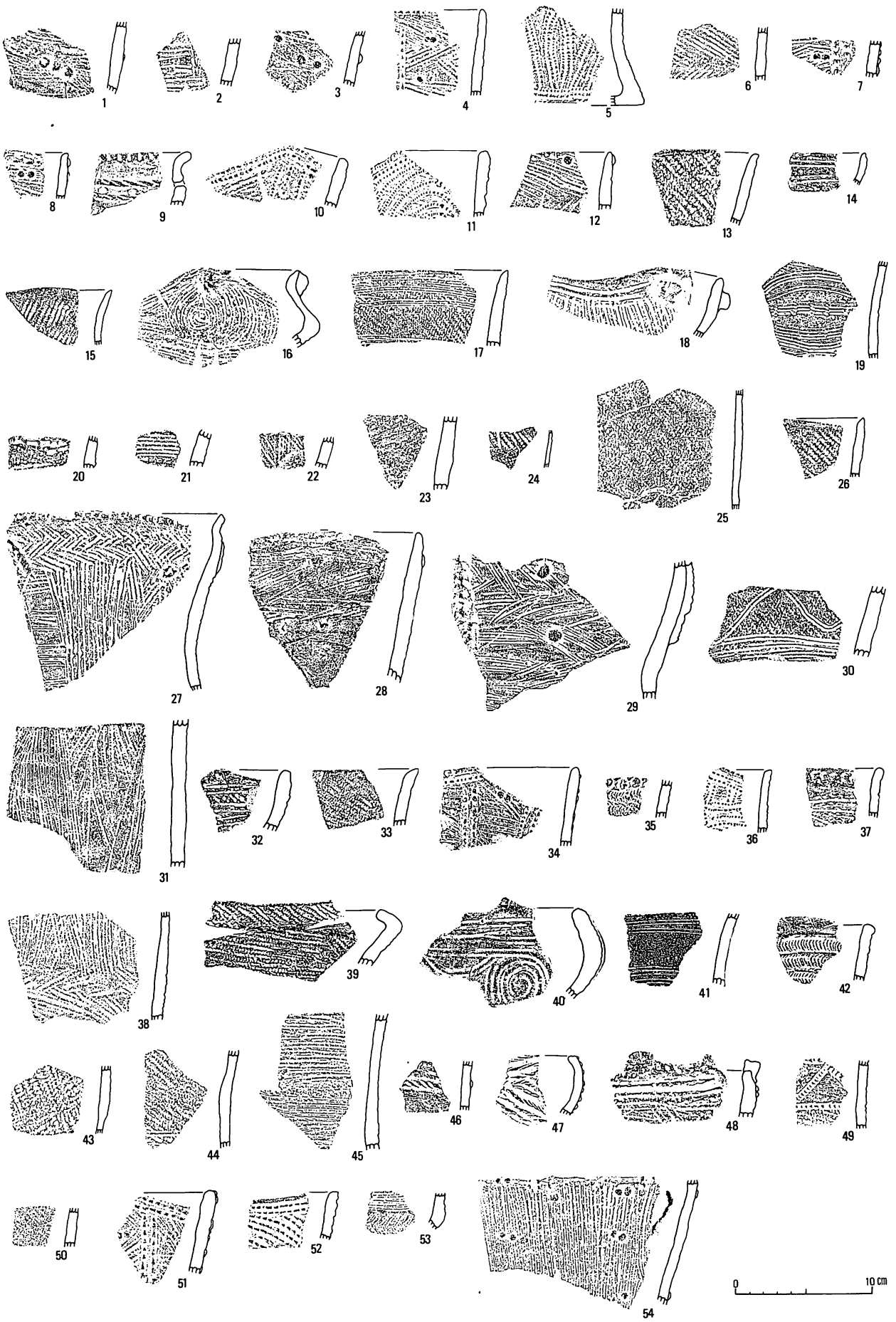
第81図　33号土壙微細図



第82図　土壙出土土器その１



第83図　土壙出土土器その２



第84図　土壙出土土器その３

4　包含層出土土器

前述したように、今回の調査では最も遺構の集中する部分で、最大１ｍに及ぶ遺物包含層が確認されている。そのため、調査幅2.5ｍ程度ながら、遺物の量が非常に多くなった。

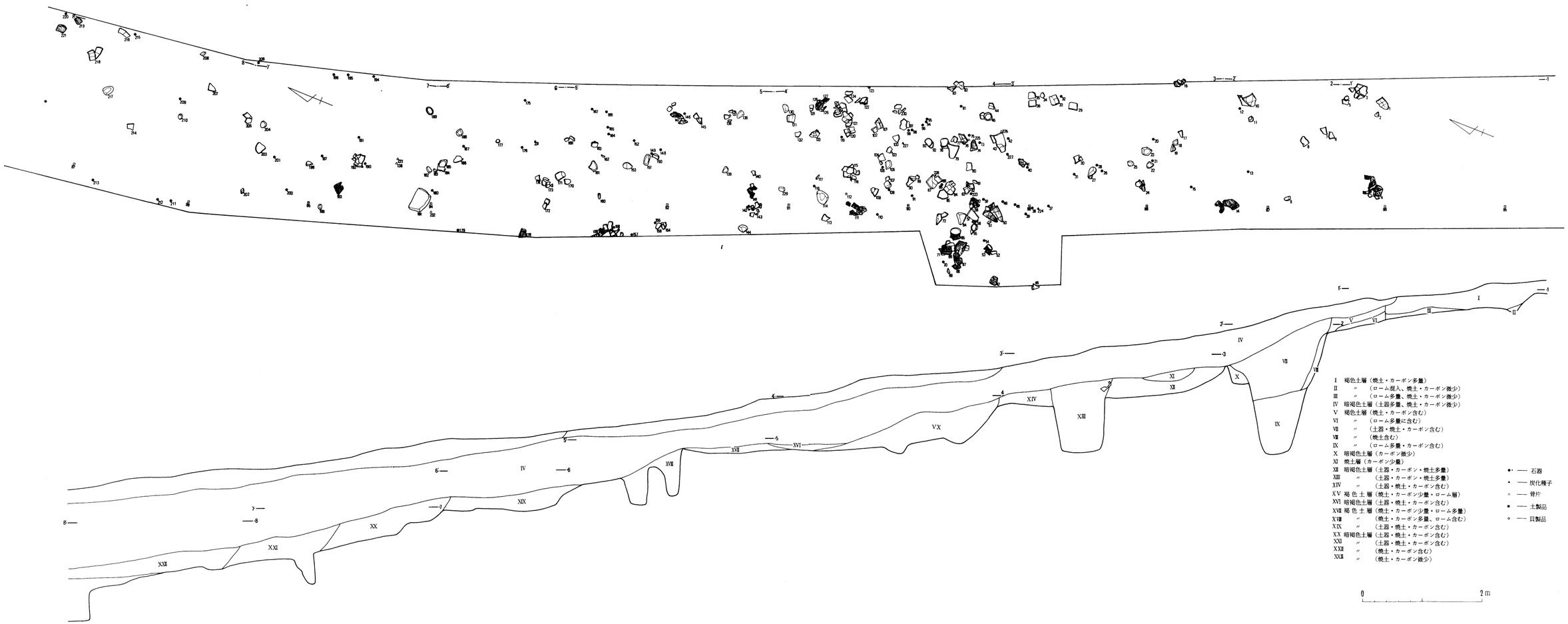
確認された包含層は13号・14号住居址付近（86グリッド）から始まり、22号住居址付近（102グリッド）にまで及ぶと推定されるが、「層」として明確にとらえることのできるのは32号土壙（97グリッド）までである。この12グリッド分についてのセクションを示したものが第85図である。図中のⅣ層が包含層となっている。また、この部分の遺構はすべて包含層以下からの掘り込みとなっており、遺構構築あるいは廃絶後の堆積であることが窺われる。なお、このⅣ層は暗褐色土を主体としたもので、土器以外にも石器・炭化物（堅果類・球根類）・骨片などが多量に出土している。なお、全体に焼土・カーボンが含まれ、土は良く締まっている。

以下に包含層出土土器についての概要を記すが、第85図中の遺物固有ナンバーは取り上げ時のナンバーである。包含層として取り上げたものは、基本的にはセクション図中のⅣ層に含まれるものを示すものであり、整理段階でⅣ層最下部以下のレベルであるものについては、その位置に確認された遺構に含め直してある。調査幅が2.5ｍと狭いため、Ⅳ層最下部のラインが同レベルで調査区域にまたがっているという前提でこの作業が行われている訳であり、この分け方には危険性があることを述べておく。この中には、この分け方で包含層とされたものと下部の遺構との接合も何例か確認されている。なお、復元可能な資料は総て図示したが、破片はあまりに多いため、ごく一部を提示したに過ぎない。

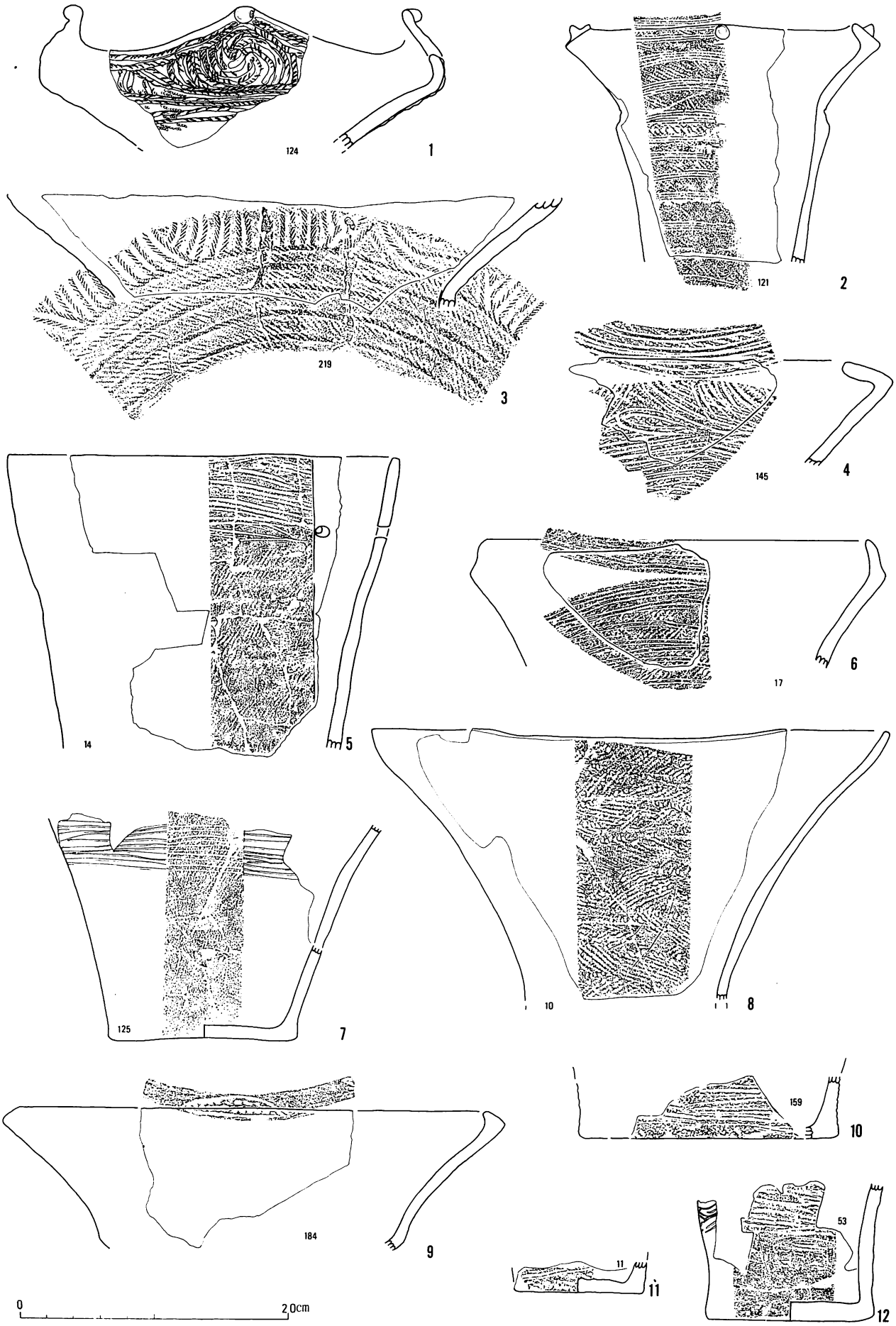
土器

包含層出土の土器は圧倒的に諸磯ｃ式が多い。諸磯式以外の、黒浜式あるいは早期末～前期初頭に位置付けられる含繊維土器なども資料中には混ざるが、その量は僅かである。復元可能な資料として、41点を図示するが、第86図に諸磯ｂ式を、第87～89図に諸磯ｃ式を示した。また、小破片の一部を第90図に示した。諸磯ｂ式では口縁部の内湾する深鉢が主体を占め、縄文だけが施文されたものを除けば、ヘラ切浮線文と沈線文の２種類に分けられる。第86図に示したものはいずれも縄文が地文で、１・３が前者に、それ以外が後者となり、他の遺構・グリッド出土例を見ても、前者の割合は少ないようである。なお、９は口縁部に木の葉状の沈線を配し、内部に刺突を行ったもので、器形は浅鉢となり、時期も諸磯ａ式期となるものであろう。第87～89図に示した諸磯ｃ式土器では大型の円形貼付文を有するものがないことが特徴である。これは包含層出土資料だけでなく、今回の調査で得られた資料の特徴と言えるものであるが、長野県の下島式土器に代表される沈線を地文とし、大型の貼付文を器面全面に張り付けるタイプの諸磯ｃ式土器は皆無と言っても良い状態である。包含層の資料中では21の口縁部に大型の貼付文が見られ、また30も貼付文が口縁部の主文様と言えるものであるが、ともに下島式には程遠いものである。ここでの資料は同じ沈線を主体としながらも結節状浮線文や結節状沈線文に小型の円形貼付文を施すものが殆どである。なお、結節状浮線文・結節状沈線文ともに使用方法は口縁部を中心に直線的に用いられており、結節状浮線文を主文様として同心円状に施文するものは包含層資料中には見られないのが特徴である。器形では４単位の大型の波状口縁もしくは平縁の深鉢が殆どであるが、18の器形は諸磯ｃ式およびその直後の十三菩提式併行に見られるトロフィー形土器などの特徴的器形と言えるものであろう。34は類例の少ないものと思われる。平坦な器面に指頭を圧し当てて引く作業を繰り返したものであろう。従って盛り上がり部分が三日月形の貼付文状を成す。この種の土器の小破片は包含層以外からも数点出土している。35は浅鉢もしくは有孔土器と思われるが、内外面ともに赤色顔料が塗布されている。41に示した資料は、、最大径が98㎝を計る超大型の土器である。口縁部は折り返し状態となっている。沈線を地文とし、口縁直下に1.5㎝程の円形貼付文を２個１単位で施文している。器厚は超大型の割りには厚くなく、多少厚めの深鉢とそう変わるものでない。中期中葉～後葉には口径90㎝を超える深鉢が知られるが、諸磯式ではこのような大きさのものは類例がないと思われる。なお、この土器の器形であるが、胴部の立ち上がりの角度が急であり、深鉢とは思われない。

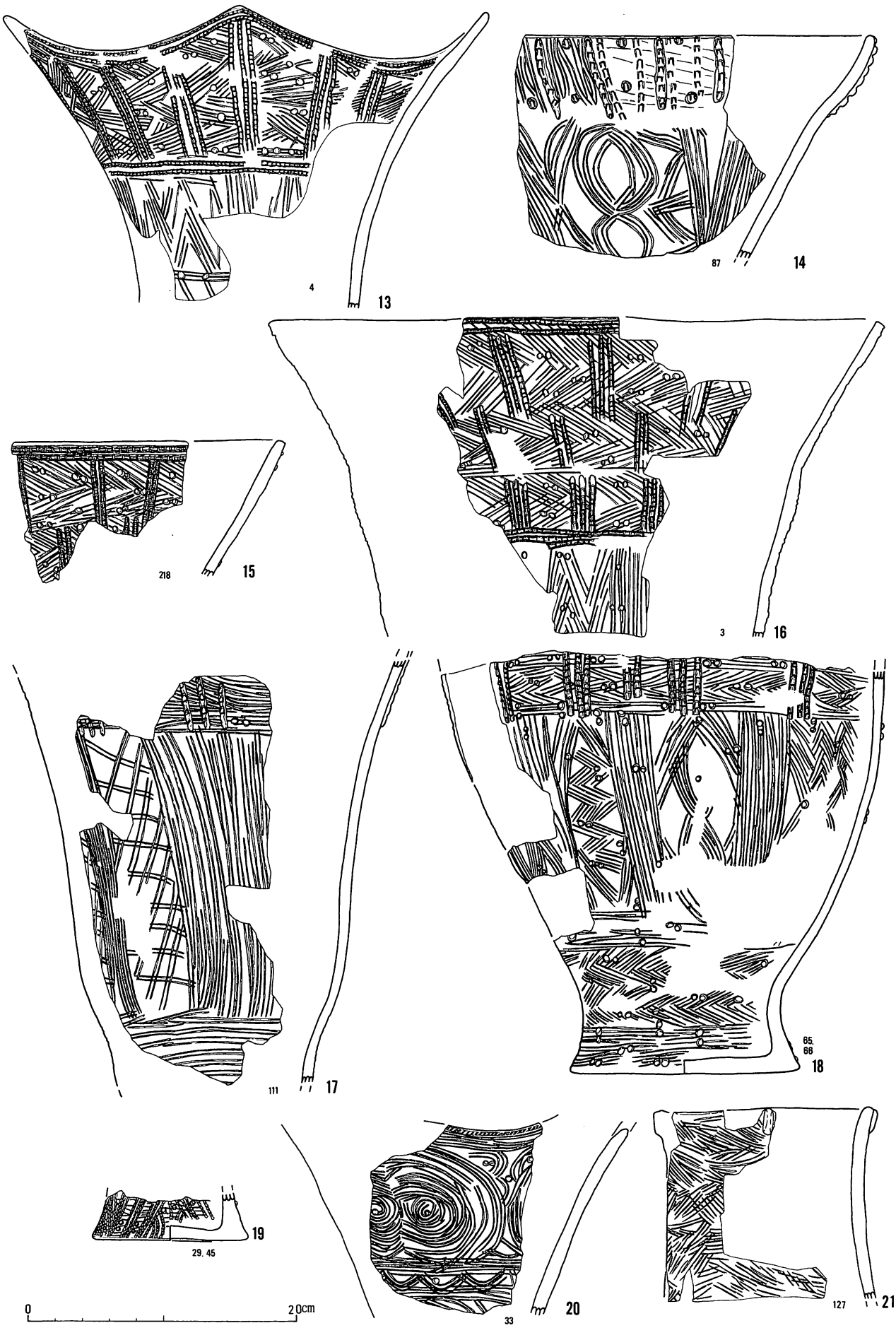
図中の、小番号は包含層取り上げ時の個々の番号であり、複数の番号のあるものは接合を示す。



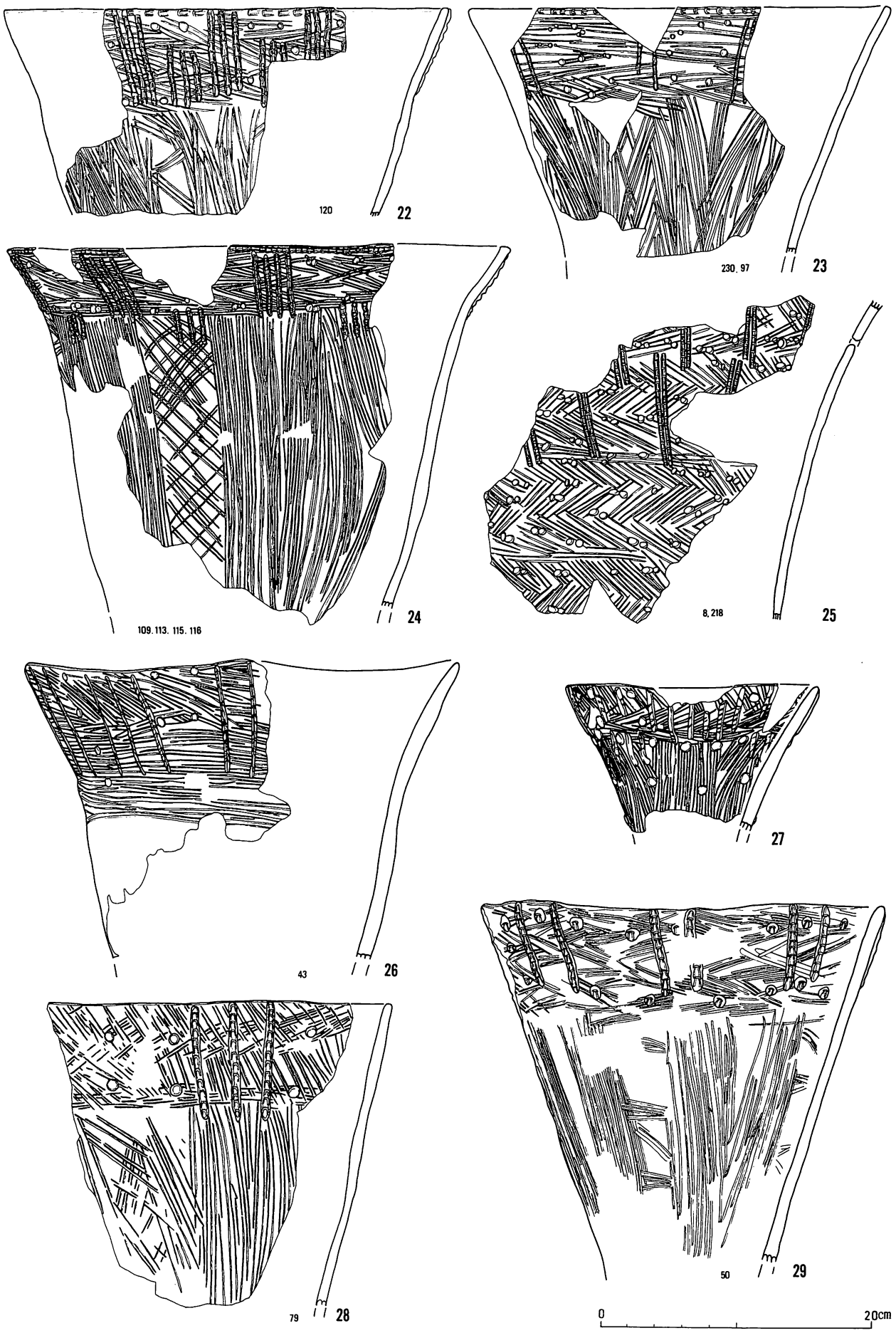
第85図　包含層平面図および断面図



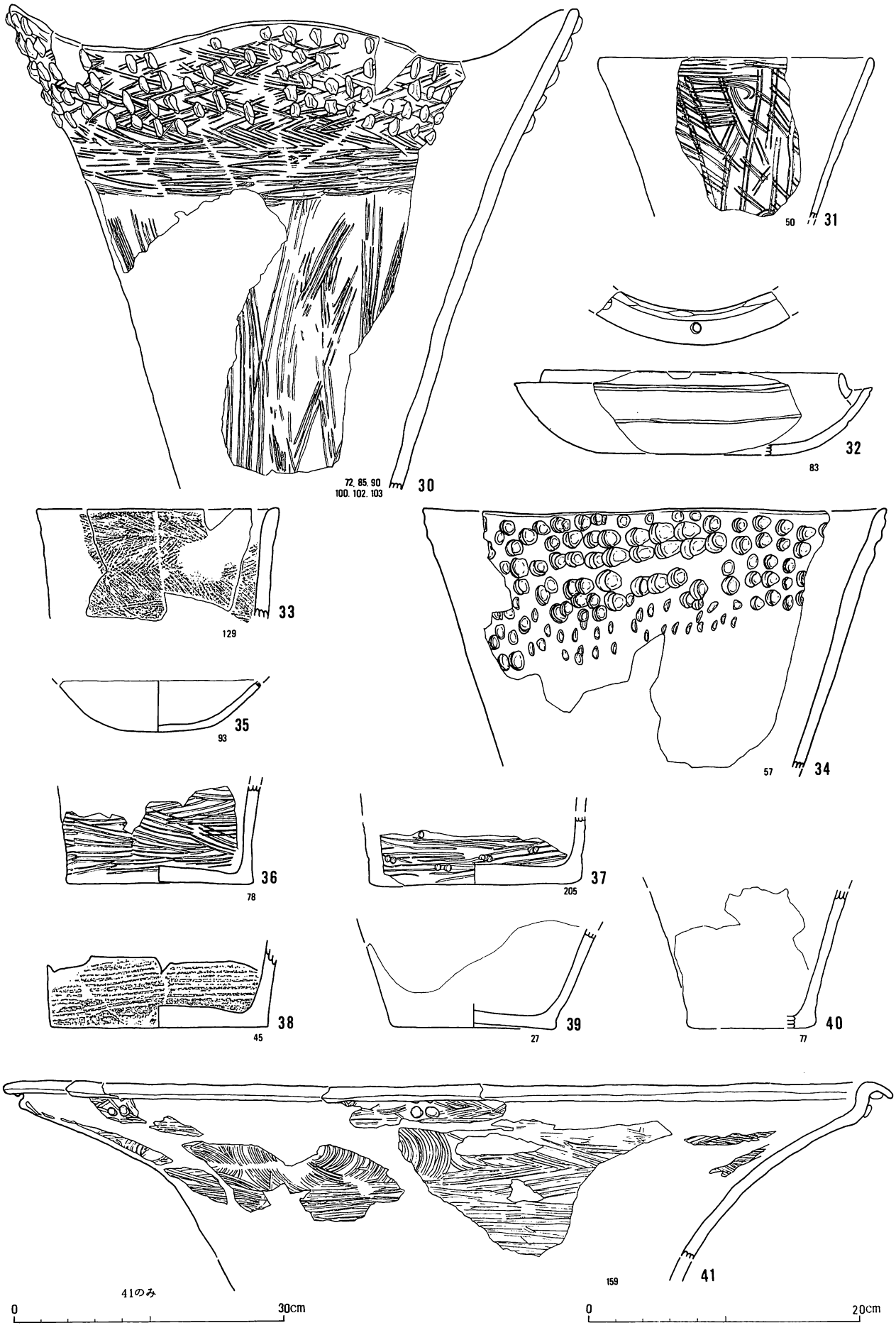
第86図　包含層出土土器その１



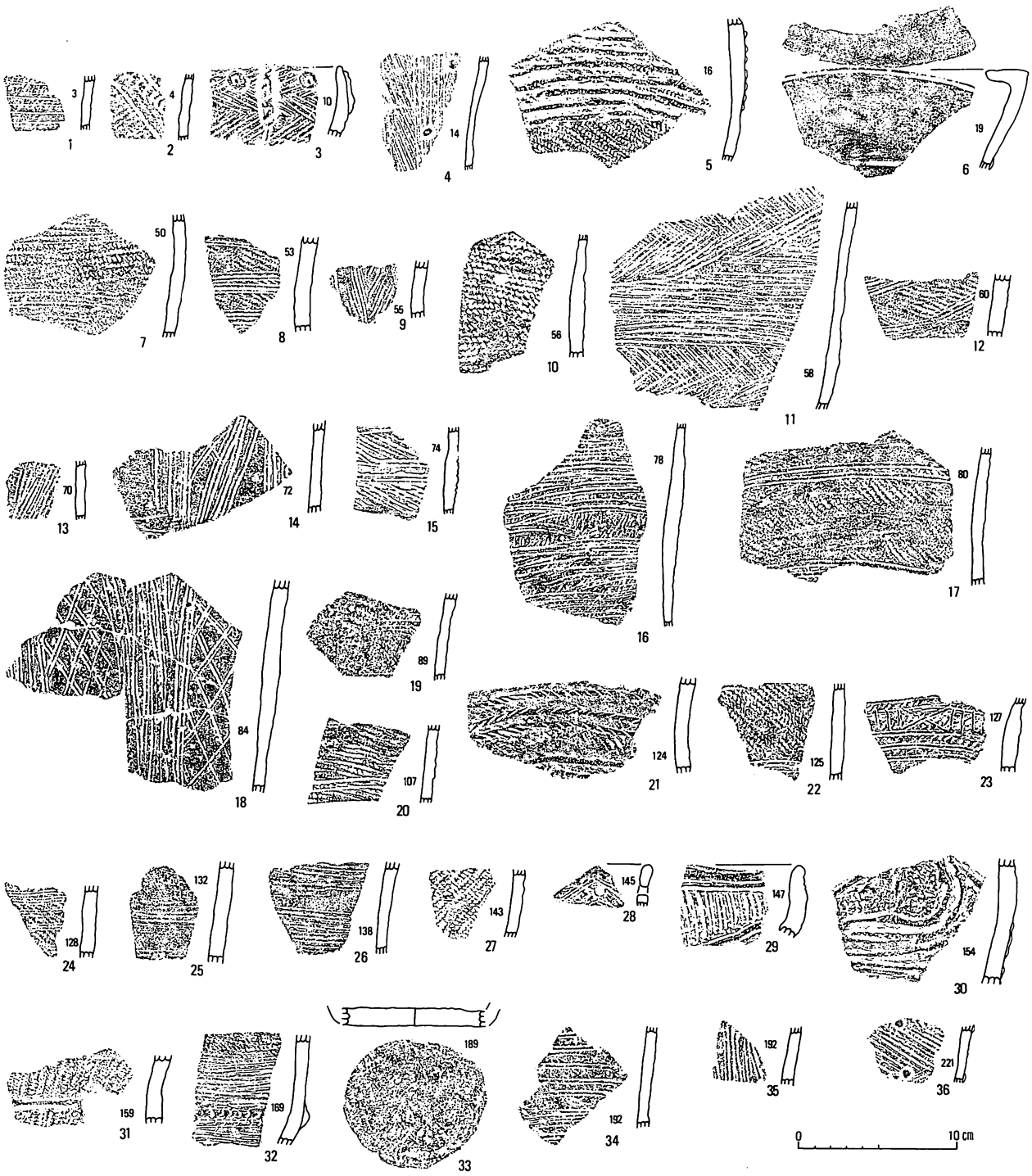
第87図　包含層出土土器その２



第88図　包含層出土土器その３



第89図　包含層出土土器その4



第90図　包含層出土土器その５

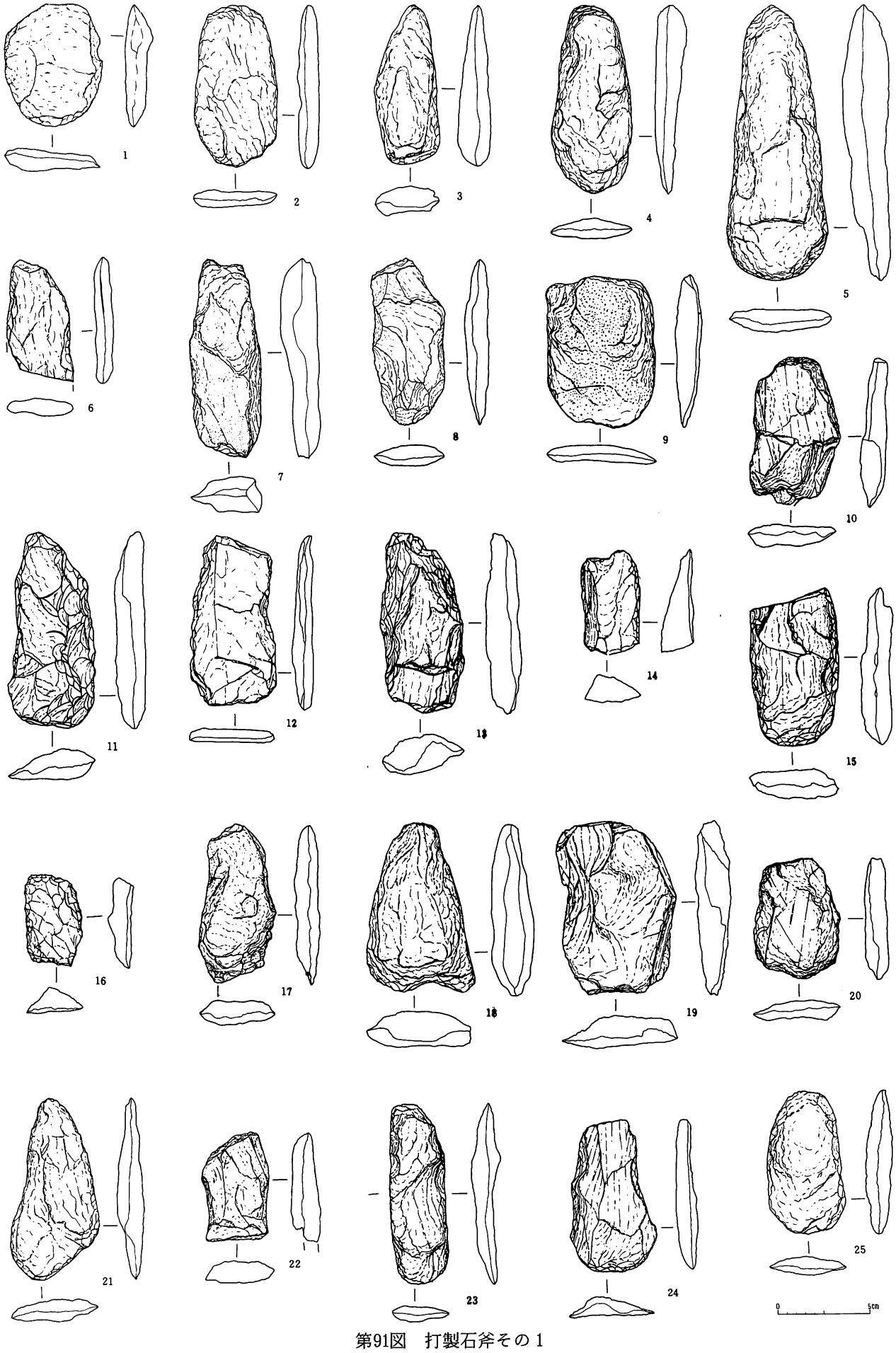
5　石器

今回の調査では石器も多量に確認されている。できる限り図示することにしたが、小破片や不定型の黒曜石やチャート剥片で使用痕のあるものは非常に量が多く、これを総て図示することは不可能であることからこれらは除いてある。なお、これらについては、器種ごとの報告を終了した後に一覧表に示すこととする。

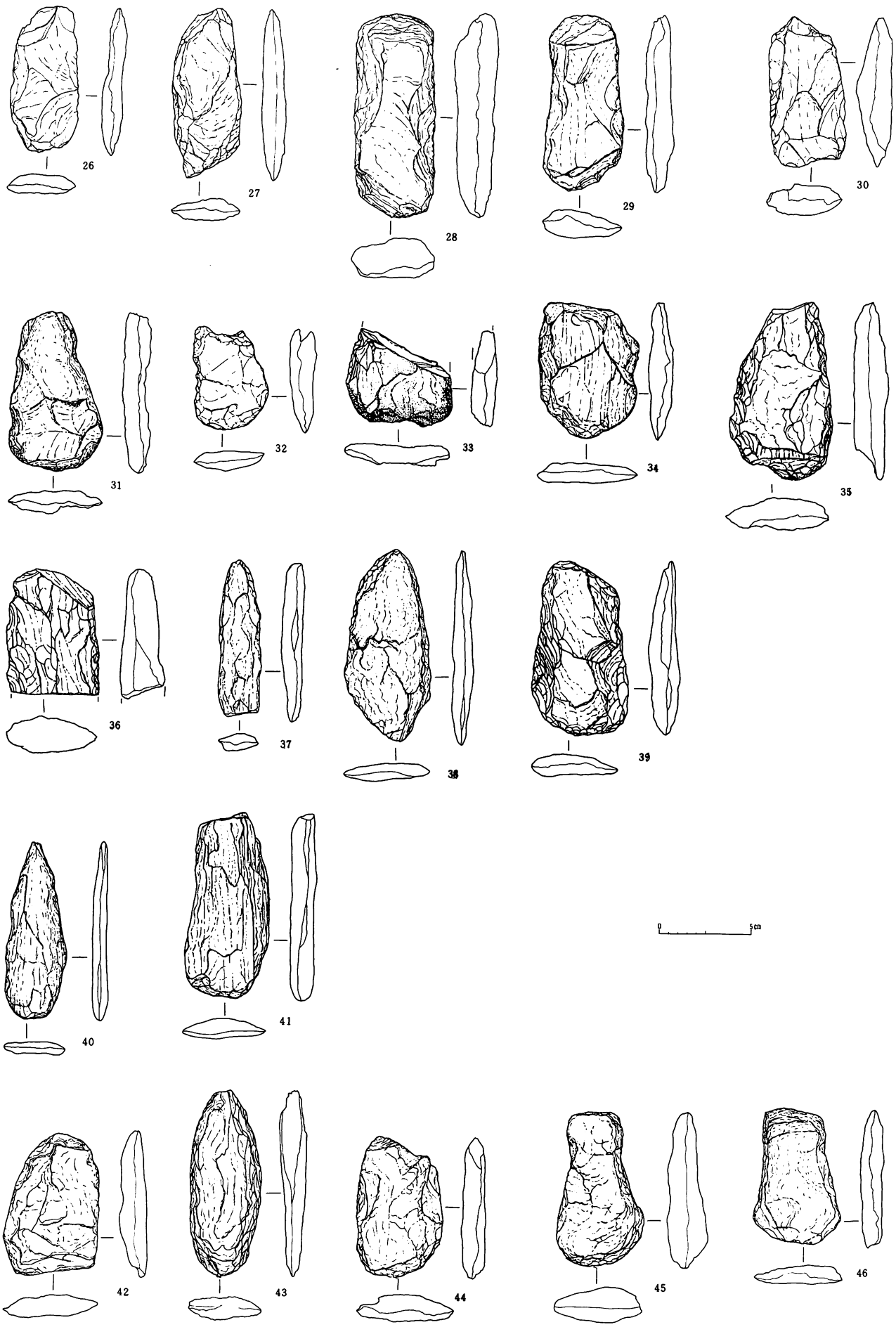
以下に器種別に述べることとする。

a　打製石斧（第91～94図）

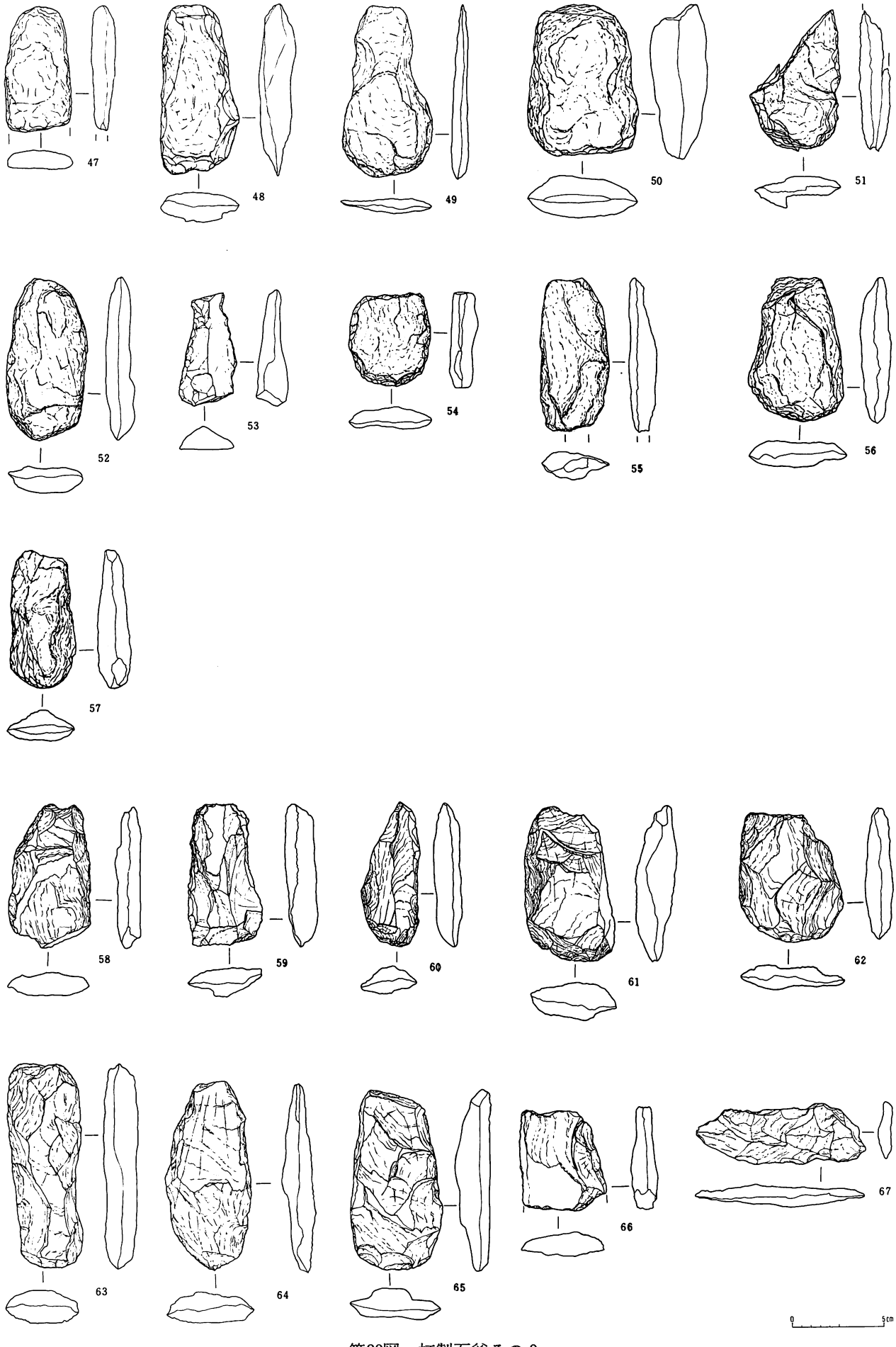
78点を報告するが、このうち39点が住居址内からの出土である。打製石斧は図示したもの以外の小破片は少な



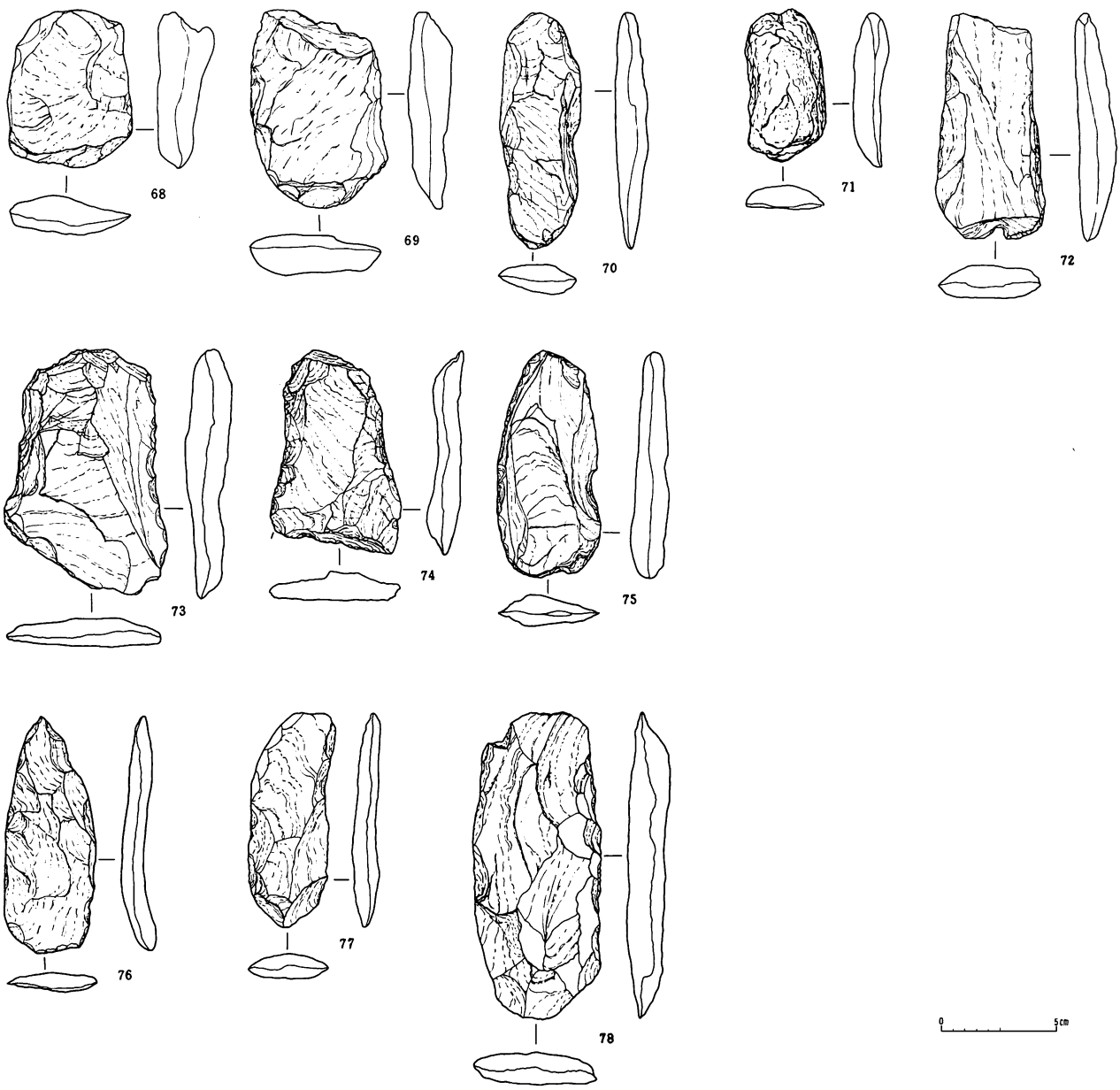
第91図　打製石斧その１



第92図　打製石斧その２



第93図　打製石斧その３



第94図　打製石斧その４

い。形態のはっきりしているものは短冊形（33点）、撥形（28点）、分胴形（５点）となっている。ここで分胴形としたものは、中期以降に見られる分胴形とは形態的にも大きさからも全く違うものであり、剝離が大きく入ったために分銅形にちかい形となったもので、もともとの形態とすれば撥形である可能性が強い。78点を石材から見てみると、泥質ホルンフェルス・泥岩・粘板岩の３種類で殆どを占める。僅かに35が安山岩、53が細粒凝灰岩、59が凝灰質シルト岩、60が細粒砂岩で、このほかは総てが先の３種となっている。手に入りやすい石材であることは勿論、これらは剝離しやすい性質のため加工が容易であることも見逃せないであろう。それもあってここに図示したものには自然面がそのまま残されるものはただ１点だけである。65に示したものがそれであるが、石材は泥質ホルンフェルスにもかかわらず図示した部分の裏面が自然面となっている。

これらの打製石斧は、中期のそれに比べてやや小振りなものが多い感じがするが、５は長さ15㎝・重量約220ｇ、78は長さ14㎝・重量約180ｇを計る大型のものである。その他、整形や厚さ・石材など中期ものと大差はない。個々の資料については一覧表に示しておく。

第1表　打製石斧一覧表

番号	出土位置	形態	長さ	基部幅	刃部幅	刃部形	重量	石　材	番号	出土位置	形態	長さ	基部幅	刃部幅	刃部形	重量	石　材
1	1住	短冊	6.70	4.50	5.30	円刃	54.37	泥質ホルンフェルス	40	13土S－1	撥形	9.80	2.60	3.30	円刃	27.73	泥質ホルンフェルス
2	〃	〃	8.90	3.80	4.55	斜刃	54.34	〃	41	18土S－4	短冊	10.30	3.70	4.60	〃	70.88	〃
3	〃	撥形	8.75	2.95	3.20	〃	62.84	〃	42	包37	〃	7.95	4.70	4.40	直刃	75.61	〃
4	〃 S－2	〃	10.30	3.50	4.30	円刃	83.90	〃	43	〃11	〃	10.45	3.60	3.50	円刃	67.85	〃
5	〃 S－7	〃	15.10	3.60	5.60	〃	216.40	〃	44	〃13	〃	7.95	4.40	4.70	〃	67.57	〃
6	3住		(6.70)	3.00			26.23	粘　板　岩	45	〃15	分胴	8.60	3.10	4.85	〃	92.64	〃
7	4住S－23	撥形	10.90	3.10	3.70	斜刃	102.09	泥質ホルンフェルス	46	〃48	撥形	7.55	3.45	4.90		61.88	粘　板　岩
8	〃		9.20	4.00	3.55		56.41	〃	47	〃140	短冊	(6.90)	3.20			42.34	泥質ホルンフェルス
9	〃		8.30	5.80	5.90	円刃	78.70	〃	48	〃96	撥形	9.30	3.40	4.15	斜刃	93.21	〃
10	〃 S－16	短冊	8.20	4.10	4.20		70.98	粘　板　岩	49	〃98	分銅	9.40	3.15	5.05	円刃	42.27	〃
11	5住S－6	撥形	10.80	4.05	4.70	円刃	114.42	泥質ホルンフェルス	50	〃99	短冊	8.25	5.40	6.10	直刃	192.94	粘　板　岩
12	〃 S－15	〃	9.35	3.90	4.70	直刃	61.62	粘　板　岩	51	〃108 92G ホウ下		7.70		4.80	円刃	42.86	泥質ホルンフェルス
13	〃 S－5	短冊	9.90	4.10	4.20		100.99	泥質ホルンフェルス	52	〃152	短冊	8.95	3.90	4.10	斜刃	64.84	〃
14	6住	〃	5.70	3.20	3.05	直刃	32.93	泥　岩	53	〃164	撥形	6.20	1.90	3.00	〃	24.70	細粒凝灰岩
15	17住S－8	〃	8.70	4.75	4.40	円刃	97.48	泥質ホルンフェルス	54	〃175	短冊	5.10	4.20	4.50	円刃	39.91	泥質ホルンフェルス
16	9住	〃	5.10	2.90	3.10	直刃	22.06	泥　岩	55	〃177	〃	(8.35)	3.40	3.60	斜刃	55.26	〃
17	〃	分銅	8.80	3.10	3.70	斜刃	62.09	泥質ホルンフェルス	56	〃183	分銅	7.85	3.90	5.20	円刃	83.90	〃
18	〃 S－18	撥形	9.30	3.75	6.05		124.55	〃	57	〃200	短冊	7.60	3.20	3.60	〃	57.63	〃
19	〃 S－30	短冊	9.60	5.90	6.00	直刃	134.42	粘　板　岩	58	102－AG	撥形	7.90	4.00	4.50	斜刃	63.23	粘　板　岩
20	13住S－2	撥形	6.65	3.80	4.60	斜刃	53.66	泥質ホルンフェルス	59	104G	〃	7.85	3.20	4.10	直刃	59.90	凝灰質シルト岩
21	〃	〃	10.10	3.10	4.90	〃	59.66	〃	60	105AG		8.00	2.70	3.20	斜刃	45.18	細粒砂岩
22	4住　78G	短冊	6.05	3.70	3.45	直刃	46.34	〃	61	107G	短冊	8.50	4.20	5.00	〃	99.88	泥質ホルンフェルス
23,	14住S－13	短冊	10.05	3.05	2.95	円刃	48.57	〃	62	73BG	〃	7.10	4.50	5.75	円刃	66.48	粘　板　岩
24	15住S－9	分銅	8.50	3.25	4.90	〃	44.15	粘　板　岩	63	74BG		11.50	3.95	3.45	〃	119.48	泥質ホルンフェルス
25	5住S－7	撥形	8.00	3.60	4.20	〃	51.95	泥質ホルンフェルス	64	89BG		10.50	3.80	4.30	斜刃	92.83	粘　板　岩
26	15住	短冊	8.10	3.50	3.80	〃	42.52	〃	65	90－B	撥形	9.95	4.10	5.20	円刃	102.05	泥質ホルンフェルス
27	〃 S－12	〃	9.35	3.40	3.60	斜刃	53.79	〃	66	94－BG	〃	5.55	4.05			47.37	〃
28	〃 S－3	〃	11.20	4.30	4.40	〃	175.35	粘　板　岩	67	95BG				9.40	円刃	34.04	〃
29	17住S－5	撥形	9.75	3.80	4.30	〃	81.30	〃	68	〃	撥形	6.95	4.90	5.50	〃	107.76	〃
30	20住	短冊	8.35	3.70	4.10		75.38	泥質ホルンフェルス	69	96BG	短冊	8.70	5.60	6.00	〃	118.42	〃
31	18住S－4	撥形	8.80	3.50	5.25	円刃	76.68	〃	70	〃	〃	10.40	3.40	3.15	〃	57.04	粘　板　岩
32	20住	〃	5.60	3.30	4.10	〃	34.81	〃	71	100BG	〃	6.70	3.25	3.35	斜刃	38.57	泥質ホルンフェルス
33	〃		(5.40)		5.90	〃	(51.65)	〃	72	108BG	撥形	9.90	3.80	4.75	円刃	86.64	〃
34	〃	短冊	7.50	5.50	5.40	斜刃	67.50	〃	73	114BG	〃	10.80	5.90	7.30	斜刃	140.85	〃
35	〃	撥形	9.85	4.10	5.70	〃	128.45	安　山　岩	74	126BG	〃	(8.95)	4.30			(81.72)	粘　板　岩
36	21住96G	短冊	6.90	4.80	5.20	直刃	105.73	泥質ホルンフェルス	75	129BG		10.00	4.00	4.60	円刃	74.43	泥質ホルンフェルス
37	p. t1	〃	8.70	2.10	2.30	〃	26.96	〃	76	表　採		10.40	3.65	3.95	〃	46.26	〃
38	22住S－3	撥形	10.70	3.70	4.90	斜刃	58.76	〃	77	〃		9.50	3.30	3.50	斜刃	45.27	〃
39	〃 S－2	〃	9.70	4.35	5.40	円刃	95.74	〃	78	〃	短冊	13.60	5.15	5.50	円刃	176.47	〃

第95図　磨製石斧

b　磨製石斧（第95図）

磨製石斧は出土数が少なく、表面採取資料を含めても18点だけである。この中に完形品は1点もない。すべて破損品である。乳棒状磨製石斧と定角式磨製石斧の2種類が見られるが、定角式は11・13・14の3点だけで、総て小型である。石材は凝灰岩や砂岩が多いが定角式の3点だけが塩基製岩であり、より細かな作業に用いられたと思われる定角式磨製石斧に硬質の石材が使用されている。破損品では、2と9に再利用の痕跡が見られる。2は基部・刃部ともに破損しているが、刃部の破損部分に「たたき」が見られ、磨製石斧として使用できなくなったものを手に握ってたたき石として使用したものと思われる。9は唯一の土壙出土資料である。かなり大型の乳棒状磨製石斧であったと思われるが、胴部中央付近で折れている。この部分を再び磨り始めている。刃部は全く良好な状態で残っているため、欠損部に基部を作り出し、もう一度磨製石斧を作ろうとしたものと思われる。

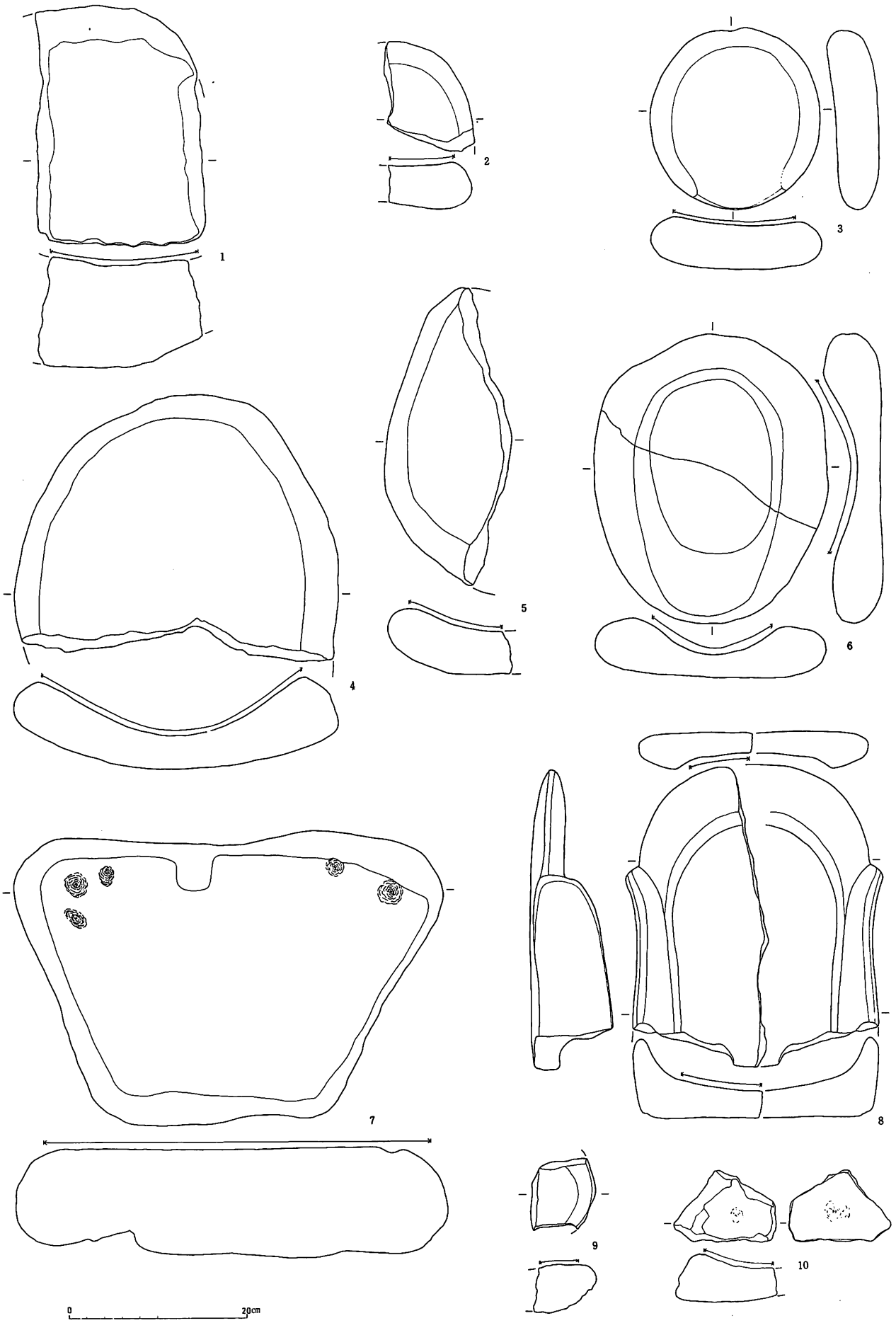
第2表　磨製石斧一覧表

番号	出土位置	形態	長さ	巾	厚さ	重量	石材・他	そ　の　他
1	5住　S－19		(11.90)	(8.90)	(3.60)	(513.6)	緑色凝灰岩	
2	9住　S－20		11.40	4.00	2.50	(167.5)	〃	欠損部をたたきに使用（再利用）
3	〃		(9.20)	4.80	2.40	(137.5)	〃	
4	9住　85BG		(6.20)	(4.70)	2.70	(110.7)	〃	
5	16住　S－6		(12.10)	6.60	3.30	(396.6)	〃	
6	〃　S－10		(7.20)	(4.10)	2.00	(82.8)	〃	
7	17住　S－4		(6.70)	(4.80)	3.00	(152.0)	〃	
8	18住　S－2		(14.00)	(5.10)	(2.70)	(205.7)	〃	
9	9土　S－2		(9.60)	5.90	(3.10)	(241.6)	〃	欠損部に磨きがみられる（再利用）
10	包21		(3.60)	(3.20)	(2.40)	(21.38)	中粒砂岩	
11	72BG		(2.60)	(4.00)	(1.40)	(14.71)	塩基性岩	定角式
12	74BG		(13.70)	(6.50)	(3.30)	(449.4)	緑色凝灰岩	
13	95BG		(4.40)	(2.70)	(1.00)	(18.23)	塩基性岩	定角式
14	97B		(7.00)	(3.60)	(1.20)	(19.39)	〃	定角式
15	100G　S－2		(8.80)	(5.00)	(2.80)	(124.8)	中粒砂岩	
16	103G　S－1		(16.20)	6.50	3.70	(637.0)	緑色凝灰岩	
17	121G		(6.40)	4.40	1.50	(68.41)	〃	
18	表採		(7.40)	(3.70)	(1.80)	(61.38)	細粒砂岩	

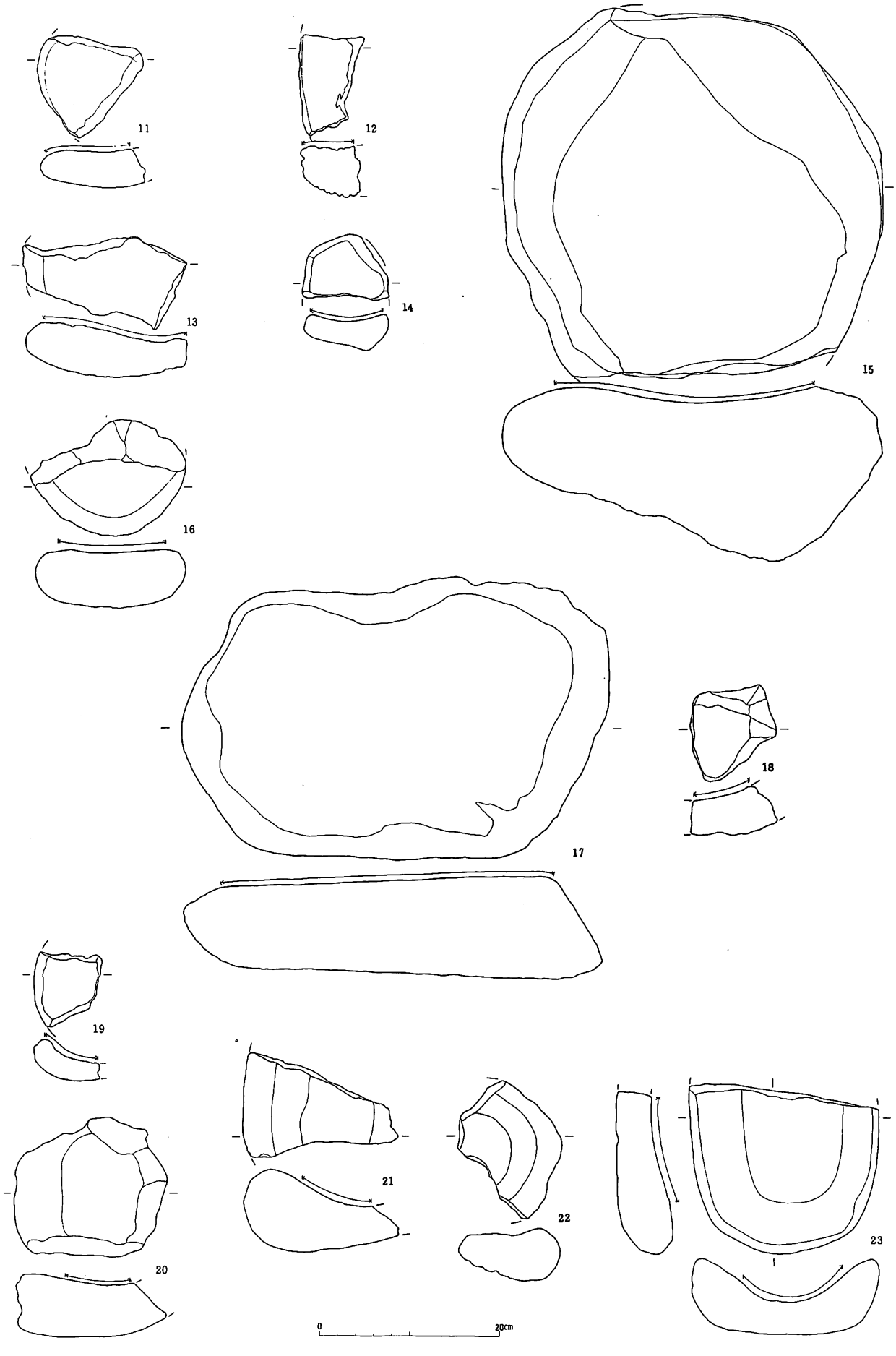
c　石皿（第96～98図）

石皿の出土量は比較的多く、39点を数える。大きく、板状のものと中央に凹みを持つものの2種類に分けられる。前者は7・15・17・26の4点だけで、7・17は完形、15・26は一部を欠損している。いずれも非常に大型で簡単に移動できるものではない。このうち最も磨り面が平坦であるものが7であるが、これも子細に観察すると中央部付近に図示することのできない微妙なへこみがある。15は磨り面全体が多少凹んでいるが、その中にもさらに細かい凹みが存在する。これは手で触れて初めて分かる程度のものであるため図示できないが、これらは「磨り面」としている部分がいくつかの区画に分かれていることを示すものと言えよう。このような磨り面中の区画は17・26にも確認されることから、いわゆる板状石皿全般に見られるものであるかもしれない。なお、7は縁辺部を凹石としても利用している。

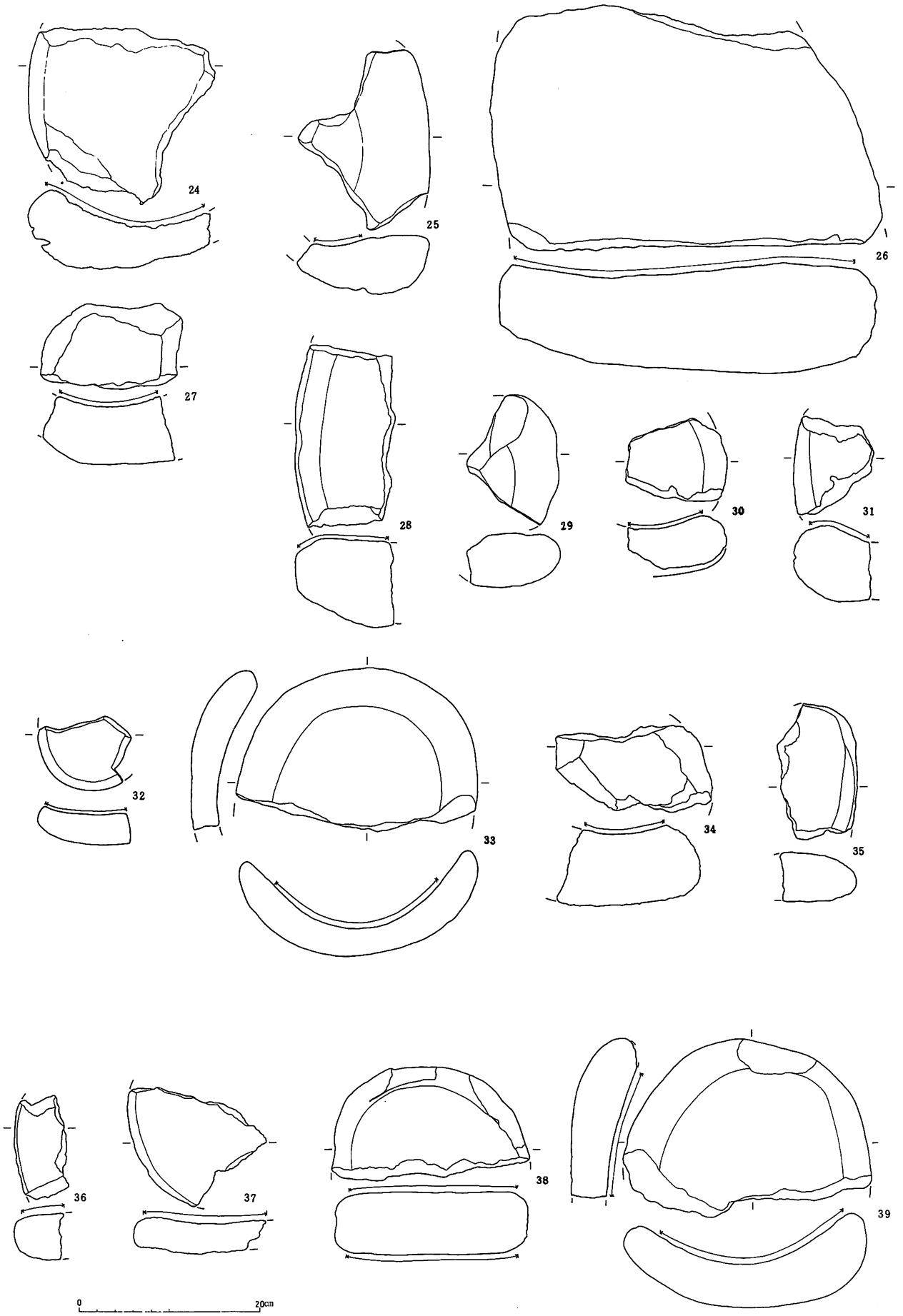
中央に凹みをもつ石皿は調査面積からすれば非常に多量と言えよう。34点の出土である。このうち完形品は3に示した1点だけである。6も完形に復元されたが、真ん中から2つに割れていた。残りは総て残存部分が半分以下となったものである。3・19・32などは非常に小型で、精紛具以外の用途も考慮する必要があろう。例えば、



第96図　石皿その１



第97図　石皿その２



第98図　石皿その３

新潟県長岡市岩野原遺跡出土の小型の石皿には、パン状炭化物が詰まっていたことが知られているが、あるいはこのような小型の石皿のうち、身の深いものについては一種の「型（かた）」としての使用もあったかもしれない。8に示した石皿は、非常に特異な形態で、サイドに耳様突起が見られる。出土した破片は全体の3分の1ないし4分の1程度の部位であると思われる。復元すると両側の耳間（幅）は約26cmとなる。平面形は他の石皿と同様に楕円形を呈すると思われるが、全体として非常に磨り面部分（身）が浅いことが特徴である。しかし、耳様突起部分については、その分身が深いことになり、他の部分と比較した場合、装飾的面は勿論であるが、実用的な面を全く否定する必要もないと思われる。突起部分だけでなく全体的に薄く、かつ非常に丁寧に仕上げられており、石皿に対する思い入れを感じるが、それと同時に1個の石材からこれだけの石皿を作り出す高度な技術が存在したことも見逃すことはできない。ともあれ、このような突起を有するものは前期に位置付けられるものとして山梨県内では他に例がない。長野県松川村有明山社遺跡出土の破片はこれほど見事に耳様突起が作り出されているわけではないが、形態的にはこの資料に類似するものである。

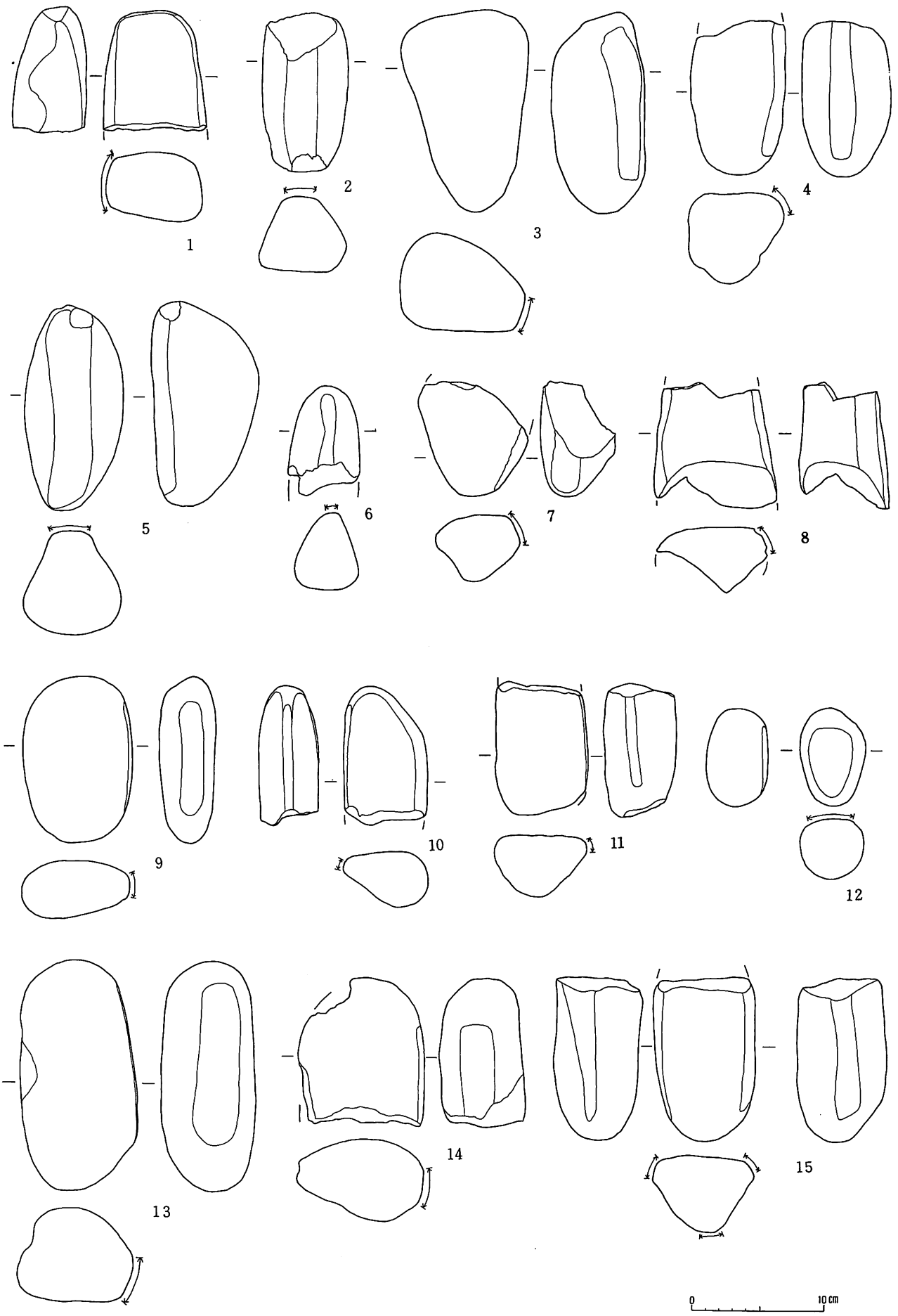
石材では板状のものには花崗岩類が用いられている。凹みの深いものは、安山岩あるいは玄武岩が殆どである。

第3表　石皿一覧表

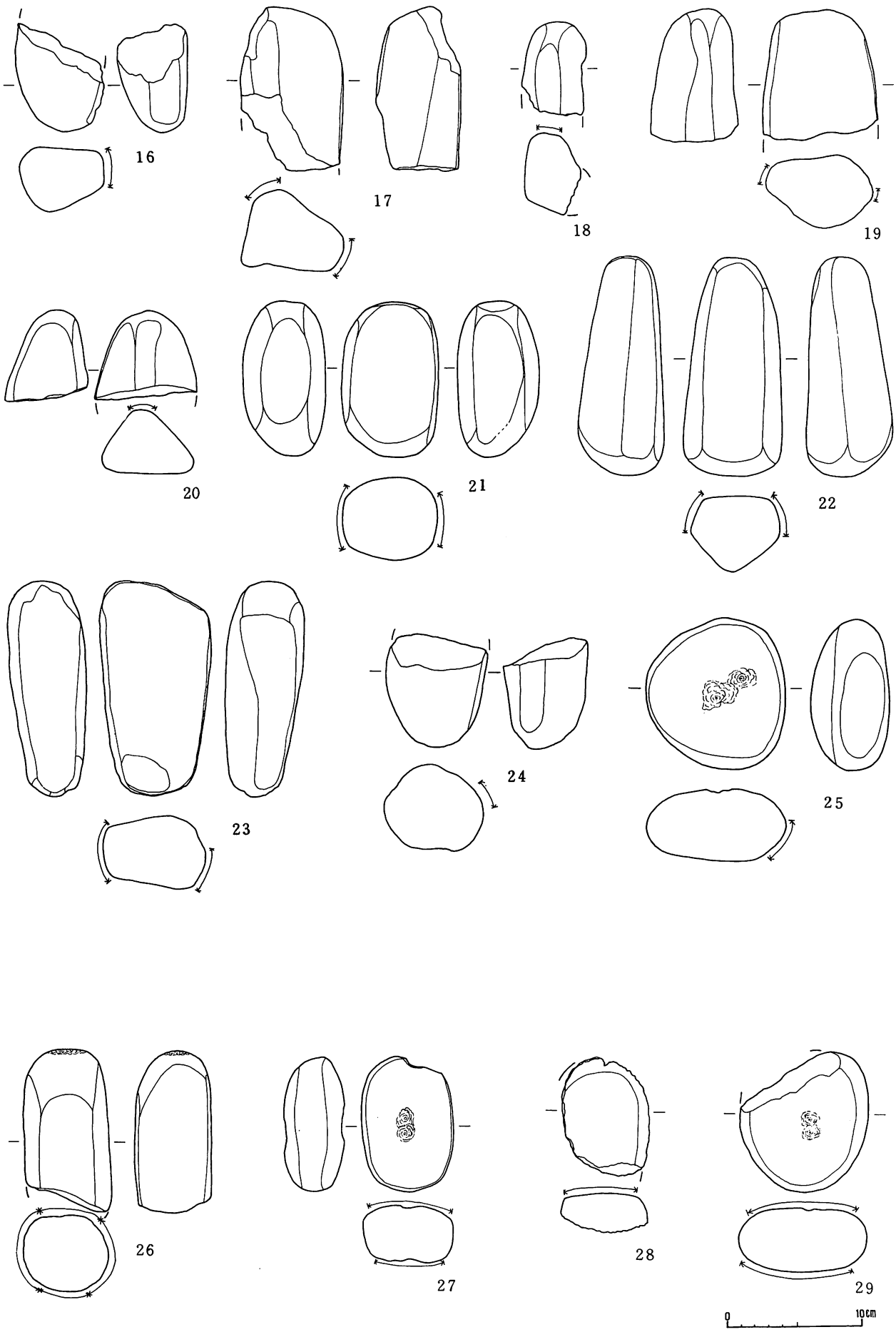
番号	出土位置	形態	長さ	巾	厚さ	重量	石材・他	番号	出土位置	形態	長さ	巾	厚さ	重量	石材・他
1	3住S－1		26.00	18.20	11.9		花崗岩類	21	ホウ28		(11.20)	(17.00)	8.30		玄武岩
2	4住		(9.40)	(9.40)	5.00		玄武岩	22	〃 105		(13.40)	(11.00)	5.60		安山岩
3	5住S－1		19.60	18.80	4.80		〃	23	〃 114		(17.70)	20.40	6.60		〃
4	7住		(26.00)	36.00	7.60		〃	24	〃 131		(18.70)	(20.00)	7.50		玄武岩
5	8住S－1		(32.60)	(14.00)	4.60		安山岩	25	〃161		(19.30)	(14.40)	6.20		〃
6	9住S－28		31.80	25.60	5.80		玄武岩	26	〃181		(26.00)	41.50	12.00		花崗岩類
7	〃 S－32		27.80	47.60	12.00		花崗岩類	27	〃 185		(8.80)	(14.90)	7.00		安山岩
8	12住		(32.80)	(26.00)	8.40		玄武岩	28	72A－G		(19.60)	(10.80)	9.10		〃
9	14住S－10		(7.80)	(7.00)	5.20		安山岩	29	78G		(13.20)	(10.10)	5.80		〃
10	〃 S－2		7.80	(11.20)	5.20		玄武岩	30	96G		(9.00)	(10.90)	5.30		玄武岩
11	〃 S－1		(10.80)	(11.00)	4.00		安山岩	31	101G		(10.60)	(8.20)	8.00		〃
12	16住		(10.80)	(6.50)	5.30		玄武岩	32	102G		(8.00)	(10.20)	3.20		安山岩
13	16住S－7		8.60	17.70	5.00		〃	33	103GS－4		(17.60)	(26.40)	5.80		玄武岩
14	17住		(6.60)	9.30	3.40		デサイト	34	107G		(9.40)	(15.70)	8.20		安山岩
15	18住S－3		(39.00)	41.40	17.60		花崗岩類	35	90G		(14.80)	(8.40)	5.40		玄武岩
16	20住S－6		(12.60)	16.60	(5.50)		玄武岩	36	表採		(10.80)	(5.40)	5.00		〃
17	2土		30.20	45.70	11.00		花崗岩類	37	〃		(11.80)	(15.50)	3.40		〃
18	28土		(9.70)	(9.30)	4.90		安山岩	38	〃		(11.80)	21.20	6.80		花崗岩類
19	ホウ13		(7.80)	(7.10)	3.30		玄武岩	39	〃		(18.80)	26.80	7.60		玄武岩
20	〃 23		14.90	(16.00)	6.60		安山岩								

d　磨石（第99～104図）

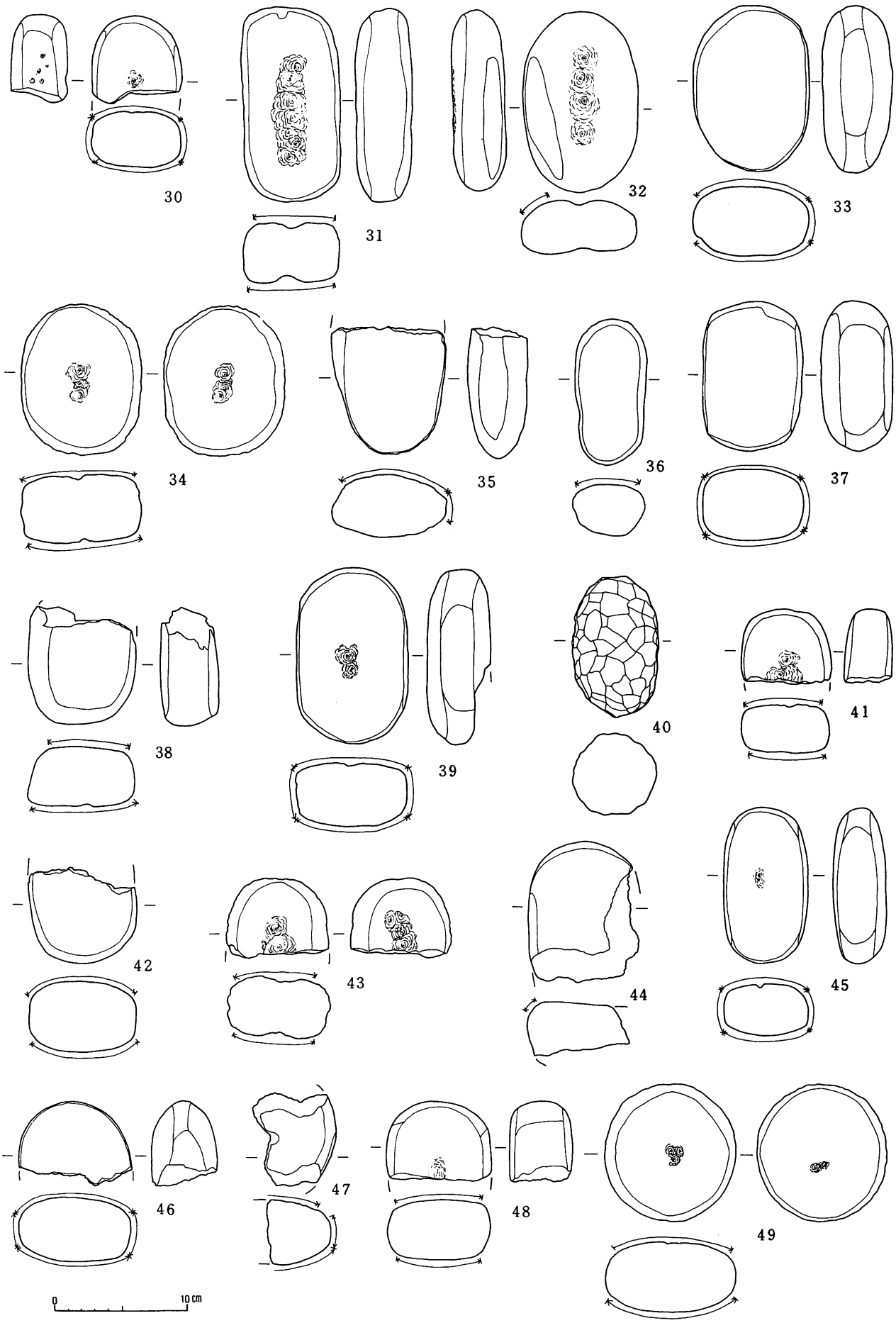
磨石は出土量が非常に多い。小破片を除いた113点を図示する。これらは使用面の状況によって、3種類に大別することができる。凹みの有るもの（イ）と無いもの（ロ）、さらにいわゆる稜磨石（ハ）の3種類である。113点の内訳は、イ・33点、ロ・54点、ハ・25点、未製品としたもの1点である。40に示したものは、花崗岩と思われるが、14号住居址覆土中から出土したものである。大型の石材を打ち砕いて、手頃な大きさとし、その周辺部を打ち欠き磨石に使用するつもりであったと思われるが、全く使用の痕跡は見られない。通常、磨石に使用す



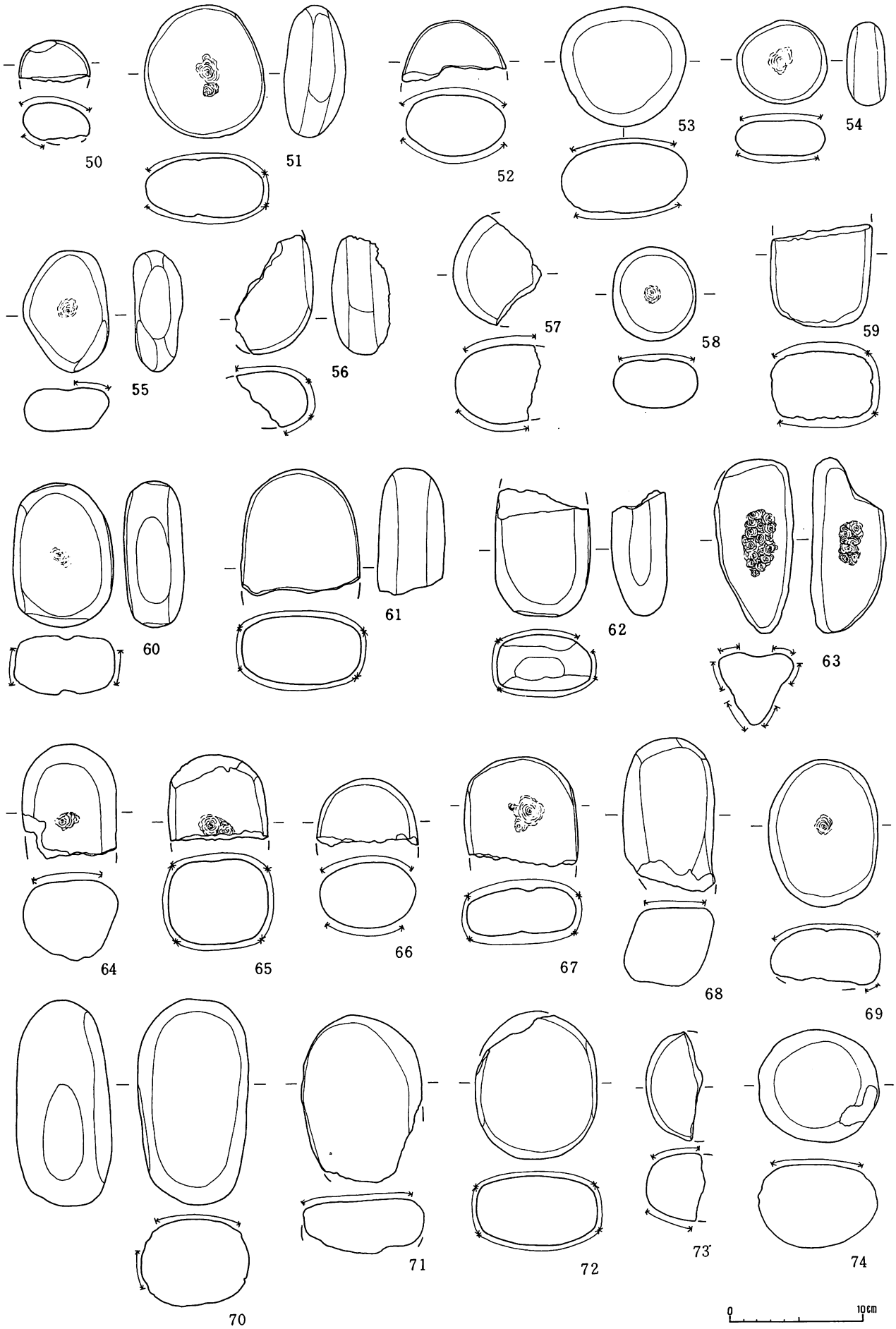
第99図　磨石・凹石その１



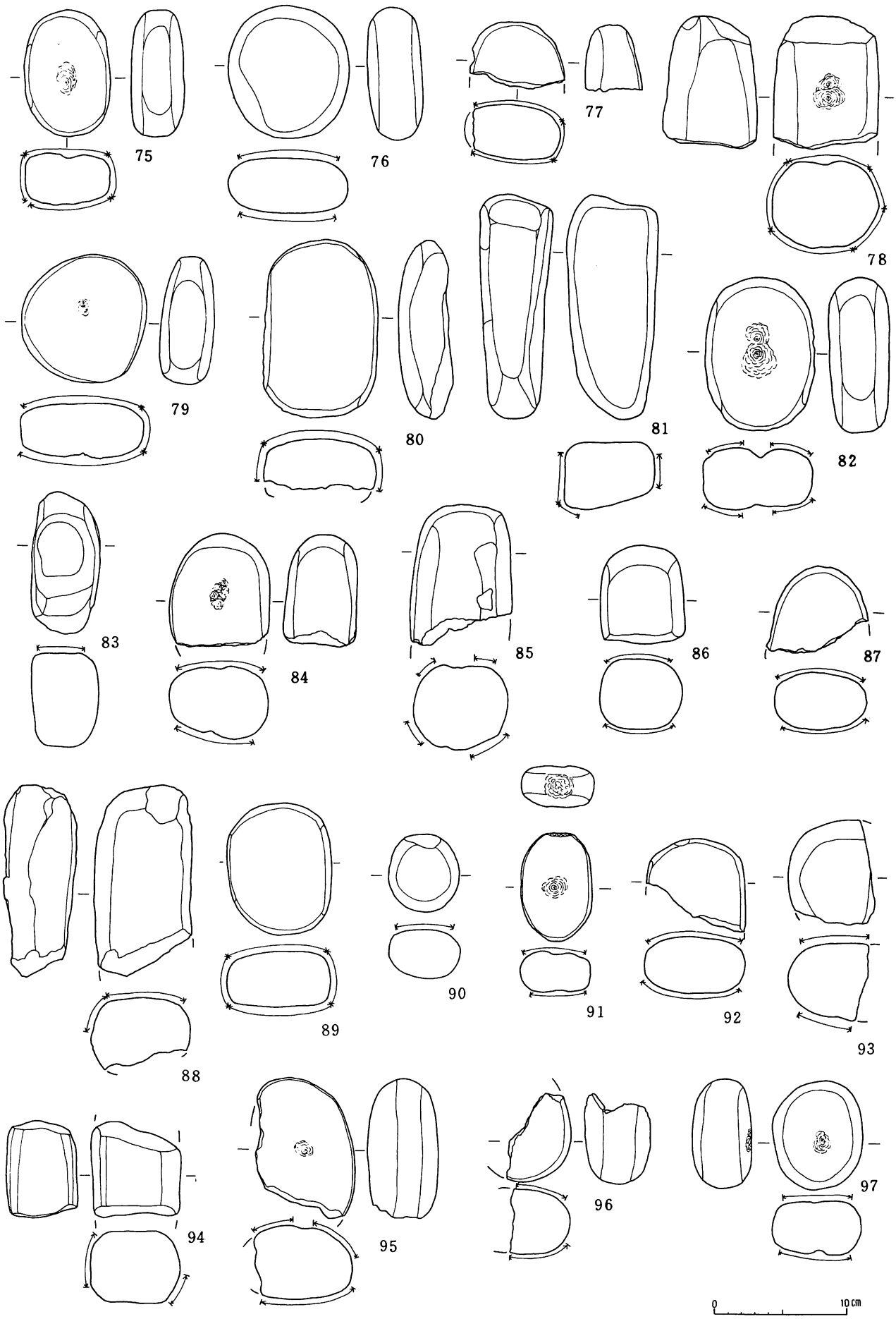
第100図　磨石・凹石その2



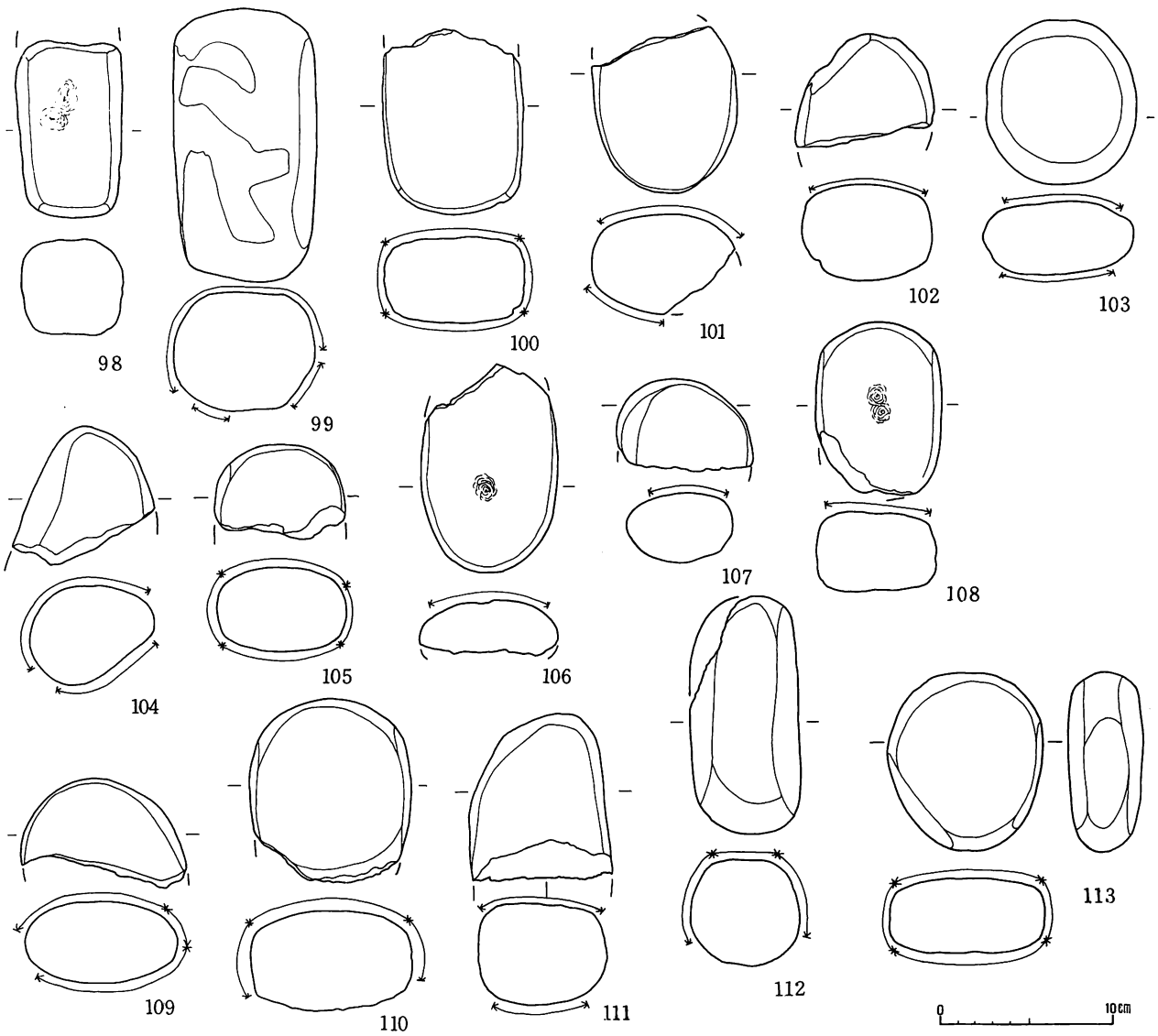
第101図　磨石・凹石その3



第102図　磨石・凹石その4



第103図　磨石・凹石その5



第104図　磨石・凹石その6

る石は河原などから適当なものを採取し、そのまま使用することが考えられ、現実に今回出土したものの多くは自然面を残している。しかし、4面すべてを使用しているものは当然ながら自然面は残っていないため、磨石として使用するまえにこのような整形が行われていないと断言できない面もあり、可能性のひとつとしてこの資料をここに提示することとした。

（イ）では98に示したものが凹みだけを有し、磨りの痕跡が全く見られないものである。これ以外は総て凹みのある面は磨り面となっている。この中には凹みが磨りに使用される以前に作られたために、磨りによって著しく浅くなっているものが何点か見受けられる。この逆に磨りを行った後に凹みを作った例は無い。以前報告の釈迦堂遺跡でも同様な傾向があり、正に磨りのために作られた凹みであると言えよう。凹み面以外の使用面で、磨りに使用した面も多いが、これには凹みが磨りによって完全になくなってしまった結果であるものも含まれると思われる。

（ロ）では断面が四角形を呈するものが多いが、磨りに使用された面は1面だけのものから4面総てのものまで存在する。はっきりした磨り面をもつものは49点であるが、最も多いのが2面（上下面）を使用したもので、21点を数える。次いで3面（11点）、4面（9点）、1面（8点）となっている。（イ）で述べたように、この中にも本来凹みを有していたものが、磨りによって凹みが消えてしまったものも含まれるのであろう。

（ハ）は、諸磯式期に特徴的に見られるものである。元々球形であったものが頻繁な使用によって半分ちかくにまで減ったもの（1）、断面三角形を呈するものの1面のみを使用面としたもの（2～7・10・11・13・16・

第4表　磨石一覧表

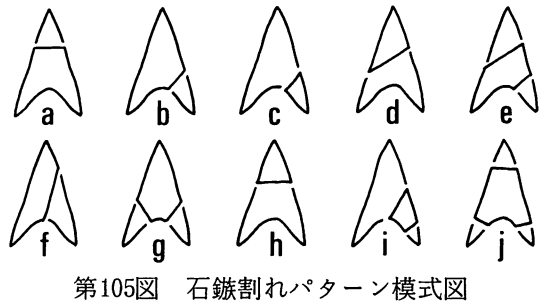
番号	出土位置	形態	長さ	巾	厚さ	重量	石材・他	使用面	そ　の　他
1	1住S－8	ハ	(9.00)	(7.80)	5.10	(58.52)	花崗岩類	1	スリ
2	4住S－21	ハ	11.80	6.40	5.60	(478.4)	〃	〃	〃
3	6住S－15	ハ	15.00	9.60	7.40	1306.5	安山岩	1	〃
4	5住S－10	ハ	(11.40)	(7.0)	6.80	(756.1)		1	〃
5	9住S－40	ハ	15.20	7.40	7.70	1184.0	〃	1	〃
6	〃 S－42	ハ	(8.0)	(5.40)	5.70				〃
7	〃 S－22	ハ	(8.50)	(8.30)	5.00	(1130.0)	細粒砂岩	1	〃
8	〃 S－21	ハ	(9.35)	(9.10)	(4.90)				〃
9	15住S－4	ハ	12.30	8.0	4.30	68.63	閃緑斑岩	1	〃
10	〃 S－16	ハ	(10.25)	6.30	4.20	(419.6)	安山岩	1	〃
11	〃 S－11	ハ	(9.80)	7.00	4.60	(542.1)	石英内緑岩	1	〃
12	22住S－5	ハ	7.20	4.90	4.50	(219.0)	安山岩	1	〃
13	〃 s－6	ハ	17.10	8.90	7.10	1644.9	花崗岩類	1	〃
14	9土s－3	ハ	(11.10)	(9.50)	6.10	(959.3)	石英閃緑岩	1	〃
15	包182	ハ	(12.20)	7.40	5.80	(800.8)	花崗岩類	3	〃
16	〃 69	ハ	(7.90)	(6.50)	4.0	(299.6)	〃	1	〃
17	〃198	ハ	(12.00)	(7,60)	5.90	(693.5)	安山岩	2	〃
18	71BG	ハ	(6.80)	(4.80)	6.00	(245.2)	石英閃緑斑岩	1	〃
19	107G　S－9	ハ	(9.50)	(8.40)	5.40	(632.6)	石英閃緑岩	2	〃
20	表　採	ハ	(6.60)	(7.50)	4.80	(273.0)	花崗岩類	1	〃
21	〃	ハ	11.40	7.20	6.00	932.4	安山岩	2	〃
22	〃	ハ	15.90	7.20	5.50	1016.3	花崗岩類	2	〃
23	9住S－25	ハ	15.70	8.20	5.40	1083.1	〃	2	〃
24	17住S－1	ハ	(8.20)	(7.60)	6.30	(446.4)	石英閃緑岩		〃
25	包139	ハ	11.00	10.20	5.30	818.6	安山岩	2	スリ　上面に凹み2ケあり
26	1住S－9	ロ	(11.90)	(6.60)	5.70	(598.6)	玄武岩	4	スリ　先端部をたたき使用
27	9自由S－2	イ	9.90	7.0	4.20	(398.1)	安山岩	2	スリ　上面に2ケ下面に1ケ凹みあり
28	13住S－6	ロ	(8.70)	(6.50)	(3.00)	(212.9)	花崗岩類	(1)	スリ
29	4住S－14	イ	10.40	(9.40)	(4.80)	(667.1)	安山岩	2	スリ　上面に2ケ凹みあり
30	5住S－18	イ	(6.50)	6.70	4.10	(251.6)	〃	4	スリ　上面に1ケ側面に2ケ凹みあり
31	6自由	イ	14.30	7.40	4.50	717.9	〃	2	スリ　上面に7ケ下面に3ケ　〃
32	〃 S－2	イ	13.30	8.60	4.00	611.1	〃	3	スリ　〃　4ケ　〃
33	9住S－26	ロ	12.10	8.60	5.10	(858.1)	〃		スリのみ
34	〃 S－24	イ	11.10	9.00	5.00	758.9	玄武岩	2	スリ　両面に各2ケずつ凹みあり
35	〃	ロ	(9.40)	(8.60)	4.60	(461.7)	安山岩	2	スリのみ
36	9住S－36	ロ	10.80	5.40	3.80	344.7	花崗岩類	1	〃
38	13住S－1	ロ	(8.60)	(8.00)	4.40	(492.5)	〃	2	〃
39	14住S－6	イ	13.00	8.40	4.70	(711.6)	〃	4	スリ　上面に凹み2ケあり
40	〃 S－14		10.40	6.40	6.00	591.2	花崗岩類		未使用（未製品）

番号	出土位置	形態	長さ	巾	厚さ	重量	石材・他	使用面	そ　の　他
41	14住S－4	イ	(5.60)	(6.70)	3.60	(186.0)	玄武岩	2	スリ　上下面に凹みあり
42	〃 S－3	ロ	(7.00)	(8.10)	5.30	(44.9)	安山岩	2	スリ
43	〃 S－7	イ	(5.80)	(7.60)	4.60	(219.0)	デイサイト	2	スリ　上下面に凹みあり
44	15住S－7	ロ	(10.40)	(8.20)	(4.00)	(506.6)	石英閃緑岩	2	
45	16住S－5	イ	11.40	6.20	(4.00)	436.4	安山岩	4	スリ　上面のみ凹み1ケあ
46	17住S－12	ロ	(6.20)	(8.40)	3.80	(330.4)	〃	4	スリのみ
47	〃	ロ	(6.80)	(6.20)	4.80	(265.5)	〃	(3)	〃
48	〃 pit 1	イ	5.80	(8.00)	4.50	(250.2)	中粒砂岩	2	スリ　両面凹みあり
49	18住S－1	イ	10.10	9.60	5.20	672.2	玄武岩	2	スリ　上面3ケ下面2ケ凹みあり
50	19住S－8	ロ	(3.10)	(5.30)	(2.80)	(63.4)	凝灰岩	2	スリのみ
51	20住S－5	イ	9.80	9.00	4.40	520.5	安山岩	2	スリ　上下面各2ケずつ凹みあり
52	23住S－1	ロ	4.40	(7.90)	4.50	(158.7)	花崗岩類	2	スリのみ
53	23住S－3	ロ	8.80	9.30	5.20	586.9	安山岩	2	〃
54	20住S－4	イ	6.20	6.70	2.60	138.6	〃		スリ　上下面に凹みあり
55	23住S－6	イ	9.00	6.40	3.10	269.6	花崗岩類	2	スリ　上面に1ケ凹みあり
56	〃 S－7	ロ	8.70	(5.80)	(4.20)	(197.0)	安山岩	(3)	スリのみ
57	〃 S－8	ロ	(8.00)	(6.60)	(5.90)	(352.5)	玄武岩	2	〃
58	〃 S－9	イ	6.90	6.20	3.60	210.0	花崗岩類	1	スリ　上面のみ凹みあり
59	〃 S－10	ロ	7.50	(7.60)	5.10	(448.2)	玄武岩	3	スリのみ
60	3土S－1	イ	10.70	7.50	4.40	432.0	安山岩	4	側面スリ、上下面に各1ケずつ凹みあり
61	24土S－2	ロ	(9.30)	(8.90)	5.00	(644.9)	〃	4	スリのみ
62	25土S－2	ロ	9.50	7.20	4.10	(449.8)	玄武岩	4	〃
63	28土S－1	イ	12.80	(5.90)	5.30	(456.6)	石英閃緑岩	3	スリ、3面に凹みあり
64	包9	イ	(8.40)	7.00	6.00	(520.8)	花崗岩	1	スリ、凹みあり
65	〃18	イ	(6.40)	7.40	6.30	(423.0)	安山岩	4	スリ、上面のみ凹みあり
66	〃214	ロ	(5.00)	(5.00)	4.80	(231.6)	〃	2	スリのみ
67	包25	イ	(8.00)	(8.60)	3.50	(399.9)	安山岩	4	スリ、上下面に凹みあり
68	22	ロ	(11.30)	(6.80)	5.80	(675.4)	花崗岩類	1	スリのみ
69	〃92	イ	10.80	8.10	(4.20)	(554.6)	〃	2	スリ、上面に1ケ凹みあり
70	〃151	ロ	15.20	8.20	6.50	1303.6	〃	2	スリのみ
71	〃157	ロ	(1.40)	(9.10)	4.10	(661.1)	〃	(1)	スリのみ
72	〃188	ロ	(10.10)	9.10	5.20	(742.6)	安山岩	4	〃
73	〃199	ロ	(8.00)	(4.20)	5.10	(207.5)	〃	2	〃
74	〃204	ロ	8.30	9.00	6.20	630.3	〃	1	〃
75	〃210	イ	9.30	6.50	3.90	346.1	玄武岩		スリ、上面のみ凹みあり
76	〃217	ロ	9.80	9.00	4.00	514.5	安山岩	2	スリのみ
77	〃223	ロ	(4.90)	(7.10)	4.10	(202.8)	花崗岩類	(3)	〃
78	〃224	イ	9.80	7.80	6.50	(717.5)	安山岩	5	スリ、上面のみ凹みあり
79	79BG	イ	9.40	9.40	4.00	491.6	〃	3	スリ、上下面に凹みあり
80	71BG	ロ	13.20	8.60	(3.70)	(584.1)	〃	(3)	スリ

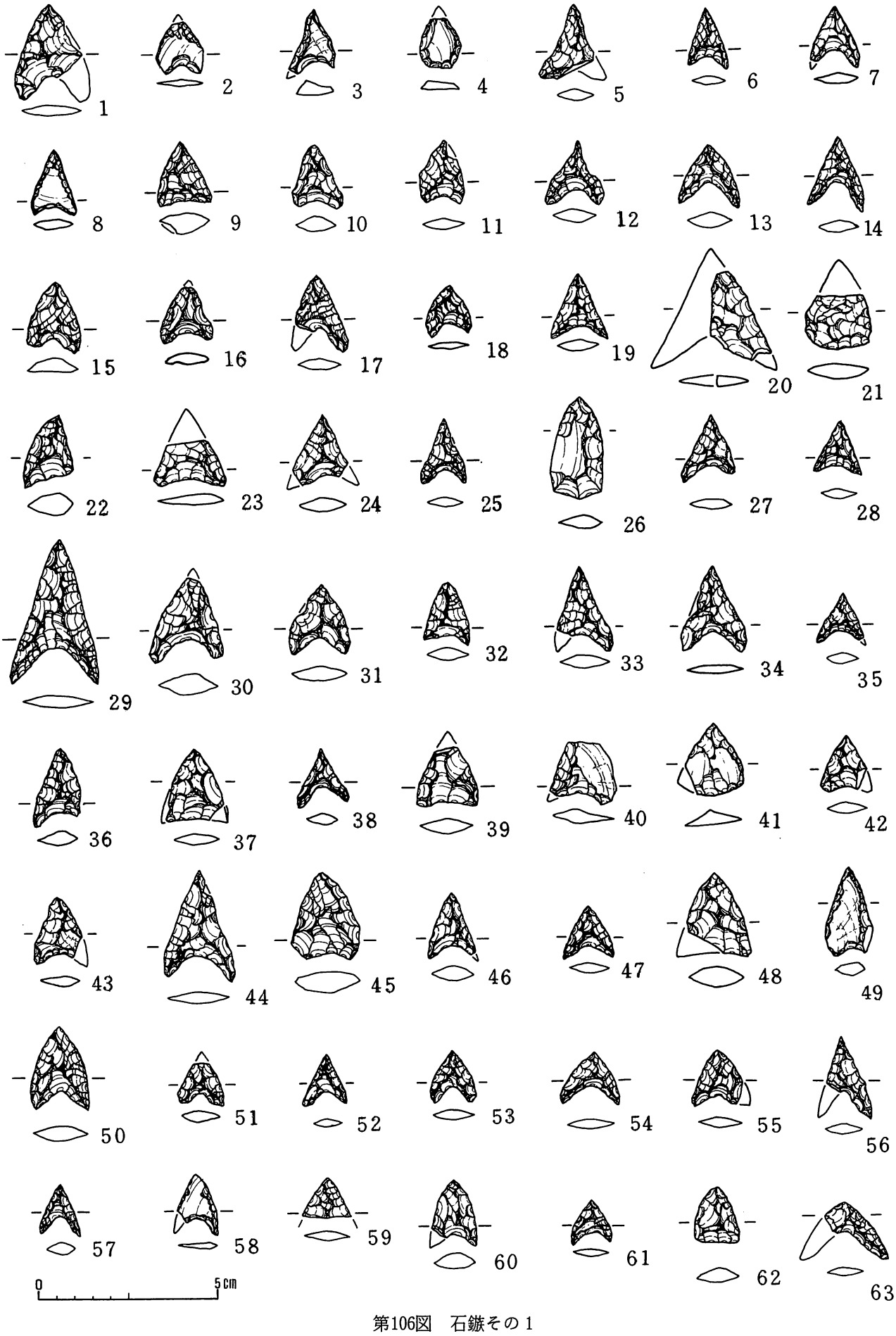
番号	出土位置	形態	長さ	巾	厚さ	重量	石材・他	使用面	そ　の　他
81	72A	ロ	16.60	6.80	5.00	(860.7)	花崗岩類	3	スリのみ
82	72G	イ	11.40	8.20	4.60	584.4	玄武岩	2	スリ、上下面に各2ケずつ凹みあり
83	73G	ロ	10.50	5.20	6.90	629.5	花崗岩類	1	スリのみ
84	〃CG	イ	(8.40)	7.40	5.40	(525.3)		2	スリ、上下面に凹みあり
85	包130	ロ	(10.40)	7.70	6.20	(806.7)	花崗岩類	6	スリ、　〃
86	79BG	ロ	7.40	6.30	5.20	(402.0)	安山岩	2	スリのみ
87	78BG	ロ	6.50	7.60	4.20	(252.6)	玄武岩	2	〃
88	〃	ロ	14.00	7.30	(5.30)	(809.2)	安山岩	2	〃
89	83CG	ロ	9.70	7.80	4.10	479.8	〃	4	〃
90	〃	ロ	5.70	5.40	3.60	(165.8)	〃	1	〃
91	84CG	イ	8.00	5.40	3.00	181.4	玄武岩	2	スリ、上下面に凹みあり
92	94BG	ロ	(6.80)	7.70	4.20	(305.3)	安山岩	2	スリのみ
93	95G	ロ	(7.80)	6.40	(5.80)	(351.9)	〃	(2)	〃
94	96G表採	ロ	(7.20)	6.80	5.40	(458.0)	花崗岩類	2	〃
95	101BGS-1	イ	(10.50)	(7.40)	5.40	(624.4)	安山岩	(4)	スリ、上面のみ凹みあり
96	102GS-3	ロ	(6.60)	4.70	5.80	(182.5)	〃	(2)	スリ
97	105GS-1	イ	8.10	6.70	4.00	332.2	〃	2	スリ、上下面に凹みあり
98	〃 S－2	イ	(10.00)	(6.10)	5.50	(485.9)	玄武岩	2	上下面に凹みのみ
99	〃 S－3	ロ	15.50	8.20	6.80	1551.7	花崗岩類	3	スリのみ
100	106GS-1	ロ	(10.50)	(8.20)	4.90	(652.5)	玄武岩	4	〃
101	107GS-4	ロ	(9.40)	8.40	(5.60)	(623.5)	安山岩	2	〃
102	102AG	ロ	(6.40)	(8.00)	5.50	(344.5)	〃	1	〃
103	109AG	ロ	9.40	8.60	4.20	500.5	花崗岩類	2	〃
104	62BG	ロ	(7.90)	(8.20)	5.60	(401.5)	〃	2	〃
105	121BG	ロ	(5.40)	(7.50)	4.80	(294.6)	安山岩	4	〃
106	134BG	イ	(11.90)	8.00	(3.00)	(432.2)	安山岩	1	スリ、上面に凹みあり
107	表採	ロ	(5.30)	(8.00)	3.90	(227.3)	花崗岩類	1	〃
108	96G	イ	(9.90)	7.20	4.50	(566.4)	〃	1	スリ、上下面に凹みあり
109	9土S－1	ロ	(6.0)	(9.50)	4.70	(332.2)	花崗岩類	3	スリのみ
110	73BG	ロ	(10.40)	9.30	5.80	(794.3)	安山岩	(3)	〃
111	92BG	ロ	(9.0)	(8.40)	5.80	(690.5)	〃	2	〃
112	95BG	ロ	13.60	6.40	6.00	(789.1)	〃	3	〃
113	102GS-2	ロ	10.10	9.00	4.30	551.4	〃	4	〃

20)、球形の一部を使用したもの（12・24）、2面以上の使用面を持つもの（15・17・19・21～23・25）に分けられる。15はこの種としては特異な部類に入るものであろうが、三角形の総ての稜を使用したものである。なお、25は使用面以外の部分に凹みを有する。

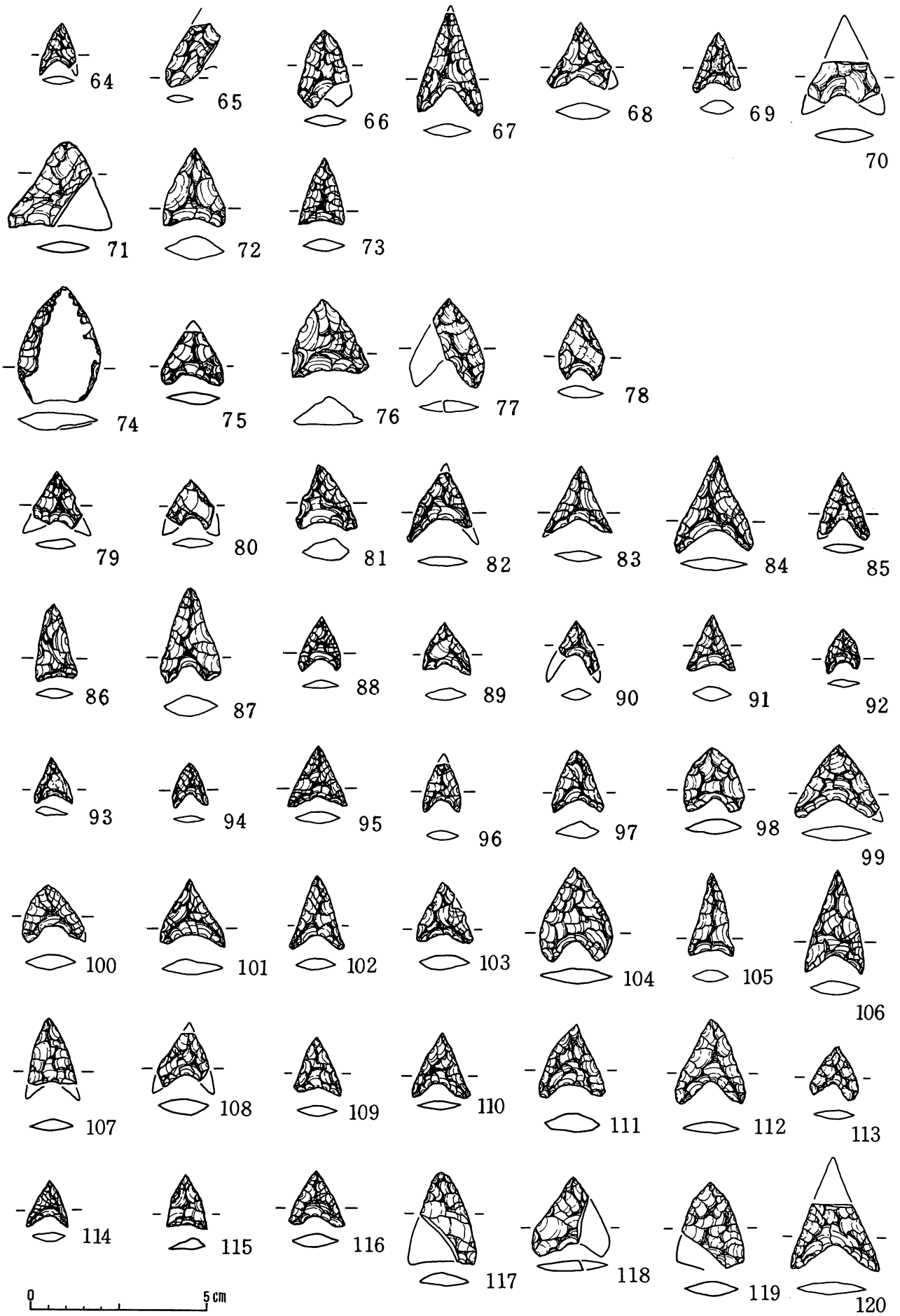
石材は玄武岩や安山岩といった、石皿と同じ石材を用いたものが多いが、その他にも花崗岩・砂岩・石英閃緑岩な



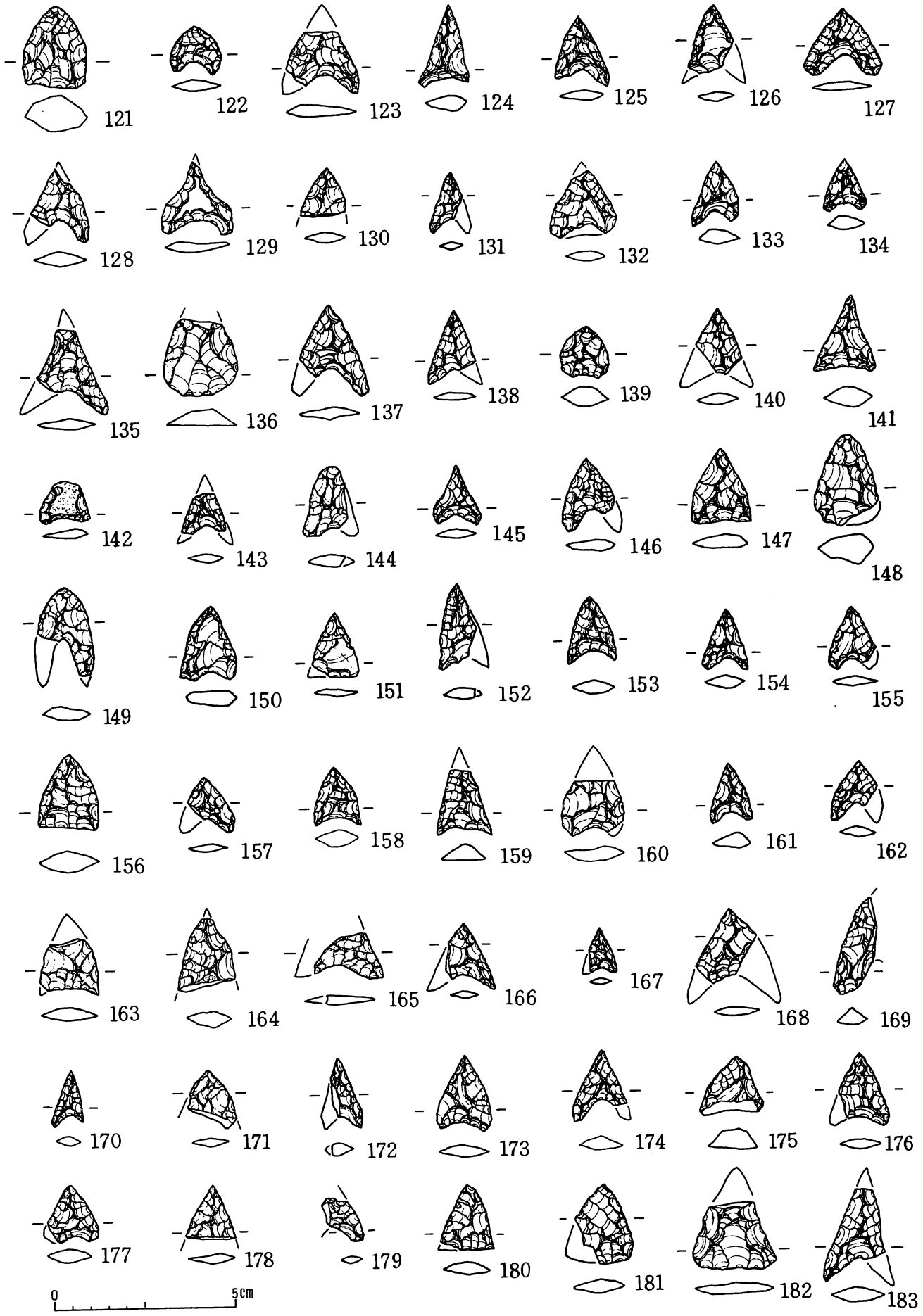
第105図　石鏃割れパターン模式図


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
0
5cm

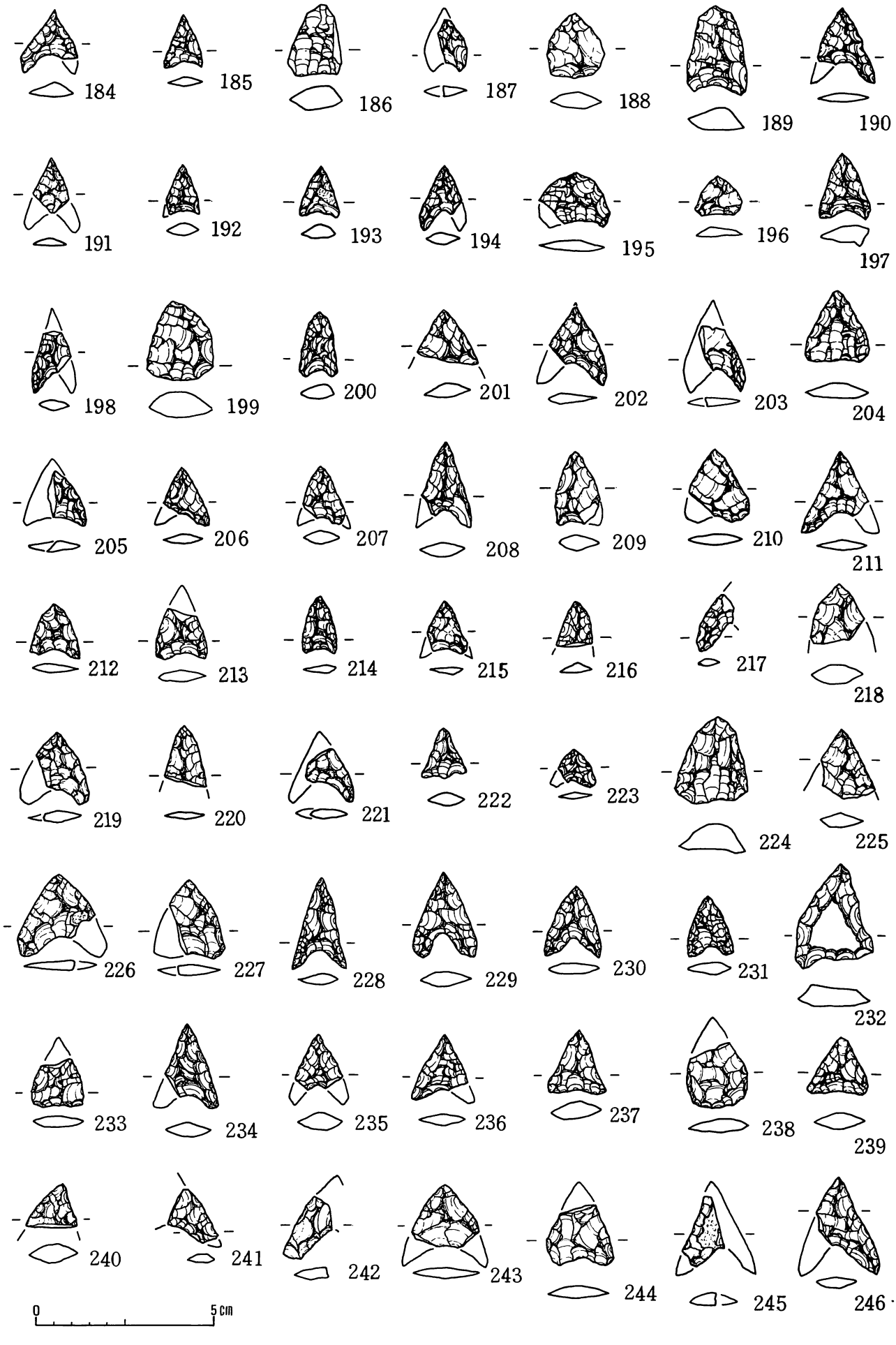
第106図　石鏃その１


64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
0
5cm

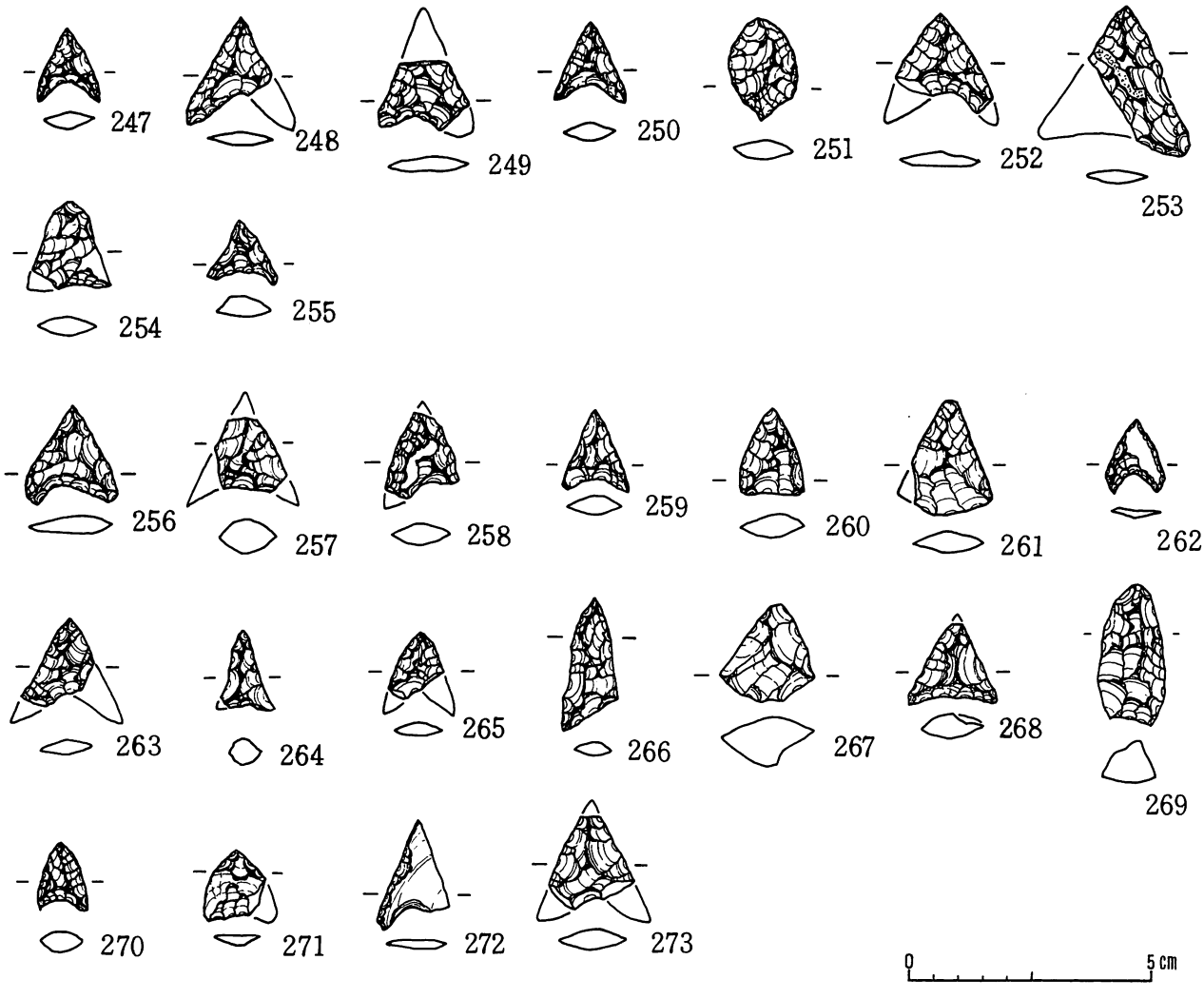
第107図　石鏃その２


121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
0
5cm

第108図　石鏃その3


184
185
186
187
188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
201
202
203
204
205
206
207
208
209
210
211
212
213
214
215
216
217
218
219
220
221
222
223
224
225
226
227
228
229
230
231
232
233
234
235
236
237
238
239
240
241
242
243
244
245
246
0
5cm

第109図　石鏃その４



第110図　石鏃その５

ど色々な種類の石材が用いられている。特定のタイプに特定の石材が用いられることはないようであるが、（ハ）には多孔質の玄武岩は使われていない。

e　石鏃（第106 ～110図）

石鏃の出土量は非常に多い。今回図示したもので273点を数えるが、このほかにも整理段階で小破片を見落としたものもあり、総数では300点ちかいと思われる。黒曜石製が圧倒的で254点である。次のチャートで７点、シルト岩が３点、安山岩が２点、デイサイトが２点、砂岩１点、頁岩１点となっている。黒曜石の占める割合は93％となるが、実際はそれ以上となろう。

基部の形態では無茎鏃が殆ど全部と言っても良い。222に示した１点だけが有茎鏃で、それ以外の基部の解るものは総て無茎鏃である。無茎鏃はさらに基部の形態から３種類に分類される。この中では、基部に抉りをいれた凹基無茎鏃が最も多い。基部がはっきりしているものや一部欠損しているが推定できるものは265点あるが、凹基無茎鏃はこのうちの225点を占める。平基無茎鏃がこれに次ぐが、僅か29点である。更に円基鏃７点、尖基鏃４点である。これらの重量は１ｇ以下のものが多い。最も重いものは74の3.83ｇであり、３ｇを超えるものは僅か５点に過ぎない。ちなみに最大のものは29で長さ４㎝、幅2.45㎝を計るが、非常に薄く仕上げられているため、重量は２ｇ以下である。

石鏃には破損品が多いが、破損部位を第105図に示した。最も多い割れのパターンは脚部の片方を欠損したもので、151点の内のおよそ半分、73点を数える。この他では、先端部を欠損したものは22点、両脚部を欠損したものが17点となっており、この３パターンで74％以上である。これ以外の割れ方は少ない。

第5表　石鏃一覧表

番号	出土位置	形態	長さ	巾	厚さ	重量	石材・他	割れ	番号	出土位置	形態	長さ	巾	厚さ	重量	石材・他	割れ
1	1住		2.65	(1.90)	0.30	(1.03)		b	40	1住		(1.70)	(1.85)	0.40	(0.86)		b
2	〃		(1.45)	1.35	0.20	(0.37)		a	41	9住		2.00	(1.60)	0.50	(0.90)		b
3	〃		(1.80)	(1.30)	0.40	(0.63)		b	42	〃		1.55	(1.30)	0.30	(0.47)		b
4	〃		(1.40)	1.15	0.25	(0.48)		a	43	〃		1.80	(1.30)	0.30	(0.52)		b
5	4住S－2		2.05	(1.55)	0.30	(0.59)		b	44	13住S－5		3.10	2.00	0.30	1.06		?
6	〃 S－4		1.70	1.10	0.25	0.32			45	13住		2.40	1.95	0.60	2.86		
7	〃 S－6		1.70	1.35	0.30	(0.39)		b	46	14住S－9		1.80	(1.35)	0.40	(0.68)		b
8	〃 S－9		1.85	1.25	0.30	0.62			47	15住S－2		1.50	1.45	0.30	0.38		
9	〃 S－11		1.80	1.50	0.60	(0.95)			48	15•18住pit8		2.30	(1.80)	0.55	(1.74)		b
10	〃 S－17		1.80	1.40	0.40	0.83			49	15住		2.45	1.35	(0.35)	1.24		
11	〃 S－18		1.75	1.30	0.30	0.63		?	50	16住S－4		2.35	1.60	0.40	1.00		
12	〃 S－19		1.75	1.65	0.40	0.58			51	17住S－13		(1.20)	1.30	0.35	(0.38)		a
13	〃 S－19		1.75	1.70	0.45	0.78			52	〃 S－6		1.40	1.25	0.20	0.23		
14	〃 S－20		2.10	1.60	0.35	0.54			53	〃 S－10		1.40	1.30	0.30	0.36		
15	〃 S－24		2.00	1.50	0.40	0.82			54	〃 S－11		1.45	1.65	0.30	0.47		
16	〃		(1.55)	1.45	0.35	(0.67)		a	55	〃 S－14		1.55	(1.40)	0.30	(0.54)		b
17	〃		2.15	(1.50)	0.30	(0.60)		b	56	〃		2.30	(1.25)	0.30	(0.47)		b
18	5住S－3		1.45	1.30	0.20	0.24			57	〃		1.45	1.10	0.35	0.28		
19	〃 S－4		1.80	1.60	0.30	0.47			58	〃		1.70	(1.15)	0.20	(0.27)		b
20	〃		(2.45)	(1.70)	0.30	(1.16)		i	59	〃		(1.15)	(1.35)	0.30	(0.32)		h
21	9住		2.00	1.85	0.45	(1.23)		a	60	〃		1.85	(1.30)	0.45	(0.87)		b
22	6住S－4		2.00	1.40	0.60	1.26			61	20住S－2		1.30	1.15	0.20	0.21		
23	6住		(1.30)	2.00	0.30	(0.67)		a	62	〃		1.60	1.25	0.40	0.72		
24	〃		(1.95)	(1.55)	0.40	(0.80)	チャート	g	63	〃		1.60	(1.75)	0.20	(0.42)		
25	8住S－3		1.80	1.30	0.25	0.35			64	20住96G		1.45	(1.00)	0.20	(0.21)		b
26	8住83G		2.85	1.50	0.35	2.31	泥質ホルン		65	〃		(1.75)	(1.50)	0.20	(0.65)		c
27	9住S－4		1.90	1.50	0.30	0.49			66	21住97B		2.15	(1.50)	0.30	(0.67)		b
28	〃 S－6		1.50	1.30	0.25	0.31			67	22住S－1		(2.80)	1.85	0.35	(1.03)	細粒砂岩	a
29	〃 S－7		4.00	2.45	0.35	1.91			68	〃 S－11		(1.85)	(1.80)	0.45	(0.87)		b
30	〃 S－9		2.35	2.05	0.60	(1.72)		a	69	〃 北セク		1.65	(1.35)	0.40	0.63		
31	〃 S－10		1.95	1.70	0.40	(0.90)			70	〃 〃		(1.15)	(2.00)	0.40	(0.88)		j
32	〃 S－11		1.75	1.30	0.35	0.71			71	〃		(2.40)	(2.35)	0.30	(1.44)		b
33	〃 S－12		2.35	(1.55)	0.35	(0.69)		b	72	23住S－2		2.20	1.75	0.65	1.81		
34	〃 S－23		2.40	1.80	0.25	(0.69)		?	73	〃 S－4		1.85	1.30	0.35	0.62		
35	〃 S－37		1.35	(1.30)	0.30	(0.34)		b	74	3号土S-1		3.20	2.35	0.50	(3.83)	チャート	
36	〃		2.20	1.30	0.40	0.82			75	29号土S-2		(1.45)	1.75	0.35	(0.63)		a
37	〃		(2.00)	(1.60)	0.30	(0.93)	チャート	g	76	23 〃		2.15	2.15	0.80	2.56		
38	〃		1.60	1.45	0.30	0.35			77	24 〃		2.50	(1.50)	0.30	(0.76)		b
39	〃		(1.65)	1.65	0.45	(1.19)		a	78	28 〃 S-4		1.85	1.30	0.35	0.64		

番号	出土位置	形態	長さ	巾	厚さ	重量	石材・他	割れ	番号	出土位置	形態	長さ	巾	厚さ	重量	石材・他	割れ
79	包 31		(1.60)	(1.40)	0.30	(0.35)		g	122	72G		1.35	1.40	0.30	0.42		
80	〃 32		(1.35)	(1.35)	0.25	(0.36)		g	123	〃G		(1.70)	(2.00)	0.35	(1.07)		e
81	〃 40		1.80	1.70	0.60	1.19			124			2.30	1.40	0.45	0.95		
82	〃 81		(1.90)	(1.80)	0.25	(0.64)		e	125	73		1.95	1.50	0.30	0.53		
83	〃 86		(1.85)	(1.90)	0.30	(0.58)	安山岩	b	126	〃		(1.90)	(1.25)	0.25	(0.43)		g
84	〃 91		2.70	(2.20)	0.35	1.10			127	〃G		1.80	2.15	0.25	0.59		
85	〃 134		1.85	(1.40)	0.25	(0.42)		b	128	〃		(2.05)	(1.65)	0.40	(0.79)		e
86	〃 〃		21.5	1.20	0.25	0.70			129	74G		(2.05)	2.00	0.30	(0.87)		a
87	〃 135		2.65	1.70	0.60	1.60	デイサイト		130	〃		(1.35)	(1.25)	0.30	(0.35)		h
88	〃 142		1.50	1.20	0.20	0.27			131	〃		1.70	(0.90)	0.20	(0.35)		b
89	〃 146		1.45	1.35	0.35	0.43			132	75		1.90	1.85	0.30	(0.73)		?
90	〃 166		(1.50)	1.15	0.30	(0.29)	泥質ホルン	g	133	76G		1.80	1.30	0.40	0.56		
91	〃 176		1.55	1.35	0.40	0.60			134	〃		1.45	1.20	0.40	0.43		
92	〃 180		1.25	0.95	0.20	0.17			135	〃		(2.40)	(1.95)	0.30	(0.95)		e
93	〃 183		1.30	1.10	0.25	0.21			136	76G		(2.15)	2.05	0.45	(2.28)		a
94	〃 190		1.25	1.00	0.15	0.17			137	77G		2.50	(1.95)	0.35	(1.08)		b
95	〃 191		1.70	1.70	0.30	0.58			138	〃G		2.05	(1.35)	0.20	(0.40)		b
96	〃 194		(1.35)	1.10	0.25	(0.25)		a	139	〃		1.45	1.35	0.55	0.88		
97	〃 195		1.75	1.45	0.50	0.80	チャート		140	78G		(1.80)	(1.25)	0.30	(0.57)		g
98	〃 196		1.80	1.70	0.40	1.02			141	〃		2.10	1.75	0.60	1.26	シルト	
99	〃 201		(2.0)	2.35	0.40	(1.15)		b	142	〃G		1.20	1.40	0.30	0.35		
100	〃 206		1.60	(1.75)	0.40	(0.74)		b	143	80G		1.10	(1.20)	0.25	(0.29)		j
101	〃 208		1.90	1.80	0.45	0.84			144	84G		1.90	(1.25)	0.35	(0.83)		b
102	〃 209		2.00	1.55	0.30	0.62			145	84G S-8		1.65	1.40	0.25	0.35		
103	〃 212		1.70	1.60	0.40	(0.87)		?	146	〃G		2.00	(1.45)	0.30	(0.61)		b
104	〃 215		2.60	2.05	0.45	1.76			147	85G		2.05	1.65	0.40	1.1		
105	〃 220		2.25	1.25	0.30	0.82			148	〃		2.50	(1.80)	0.85	(2.72)		b
106	〃 222		2.90	1.65	0.40	1.23			149	85G		(2.45)	(1.60)	0.40	(0.94)		b
107	74G		(1.85)	(1.35)	0.30	(0.66)		g	150	85G		2.05	1.60	0.40	1.08		
108	70 〃		(1.50)	(1.45)	0.45	(0.58)		j	151	86G		(1.80)	(1.30)	0.20	(0.33)		b
109	〃		1.60	1.35	0.30	0.47			152	〃G		2.35	(1.05)	0.30	(0.63)		b
110	〃		1.80	1.65	0.20	0.40			153	〃G		1.85	1.40	0.40	0.59		
111	70G		2.05	1.85	0.50	1.45			154	〃		1.70	1.30	0.40	0.50		
112	〃		2.30	1.95	0.30	0.99	シルト		155	86G		1.75	(1.35)	0.25	(0.45)		b
113	〃		1.50	1.35	0.25	0.31			156	〃G		2.10	1.70	0.60	2.01		
114	〃		1.30	1.15	0.25	0.21			157	〃		1.50	1.30	0.20	(0.30)		b
115	71		1.55	1.15	0.35	0.43			158	〃		1.60	1.30	0.45	0.81		
116	〃		1.55	1.60	0.40	0.74			159	〃		1.80	1.55	0.45	(0.83)		a
117	〃		2.60	(1.60)	0.40	(0.99)		b	160	〃		1.50	1.75	0.40	(0.97)		e
118	〃		2.20	(1.55)	0.30	(0.80)		b	161	〃		1.65	1.20	0.45	0.48		
119	71		(2.40)	(1.70)	0.40	18)		b	162	86G		1.70	1.30	0.30	(0.35)		b
120	〃		(1.90)	2.50	0.35	(1.32)		a	163	87G		1.60	(1.60)	0.40	(0.84)		a
121	〃		2.30	1.80	1.00	3.33			164	〃		(2.00)	(1.60)	0.50	(1.46)		d

番号	出土位置	形態	長さ	巾	厚さ	重量	石材・他	割れ	番号	出土位置	形態	長さ	巾	厚さ	重量	石材・他	割れ
165	87G		(1,30)	(1.90)	0.25	(0.63)		e	208	96G		2.40	(1.40)	0.40	(0.80)		b
166	〃G		1.85	(1.40)	0.20	(0.53)		b	209	〃		2.05	1.35	0.45	(1.03)		b
167	89G		1.30	(0.80)	0.20	(0.16)		b	210	96G		2.05	(1.70)	0.30	(0.90)		b
168	〃		(2.10)	(1.70)	0.25	(0.75)		g	211	〃		2.30	(1.85)	0.30	(0.72)	シルト	b
169	90G		(2.70)	(1.25)	0.50	(1.33)		c	212	97		1.55	1.40	0.25	0.56		
170	90G		1.55	0.90	0.25	0.22			213	97G		(1.45)	1.45	0.30	(0.73)		a
171	91G		1.60	(1.35)	0.25	(0.47)		d	214	〃		1.60	0.95	0.25	0.30		
172	90G		1.90	(0.85)	0.35	(0.34)		c	215	〃		(1.50)	(1.15)	0.20	(0.34)		g
173	〃		2.10	1.60	0.35	0.86			216	〃		(1.30)	(1.00)	0.30	(0.30)		b
174	91G		2.00	(1.55)	0.40	(0.47)	デイサイト	b	217	〃		(1.60)	(1.00)	0.20	(0.33)		c
175	〃		1.60	1.80	0.60	1.28			218	〃		(1.60)	(1.50)	0.55	(1.10)		d
176	〃		2.00	(1.40)	0.30	(0.68)	細粒安山岩	b	219	100G		2.00	(1.50)	0.30	(0.65)		b
177	91G		1.60	(1.40)	0.40	(0.53)		b	220	〃		(1.70)	(1.15)	0.20	(0.40)		d
178	〃G		(1.55)	(1.40)	0.30	(0.37)		h	221	100G		(1.50)	(1.35)	0.30	(0.32)		e
179	〃G		(1.25)	(1.15)	0.20	(0.27)		c	222	〃		1.40	1.30	0.40	0.45		
180	〃		1.80	(1.50)	0.35	(0.74)		b	223	101G		1.10	(1.05)	0.20	(0.21)		b
181	〃		2.25	(1.60)	0.40	(1.21)		b	224	103 S-5		2.40	2.05	0.80	3.28		
182	〃		(1.90)	2.30	0.30	(1.94)		a	225	〃		1.95	(1.50)	0.40	(1.14)		d
183	91G		(2.55)	(1.70)	0.40	(1.05)		e	226	104G		2.30	(2.20)	0.30	(1.05)		b
184	92G		1.80	(1.60)	0.40	(0.54)		b	227	〃		2.20	(1.55)	0.30	(0.90)		b
185	〃G		1.50	1.10	0.25	0.23			228	105G S-4		2.55	1.50	0.30	0.80		
186	〃		2.00	1.50	0.70	1.53			229	105G S-5		2.40	1.80	0.40	1.10	チャート	
187	〃G		1.50	(0.80)	0.30	(0.27)		i	230	〃 S-6		2.00	1.60	0.30	0.71		
188	〃		1.85	1.60	0.50	1.19			231	105G		1.70	1.30	0.35	0.46		
189	92G		2.50	1.65	0.60	2.54			232	〃		2.90	2.20	0.60	3.64	泥岩(ホルン化)	
190	93G		2.10	(1.60)	0.25	(0.48)		b	233	〃		(1.35)	1.50	0.30	(0.66)		a
191	〃		(1.55)	(1.00)	0.20	(0.27)		g	234	〃		2.35	(1.50)	0.40	(0.99)	チャート	b
192	〃		(1.40)	(0.90)	0.35	(0.39)		b	235	〃		(1.55)	(1.35)	0.50	(0.65)		g
193	94G		1.45	1.10	0.40	0.38			236	〃		1.85	(1.60)	0.35	(0.58)		b
194	〃		1.80	(1.20)	0.35	(0.31)		b	237	〃		1.80	1.60	0.55	1.06		
195	〃		1.50	(2.00)	0.30	(0.70)		b	238	106G		(1.85)	1.70	0.40	(1.28)		a
196	〃		1.10	1.30	0.25	0.28			239	106G		1.60	1.70	0.45	0.77		
197	〃		1.85	1.45	0.60	0.95			240	100G		1.25	(1.45)	0.55	(0.73)		h 2
198	95G		(1.70)	(1.10)	0.30	(0.42)		e	243	106G		(1.80)	(1.95)	0.30	8 0.93)		g
199	95G		2.20	1.85	0.40	2.93			244	〃		(1.70)	1.90	0.35	(0.90)		a
200	〃		1.80	1.10	0.40	0.55			245	〃		(2.00)	(1.15)	0.35	(0.53)		i
201	95		(1.50)	(1.75)	0.40	(0.76)		d	246	〃		2.75	(1.75)	0.30	(0.85)		b
202	95G		(2.15)	(1.60)	0.30	(0.59)		b	247	107G S-5		1.50	1.30	0.40	0.35		
203	〃		(1.80)	(1.30)	0.25	(0.38)		I	248	107		2.20	(1.75)	0.30	(0.49)		b
204	〃		2.00	1.80	0.45	1.46			249	108G		(1.5)	(1.90)	0.30	(0.74)		e
205	95		(1.50)	(1.10)	0.30	(0.33)		i	250	110G		1.65	1.50	0.40	0.42		
206	96		(1.65)	(1.30)	0.30	(0.34)		b	251	114G		2.10	1.45	0.40	1.65		
207	96G		(1.60)	(1.20)	0.40	(0.46)		g	252	116		(2.0)	(2.00)	0.30	(0.70)		g

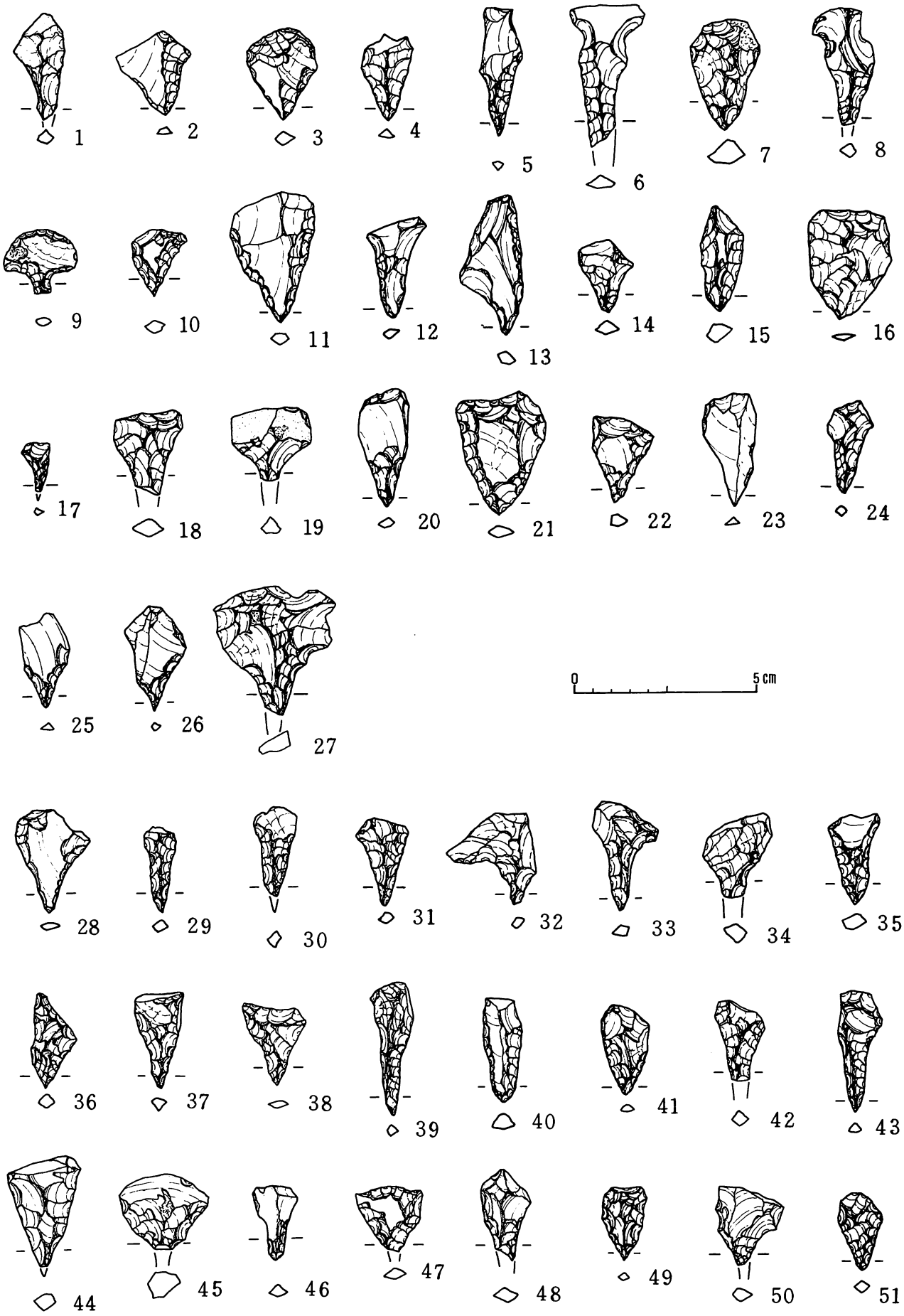
番号	出土位置	形態	長さ	巾	厚さ	重量	石材・他	割れ	番号	出土位置	形態	長さ	巾	厚さ	重量	石材・他	割れ
253	122G		3.00	(2.05)	0.30	(1.23)		b	264	表採		1.65	(1.10)	0.55	(0.53)		b
254	〃		(1.80)	(1.60)	0.40	(0.81)		b	265	〃		1.40	(1.15)	0.30	(0.37)		g
255	130G		1.35	1.45	0.45	0.44			266			2.70	1.20	0.30	(0.72)		
256	表採		2.00	1.90	0.40	1.16	珪質頁岩		267			2.00	2.00	1.00	2.15		
257	〃		(1.55)	(1.50)	0.70	(1.29)	チャート	j	268	表採		1.65	1.85	0.50	(0.92)		a
258	〃		(1.80)	(1.55)	0.45	(0.91)		j	269	〃		2.90	1.40	0.85	3.00		
259	〃		1.70	1.40	0.40	0.62			270	〃		1.40	1.05	0.45	0.40		
260	〃		1.80	1.35	0.50	0.87			271	〃		1.40	(1.25)	0.20	(0.63)		b
261	〃		2.35	(1.65)	0.45	(1.23)		b	272	〃		2.20	1.50	0.20	(0.37)		
262	〃		1.55	1.25	0.20	0.23			273			1.85	(1.80)	0.40	(1.09)		j
263	〃		(1.80)	(1.50)	0.30	(0.49)		g									

f　ドリル（第111・112図）

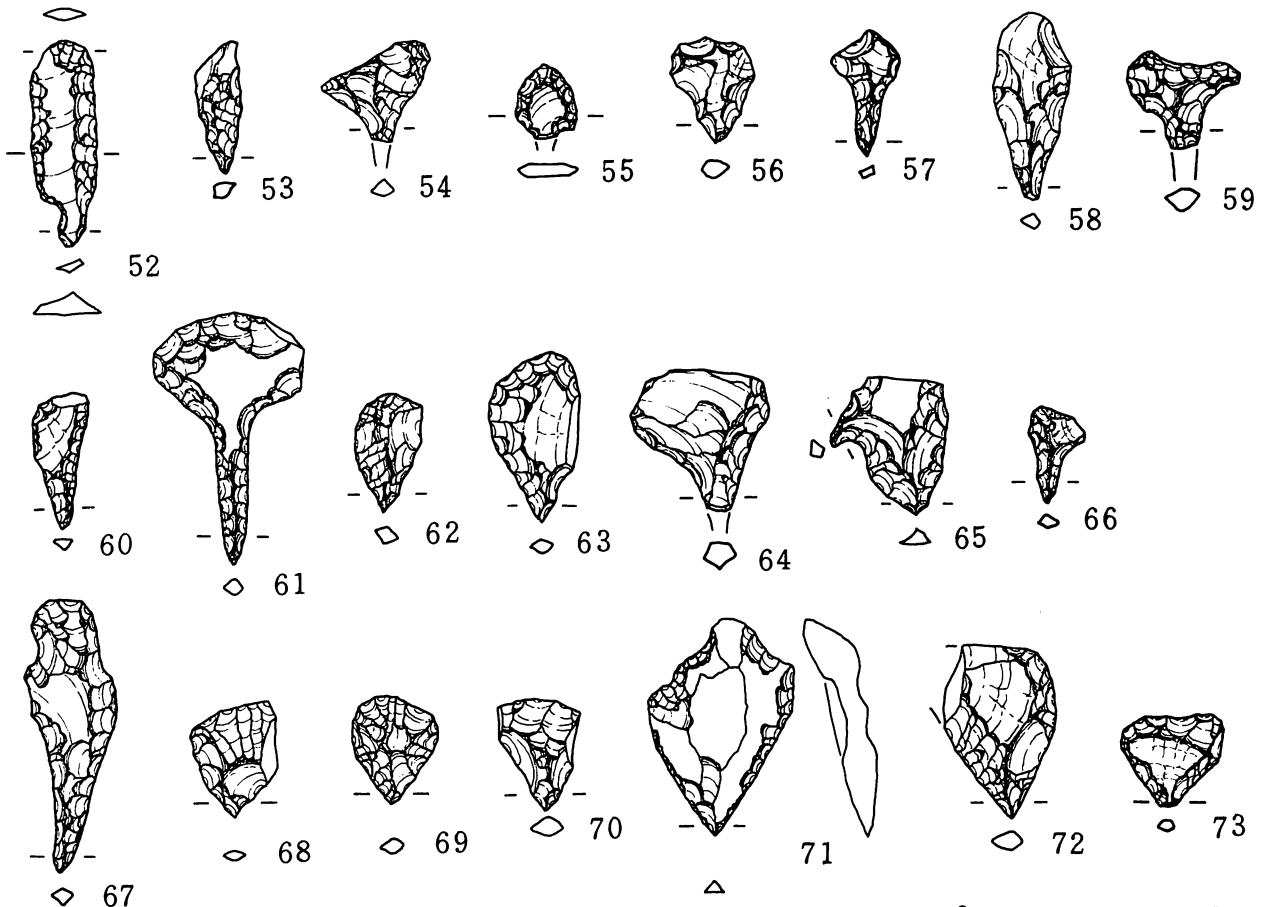
ドリルも比較的出土量が多い。73点図示するが、これも出土総数とは言い切れない。やはり黒曜石製が圧倒的である。先端部の整形は非常に丁寧に行われている。頭部は整形を行っているものと行っていないものがあるが、頭部の整形はそれほど重要視されていないらしく、整形するにしてもラフなものが多い。この部位については使用する剥片の形態によってある程度制限されることが考えられ、17や29など小型のものはドリルを作り始める段階から頭部のつまみを作ることは不可能である。こういった剥片を利用するものと、61や9のようにかなり大きな剥片から頭部の整形とドリルの身を細く作り出すものと2種類がある。65は一つの剥片から2カ所の尖端部を作り出している。また、52は細長い剥片を整形し、片方の先端部をドリルとして利用、両側および片側先端部に刃部を作り出しスクレイパーとしたものと思われる。

第6表　ドリル一覧表

番号	出土位置	形態	長さ	巾	厚さ	重量	石材・他	番号	出土位置	形態	長さ	巾	厚さ	重量	石材・他
1	1住		(2.95)	1.45	0.40	(2.34)		18	10住S－1		(2.35)	1.90	0.50	(3.02)	
2	〃		2.30	2.05	0.20	1.51		19	15•18住pit12		(2.00)	2.20	0.45	(3.78)	
3	〃		2.55	2.05	0.40	2.31		20	20住		3.25	1.40	0.35	3.28	
4	〃		2.40	1.45	0.25	1.16		21	〃 97G		3.40	2.50	0.30	6.39	珪質頁岩
5	〃		3.50	1.20	0.25	1.78		22	〃		2.40	1.70	0.35	2.11	
6	4住S－1		(3.90)	2.05	0.35	(3.56)	泥質ホルン化	23	20住		3.15	1.5	0.25	1.19	
7	〃		3.05	1.90	0.65	3.63		24	〃		2.60	1.25	0.30	1.18	
8	〃 S－3		3.20	1.70	0.40	(1.77)	シルト	25	〃		2.60	1.40	0.20	0.83	
9	〃 S－5		1.80	2.05	0.20	1.16	チャート	26	2住 97G		2.90	1.70	0.20	2.13	
10	〃		1.85	1.55	0.35	0.98		27	23住 pit3		(3.55)	3.40	0.60	(9.86)	
11	5住		3.60	2.35	0.30	4.73		28	71		2.85	2.10	0.20	1.99	泥質ホルン化
12	〃		2.75	1.65	0.25	1.64	凝灰岩	29	74G		2.40	0.90	0.35	0.83	
13	〃		3.85	1.75	0.35	4.45		30	75G		(2.50)	1.20	0.45	(1.17)	
14	9住		2.00	1.50	0.40	1.20		31	76G		2.40	1.50	0.30	1.60	
15	〃		2.95	1.20	0.50	2.11		32	77G		2.50	2.50	0.30	3.46	チャート
16	〃		3.05	2.30	0.20	4.04		33	〃		3.00	1.80	0.30	2.19	
17	〃		(1.35)	0.80	0.20	(0.17)		34	〃G		(2.30)	1.90	0.50	(1.94)	

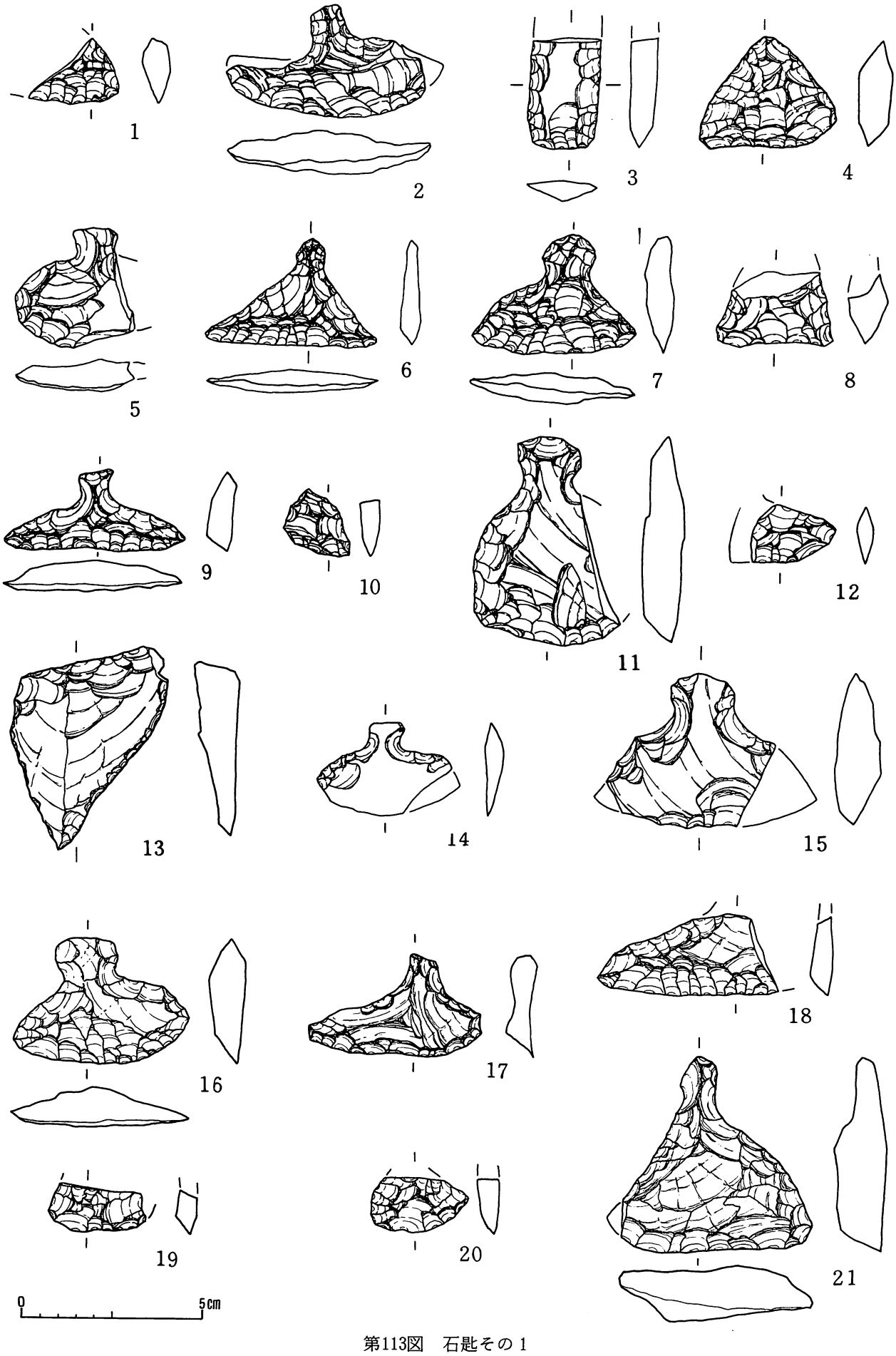

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
0
5cm
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51

第111図　石錐その１

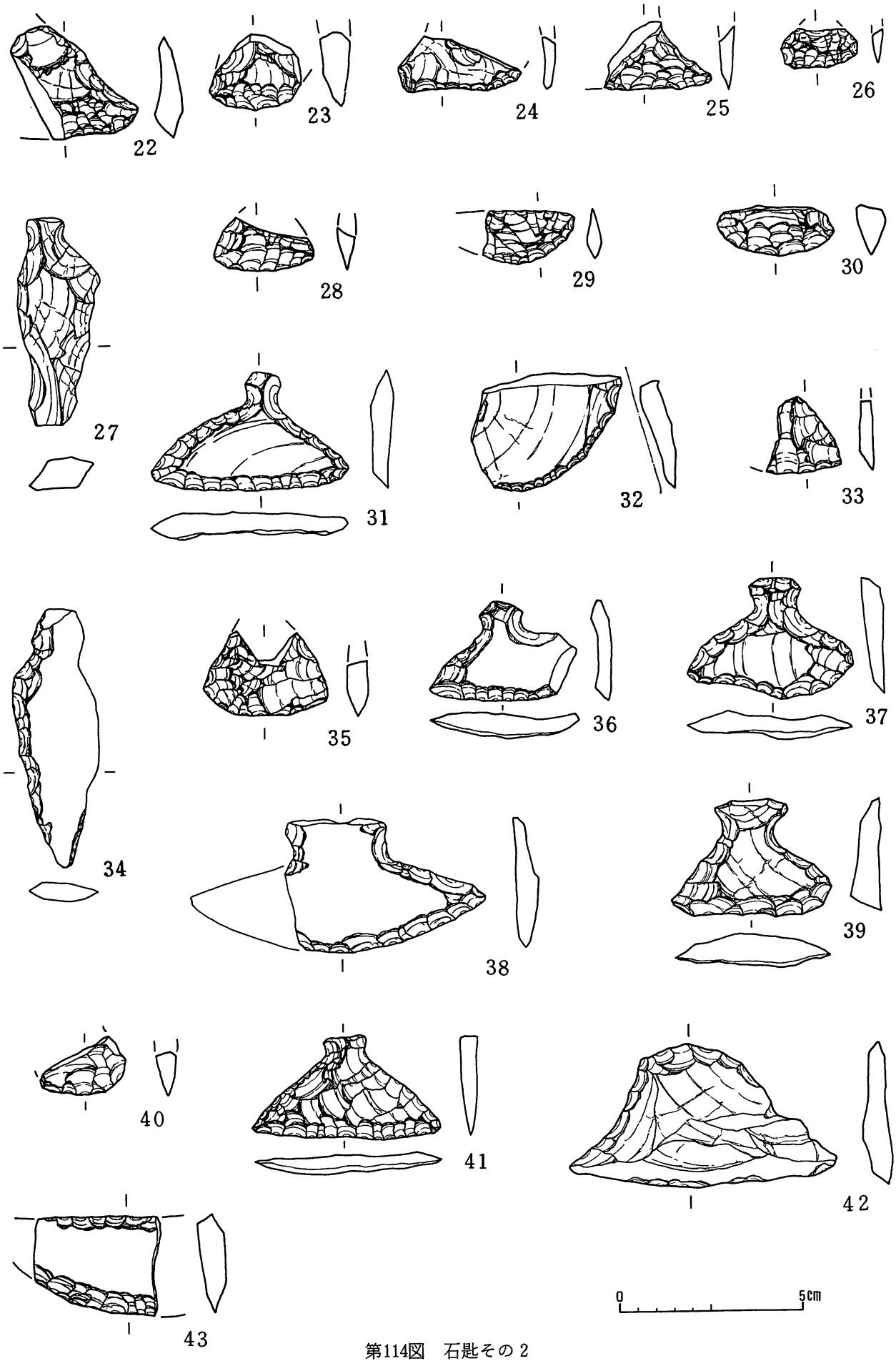


第112図　石錐その2

番号	出土位置	形態	長さ	巾	厚さ	重量	石材・他	番号	出土位置	形態	長さ	巾	厚さ	重量	石材・他
35	77G		2.50	1.40	0.45	1.78	チャート	55	97G		(1.50)	1.20	0.2	0)	
36	〃		2.65	1.30	0.40	1.76		56	〃		2.10	1.70	0.35	1.23	
37	72		2.65	1.35	0.35	2.28		57	〃G		2.45	1.35	0.25	0.64	
38	86G		2.25	1.75	0.20	1.22	細粒安山	58	〃G		2.45	1.35	0.25	0.64	
39	〃		3.65	1.20	0.30	1.98		58	100G		3.65	1.55	0.30	4.09	
40	87G		2.85	1.10	0.45	1.97		59	〃		(1.90)	2.20	0.45	(1.65)	
41	〃		2.50	1.30	0.20	1.33		60	101G		2.65	1.10	0.20	1.18	
42	88G		2.20	1.40	0.40	(1.09)		61	103G S-3		4.90	2.95	0.30	4.83	シルト
43	〃		3.30	1.20	0.25	1.18		62	〃		2.30	1.30	0.30	1.52	
44	〃		(3.10)	2.05	0.50	(5.13)		63	106G		2.30	1.80	0.30	4.25	泥質ホルン
45	89G		(2.10)	2.45	0.75	(2.71)		64	109G		(2.75)	2.75	0.55	(6.39)	チャート
46	90G		2.10	1.25	0.35	0.82		65	117G		2.70	2.30	0.30	(3.90)	チャート
47	92G		(1.80)	1.85	0.30	(1.66)		66	129G		1.90	1.10	0.35	0.47	
48	〃		(2.55)	1.40	0.35	(1.91)		67	表採		5.30	1.80	0.35	5.55	チャート
49	93G		2.05	1.25	0.20	1.44		68	〃		2.30	1.70	0.0	1.91	
50	94G		(2.20)	1.90	0.35	(2.12)		69	〃		2.10	1.70	0.30	2.51	
51	〃		2.15	1.25	0.35	1.34		70	9住		2.20	1.65	0.45	2.11	
52	95G		4.00	1.30		2.17		71	表採		4.0	2.90	0.25	7.04	シルト
53	95G		2.60	0.90	0.30	1.14		72	78G		4.35	(2.0)	0.35	(6.44)	シルト
54	97G		(2.00)	2.10	0.30	(1.16)		73	114G		1.80	2.00	0.35	2.07	



第113図　石匙その１



第114図　石匙その２

g　石匙（第113・114図）

石匙は41点を報告する。これも小破片については加工痕ある剝片に含んでしまったものがあると思われ、また、定型化された石匙以外のものも含んでいることから、厳密な数字とは言えない。

石匙には縦型と横型の２種類が存在するが、明確に縦型と言えるものは、27・34の２点だけである。殆どが横型と言えるが、４や42のようにつまみ部が存在せず、三角形の３辺ともに整形しているものも見受けられる。特異なものとしては３・29・43が挙げられる。いずれも細長い剝片を利用したもので、両側面や先端部に一連の加工が施されており、どの面も刃部として使用することができるものである。ナイフとしての使用が考えられるのであるが、定型化したものでない13や加工痕ある剝片とされるものも同様であろう。

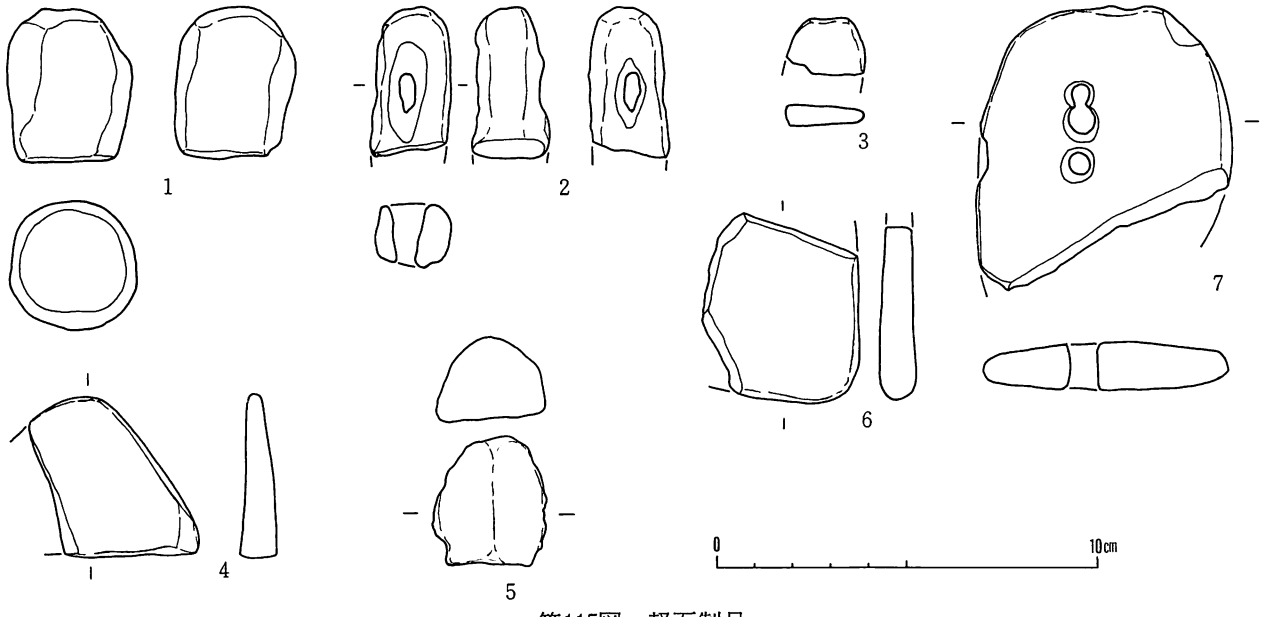
従来言われているように、中期の大型粗製石匙と違い、鋭い刃をもった小型のものに統一されており、石材も黒曜石他の硬質のものが選ばれている。

第７表　石匙一覧表

番号	出土位置	形態	長さ	巾	厚さ	重量	石材・他	番号	出土位置	形態	長さ	巾	厚さ	重量	石材・他
1	3住S－1	横	(1.80)	(2.50)	0.80	(2.35)		23	91G		(2.10)	(3.45)	0.80	(4.13)	
2	5住S－5	〃	3.10	(5.50)	1.20	(12.68)	チャート	24	〃	横	(1.50)	(2.55)	0.85	(2.19)	
3	6住	縦	(3.05)	(2.00)	0.60	(5.04)	細粒安山	25	92G	〃	(1.85)	(3.45)	0.35	(1.75)	
4	9住		3.10	3.75	0.95	10.12	〃	26	〃		(1.10)	(2.95)	0.45	(0.76)	
5	14住	横	3.25	(3.30)	0.90	(8.06)	チャート	27	96G	縦	5.70	2.30	0.90	11.7	泥岩
6	16住S－11	〃	2.95	4.70	0.65	4.82		28	95G	横	(1.0)	2.75	0.50	(1.57)	
7	20住S－7	〃	3.30	4.50	0.85	7.79		29	97G	〃	1.50	(2.55)	0.40	(2.51)	赤色頁岩
8	13土壙		(2.10)	3.20	1.10	(6.43)	チャート	30	〃	〃	1.40	3.20	0.80	(3.46)	
9	54G	横	2.20	5.00	0.85	6.61		31	100G S-1	〃	3.25	5.40	0.75	9.59	泥質ホルンフェルス
10	70G	〃	1.85	1.85	0.55	(1.96)	凝灰岩	32	102G		3.20	4.20	0.60	(11.16)	シルト
11	71G		5.70	(4.05)	1.15	(30.32)	シルト	33	104G		(2.10)	2.05	0.40	(1.63)	
12	72G	横	(1.60)	(2.30)	0.45	(1.62)		34	104	縦	7.05	2.30	0.50	9.42	泥質ホルン
13	〃G		5.55	4.35	1.25	19.05	チャート	35	〃 S-1	横	(2.30)	3.40	0.60	(4.61)	
14	〃G	横	2.55	(3.70)	0.50	(3.76)	〃	36	〃	〃	2.70	4.10	0.75	5.95	泥質(ホルン化)
15	75	〃	4.25	(4.90)	1.30	(22.80)	細粒安山	37	〃 S-3	〃	3.30	4.45	0.80	6.73	〃
16	78G	〃	3.45	4.85	1.10	14.16	チャート	38	105G	〃	3.65	(5.55)	0.65	(14.24)	泥岩(ホルン化)
17	84G	〃	2.80	4.80	0.80	8.85	泥質ホルン	39	〃		3.20	4.40	0.85	9.8	〃
18	85G	〃	(2.20)	(4.95)	0.60	(10.44)	細粒安山	40	106G		(1.60)	(2.35)	0.55	(1.66)	
19	〃G	〃	(1.40)	(2.70)	0.60	(2.03)		41	107G S-8	横	2.85	5.20	0.55	5.34	
20	87G	〃	(1.55)	(2.70)	0.60	(2.52)	チャート	42	108G		3.95	7.30	0.85	17.82	泥質(ホルン化)
21	89G	〃	5.40	5.60	1.50	34.42	細粒安山	43	112G	横	2.70	3.50	0.75	(9.86)	泥岩(ホルン化)
22	90	〃	(3.10)	(3.45)	0.80	(7.20)									

h　軽石（第115図）

軽石の出土量は多くはなく、７点を図示した。総て遺構から出土している。整形されており、円柱状のものと板状に薄く作られたものとがある。孔のあるものが２点で、その他には紐掛け用の溝などが整形された例もない。一般に浮子とされているが、孔のあるものはともかく、それ以外は積極的に浮子とする根拠もない。



第115図　軽石製品

第８表　軽石一覧表

番号	出土位置	形態	長さ	巾	厚さ	重量	番号	出土位置	形態	長さ	巾	厚さ	重量
1	4住Ｓ－12		4.00	3.20	3.35	7.27	5	28土Ｓ－５		3.35	2.85	2.10	4.79
2	5住Ｓ－12		(3.70)	2.95	1.50	2.37	6	9住Ｓ－43		(4.70)	(4.15)	0.95	4.54
3	9住		(1.45)	(2.05)	(0.55)	0.23	7	9住Ｓ－33		(6.50)	6.50	1.20	10.36
4	15住Ｓ－15		4.20	(3.60)	(0.90)	2.34							

i　その他の石器（第116図）

ここでは上記のいずれにも属さなかった石器を一括して報告する。１～４は磨石の一種である。小型の円礫、あるいは細長い河原石を用い、手に持って磨石として使用している。いずれも先端部を中心に磨り面が形成されている。５・６はたたき石である。これも細長い河原石を持ってたたいたもので、片面だけの使用である。「たたき」の面は表面が荒れている。７は特に使用の痕跡は見られないが、包含層中から出土したやはり細長い河原石である。８～16も使用の痕跡はみられないが、花鳥山遺跡周辺では得られない丸石で、意識して遺跡に持ってきたものであろう。

第９表　その他の石器一覧表

番号	出土位置	形態	長さ	巾	厚さ	重量	石材・他	番号	出土位置	形態	長さ	巾	厚さ	重量	石材・他
1	5住ｓ－９		(4.75)	(2.95)	2.35	(39.23)	細粒砂岩	9	包49		5.00	2.80	2.45	65.12	極粗粒砂岩
2	9住ｓ－16		(4.80)	2.90	2.55	(48.14)	粗粒砂岩	10	72G		(6.00)	3.95	2.00	(64.86)	安山岩
3	15住ｓ－６		(8.40)	3.75	2.70	(133.72)		11	73		(4.20)	(4.05)	1.80	(53.06)	中粒砂岩
4	16住ｓ－９		(5.50)	3.85	2.80	(98.63)	石英閃緑岩	12	74G		(7.95)	3.60	2.80	(113.92)	粗粒砂岩
5	22住ｓ－13		11.50	4.05	(2.60)	(184.72)	〃	13	78G		(3.40)	(3.65)	2.95	(46.09)	中粒砂岩
6	97G表採		9.25	3.70	3.20	162.94	安山岩	14	97G		(2.90)	(3.10)	(2.30)	(25.60)	細粒砂岩
7	包20		(8.0)	(2.35)	(1.25)	(54.78)	緑色片岩	15	90G		(2.70)	(2.80)	2.45	(24.98)	中粒砂岩
8	〃26		(2.85)	(5.15)	(2.80)	(49.80)	凝灰岩	16	126G		(4.90)	(3.50)	2.65	(64.86)	細粒砂岩

第116図　その他の石器

第10表　使用痕ある剥片数量表

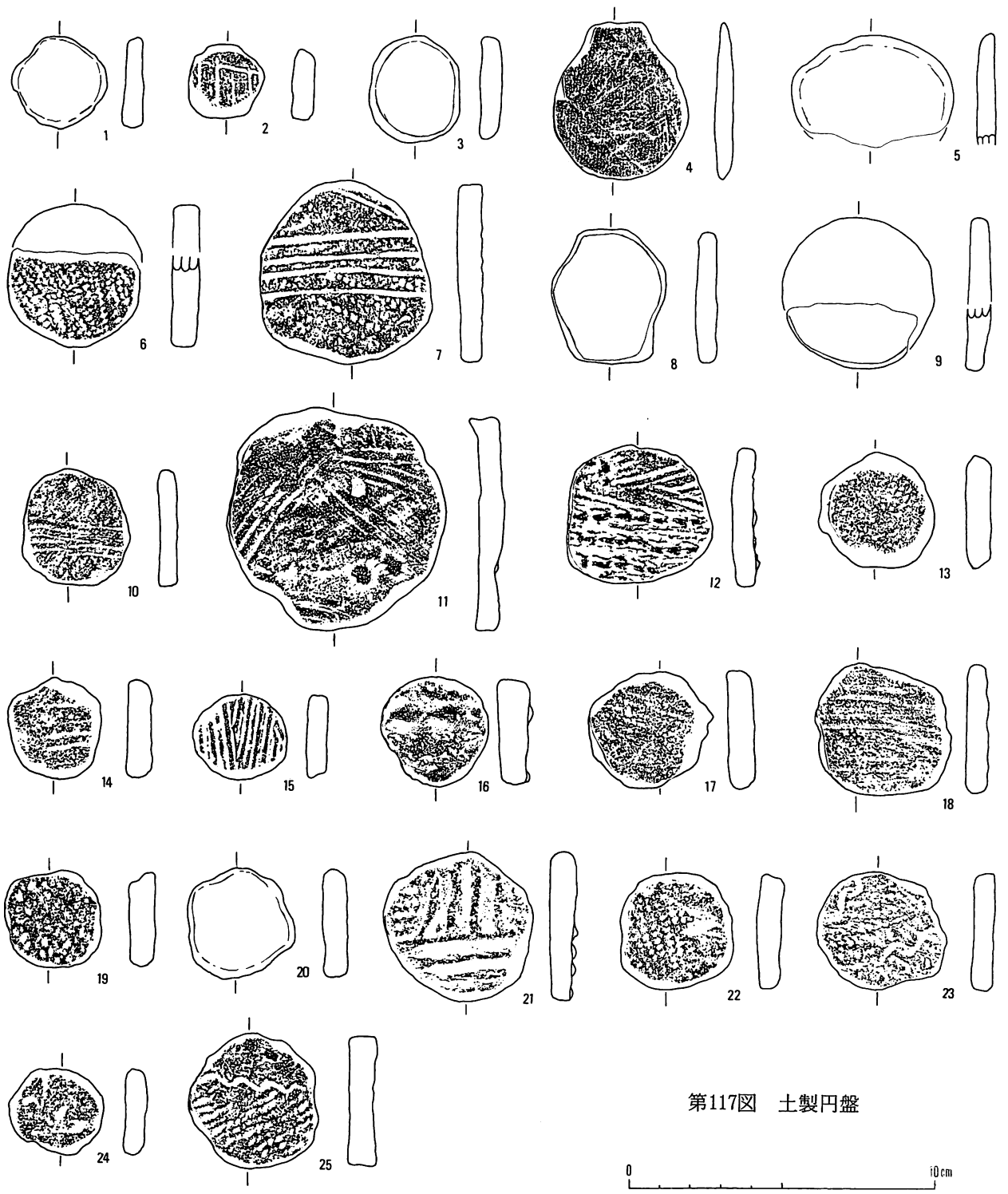
出土位置	コア	原石	ＵＦ	ＲＦ	ピエス	出土位置	コア	原石	ＵＦ	ＲＦ	ピエス
1住	4	7	12	9	4	87G	7	2	3	6	2
3住	4					88G	15	3	2	6	1
4住	6	3	3	3	4	89G	16	6	6	6	4
5住	6	1				90G	32	11	7	18	1
6住	6	2	1	3	1	91G	27	9	15	20	4
7住	2			1		92G	19	14	3	9	1
8住	5	4		2		93G	11	10	4	7	2
9住	14	14	5	10	2	94G	16	8	2	7	3
10住			1			95G	13	4	7	8	
13住	1	2	1		1	96G	22	6	3	5	1
14住	3			1		97G	14	5	4	12	3
15住	10	3	3	7		98G	5	1	2	2	
16住	1			1		99G					
17住	6	1	3	3	1	100G	3	1	1	3	1
20住	19	5	7	11	2	101G	1	2	2	2	1
21住	4	1		2	1	102G				2	
22住				1		103G	5	5			
						104G	7	4		3	
10土	2					105G	10	8	1	4	3
13土	1			1		106G	15	5	2	4	
17土	2			1		107G	5	2		4	
18土	1					108G		1		1	
19土		1				109G	2				
23土	1			1		110G	1		1		
32土	1			1		111G	5	2		1	
						112G	5			1	2
69G	1	1		1		113G	4	1			
70G	6		1	4		114G					
71G	8	2	1	5		115G	2	3	1		
72G	2	2	2			116G	1	1	3	1	1
73G	13	6	2	4	1	117G	4				
74G	5	3	3	2	1	118G					
75G	5	2	1	2		119G					
76G	4	1		6	1	120G					
77G	10	3	2	4	2	121G					
78G	9	5	2	4		122G	3	1		1	
79G	3		2	2		123G					
80G	1	3	2	1	2	124G					
81G						125G					
82G			1			126G					
83G						127G					
84G	7		1		1	128G					
85G	12	5	5	3		129G			1	1	
86G	13	2	4	6	3						

6　特殊遺物

特殊遺物には土製品と石製品さらには貝製品があるが、出土量が少なかったという点から、土製品ではないが、ここに関西・東海系の土器破片を含めておく。以下に製品ごとに記すことにする。

a　土製円盤（第117図）

土製円盤は25点の出土である。このうち、住居址または土壙から出土したものは４点だけで、他は遺構には伴わない。総て土器片を再利用したもので、最初から土製円盤として製作されたものはない。口縁部もしくは胴部の反りの少ない部分を選んで、周辺を磨って土製円盤としたものである。３・４などは比較的丁寧に整形されて



第117図　土製円盤

第11表　土製円盤一覧表

番号	出土位置	長さ	厚さ	重量	番号	出土位置	長さ	厚さ	重量	番号	出土位置	長さ	厚さ	重量
1	4住	2.85	0.70	8.01	10	78G	3.75	0.55	11.87	19	97G	3.05	0.80	10.95
2	9住	2.30	0.75	5.40	11	84G	6.95	0.80	54.30	20	100G	3.55	0.80	13.45
3	20住	3.30	0.70	9.60	12	86G	4.50	0.70	24.54	21	105G	4.85	0.90	24.71
4	28土	5.10	0.60	10.94	13	90G	3.65	0.80	13.28	22	111G	3.70	0.80	15.75
5	包76	(3.30)	0.60	(13.14)	14	90G	3.20	0.85	10.36	3	116G	3.80	0.70	19.88
6	71G	(4.60)	0.90	(18.70)	15	93G	2.70	0.65	8.70	24	124G	2.85	0.70	8.91
7	71G	5.75	0.85	37.07	16	94G	3.40	1.10	15.0	25	試掘	4.25	0.90	23.73
8	74G	4.20	0.70	14.89	17	94G	3.90	0.90	14.18					
9	76G	(4.95)	(0.80)	8.28	18	95G	4.15	0.60	20.69					

ているが、きれいな円形を呈するものは少ない。厚さは1㎝以下のものばかりで、1㎝を超えるものは1点だけである。径は2.30〜6.95㎝を計り、3㎝台、4㎝台のもので殆どを占める。重量は5.40〜54.30ｇと幅広くなっているが、分布の中心は5〜15ｇにある。長さ・重さとも最大である11は磨り面が綺麗でないこともあり、さらにこれを磨り挙げて3ないし4㎝大の土製円盤を作ろうとしたものであるかもしれない。

b　人形状土製品（第118図）

この資料は、出土段階では土偶あるいは土器片錘と思われた。しかし、水洗後これが土器片を再利用して作られたものであることがはっきりしたため、少なくとも土偶の範疇には入らないことが明らかとなった。また、抉りが非常に深いため、土器片錘としての使用は考えられない。

破片を含めて15点が確認されている。この資料の最も典型的なものとして、7を挙げることができよう。抉りの位置は真ん中よりやや上にあり、抉りが深いため、再下部の幅（2.5㎝）に比べ、その部分（0.9㎝）は極端に狭いものとなっている。ここでは仮に抉りより上を頭部、下を体部と呼ぶことにするが、頭部の幅も体部下端よりも狭く仕上げており、抉りまでの側面も頭部・体部ともに抉りに向けて傾斜を持たせている。2・12なども丁寧な仕上げであるが、抉りがほぼ中央に入っており、15のように明確に頭部・体部を分けることができない。住居址から3点が出土しているが土壙からは出土していない。他は遺構に伴わないものである。

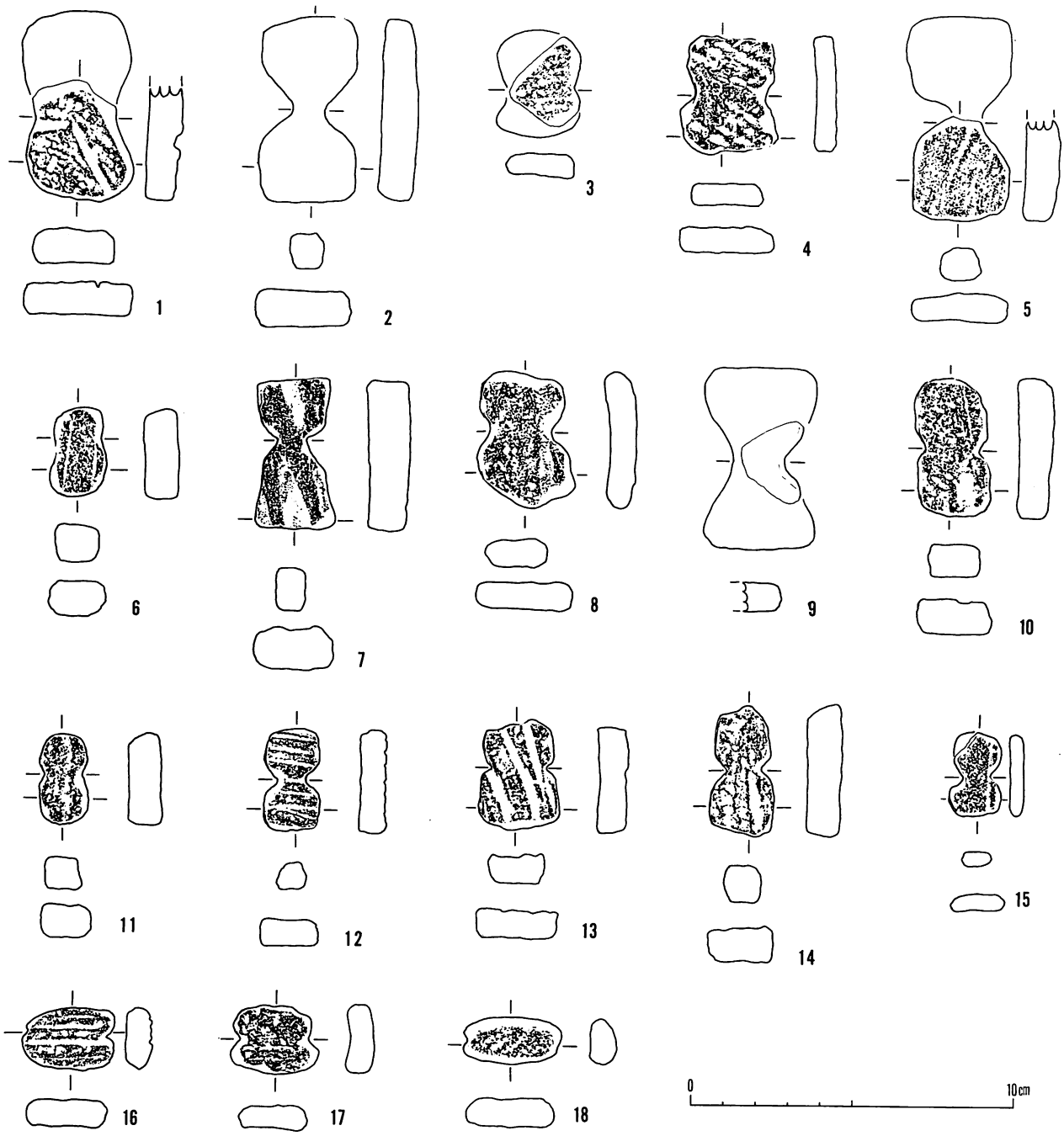
このような資料は類例が殆どなく、用途も不明である。管見では東京都三鷹市原遺跡から本資料に類似した土製品が3点出土している。また、長野県原村阿久遺跡にも類品が存在するようである。

c　土器片錘（第118図）

土器片錘は少なく3点を報告するが、このほかにさらに小型のものが1点出土しており、合計4点である。いずれも破片を磨って、長楕円形に整形した後、長軸の両端に抉りをいれて土器片錘としたものである。16は6号住居址からの出土で5.95ｇを計る。17は95グリッドで5.25ｇ、18は表採で3.81ｇを計る。

第12表　人形状土製品・土器片錘一覧表

番号	出土位置	長さ	巾	厚さ	重量	番号	出土位置	長さ	巾	厚さ	重量	番号	出土位置	長さ	巾	厚さ	重量
1	4住	(5.80)	2.55 3.40	1.00	(15.21)	7	79G	4.60	0.90 2.50	1.30	18.49	13	92	3.25	1.80 2.50	0.90	9.75
2	15住	5.70	1.05 2.95	1.15	23.81	8	85G	4.20	1.95 3.05	0.90	12.26	14	106G	4.05	1.15 2.00	1.10	11.21
3	20住	(3.30)	(2.1)	0.70	(4.25)	9	88G	(5.60)	(1.60)		(3.62)	15	表採	2.50	0.90 1.65	0.50	(1.97)
4	70G	3.65	2.20 2.90	0.80	11.36	10	90G	4.30	1.60 2.30	1.10	13.22	16	6住	1.90	1.50	0.80	5.95
5	70G	(6.30)	1.25 2.95	0.90	(10.54)	11	92G	2.85	1.10 1.60	1.00	5.77	17	95	2.10	2.10	0.75	5.25
6	77G	2.75	1.35 1.80	1.10	5.98	12	90	3.20	0.90 1.75	0.85	6.55	18	表採	1.40	2.75	0.85	3.81



第118図　人形状土製品・土器片錘

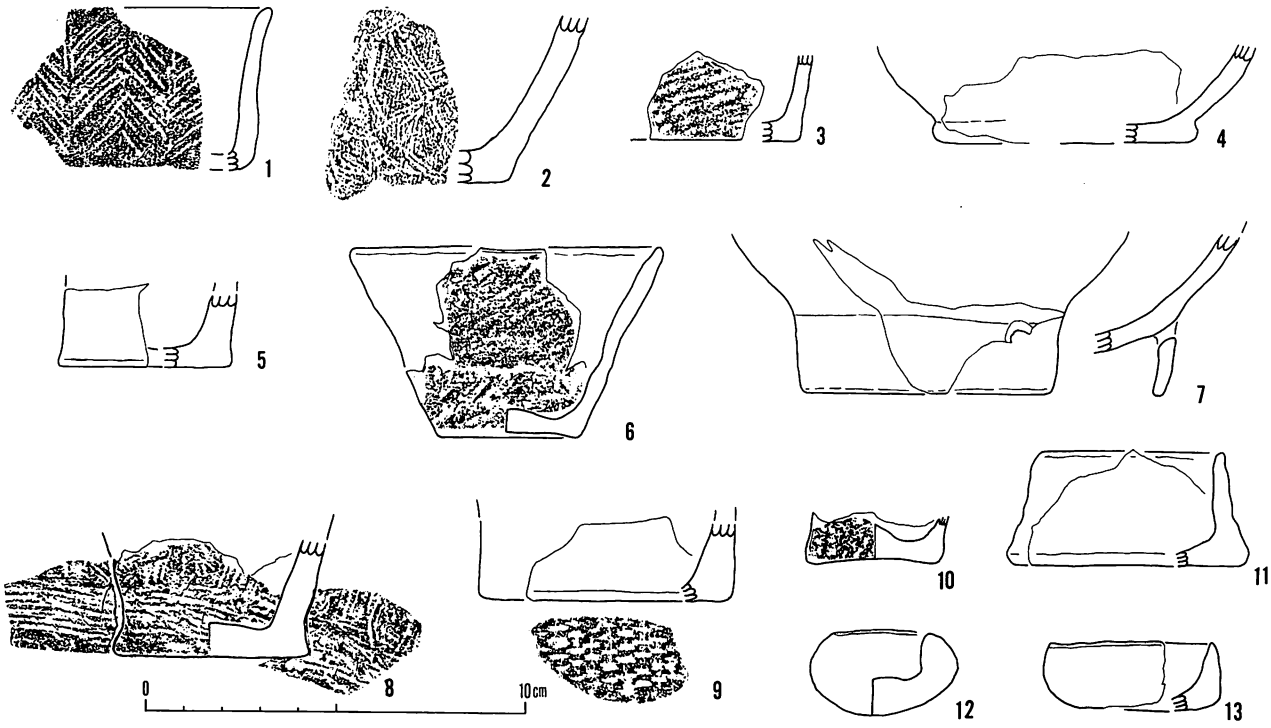
d　ミニチュア土器（第119図）

ミニチュア土器は13点の出土である。深鉢・鉢・台付きなどがあり、施文した丁寧なものもある。9の底部には網代圧痕が見られる。2本越え・1本潜り・1本送りである。今回の調査では非常に数多くの土器底部が出土しているが、この資料以外には網代圧痕もカゴ底圧痕も全く確認されていない。国学院大学収蔵資料中には1点だけカゴ底圧痕を有する底部が確認されているが、今回の調査では出土しなかった。

各資料について出土位置のみ記しておく。1：5号住居址、2：7号住居址、3：9号住居址、4：14号住居址、5：73G、6：85G、7：86G、8：94G、9：94G、10：95G、11：96G、12：103G、13：表採。

e　関西・東海系土器（第120図）

今回の調査では、前期に位置づけられる関西・東海系土器や関東系土器が出土している。いずれも小破片であ



第119図　ミニチュア土器

り、4号住居址出土の完形に復元されたものを含めて第120図にその一部を呈示する。

1は極めて薄い作りで、口縁および口唇部に貝殻による刺突がみられる。貝殻刺突は縦位に数段施文され、一つ一つの施文単位がはっきりしている。内面には何の施文も見られない。鳥浜貝塚の資料ではこれに極めて類似する刺突をもち、内面に条痕の見られるものを羽島下層式とし、搬入品の可能性のあるものも含まれることを示している。また、愛知県清水ノ上貝塚では清水ノ上Ⅱ式とされる土器群中に貝殻刺突を横位に連続的に施文するものが存在し、施文方向こそ違うものの、本資料に類似するものである。いずれにせよ、本資料は前期前半に位置付けられるもので、羽島下層式もしくは清水ノ上Ⅱ式に比定されよう。

2～6は爪形状の刺突が施文される一群である。2は口縁内面に刻みがある。また6は爪形状の刺突を横位に巡らしている。これらは清水ノ上Ⅱ式に比定される。

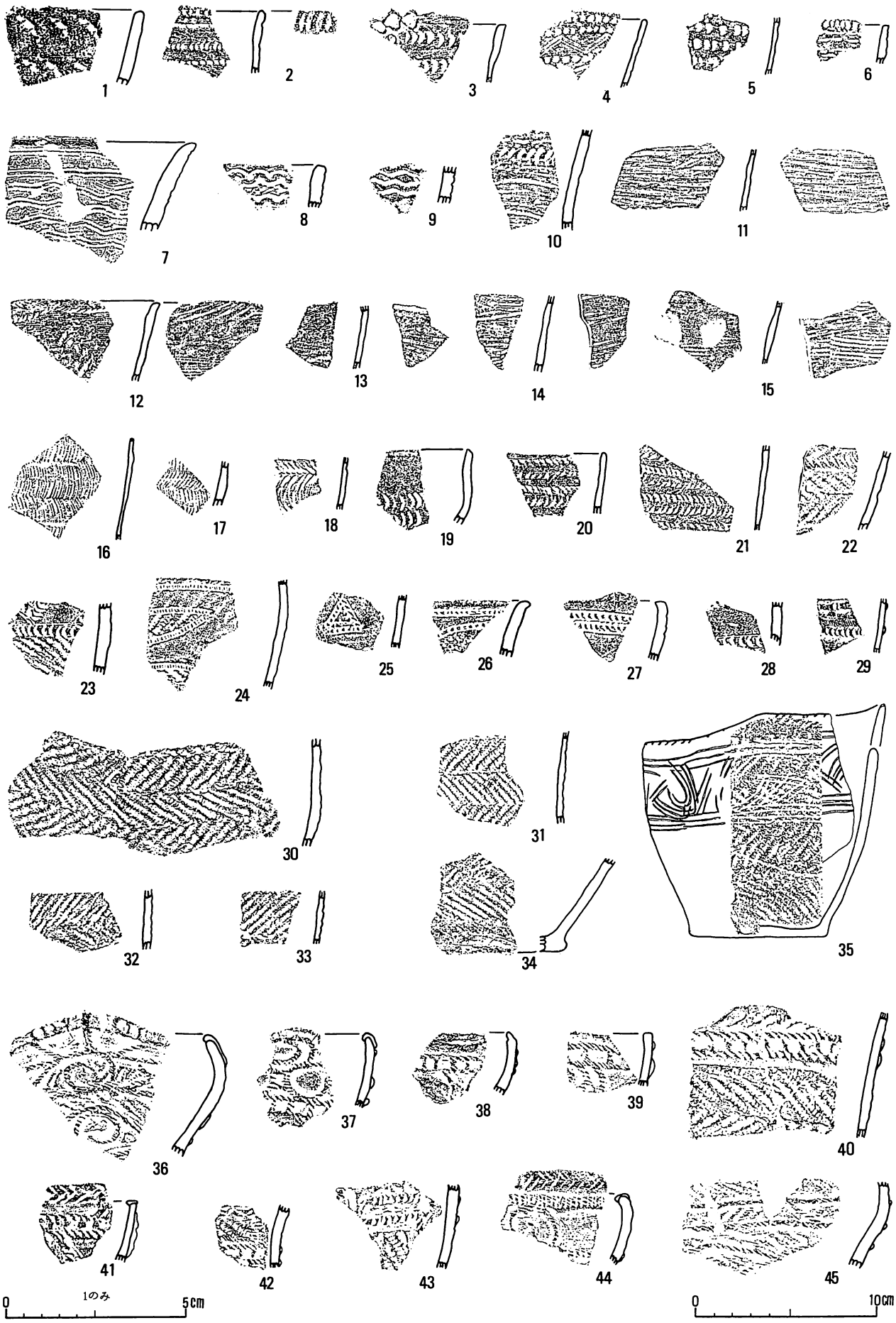
7～9は竹管状工具による波状文あるいはコンパス文の施されるもので、はっきりしたコンパス文の見られる8は繊維を含んでいる。黒浜式に比定されよう。

10～15は内外面とも条痕文の施されるものである。10は条痕を地文として、厚さのある竹管条工具による爪形文が施されている。12にも口縁部下に小さな爪形文が施文される。また、本資料の内面の条痕は口縁部のみ斜め方向に間隔をあけて施し、胴部内面は横方向に間隔を詰めて施文している。これらは薄手であり、内外面の条痕と爪形文から北白川下層Ⅰ式に比定されよう。

16～22は爪形文の施されるものである。これらの爪形文には爪形の両側に側線がないことで一括されるが、爪形文の状況により二分される。16～18は大型の爪形文が連続して施文されるもので、施文自体も浅いものである。19～20は前者に比べ、爪形文に間隔がみられ、深く施文されている。22は胴部破片であるが、羽状縄文との併用である。おそらく他の破片も羽状縄文との併用と思われ、この一群は北白川下層Ⅱａ式に比定される。

23～29はやはり爪形文の施される一群で、爪形に側線の伴うものである。胴部破片では縄文の見られるものがあるが、これも羽状縄文かもしれない。口縁部だけのものは胴部以下は無文の可能性がある。一部に赤彩されたものも含む。清水ノ上貝塚で第2群3類B種と分類されたものに相当し、北白川下層式土器中ではⅡｂ式に類似するが、厚手のものも多く、関東～中部にかけて該期に広く分布する土器としておきたい。

30～35は羽状縄文の施されるものである。復元された35は、4号住居址からの出土であるが、40m以上離れて



第120図　関西・東海系土器

出土した34（95グリッド出土）と胎土・施文・底径など全く同じで、おそらく同一個体と思われる。これらの一群はいずれも薄手で、北白川下層Ⅱ式の範疇に入るものであろう。

36〜45は凸帯文を持つ一群である。本遺跡で出土したものはいずれも地文が羽状縄文で、凸帯文上はヘラ状工具による刻みが付けられている。やや厚手のものも含まれるが、この一群は北白川下層Ⅱｃ式に比定されよう。この一群は比較的多く見られるようである。

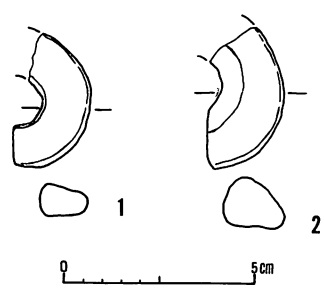
以上のように、前期段階では関西・東海系の土器群が当地方に入り込んでおり、「交流」が活発に行われていたことが窺われる。とくに北白川下層Ⅱｃ式土器は本遺跡に限らず、本県内でもしばしば破片で確認されており、諸磯ｂ式期には一段と活発化した交流があったと思われるのである。

第13表　関西・東海系土器出土位置表

番号	出土位置	番号	出土位置	番号	出土位置	番号	出土位置	番号	出土位置	番号	出土位置	番号	出土位置
1	8住	8	93G	15	9住	22	107	29	77G	36	4住	43	73G
2	93G	9	表採	16	18土	23	88G	30	105G	37	92G	44	92G
3	94G	10	4住	17	103	24	96G	31	71G	38	14住	45	4住
4	6住	11	90G	18	表採	25	93G	32	76G	39	92G		
5	105G	12	4住	19	23土	26	97G	33	77G	40	75•76G		
6	表採	13	104G	20	8住	27	〃	34	95G	41	75G		
7	9住	14	9住	21	84G	28	4住	35		42	94G		

f　土製玦状耳飾り（第121図）

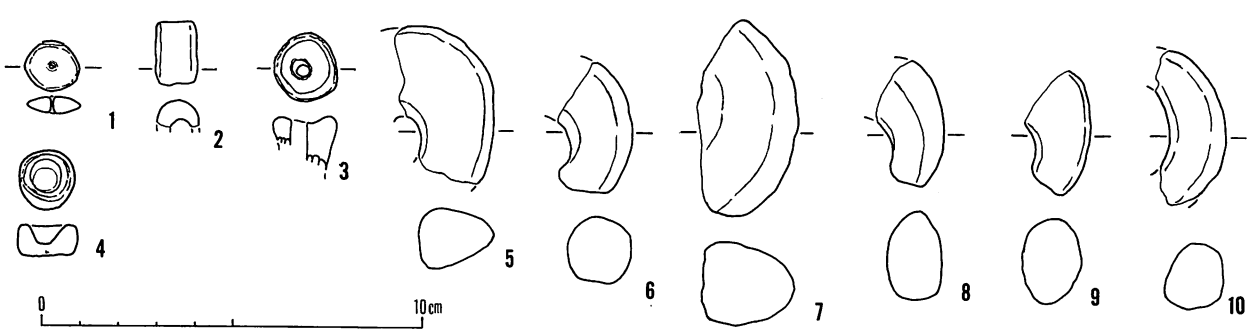
土製玦状耳飾りは、確実なものは2点である。共に丁寧な作りで、1は径4㎝、2は径4.5㎝を計る。両者とも赤色顔料が塗布されているが、とくに2は良好な残りである。断面形は全く違い、1は四角形、2は三角形状を呈する。なお、1は4号住居址、2は90グリッドからの出土である。



第121図　玦状耳飾り

g　その他の土製品（第122図）

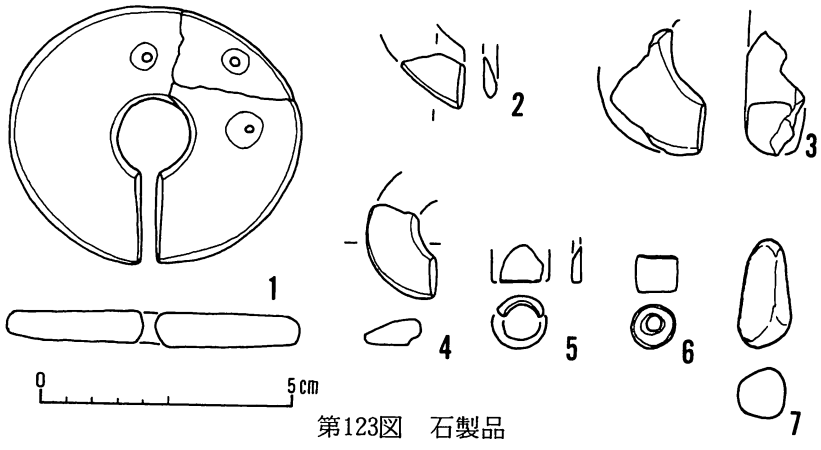
第122図1はボタン状を呈する土製品で、最初から製品として作られたものである。中央に貫通孔を有し、レンズ状の断面を呈する。25号土壙からの出土である。2は土製の玉である。顔料は残存していない。95グリッドからの出土である。3・4はボタン状の形態であるが用途不明である。3は破片で、20号住居址内、4は22号土壙から出土している。5〜10は土製品の破片と思われるが、いずれもグリッドからの出土である。このうち、6と8は図の下端が切れ目となっており、全体を推定した場合玦状耳飾り状となる。非常に幅の厚いもので、玦状耳飾りをイメージしにくいものである。



第122図　その他の土製品

h　石製玦状耳飾り（第123図）

石製玦状耳飾りは4点出土している。総て滑石製で、完形品は1点だけである。1は1号住居址からの出土である。やや楕円形であるが、最大径は5.8㎝を計る。使用段階から3つに割れており、3個の補修孔が存在する。この補修孔や割れ口には赤色顔料が残っており、使用段階では赤彩されていたと思われる。2は9号住居址、3は17号住居址、4は71グリッドからの出土であるが、いずれにも顔料は残っていない。



第123図　石製品

i　石製玉類（第123図）

小玉が2点出土している。いずれも滑石製である。5は4号住居址、6は9号住居址出土である。7はチャートであるが、意識的に磨いて玉としたものではない。加工の痕跡は全く見られないが、赤色で美しい光沢があり、9号住居址から出土している。

j　ボタン状貝製品（図版26－右下）

包含層中からの出土である。径2.2㎝を計り、中央部に5㎜程の孔があけられている。2つに割れているが、その割れ口は光沢があり、明らかに貝を整形したものである。淡水産か鹹水産かは不明であるが、光沢はアワビのそれに類似する。

7　グリッド出土土器

前述してきたいずれの遺構にも属さない土器も多く見られる。この中で復元可能なものを一括して第124・125図に示す。諸磯a～c式土器があるが、やはり量的には諸磯c式土器が多い。1～3は諸磯a式に、4は同a～b式に、5は結節縄文をもつもので諸磯a式あるいはそれ以前に比定されよう。6・7は諸磯b式に、8～21が諸磯c式である。

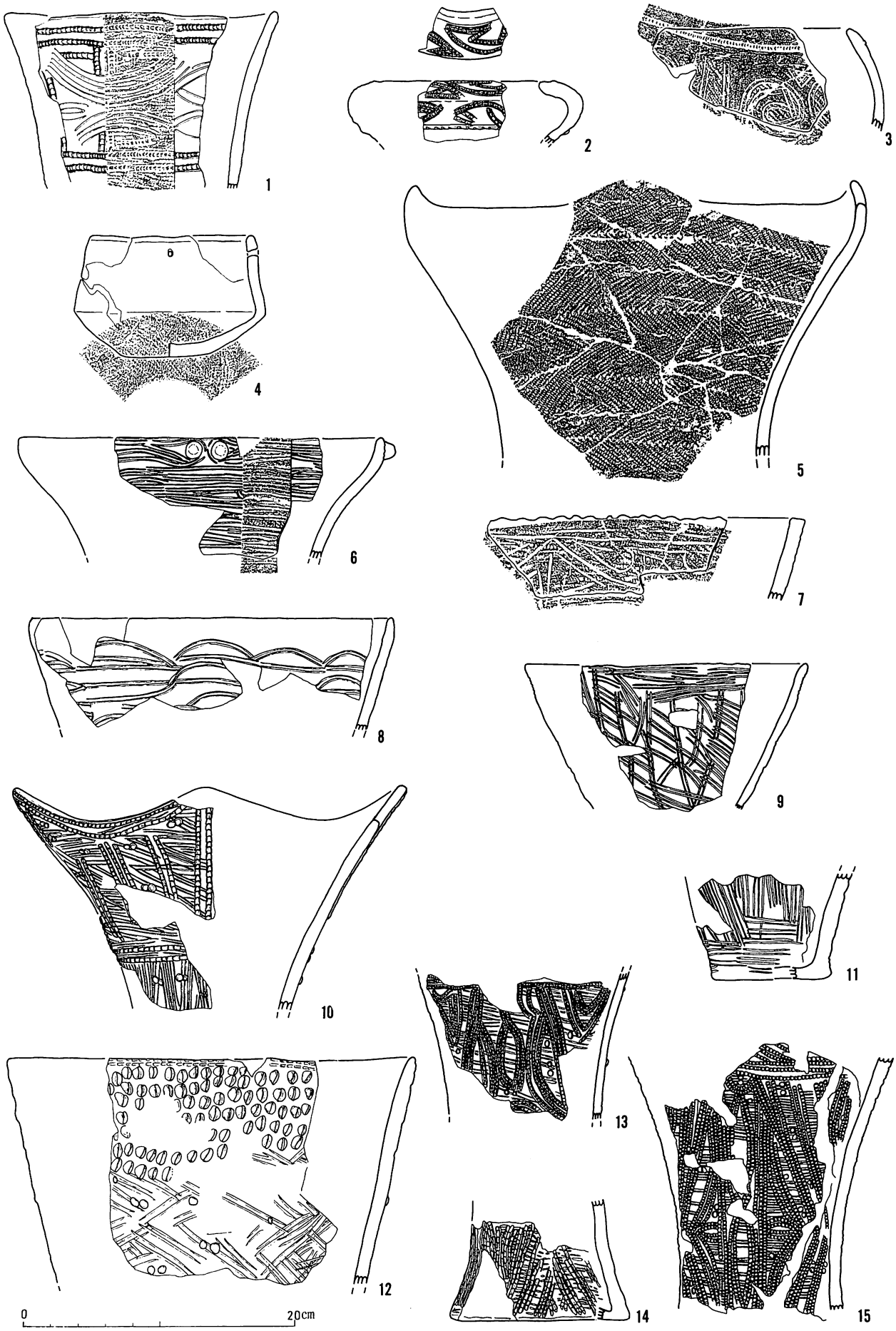
諸磯a式では連続爪形文を弧状に配するものが主で、3には区画内にも縄文が見られる。4の類例では千葉県飯山満東遺跡のピット中より出土したものがあるが、時期は明らかにされていない。ただ、他の例から見れば、諸磯a～b式期に位置付けるのが妥当であろう。5の結節縄文は前期前半にも見られるものであるが、胎土・整形などは本遺跡の他の資料と変わるものでなく、おそらく諸磯a式期に位置付けられるものであろう。

諸磯b式土器は遺構から出土したものと大差はない。ただし、7の沈線は一部が弧状となっており、諸磯b式でも古い部分であるかもしれない。

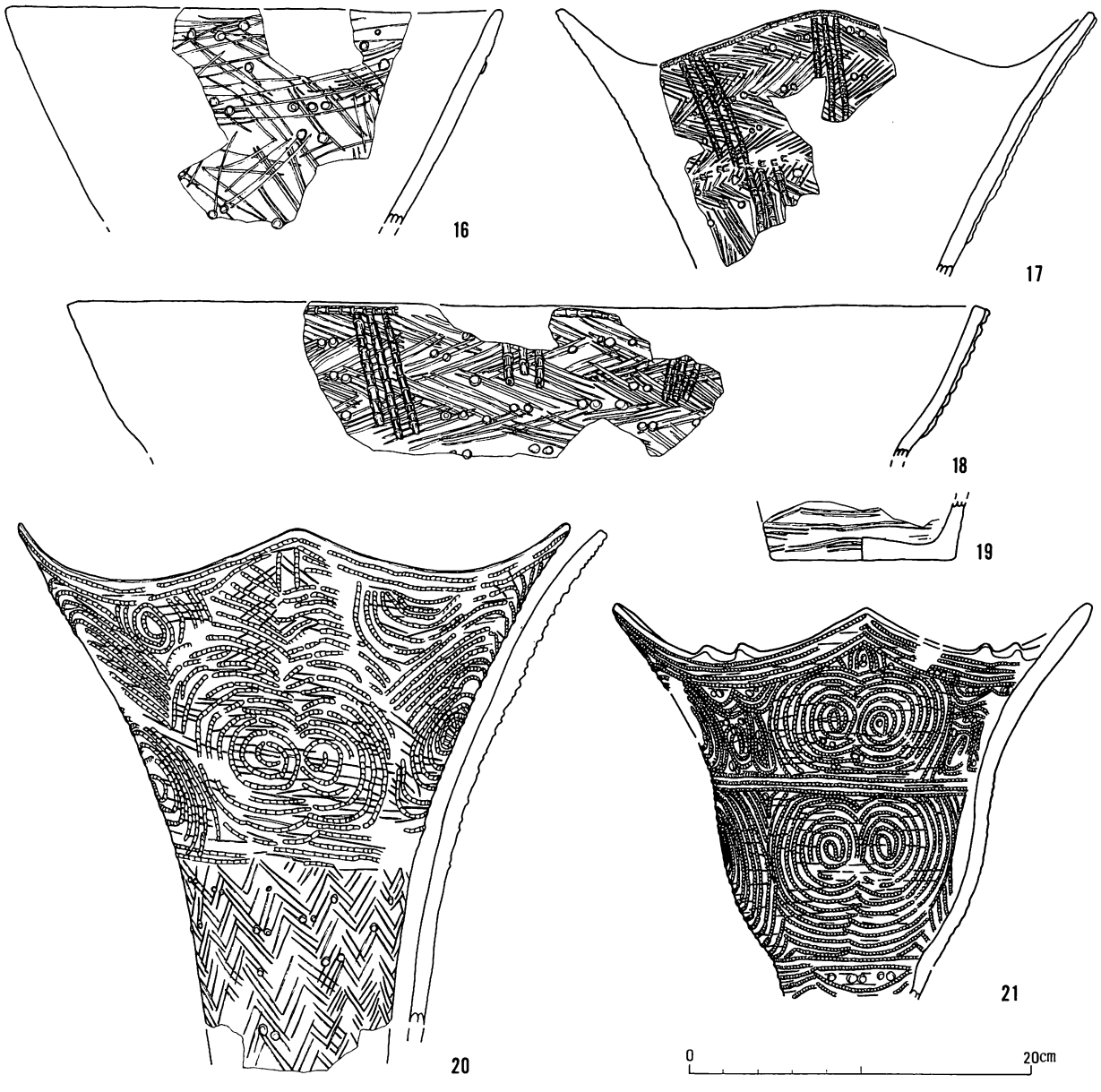
諸磯c式では、12が包含層出土資料と極めて類似するものである。また、遺構ではそれほど多くなかった結節状浮線文を主文様とするタイプが存在する。13～15・20・21などがこれに当たるが、とくに21は口縁部と胴部の2段に分けて渦巻き状の結節状浮線文を器面全面に施したものである。

8　土器内面のオコゲ

今回の調査では、数点の土器内面にオコゲが付着している。これらは図示できないため写真図版に示す。図版



第124図　グリッド出土土器その１



第125図　グリッド出土土器その２

29－１は20号住居址から出土しており、竹管による沈線だけが施文された諸磯ｃ式土器内面のオコゲである。中央部に同心円状を呈するオコゲが見られ、その径は最大で1.5㎝を計る。球根類の横断面であろう。その横にはやはり同心円状で長楕円形の断面が見られるが、これは球根類のナナメ断面と思われる。オコゲ自体の厚さは２～３㎜である。　－２は１と同様のオコゲである。１に比べ残りは良くないが、１と同じ同心円状を呈し、球根類であることは疑いない。この土器は施文や胎土も１に非常に類似し、オコゲの付いた部位の径も同じである。95グリッドからの出土であるが、このグリッドの下部に20号住居址が確認されていることから同一個体の可能性が強い。　－３も球根類のオコゲである。包含層84として取り挙げたもので、グリッドでは89グリッドに相当する。出土位置や施文から１・２とは全く別の土器である。外面にはやはり竹管による沈線が見られるだけであり、諸磯ｂ式もしくはｃ式土器であろう。これも同心円状の部分と球根類の中心部の縦断面が確認できる。この部分の縦長は９㎜である。　－４は104グリッドから出土したもので、土器は諸磯ｂ式もしくはｃ式と思われる。上記３点のオコゲと違い球根類ではない。オコゲの表面には光沢があり、タール状になっている。　－５は23号土壙から出土している。土器は諸磯ｂ式である。やはり光沢のあるオコゲで粒は確認できない。　－６は89グリッドから出土しており、諸磯ｃ式の結節状浮線文を主体とするタイプである。このオコゲは光沢もなく、粒も全く確認できない。

オコゲの中でも注目されるのは1～3に示した球根類のオコゲであろう。これまで報告されたオコゲで球根類とされたものは、－7に示した福井県鳥浜貝塚の前期の土器内面のものが知られている。鳥浜貝塚の資料はユリ科植物の球根類ではないか、とされているが詳細は不明である。本遺跡では球根そのものも30点以上出土している（第Ⅲ章第2節参照）が、球根類の種の特定は非常に困難ということで資料呈示に留めざるを得なかった。平塚市上ノ入遺跡では出土した球根類を現生球根との比較からキツネノカミソリに類似するものとしている。これに比べ、本遺跡の球根類はやや小型と思われる。このほかに球根類としては、－8に示したパン状炭化物として有名な、岐阜県蜂一合遺跡がある。また、オコゲとしては長野県判ノ木山西遺跡7号住居址出土土器内面や本報告書第Ⅱ章で述べる水呑場北遺跡3号土壙出土土器内面（詳細は第Ⅲ章第3節参照）のものが明らかに球根類である。

9　自然遺物

今回の調査では、炭化物や骨片などの自然遺物が細片となって出土している。詳細は第Ⅲ章に委ねるが、ここで概略を記しておく。

大型の炭化物や骨片は、出土時点で確認されたものについてはポイントを取り上げている。住居址では特に覆土に炭化物を多く含んだ層が確認された部分については、遺物を残すための土柱をサンプル用として利用することとした。これは特に炭化物層が厚く確認された9号住居址で行ったものであるが、この土柱を床面から5㎝単位で切り取ってサンプルとし、整理段階で水洗したものである。従って、第Ⅲ章の考察では9号住居址の資料が最も多く用いられている。これ以外では土壙の覆土で、やはり炭化物を多く含んだ部分を水洗の対象とした。包含層では、骨片や大型の炭化物で調査中に確認出来たもののみを取り上げている。

この結果、エゴマやアブラナ類を含む様々な微小種子、ドングリ・クルミといった堅果類、球根類などの植物やイノシシ・シカといった大型動物、さらにはコイ科の骨の一部なども確認されることとなり、特に食生活にかかわる部分で得られた成果は大きい。

第Ⅱ章　水呑場北遺跡の調査

第１節　調査状況

１　調査に至る経過

昭和63年７月９日	文化庁に発掘通知を提出する。
昭和63年７月11日	農林水産省、県文化課、県埋蔵文化財センターとの間で、発掘調査の打ち合わせを行う。
昭和63年７月18日	発掘調査を開始する。
昭和63年９月５日	発掘調査を終了する。

２　調査組織

調査主体	山梨県教育委員会
調査機関	山梨県埋蔵文化財センター
調査担当者	長沢宏昌（県文化財主事）
作業員	石川幸、岩崎登加、岡田清美、長田豊子、窪田妙子、小林よ志子、丹沢町子、土橋美和、内藤真一、矢崎文枝、若林初美、
整理担当者	長沢宏昌（県文化財主事） 高野玄明（臨時職員）
整理作業員	雨宮穂波、石川操、石田文次郎、遠藤映子、柏木まつ江、弦間千鶴、後藤良美、佐野靖子、内藤真千子、松野和美、山路宏美、山本恵子
調査協力機関	三珠町教育委員会

第２節　遺跡概況

１　遺跡の位置と周辺の環境

本遺跡は、山梨県西八代郡三珠町大塚字水呑場2628－１他、標高約370ｍに所在する。

三珠町は、甲府盆地南部に位置し、御坂山地中部より西に流れる芦川の下流流域と、甲府盆地南東部に位置する曽根丘陵西南端、芦川の扇状地上に発達した所とに大別される。

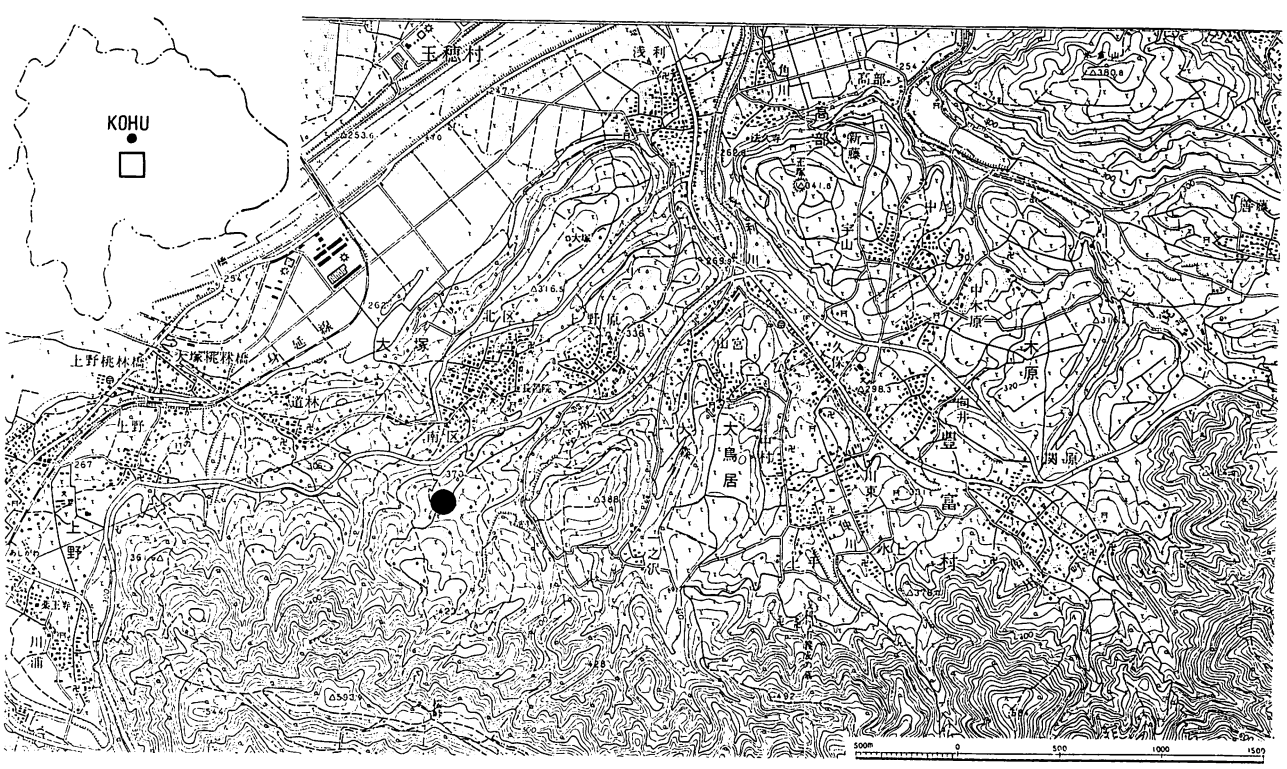
本遺跡の所在する大塚地区は、文化遺産が数多く残り峡東方面から伸びる曽根丘陵地帯に存在する。町内においては、昭和初年頃から積極的に分布調査が行われ、大きな成果が得られている。1936年に宮坂糺氏によって、『史前学雑誌』に敷石住居址のある遺跡と伴に押型文土器を出土する遺跡、として水呑場遺跡が報告されている。その後、小野正文氏、信藤裕仁氏による表採資料により、一層明確になった。また農道整備事業（昭和45～47年）にローム層がカッティングされ先土器時代の石器及び押型文土器などが発見されている。また、周辺の遺跡では昭和47年に金川曽根広域農道建設に伴い大塚地区上野原の上野原遺跡が調査され、縄文中期～後期及び古墳時代以降と報告されている。次いで一条氏館跡遺跡は、曽根丘陵で中道町上の平遺跡に続く周溝墓群を中心とした遺跡であり、他に弥生後期の一城林遺跡など、さらに古墳時代について見ると、古墳は曽根丘陵の西端に数多く見られ、中でも著名な鳥居原狐塚古墳、町の指定史跡として保存されている大塚古墳、伊勢塚古墳、エモン塚古墳などが中心となり、10数基点在している。

２　調査方法と標準層位

本遺跡の調査は、笛吹川農業水利事業の管水路埋設工事に伴うもので、北北東～南南西約400ｍ、東西方向同じく約400ｍの不定形に広がる丘陵上の平坦部、標高約370ｍにおいて調査が行われた。

調査方法は、調査区域約150ｍ×２ｍの表土を削除し、遺構確認のため調査を行った。調査範囲を南西方向から２ｍ間隔で、１・２・３区と定めその基準杭から直角に２ｍ振り、北東方向の74区まで２ｍ×２ｍのグリッドを設定し、全面調査を行った。

表土である耕作土から遺構確認面まで、全体に約40～75㎝を計り、調査内に攪乱を受けている所も目立った。



第126図　水呑場北遺跡位置図

第3節　遺構と遺物

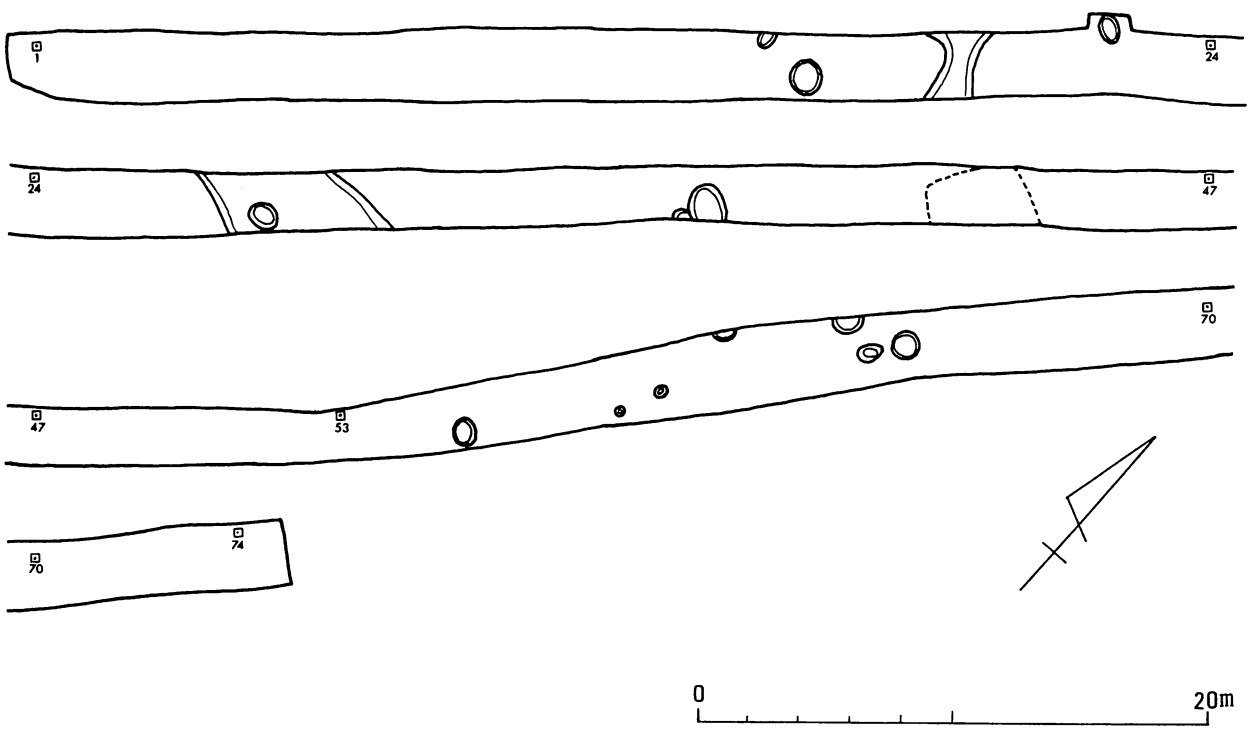
水呑場遺跡は押型文土器が出土する遺跡として、1936年に宮坂紀氏により『史前学雑誌』に紹介されていることから、本遺跡も押型文土器が主体をなすものと期待がもたれた。しかし、縄文早期と思われる遺構は、7号土壙が1基確認されただけである。本遺跡周辺の表面採集資料においては、4箇所から押型文が採集できたことにより、本遺跡周辺に該期の遺構が存在することは間違いないと思われる。

今回の調査では住居址は1軒確認されただけで、攪乱を受けていたため柱穴1基を除き、壁やその他の施設は認められず、住居址プランで判断せざるを得なかった。隅円方形を呈することなどから、時代は古墳時代以降のものと思われる。

土壙は、13基確認されている。縄文中期と思われるものが3・5・6・9号土壙である。3号土壙は中期中葉の井戸尻式期と思われる大型の深鉢が土壙内に横たわる状態で出土しており、土器内面下半部に厚さ1㎝程に炭化物が付着していた。5・6・9号土壙が同時期と思われる。4・8号土壙については小破片の土器、石器類が出土しているものの時期の決定は難しい。他の土壙には、遺物が全く見られず時期は不明である。

他の遺構では溝が2本確認されており、1号溝については、6世紀後半（古墳時代後期）の須恵器、土師器の坏、坏蓋、高坏など7個体が出土し、礫も混入していることから、古墳の周溝である可能性が強い。2号溝は、1号溝より規模も大きく出土遺物も縄文中期の井戸尻式期の深鉢形土器が出土している。

以上のように、今回の調査では、縄文早期～古墳時代以降の遺物と住居址1軒、土壙13基、溝2本が確認されたわけで、当初期待された押型文土器に伴う遺構は、土壙1基のみであった。



第127図　調査全体図

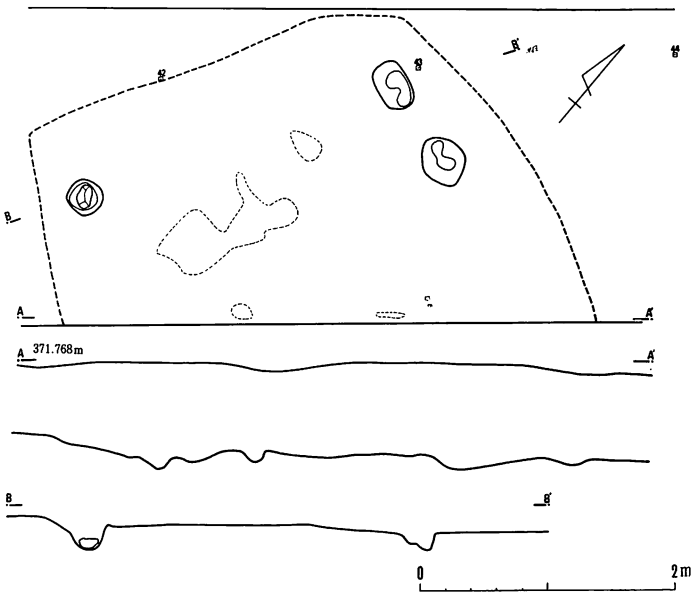
○１号住居址（第128図）

（位置）　41～43グリッドに位置する。

（形状・規模）　住居址全体に攪乱をうけているため、推定プランしかつかめなかった。住居址南東部側が調査区域外に延び、形状・規模などは不明であるが、西辺は3.2ｍを計る。隅円方形を呈するものと思われる。

（床面・壁）　全体に攪乱を受けており、床面は所々に見られる程度である。攪乱により壁は全く確認されなかった。

（その他の施設）　ピットは、確実なものとして住居址の南西側に１カ所確認され、直径30cm、深さ25cmを計り、ピット底部に20cm大の平石がみられる。焼土も住居址内に点々と見られる。遺物は全く出土していない。



第128図　１号住居址

○１・２号土壙（第129図）

１号土壙

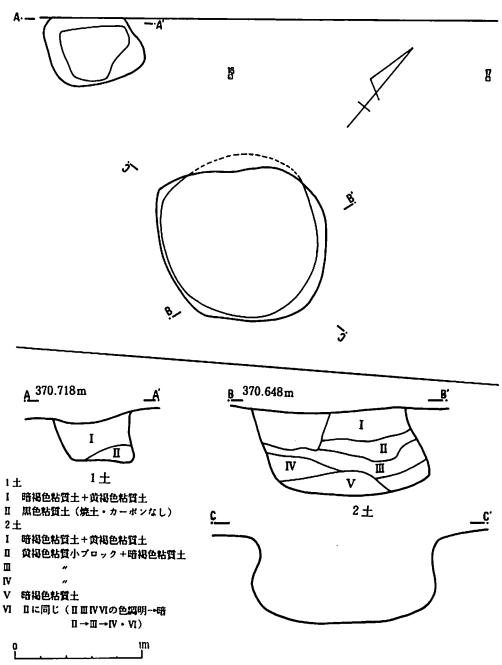
（位置）　15グリッドに位置し、土壙北西側が調査区域外に延びる。

（形状・規模）　長径80cm、短径60cm程度と推定され、不整楕円径を呈すると思われる。土壙底面は、不定形で確認面より深さ37cm、底部は平坦である。遺物は全く確認されなかった。

２号土壙

（位置）　15・16グリッドに位置する。

（形状・規模）　長径１ｍ45cm、短径１ｍ20cmの不整円形を呈する。土壙底部は、円形丸底になる。確認面より深さ65cm、断面形は袋状となる。遺物は認められなかった。



第129図　１号・２号土壙

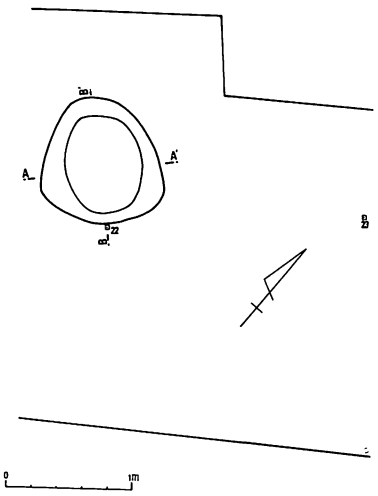
○３号土壙（第130・131図）

（位置）　21・22グリッドに位置する。

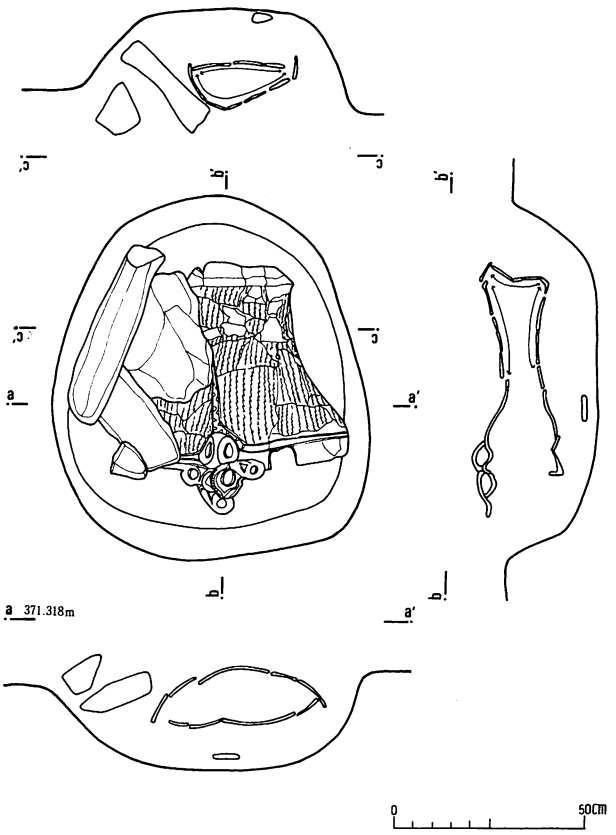
（形状・規模）　長径１ｍ、短径95cmの不整円形を呈し、確認面からの深さ25cm、不整円形で断面形は鍋底状を呈する。

（出土土器）　土壙内には、多孔石（第149図－１）がみられるほか、50cm大の円柱状の石および30cm大の平石が右半分を覆うかたちで底部から30cmほど浮き、土壙内に横たわる状態で完形土器１点が出土している。

第144図－１は、内湾する口縁部を有し、山形突起をもつ大型深鉢。口縁部に２カ所双孔把手を有し、頸部に一条隆帯が巡る。胴部を縄文が覆い、隆帯による楕円区画が双孔把手の下部より巡る。なお土器内部には、土器内下半部全体に厚さ１cmほどの球根類のオコゲが付着していた。口径36.5cm、器高60cm、底径16.5cmを計り、褐色を呈し、胎土・焼成とも良好である。縄文中期中葉の井戸尻式期に比定される。



第130図　3号土壙位置図



第131図　3号土壙微細図

○4号土壙（第142図）

（位置）　28グリッドに位置し、2号溝内に掘り込まれている。

（形状・規模）　長径1m20cm、短径1m、確認面より、深さ15cmを計る。形状は不整円形、底部に一部テラスを持つ。遺物は、土壙内より石匙（第147図－4）が1点出土している。

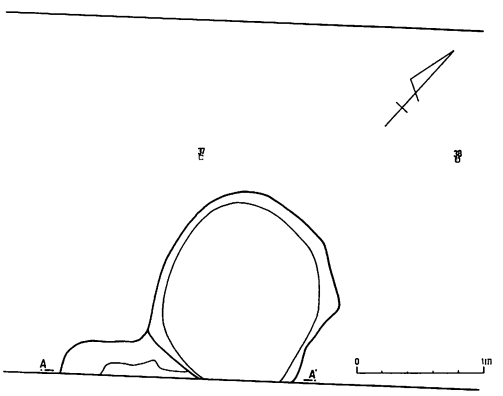
○5・6号土壙（第132・133図）

5号土壙

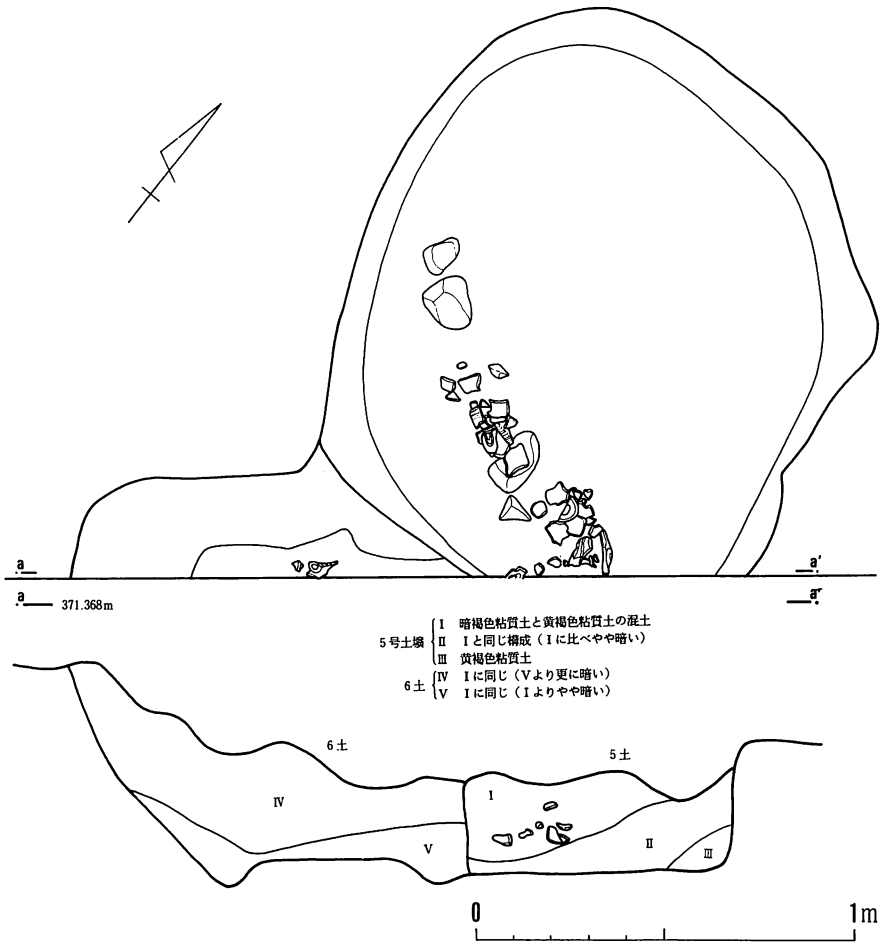
（位置）　36・37グリッドに位置し、土壙南側の一部が調査区外に延びる。

（形状・規模）　1m50cm×1m0cmの円形を呈するものと思われる。確認面より、深さ30cmを計り、底部も円形を呈す。覆土は、上層において褐色粘質土と黄褐色粘質土の混土であり、下層においては、壁の崩落と思われる黄褐色粘質土が主体となる。

（出土土器）　第144図－2は深鉢の口縁部で内湾した口縁を有し、上部には沈線による施文がなされ、外側は無文である。双孔把手を有し、胴部には、隆帯による円文、区画文が施される。現存高14.0cmを計る。褐色を呈し、胎土・焼成とも良好である。縄文中期中葉、井戸尻式期に比定される。このほかに、土器は小破片であるが5号土壙の南側に集中し、上層部では井戸尻式、下層部では縄文前期の十三菩提式が極僅か見られた。なお、小破片ながら磨石も1点出土している。



第132図　5号・6号土壙位置図



第133図　5号・6号土壙微細図

6号土壙

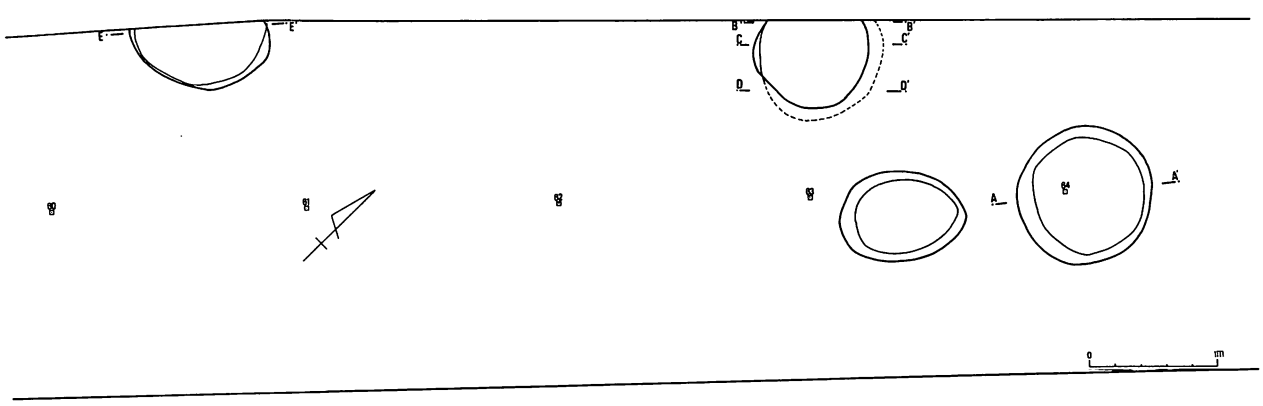
（位置）　36グリッドに位置し、南側半分が調査区外に延びる。

（形状・規模）　長径1*m*、短径は推定で60*cm*前後の楕円形を呈するものと思われる。深さは、5号土壙とほぼ同じく30*cm*である。覆土は、暗褐色粘質土と黄褐色粘質土を主体とする。6号土壙は、5号土壙に切られている状態であり、遺物は出土していない。

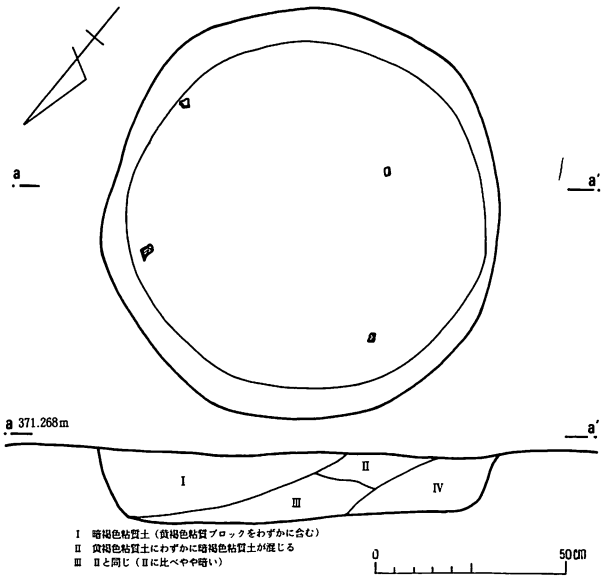
○7号土壙（第134・135図）

（位置）　63・64グリッドに位置する。

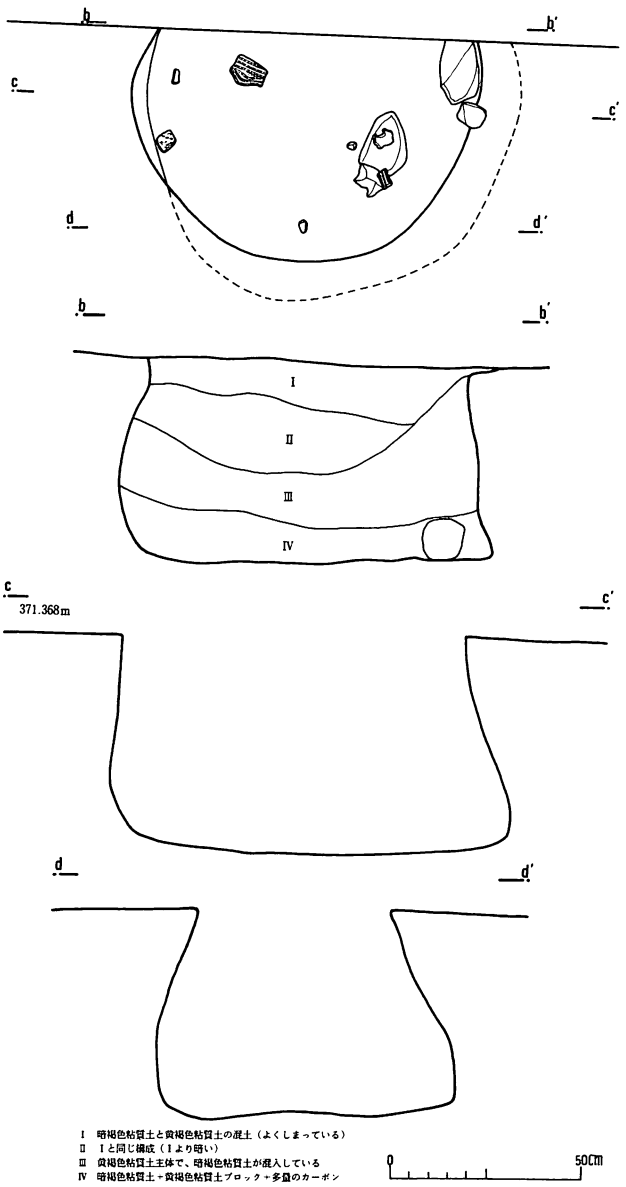
（形状・規模）　直径1*m*の円形を呈する。深さは確認面より15～20*cm*を計り、底部は円形で平坦になり断面形は鍋底状になっている。



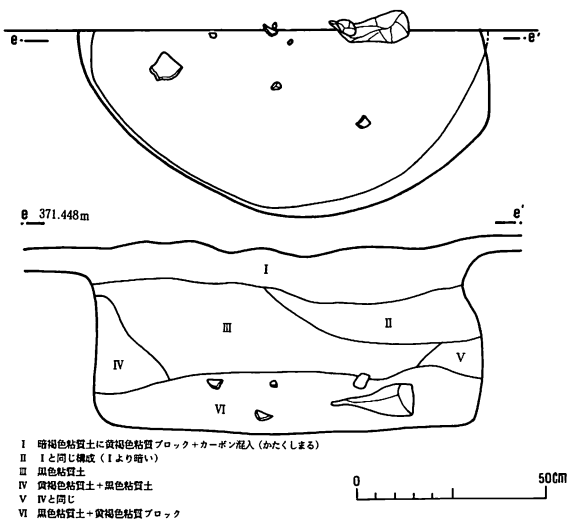
第134図　7号～10号土壙



第135図　7号土壙



第136図　8号土壙



第137図　9号土壙

（出土土器）　第143図1～4に示した。いずれも小破片であるが4点出土している。1は、外面に山形押型文が施され、胴部がやや膨らみ、乳房状の底部を成す。2にも山形押型文が施される。3は無文であり、4は、縄文が施される。これらの出土土器から本土壙は縄文早期に位置付けてよいと思われる。

○8号土壙（第134・136図）

（位置）　62・63グリッドに位置する。

（形状・規模）　土壙半分北側が、調査区外に延びるため、直径90㎝の円形を呈するものと思われる。確認面からの深さ50㎝を計り、底部はほぼ平坦である。断面形は袋状になっており、下層からは多量のカーボンが見られたことから貯蔵穴と思われる。遺物は小量の土器片、石皿の破片（第149図－2）も見られた。

○9号土壙（第134・137図）

（位置）　60グリッドに位置する。

（形状・規模）　最大径1ｍ10㎝を計り、土壙の北西側が調査区外に延びるが、楕円形を呈するものと思われる。深さは確認面より40㎝を計り、底は平坦、断面形は鍋底状となっている。遺物は極僅か出土している。

○10号土壙（第134図）

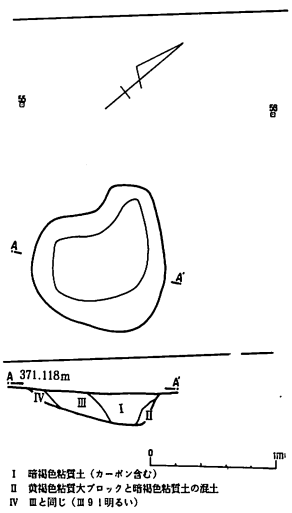
（位置）　63グリッドに位置する。

（形状・規模）　長径１ｍ、短径70㎝で楕円形を呈し、比較的浅く底部はほぼ平坦である。遺物は認められなかった。

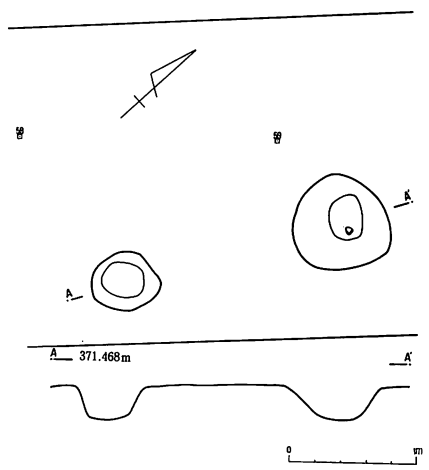
○11号土壙（第138図）

（位置）　55グリッドに位置する。

（形状・規模）　長径１ｍ20㎝、短径95㎝の楕円形を呈し、深さは20㎝前後を計る。遺物は、認められなかった。



第138図　11号土壙



第139図　12号・13号土壙

○12号土壙（第139図）

（位置）　59グリッドに位置する。

（形状・規模）　長径80㎝、短径70㎝の不整円形を呈する。深さ26㎝、底部は丸底で、断面はすり鉢状になる。遺物は極僅か確認されただけである。

○13号土壙（第139図）

（位置）　58グリッドに位置する。

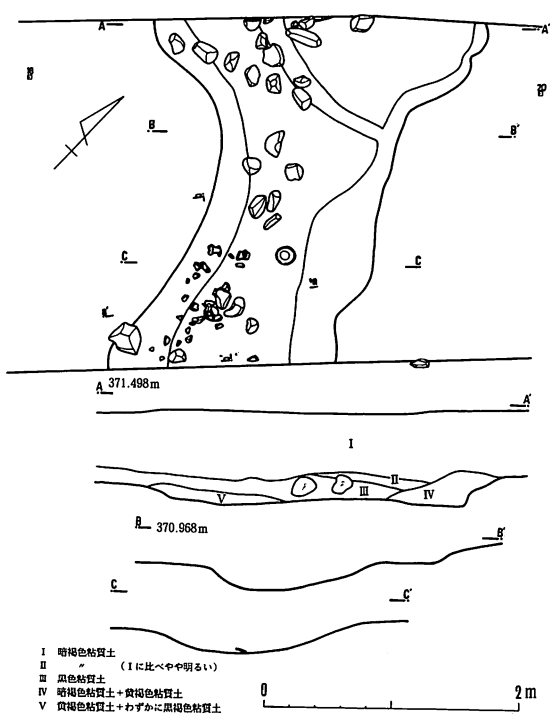
（形状・規模）　長径55㎝、短径45㎝の不整楕円形を呈し、深さは確認面より25㎝を計る。底部は丸底で断面形はすり鉢状を呈す。遺物は全く認められなかった。

○１号溝（第140・141図）

18・19グリッドに位置し、南東〜北西方向に調査区を横切る。溝はもっとも狭いところで１ｍ30㎝、広いところで２ｍ60㎝を計る。また、溝の北側にはテラスを持つ。遺物は、南側に集中し溝底部から10㎝程浮いた状態で礫と伴に土器が７個体出土している。

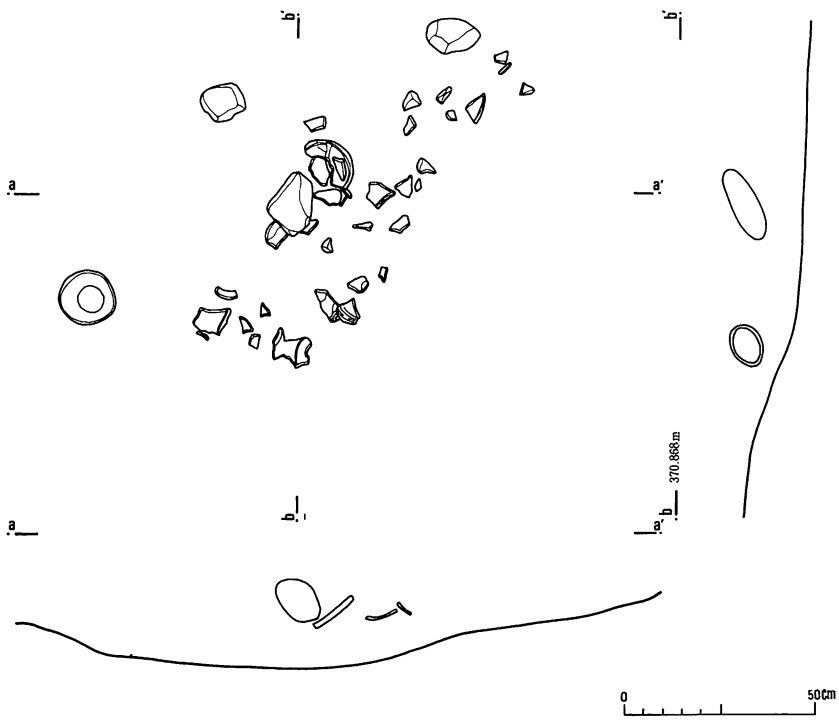
（出土土器）（第146図）

１、土師高坏。推定口径13.5㎝、器高10.7㎝、底径11.8㎝。身部内面はナデ、外面はヘラ調整が施される。脚部は、内面にハケ調整、外面は、ヘラ調整が見られる。胎土は赤色粒子（大）を含み精選され、焼成は良好であり暗褐色を呈する。２、土師高坏脚部。現存高８㎝、底径12㎝を計る。身部は一部残存しており内面に黒色が吸着している。脚部内面にはハケ調整、外面にはヘラ調整がみられ、内外面の一部に黒色塗彩が施される。胎土・焼成とも良好で褐色を呈する。３、土師高坏脚部。現存高7.5㎝、身部内面には黒色が吸着している。脚部内外面に、剥離が見られるが内面にハケ、外面にヘラ調整が見られる。胎土は砂粒、赤色粒子を含み焼成は良好で褐色を呈する。４、須恵坏蓋。推定口径14.0㎝、器高3.8㎝を計る。内面はナデ調整、外面は回転ヘラケズリとナデ調整



第140図　１号溝位置図

が見られる。胎土・焼成とも良好で色調は内面灰白色、外面青灰色を呈する。5.、須恵坏蓋。推定口径13.7cm、器高3.2cmを計る。内面はナデ調整、外面は回転ヘラケズリとナデ調整とが見られる。胎土はやや粗く焼成は良好、色調は灰白色である。6、須恵坏。口径12.1cm、器高4.4cmを計る。内部にはナデ調整、外部には回転ヘラケズリ、ナデ調整が施される。胎土は精選され焼成は良好で、灰白色を呈する。7、須恵高坏。口径12.6cm、器高11.1cm、底径10.6cmを計る。身部・脚部内外面にナデ調整、身部外面を一部に回転ヘラケズリが施される。胎土は砂粒を含むが精選され、焼成は良好で外面灰白色、一部青灰色、内面は灰白色を呈する。



第141図

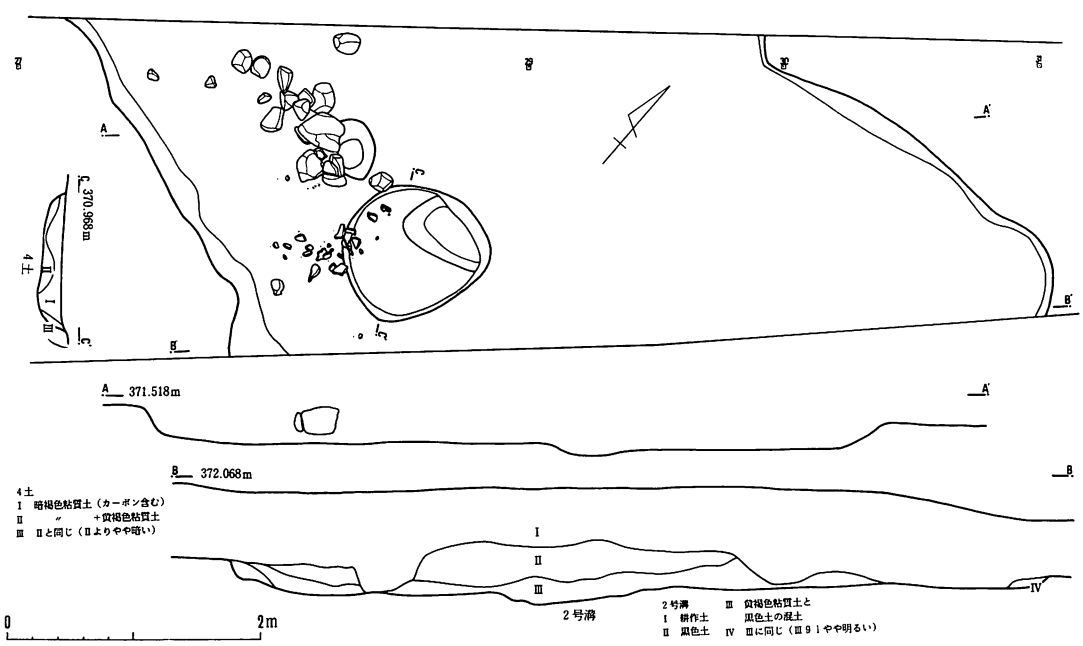
遺物は、すべて六世紀後半（古墳時代後期）に位置付けられることから、後期古墳の周溝である可能性が強い。

○2号溝（第142図）

27～30グリッドに位置し、調査区域内を東西方向に延びる。幅5.5m～6.4m、深さ25～30cmを計る。溝内に4号土壙が重複し、小ピットも見られる。溝の南側には壁と平行して土器や15～30cm大の平石などが集中している。

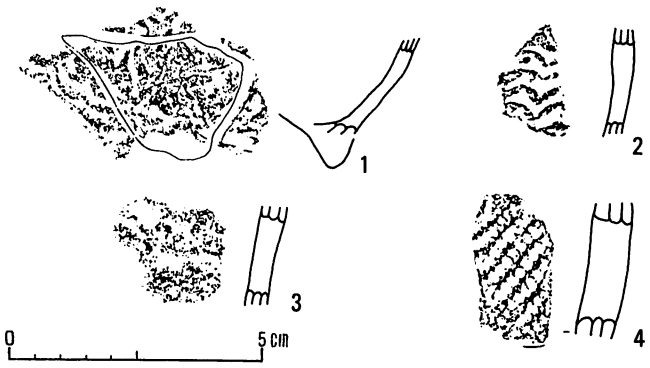
出土土器（第144図－3）

口縁が内湾する深鉢形土器の上半部。一部口縁に突起物を有した形跡が残る。外面を縄文が覆う。内面下部に

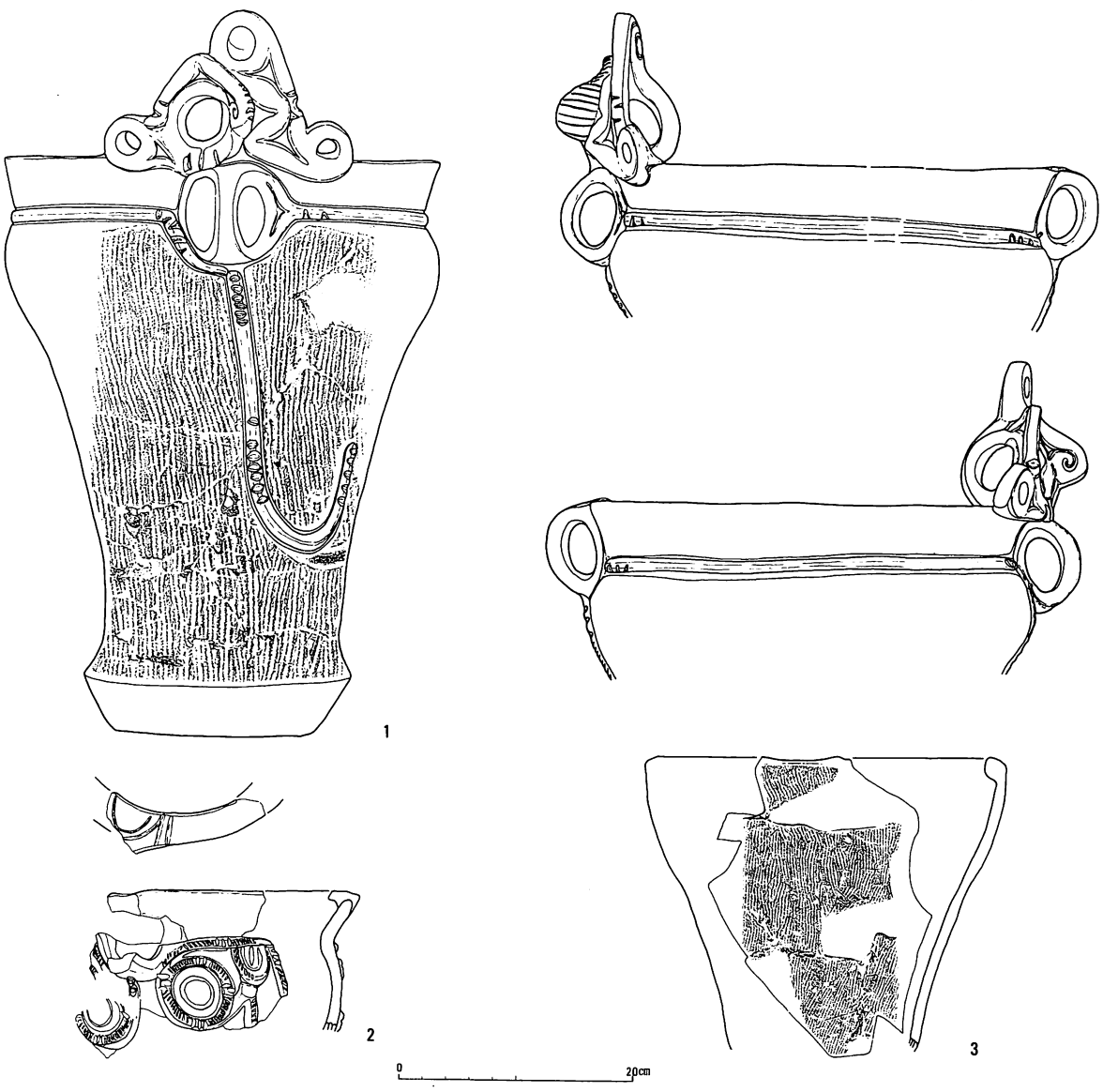


第142図　2号溝・4号土壙

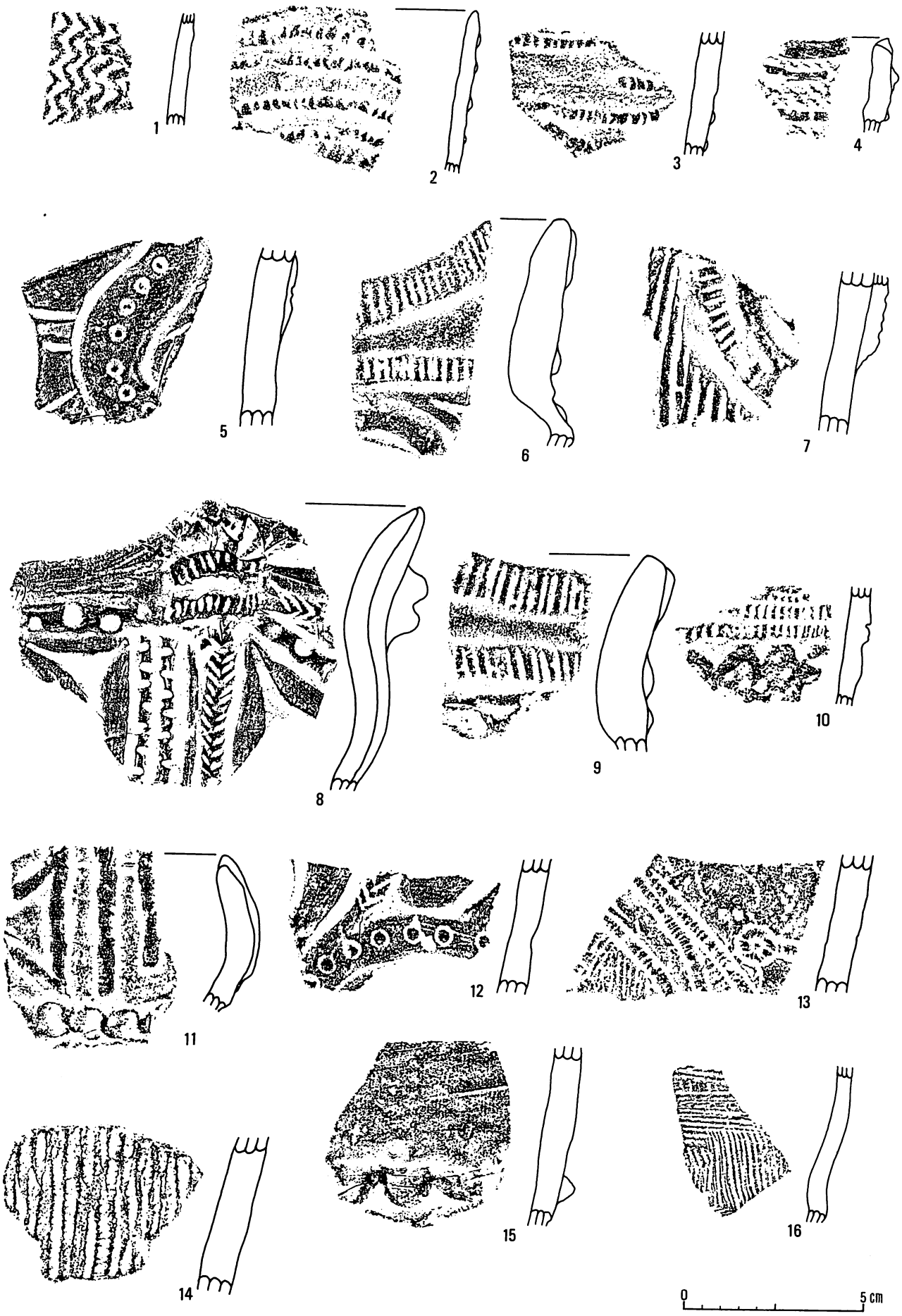
は、炭化物が付着している。推定口径28cm、現存高25cmを計り、胎土はやや粗く、褐色を呈する。縄文中期中葉の井戸尻式期に比定される。



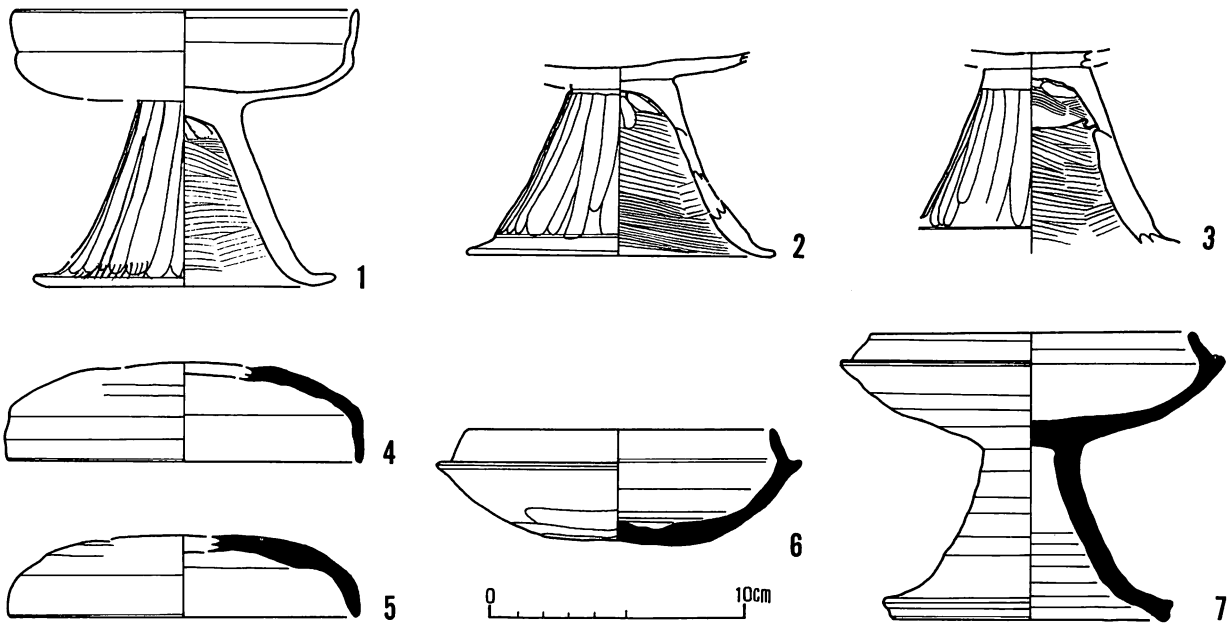
第143図　7号土壙出土土器



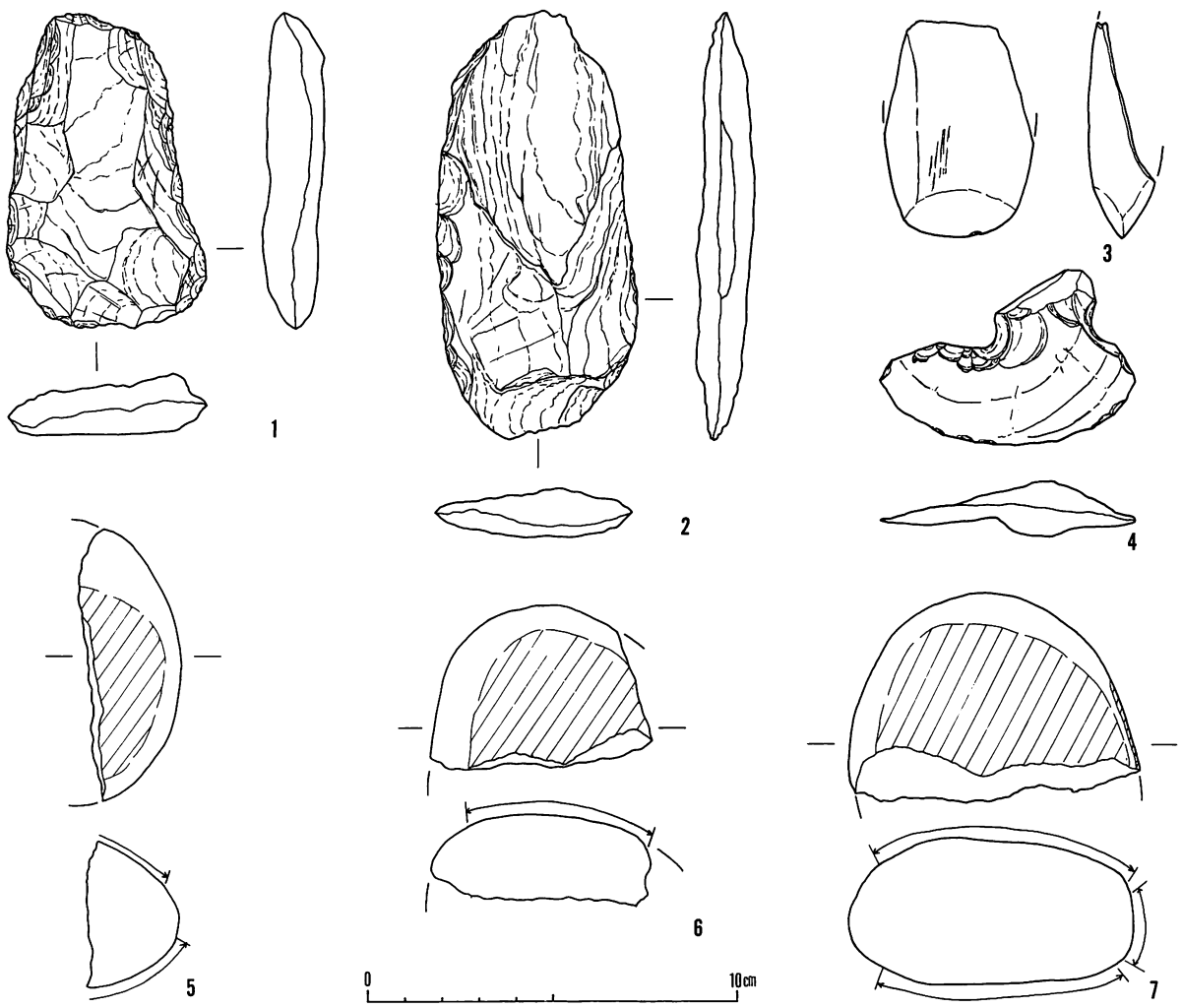
第144図　縄文土器



第145図　縄文土器拓本



第146図　1号溝出土土師器・須恵器



第147図　出土石器その1

○石器

本遺跡からは、打製石斧２点、磨製石斧１点、磨石３点、多孔石１点、石皿１点、石匙１点、石鏃２点が確認されている。以下、器種ごとに概観していく。

a　打製石斧（第147図－１・２）

1　31グリッド出土。形態は撥形で、長さ8.3㎝、基部幅3.2㎝、刃部幅5.2㎝を計る。刃部形は、直刃である。粘板岩製。

2　表採。形態は短冊形で、長さ11.3㎝、基部幅4.3㎝、刃部幅4.8㎝を計る、刃部形は斜刃である。粘板岩製。１・２とも自然面は残されていない。

b　磨製石斧（第147図－３）

3　26グリッド出土。現存部は長さ5.7㎝、刃部幅3.0㎝、厚さ1.7㎝を計る。両刃で円刃を成し、丁寧な磨きで仕上げられている。砂岩製。

c　石匙（第147図－４）

4　４号土壙出土。長さ6.8㎝、幅4.6㎝を計る。横型で、刃部は片面だけの加工を施し、剥離面は小さい。安山岩製。

d　磨石（第147図５－７）

5　５号土壙出土。現存部長さ7.2㎝、幅2.4㎝を計り、使用面は２面見られる。砂岩製。

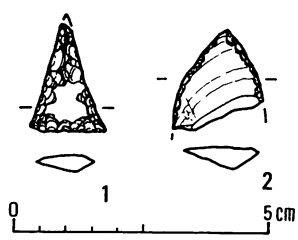
6　10グリッド出土。現存部長さ４.４㎝、幅６㎝を計る。現存部が極僅かなため、使用面は一部のみしか確認できない。花崗岩製。

7　56グリッド出土。現存部長さ5.4㎝、幅7.5㎝を計る。使用面は、３面見られる。花崗岩製。

e　石鏃（第148図）

1　71グリッド出土。現存部長さ2.1㎝、最大幅1.6㎝、厚さ0.35㎝を計る。先端部は欠損しているが、薄く丹念に整形されている。チャート製。

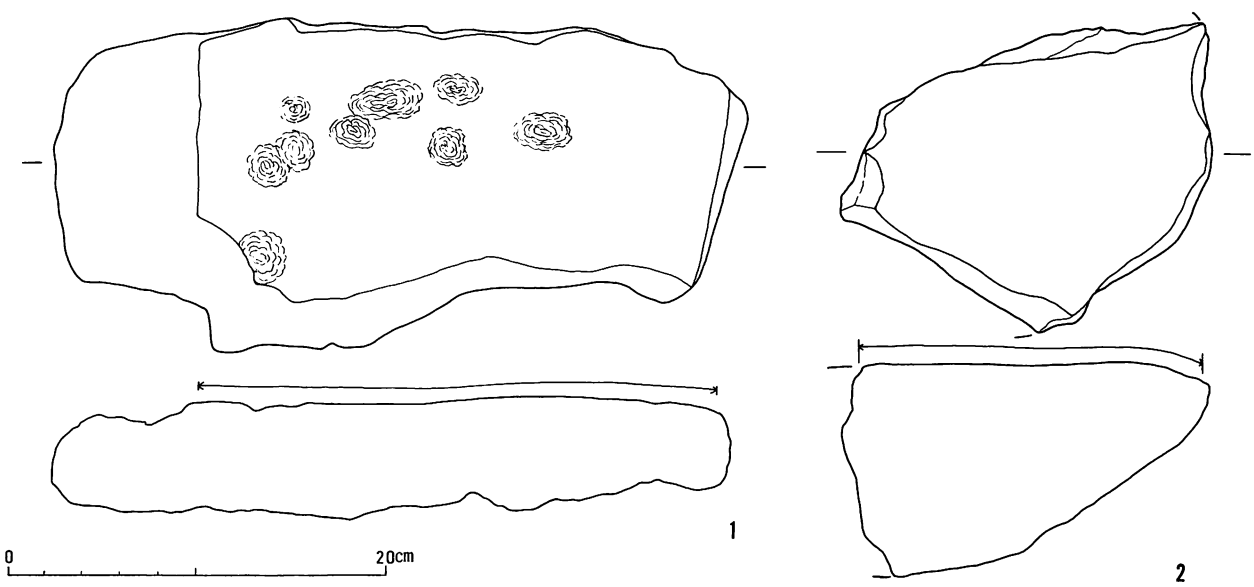
2　22グリッド出土。現存部長さ1.95㎝、最大幅1.75㎝、厚さ0.45㎝を計る。下部が欠損しており、尖頭器の可能性もあるが下部に整形の痕が見られるため、石鏃としておく。黒曜石製。



第148図　出土石器その２

f　多孔石（第149図－１）

1　３号土壙出土。板状の石を使用しており、上面に凹みは９個見られ、下面に



第149図　出土石器その３

10個程認められる。長さ35.7㎝、最大幅17.0㎝を計る。図示した上面は、磨耗し、かつ滑らかであることから、石皿として使用された可能性もある。安山岩製。

g　石皿（第149図－２）

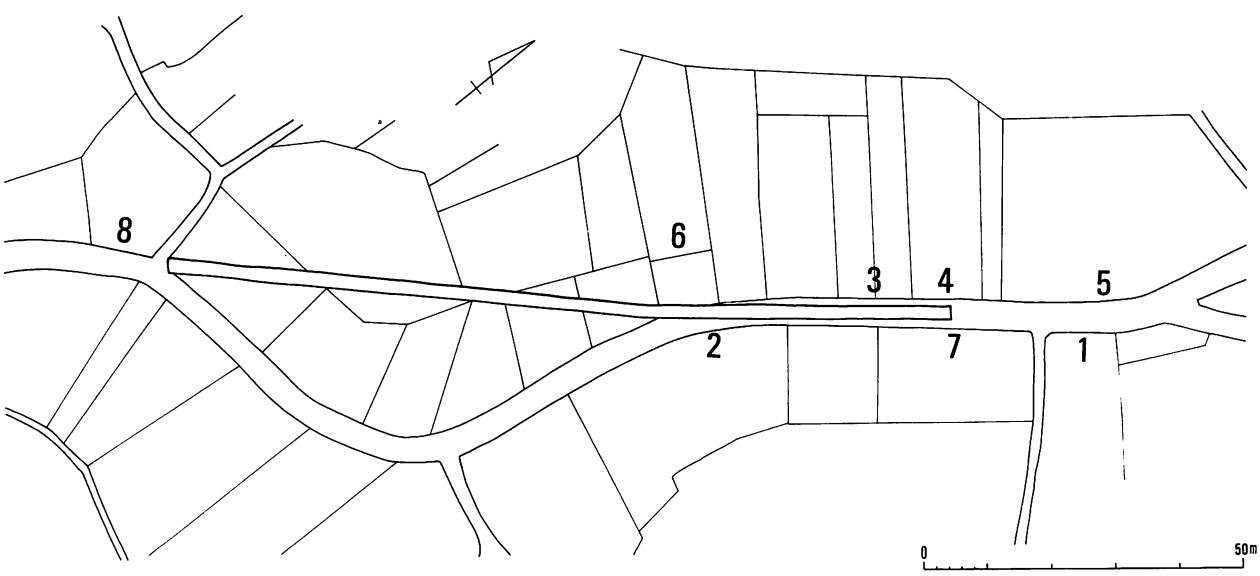
2　８号土壙出土。板状石皿の一部で、平石の一面が使用により平坦かつ滑らかにっている。現存長18.2㎝、幅16.0㎝を計る。特に凹みや縁は形成されていない。安山岩製。

第４節　調査区域周辺分布調査

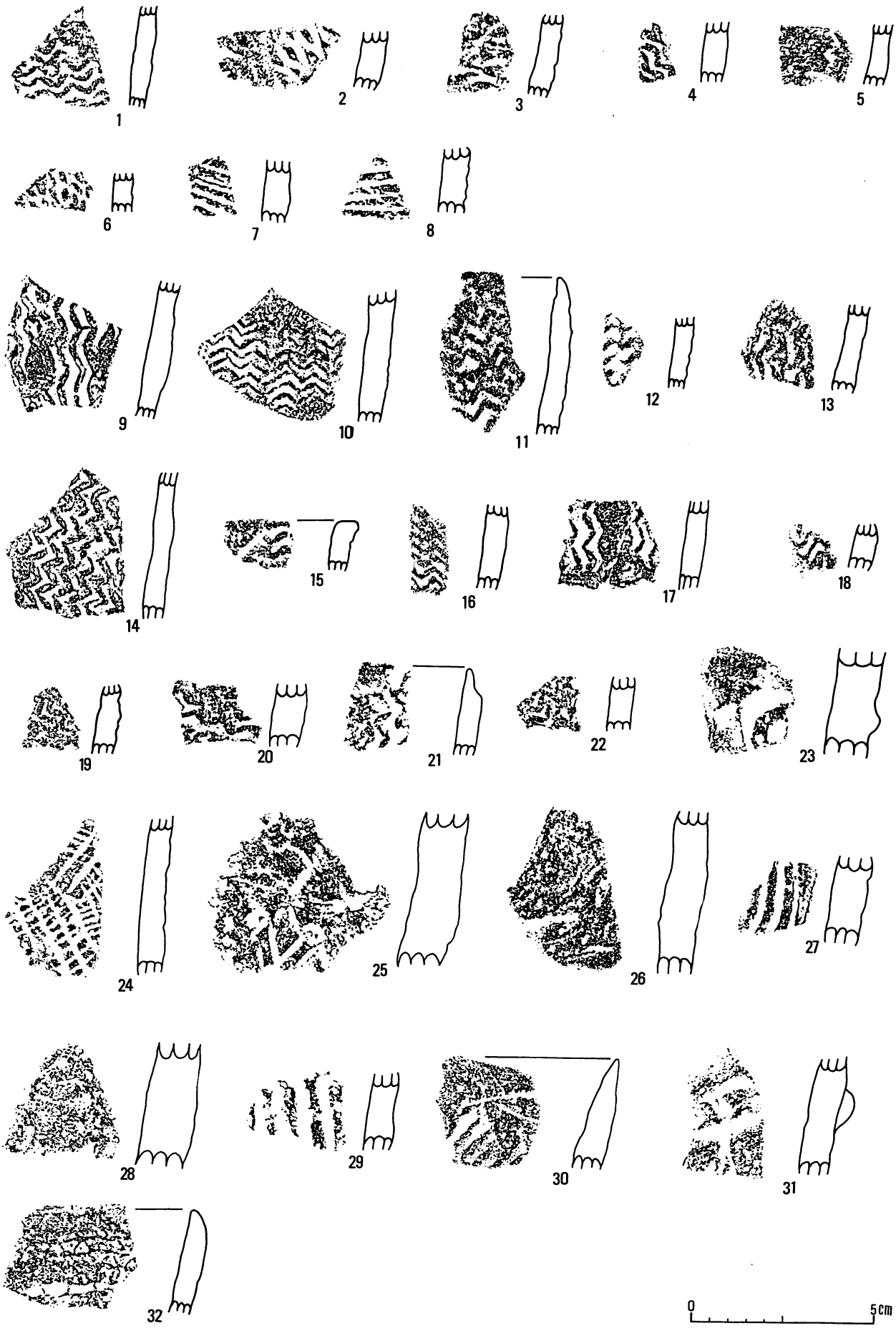
今回、遺跡調査中に周辺の分布調査を併行して行った。特に第２節で述べたように、本遺跡周辺では縄文早期の押型文土器が採取できることが解っていたため、早期の遺物を中心に表面採取を行ったものである。

表面採取遺物と地点は第150・151図に示したとおりである。このうち押型文土器が採取できたのは１～５までの地点であり、６～８では表面採取されていない。しかし、表面採取の位置関係からは６・７地点にも押型文土器が分布していることが予想される。この１～７までの地点は尾根の先端部と言える場所であり、８地点は尾根の付け根とも言うべき場所である。以前から押型文土器の採取されていた場所も、１～７の先端部に近い位置であることや、今回の調査で確認された唯一の該期の遺構である７号土壙の位置からも、該期の遺構・遺物の展開はこの当たりに限られるものであろう。

なお、６・３・４・５側の畑は北西の境までが平坦で、そこから先は急傾斜となる。また、２・７・１側の畑では境の南東側には谷が入り込んで、やはり傾斜がきつくなっており、尾根自体の幅は広いものではない。押型文期の遺跡は、痩せ尾根の先端部に、ごく限られて営まれたことが窺われる。



第150図　調査区周辺分布調査地点



第151図　調査区周辺表採資料

第Ⅲ章　考　　察

第１節　花鳥山遺跡出土の炭化種実塊ならびに微小種子の同定

笠原　安夫・藤沢　　浅

花鳥山遺跡（縄文前期）の４号住居址の床上から出土した２㎝×1.5㎝大の種実塊を1988年３月29日に長沢氏が筆者たちのもとに持参されて種実の同定を依頼された。それの中の粒を２・３粒（種子）とって走査電子顕微鏡（ＳＥＭ）で調べた結果、焼けたらしいエゴマ種実（種子と果実）の塊であった。それは表面からみて約40粒（おそらく100粒以上ある：図版39参照）それら各粒は２～2.5㎝ぐらいの大きさである。なお、その時に表第14～16表に示された８号住居址と９号住居址から出土した炭化種子を入れた小ビンも持参された。またエゴマＳＥＭ写真のうち図版45ａｂｃと同46ａｂは松谷暁子氏の御好意で提供されたもので、それは前述の種実塊を取上げた時に破損したものである。

第14表　８号住居址出土炭化種子

８号住居址　土	No.1	ミズキ（16：炭化半割をふくめる）炭化片（4）
〃	No.2	ミズキ（24：　〃　）炭化片（4）
〃	No.3	ミズキ（８：　〃　）
〃	No.4	ミズキ（８：　〃　）
〃	No.5	ミズキ（14）　アブラナ（3）
〃	No.6	ミズキ（25：炭化半割をふくめる）
〃	No.7	ミズキ（28：　〃　）
〃	No.8	ミズキ（26：　〃　）
〃	No.9	ミズキ（19：　〃　）炭化片（7）　アブラナ類（1）
〃	No.10	ミズキ（10：　〃　）アブラナ（1）
〃	No.11	ミズキ（15：　〃　）

計…ミズキ193、アブラナ類５、炭化片15＝213　（ミズキ粒の大きさは第17表参照）

第15表　９号住居址出土炭化種子

９号住居址　土	エノキグサ（1）
〃	アブラナ類（2）
〃	アブラナ類（1）
〃	スゲ類？（1）
〃	ミズキ（3）
〃	炭化片（1）
〃	ミズキ（1）

計…ミズキ４、アブラナ類３、エノキグサ１、スゲ類１、炭化片１＝10

９号住居址	未炭化（1）
〃	ニワトコ（3）　ミズキ（2）
〃	炭化片（1）
〃	ニワトコ（4）
〃	炭化片（1）
〃	炭化片（4）
〃	炭化片（1）

計…ミズキ２、ニワトコ７、炭化片７、未炭化片１＝17

９号住居址　A	５～10㎝	炭化片（1）
〃	10～15㎝	ニワトコ（2）ミズキ（3）
〃	15～20㎝	ニワトコ（3）
〃	40～45㎝	ミズキ大（1）

計…ミズキ４、ニワトコ５、炭化片１＝10

９号住居址　B	０～５㎝	エノキグサ（1）
〃	10～15㎝	ニワトコ（5）
〃	15～20㎝	ニワトコ（1）
〃	25～	ニワトコ（2）

計…エノキグサ１、ニワトコ８＝９

9号住居址 C	5～10cm	炭化片（4）
〃	10～15cm	シロザ（1）
〃	15～20cm	不明（1）
〃	30～35cm	アブラナ類または胞子類（5）

計…アブラナ類5、シロザ1、炭化片4、不明1＝13

9号住居址 D	0～5cm	スベリヒユ(2) エノキグサ(1)
〃	15～20cm	アブラナ類（5）
〃	20～26cm	スベリヒユ（2）
〃	30～	アブラナ類（3）

計…スベリヒユ4、エノキグサ1、アブラナ類8＝13

9号住居址のA～Dはサンプル採取地点を示す（第34図参照）。また、cmは床面からの高さを示す。

9号住居址計…ミズキ10、アブラナ類16、エノキグサ3、ニワトコ20、シロザ1、スベリヒユ4、スゲ類1、炭化片13、未炭化片1、不明1＝70

第16表　包含層出土炭化種子

花鳥山包合層	23	炭化片（1）
〃	33	ミズキ（4）　炭化片（1）
〃	38	炭化片（4）

計…ミズキ4、炭化片6＝10

8号住居址と9号住居址及び包含層の総粒数　　257

ミズキ207、アブラナ21、エノキグサ3、ニワトコ20、シロザ1、スベリヒユ4、スゲ類1、（炭化片34、未炭化片1、不明1＝36）

第17表　ミズキの大きさ（長さ×幅×厚さ：単位mm）

ミズキ（先端に小さい穴）またはクマノミズキ（穴がない）とがあるようである。またミズキ類の種実はもろい炭化粒のため、取り扱い中に壊れるものが多かった。壁があって2室の中に炭化した種子がある。それらの大きさは次のようである。

8号住居址 No.3	3.5×3.2×2，3.5×2.5，3.5×2.2×3.2，3×2.5×2.5，3×2.5
8号住居址 No.11	3.2×2.5，3.2×3.3，3×3.5，3×3.2，4×4.2，3.2×3.4，3.2×3.2，4.5×3.8，2.5×2.5

同定の結果と考察

表14～17表と図版、約100余粒の種子塊とそれより取り出したエゴマ種子および8号住居址と9号住居址からの出土粒は、全部で第16表に示したようにミズキ207粒、アブラナ類21、エノキグサ3粒、ニワトコ20粒、シロザ1枚、スベリヒユ4、スゲ類1粒など、合計257粒と炭化片36があった。なお、採集地上下位置による種類関係は明らかでない。

現生エゴマのＳＥＭ写真とエゴマの果実の横断面は図版40・41ならびに第152図のようである。エゴマ果実（普通種子という）は、大きく白エゴマと褐色エゴマとに分けられる（図版40－ａ，ｂ　41－ａ）。ともにほぼ球形で、基部に「へそ」がある。果皮の表皮に白エゴマは高くて太い大網目と全面に美しい突起型の流線文があり、褐色エゴマの大網目は低くて細く、全面に尾根型流線紋がある。シソやレモンエゴマ、ヒメジソなどは褐色エゴマと同型の尾根型流線紋である。種子は白色粒も褐色粒も表面に“わらじ状細胞”と細い線状や球形の小点がある（油脂線らしく油を分泌する：41－ａ種子表面、41－ｂ，ｃ“わらじ状細胞など）。

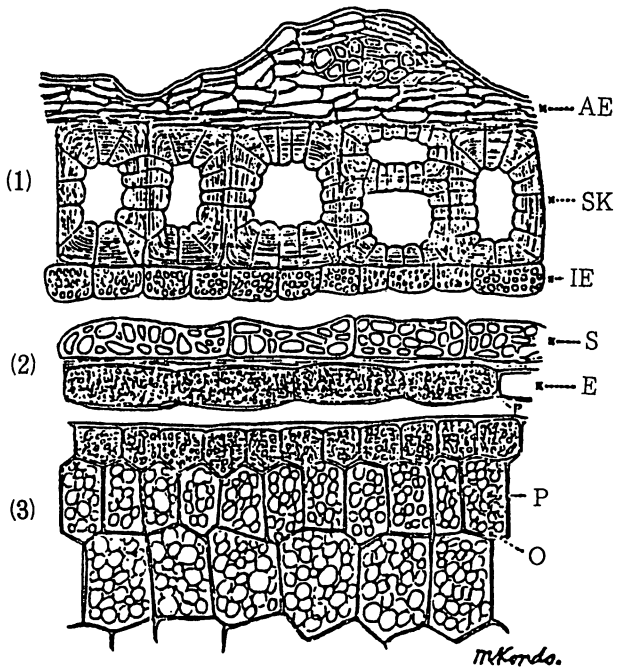
なお、エゴマとシソの果実の横断面の解剖図について、近藤万太郎氏の『日本農林種子学　後編（1931）』より引用してみたのが第152図である。

シソの果皮部（1）は、甚だ厚く堅くつくられて外表皮（ＡＥ）の下に厚膜細胞層組織（ＳＫ）が一列に並び、最内部の内表皮に多孔厚膜層（ＩＥ）がある。種皮部(2)の種皮（S）は一列の美しい網状に見える細胞層と内胚

1　エゴマ，2　シソの果実の横断面，近藤万太郎博士原図

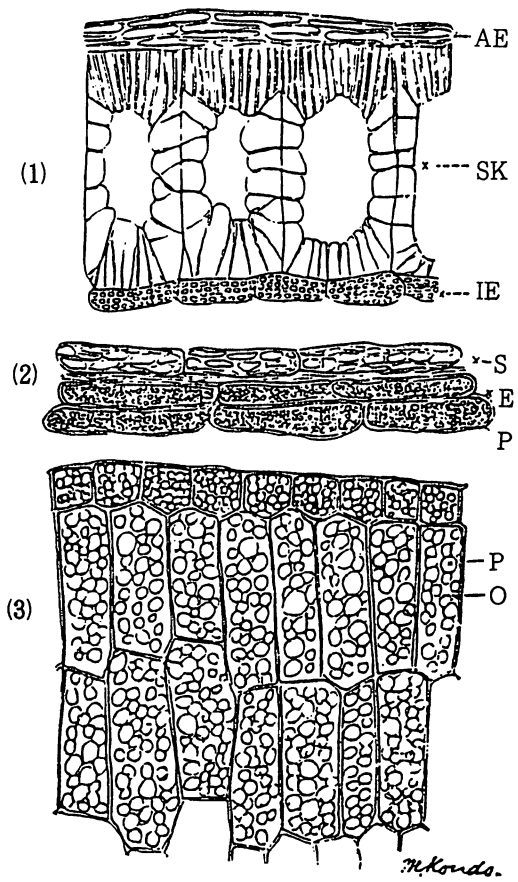
日本農林種子学　後編（1934）より引用

1
エゴマの果実



(1)…果皮，AE…外表皮及び柔組織，SK…厚膜細胞層，IE…内表皮，(2)…種皮及び内胚乳，S…種皮，E…内胚乳の残物，(3)…子葉組織，P…蛋白粒，O…脂油

2
シソの果実



(1)…果皮，AE…外表皮及び柔組織，SK…厚膜細胞組織，IE…内表皮，(2)…種皮及び内胚乳，S…種皮，E…内胚乳の残物，P…蛋白粒，(3)…子葉組織，P…蛋白粒，O…脂油

第152図　エゴマ・シソ断面模式図

乳の残物があり、その下に子葉組織（3）がある。エゴマの果種皮も基本的構造はシソと同じである。しかし、果皮の厚膜細胞細層はシソより薄く、破れ易い。またエゴマ粒はシソよりも大きく、例えばアオジソの果実は、長さ1.3〜1.8㎜、幅1.1〜1.7㎜、厚さ0.9〜1.4㎜、1000粒重が0.91ｇに対して、白エゴマ（褐色エゴマ）の果実は、長さ1.9〜2.7㎜（1.8〜2.7㎜）、幅1.7〜2.5㎜（1.6〜2.3㎜）、厚さ1.4〜1.9㎜（1.3〜1.7㎜）、1000粒重は3.25ｇ（2.92ｇ）で、シソより粒が大きく、脱殻が容易で食品価値が大きい。両種ともシソ科の一年草で変種関係とされている。たとえば、“牧野日本植物図鑑[2]”には、エゴマの学名を *Perilla frutescens* Britt.、シソをその変種 var. *crispa* Decen. とし、2種とも中国の原産とあるが、現在日本で一般に両者とも変種[3]とされ、エゴマは var. *japonica* Hara、シソは、前述または var. *acuta* Kudo が用いられている。しかし、近時出版された増淵法之編“中国日本植物名比較対照辞典”[4]には、シソが P. *fruteescens* Brit. var. *acuta* Kudo で、薬用として各地で栽培され、母種のエゴマは東南アジア、中国中南部の原産とある。矢沢進氏の中国雲南省シーサンバンナ、マンテン村の視察では[5]、エゴマは山地で栽培されて、かるく炒ったものをモチに入れる。シソは平地で僅かに薬用として作られているが、少ないという。奥山治美氏の“食用油としてのシソ油研究報告”[6]によれば、食用油でリノリン酸が多いシソ、エゴマが非常に安全で有効食品という。現在、中国でシソ種子として用いているものは、植物の大きさ、形および種子の大きさから判断して、我が国のエゴマとほぼ同じであることが解ったとの記述がある。

深津正氏の書[7]には、エゴマは東インド、マライなどの原産で、エジプト・インドなどで古くから作られ、中国では“斉民要術”などに記載があり、中国東北部から朝鮮半島にかけて盛んに栽培されたという。我が国では“正倉院文書”の天平年間に記録があり、奈良時代各地で栽培され、古く朝鮮から伝えられた。柴田昌英氏の栽培植物としてのエゴマの性状の記録[8]では、エゴマは東インド・中国中南部の原産で、それらの国と朝鮮・日本の特産物とされていたが、今はソ連・南北アメリカでも栽培されている。比較的冷涼でも温暖な地でも土地を選ばないので、日本では関東以北と山梨・長野・岐阜県などで栽培されている。

図版39は焼けてタール状に固まった出土種実塊で、中空になったもの、中に種子を包むものもある。図版42－ａ、43－ａ，ｃ、44－ａは果皮内から取り出した種子で、各図版とも種皮を拡大しているが、タール状に溶解しているので、現生エゴマ種子の図版41－ｂ，ｃに見られたようにはっきりした“わらじ状細胞”は見えないが、それでも図版44－ｂ，ｄにはくずれた“わらじ状細胞”の面影が拡大1000〜2000倍像で見られる。一方、種実塊の破損した２・３粒の破片が、図版45－ａ、46－ａで、その内表皮の拡大が45－ｂ、ｃと46－ｂである。また図版45－ａと44－ｃに果皮の横断面が見える。以上、粒の大きさと果実と種子のＳＥＭ拡大図でエゴマと同定した。なお、図版46－ｃ，ｄは粒の大きさからシソの種子と推定し、炭化粒とその拡大像が示されている。

アブラナ類（*Brassica*）は水島宇三郎氏（1969）によれば[9]、アブラナ類の故郷は地中海周辺と考えられている。在来のアブラナ類（*B, campesfris*）について共通していることは、地中海沿岸から北ヨーロッパ、北ロシア、シベリアに自生し、比較的低温条件やトルコ高原のコムギ畑の雑草となっていることである。中国へは栽培物として導入され、２コースすなわち西域とモーコを経由した。中国ではハクサイ、タイサイなど葉菜の栽培型が分化し、これらは後に日本などに導入された。そして日本ではキョウナなどとして成立している。また在来アブラナは油用、カブは食用、飼料用に栽培されている。カラシナ（*B, juncea*）はクロガラシと在来ナタネとの自然交雑に由来する複二倍体でカラシ成分の高い植物で、葉菜（タカナ）、油料・香辛料として栽培され、その野生型はトルコ高原、イラク高部からアラビア平原に分布する。シルクロードでインドや中国に入ったようで、中国の四川省を中心とした地域で多様な栽培型が分布している。日本ではこれらが上代後半期以来栽培がつづいている。すべて栽培型として導入されたものかは不明であるが、青森県八戸近くの海上の小島である蕪島などでは、自生種はシベリア経由で自生していた可能性が全くないとは言えないという。また青葉高氏[10, 11]（1981）も東日本では岩手県から、福井、岐阜、滋賀県にわたる地方品種は原始的な焼畑農法で栽培し、いずれも栽培用の重要な食品としていた。岐阜県高山市付近の八賀カブは1783年に土地の産物狂歌に上られ、山形県在来品種温海カブは1785年に藩内の名産として藩主が江戸に持参したというように、200余年前の記録があり、明治時代前後に入ったものではなく、非常に古い時代、水稲栽培が行われた以前の焼畑農耕時代から引き継がれたものと思われる。そ

の他この在来ナタネの自生品としては新潟県六日町の弘法菜、京都府冠島、沓島のオオシマナ（老人菜）、島根県菜島のナタネ、山形県西置賜郡小国町のヒッチカブはフツセに通ずるものであり、これらは弘法大師によりもたらされたと言い伝えられ、古くから飢饉年に利用していた。5月には小国の荒川原、荒廃畑は一面に自生カブの黄花で埋まる。この種皮B型（種皮が吸水しても膜状のまま）の西洋系である。これら在来ナタネのツケナに対して、日本で成立したA型（種皮細胞が吸水したとき水泡状となる）の広島菜、丹波菜などの多くの品種は西日本に分布している。AB種皮の分布境界は中部地方の西側にあるという。またルタバカ（スウェーデンカブ）は明治初年政府によって日本に輸入されたとされているが、北海道のアイヌは古くからこのルタバカをアタネと称し栽培していた。またアイヌが比較的後代まで居住していた青森県東部、岩手県藤沢町山間部ではヒエとルタバカを混播栽培するなどは北海道のアイヌの場合と一致する点からみて、ルタバカが北方経路を得て渡来したと考える。また最近出版された『畑作文化の誕生』（1988）“野菜の系譜”[12]でルタバカが石川県白山山麓の焼畑でヒエと混播し、エドカブラというが、これはエゾカズラの訛りであり北海道からの渡来であろう。また前述の日本のツケナ、カブのA型種皮は日本だけのものと考えられていたが、最近ネパールやインドの北部、東部で、A型種皮の遺伝子をもつカブとアブラナが見付かったとある。

先に、上の平遺跡の種実同定[13]で縄文中期初頭の16号住居址から1粒アブラナの炭化粒を認めた。今、花鳥山の縄文前期の8・9号住居址から21粒のアブラナ炭化粒を同定した。しかし、この花鳥山のアブラナ粒は図版48－a，b，cのようにどれも小粒で斑文も明瞭ではない。上の平の出土粒よりもさらに小粒である。筆者たちはこれまでにアブラナ類の出土を同定したのは、弥生、縄文時代の各地遺跡から確認したが、SEM写真で同定以前の初期の報告例では単に黒粒としていた。SEM写真ではっきり確認できたのは、今日縄文貝塚で著名な縄文前期の福井県鳥浜[14,15]、米子市目久美、縄文中期新潟県八反田[16]、縄文後期中津川市阿曽田遺跡[17]などから出土した例がある。それら大部分は炭化粒で、とくに阿曽田からは土壙の土を0.6㎜目篩で水洗し約9000粒が分析され、栽培と考えられた。また後述のアサバタケの遺跡からカラシナ粒と同型の大網目の内に小網目のある未炭化の前述のルタバカ（エゾカズラ）を同定した。

アサバタケ遺跡では石川県小松市の3～5㎞の台地上にある住居址を含む多数の井戸跡、土壙が1985年に同県埋蔵文化財センターで発掘された。発掘者によって17基の井戸跡と4基の土壙から10～15世紀の土器片を含む地層から得られた32.5㎏の土が0.5㎜の金網目で水洗選別された。それを筆者たちが同定した[18]。出土種実は93種5508粒の多きに達した。それらは畑雑草が圧倒的に多く37種4344粒、次が栽培植物の16種421粒、田畑共通雑草が12種414粒、水田雑草やその他は少なかった。ここに興味深いのはアサバタケ遺跡出土の作物種類が、野本寛一氏（1987）が“焼畑文化の形成”[19]の章で、小松市小原の焼畑で栽培植物とが殆ど一致をみたことである。すなわちアサバタケ遺跡でイネは日本型とインド型の陸稲として、他のヒエ、アワ、エゴマ、カブ、ソバなど照葉樹系とナラ林文化系の見事な合流があったという。しかし、このアサバタケ遺跡で、アサバタケというようなアサの他に、ヒョウタン、マクワウリなども加わり、焼畑の雑草よりも普通（常）畑雑草が圧倒的に多いので、当時既に常畑耕作に移行していたと推定した。

本遺跡8・9号住居址からミズキ、クマノミズキが207粒と最も多く出土した。

ミズキ（*Cornus controves* Hemsl.）は、ミズキ科の落葉高木、山地に普通に生える。葉身は広卵形、長さ6～15㎝、幅3～8㎝、全緑で先が尖る。子房は2室で種子は各室1種子を入れる。果実は球形、黒く熟し径6～7㎜、核は浅い縦溝があり、先に孔がある。分布は日本、朝鮮、台湾、中国、インドシナ、ヒマラヤなどとある。クマノミズキ（*C, machophylla* wall.）は山地に生える落葉高木、葉はミズキに似て対生する。果実は球形、早熟し径5㎜、核はほぼ平滑、径4㎜で先に孔がない。分布はミズキと同じである[20]。果実は甘味があるので花鳥山遺跡の当時の人達の食用となり、核が残ったものであろう。なお、炭化しているので図版47－a～dのように取扱中核が脆く破れ易くなっていた。

ニワトコ（*Sambucus sieboldiana* Bl.）はスイカズラ科の落葉低木で山野に普通見られ、隨は太く、花は奇数羽状複葉、小葉は2～3対、果実は赤熟し、卵円形、径3～5㎜、種子は広卵形、長さ2㎜、出土種子は図版50－

ｃｄのように、種子表面は横に波状のものや、平行した波状隆起紋がある。本遺跡から全部で20粒出土した。多分、果実を薬用、食用にしたらしい。というのは、上の平遺跡でもニワトコが土器内から出土しているためである。このよい出土例としては、著者らが1984年に米子市教育委員会によって発掘された米子市目久美遺跡での出土土器片に付着したこのニワトコの果実と種子を同定している。簡単に紹介すると[21]、目久美遺跡発掘担当者より、縄文時代前期、中期及び弥生時代中期の土器片の内側に物が焦げたような不着物があり、その同定依頼を３回にわたって受けた。そのうち、とくに縄文中期の土器内部には土器片いっぱいに付着したものが見られ、中に２粒のニワトコ種子の残存からニワトコの液果を貯えていたことが確認された。その結果からタール状に焦げ付いた縄文前期のものもニワトコの焦げ付きと推定した。また弥生中期の土器片のものは、上部には自然炭化したらしいイネの葉片や、カタバミ、コナギなど小型種子が付着しており、それを除くと下にはニワトコの果皮が焦げてタール状になったものがあった。これは水田にあった上記の葉や種子がその上に二次的に付着したものと推定できた。それからみて、古代人はかなり頻繁にニワトコの液果を土器に入れ、それを煎じて薬用または食用にしたと思われる。

次に雑草の出土である[22]。エノキグサ（*Acalypha australis* L.）は、トウダイグサ科の畑や路傍に生える１年草で、葉がエノキの葉に似ているので名付けられた。分布は日本、朝鮮、中国、フィリピンなど、また各地で発掘された諸遺跡から出土の多い種類であり、上の平遺跡で２粒、本遺跡で３粒が同定された（図版49－ａｂ）、ただ人里に自生するものか、何らかの利用価値があったのか不明の植物である。

シロザ（アカザ）（*Chenopodium album* L.）は１粒だけであるが出土した（図版49－ｃｄ）。 アカザはシロザの変種、アカザの１年草で前者は葉身が赤色を帯び、後者は白い粉が葉の下面や葉身に多くついている。アカザは普通は栽培し、中国から渡来し、葉を食用にする。シロザはユーラシア大陸が原産で好室素性なので畑や荒地に生える雑草とし全世界に分布する。若菜は食用にできる。種子は扁円形、黒色光沢があり、両者はとくに出土品では区別できないので、筆者たちはシロザ（アカザ）と同定している。

いわゆるツバキ属、クスノキ属やカシ類などで代表される照葉樹の分布する地帯は、雲南から中国中南部、東南アジアを通って日本列島の関東地方以西南にあり、中尾佐助氏の「照葉樹林文化論」は同氏の『栽培植物と農耕の起源』[23]（1966）で提唱がみられている。茶、絹、ウルシ、柑橘とシソそれに酒などが代表的文化要素という。

また、佐々木高明氏の『稲作以前』[24]（1971）には、西日本の照葉樹林地帯には、つい最近まで、ソバ、アワ、ヒエ、ダイズ、アズキの５作物の焼畑農耕があり、それは東南アジアの北にある雑穀焼畑の特色が共通であり、稲作以前の伝統があるとされた。さらに上山春平・佐々木高明・中尾佐助らは[25]、『照葉樹林文化』とさらに『続・照葉樹林文化』シンポジュウムにおいて、その農耕センターとして“東亜半月孤”を設けた。その文化とシソの章ではシソ、エゴマの分布と同文化圏とが一致すると言う。また日本型イネの稲作文化もこの文化圏に加えられた。

笠原は福井県鳥浜貝塚の1980年度調査報告で縄文前期の地層からエゴマ、シソの炭化粒、タール状切片、未炭化粒（湿地帯貝塚のため）などを分析同定した[26]。その報告書で、安田喜憲氏の花粉分析の調査結果から次の記述を引用した[27・28]。鳥浜貝塚周辺の照葉樹林形成はＢＰ，6500年代前のころで縄文前期の開始期に当たり、その大きな文化要素はヒョウタン、リョクトウ、ウルシの利用など各種多用の木器であり、縄文中期以後は温暖多湿を好むスギ林の時代となった。しかし西日本においても、縄文時代の文化母体は、コナラ、クリなどの落葉広葉樹林文化（ナラ林）であって、上記の照葉樹林文化は外来の付加的要素の大きい文化としている。後にまた笠原は鳥浜の発掘[15・29]で、前述ナラ林文化要素としてアサ、ゴボウの種実とさらに縄文早期、前期層からアブラナ類の種子を同定した。いわば照葉樹林文化以前のナラ林文化が鳥浜遺跡であったことが推定できたのである。

この縄文時代前期は現在より平均気温が２・３℃高かったというので、現在、山梨県は南部の極く一部を除いて落葉広葉樹林地帯であるが、当時は照葉樹林が分布していて、エゴマ・シソの出土した花鳥山遺跡周辺では、それらを十分に育てることが出来たのであろう。もう一つは、鳥浜貝塚の発掘担当者の森川昌和氏によれば[30]、

出土する京都市北白川小倉町出土にちなんだ、北白川下層土器が鳥浜貝塚から多数出土し、黒曜石、サヌカイト（讃岐石）の石器類もまた多く出土した。それは日本海の北上、南下の海路だけでなく、陸路による奈良の二上山産のものも運ばれている。それは『芸術新潮』（1987年12月号）第三部“縄文のタイムカプセル”からの引用であるが、同誌には東村武信氏の『石器の原産地を知る方法』として蛍光X線分析法で産地を知る指紋法でしらべた“縄文時代交易地図”がある。それによれば[31]、長野県霧が峰の原石が静岡県の諸遺跡から出土し、逆に大島諸島の神津原石が能登半島や山梨県に接する東京都などの諸遺跡から出土し、海路、陸路による交易があったためであるという。

山本寿々雄氏の『山梨県の考古学』[32]（1986）によれば、花鳥山遺跡の縄文前期後半の土器、石器が多数出土したそのなかに北白川（京都府）、大歳山（兵庫県）系の関西風な土器も伴出している。また小野正文氏（1985）によれば[33]、本遺跡に近い釈迦堂遺跡群には、縄文前期の関東地方の黒浜式併行期、諸磯式など地域的に顕著な土器の他に、伴出土器として、関西に多い北白川下層式土器がある。とすると縄文前期前半に出土したエゴマ、シソが原初的栽培植物であったにしても、その情報は間接または直接に、この花鳥山遺跡周辺に伝わったと思われる。なお、上の平遺跡の縄文中期中葉のシソ？、エゴマ？、としたものも、おそらくタール状に溶けて紋様が十分判明しなかったが粒形、大きさから見てシソ、エゴマと同定できるであろう。とすると花鳥山のエゴマ、シソが上の平遺跡に続いていたであろう。

以上、本遺跡で出土した照葉樹林文化系のエゴマが、既に縄文前期後半に当地方に導入され、焼畑または住居地周辺で原初園耕栽培があったと推定できよう。おそらく種実、茎葉を食品とするための利用であろう。鳥浜貝塚では、湿地のため未炭化粒も出土したが、山地台地にある花鳥山住居址では、炭化粒で塊状に固まったもの以外は発見出来ないものであり、本遺跡では幸いにも一つの塊状になっていたために、綿密周到な発掘過程で見付かったものであり、その発見を喜び、発見者に敬意を表したい。なお鳥浜貝塚第10次発掘（未発表）においても安田喜憲氏の採土に係る試料を水洗し、種実選別の段階で半割したクルミ殻内に土と一緒につまった100余粒のエゴマ種実が見付かっている。それは縄文前期時代に多量のエゴマを収穫して、その取り扱い中にクルミ殻を捨てた土中にあやまって落としたものであり、利用したクルミは半栽培であり、エゴマは園耕栽培のものと推定できる。

本遺跡８・９号住居址から207粒出土のミズキは果実が甘味のため生食であろう。また20粒出土のニワトコは若菜は食用となり、液果は薬用か、シロザは茎葉、種実も食用としたか、後代に茎葉や根を食用のため重要な蔬菜となったアブラナ類21粒の出土は、極小粒なのでまだ栽培以前の利用のため自生植物のように考えられる。また現在は畑雑草となっているエノキグサも各地の縄文、弥生時代から中世、近世を通じて出土するが何に利用したものか、あるいは単なる人里植物か畑雑草かは今のところ不明である。

謝　　辞

本文を草するに当たり本試料の同定の機会を与えられた山梨県埋蔵文化財センターの長沢宏昌氏及び花鳥山遺跡の発掘担当各位に謹んで感謝の意を表します。

（笠原安夫：元岡山大学農業生物研究教授　農学博士）
（藤沢　浅：国立津山工業高等専門学校）

追　　記

橘礼吉氏の“エド蕪菁考”によれば、白峰村のエドカブラの栽培に出会ったのは1970年であるが、根がとっくり型・紡錘型・球型とそれは見事に不揃いで、これが栽培植物かと疑うほどの粗野のものであった。このカブはヒエ、シコクビエ（カマシ）との混作がこの地方の栽培方法で古くから焼畑や常畑で栽培が受けつがれている。またカブとソバとの混播は庄川、神通川の上流飛越高地と能登半島の焼畑にある。またアワの間作として1920年代まで金沢平野の南部にあった、この地方系作物のエドカブラの分布南限が石川県であろうと推定している。

（石川地域研究第５号、107～124Ｐ，1984より）

註・参考文献

1）近藤万太郎　『日本農林種子学　後編』養賢堂　(1934)
2）牧野富太郎　『牧野日本植物図鑑』北隆館　(1947)
3）北村四郎・村田　源　『原色日本植物図鑑　草本編（Ⅱ）』(1961)
4）増淵法之編　『中国日本植物名対照辞典』東方書院　(1988)
5）矢沢　進　"雲南にみる野菜"『農耕技術』6号　86－100　(1983)
6）奥山治美　「食用油としてのシソ油に関する研究報告書」（プリント）名古屋市立大学薬学部　(1988)
7）深津　正　『植物和名語源新考』141－4　八坂書房　(1975)
8）柴田昌英　「第6編　油料類　Ⅱ」胡麻、荏　戸刈義次編　『作物大系』14－30　養賢堂
9）水島宇三郎・角田重三郎　"アブラナ属栽培種の起源について"『農業および園芸』44巻9号　P13～18 (1969)
10）青葉　高　「アブラナ類作物の種子－とくに種皮の形態(1)～(3)」『農業および園芸』56巻9号　P10・11 (1981)
11）青葉　高　『野菜－在来品種の系譜－』ものと人間の文化史43　法政大学出版局 (1981)
12）青葉　高　「畑作文化の誕生」『野菜の系譜－地方品種の来た道』P121～144　佐々木高明・松山利夫編　日本放送協会　(1988)
13）笠原安夫・藤沢浅　「上の平遺跡住居址から出土した炭化種子の同定」『研究紀要』3　P69～77・図版1－9　山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター　(1986)
14）笠原安夫　「鳥浜貝塚（第7次発掘）の植物種子の検定－とくにアブラナ類とカジノキおよびコウゾの同定」『鳥浜貝塚1982年度調査概報』P49－79 (1984)
15）笠原安夫　「鳥浜貝塚（第6・7次発掘）のアサ種実の道程について　付：80R2・3区ベルト出土のゴボウ、リョクトウ、ツルマメ、キハダなどの同定」『鳥浜貝塚1982年度調査概報』
16）笠原安夫　「新潟県津南町八反田遺跡出土炭化種子の同定」『八反田遺跡発掘調査報告書』津南町教育委員会　(1984)
17）笠原安夫　「岐阜県中津川市阿曽田遺跡出土炭化粒の同定」『阿曽田遺跡発掘調査報告書』考察　P1～7・図版187－20 (1985)
18）笠原安夫・藤沢浅　『佐々木アサバタケ遺跡　Ⅱ』P7～28・図版4－54　石川県立埋蔵文化財センター(1988)
19）野本寛一　「焼畑文化の形成」『日本の古代　10　山人の生業』P117～178　中央公論社 (1987)
20）北村四郎・村田　源　『原色日本雑草図説　木本編（Ⅲ）』　保育社 (1976・1979)
21）笠原安夫・藤沢浅　「米子市目久美遺跡出土の土器片の植物同定」　－加茂川改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－　P96～97　図版 77－78 (1986)
22）笠原安夫　『日本雑草図説』養賢堂　(1968)
23）中尾佐助　『栽培植物と農耕の起源』岩波新書　(1966)
24）佐々木高明　『稲作以前』日本放送協会　(1971)
25）上山春平・佐々木高明・中尾佐助　『続・照葉樹林文化』中公新書　(1976)
26）笠原安夫　『鳥浜貝塚の植物種実の検出とエゴマ・シソ種実・タール状種子塊について』鳥浜貝塚1980年度調査概報　福井県教育委員会　P65～87 (1981)
27）安田喜憲　「照葉樹林文化の形成と縄文文化」『どるめん』13号　P51～61 (1977)
28）安田喜憲　『環境考古学事始め』　日本放送協会出版協会　(1986)
29）笠原安夫　「鳥浜貝塚（第6次発掘）の植物種子の検出と同定について」鳥浜貝塚　1981・1982年度調査概報　(1983)
30）森川昌和　「鳥浜発掘四半世紀」『芸術新潮』12月号　P54～59 (1987)
31）東村武信　「石器の原産地を知る方法」『芸術新潮』12月号　P30～31 (1987)
32）山本寿々雄　『山梨県の考古学』吉川弘文館　(1986)
33）小野正文　「山梨県釈迦堂遺跡群」戸沢充則編『探訪縄文の遺跡』P399～406 (1985)

第2節　花鳥山遺跡出土の自然遺物

渡　辺　　誠

1．出土状態

山梨県東八代郡御坂・八代町花鳥山遺跡出土の自然遺物は、大部分が植物遺体であるが、少量の動物遺体も検出されている。それらは第9号住居址覆土、1・8・9・23・33号の5基の土壙、および包含層から検出された資料である。遺跡は縄文時代前期の諸磯b・c式期を主体とする。

植物遺体は炭化し、動物遺体は被熱しいる。

2．動物遺体（図版52・53）

動物遺体は、第9号住居址覆土、および包含層から検出されている。いずれも被熱して白色化した細片のみであり、種を同定できる資料は数点にすぎないので、それらの数量については重量で示すことにする（第18表）。

同定できた種名は、次のとおりである。

A．魚綱　PISCES

1．こい科の1種　Cyprinidae sp.

B．哺乳綱　MAMMALIA

1．いのしし科イノシシ　*Sus scrofa leucomystax* TEMMINCK

2．しか科ニホンジカ　*Cervus nippon* TEMMINCK

他の細片には、明らかに魚類や鳥類などとみなされるものはなく、おそらく哺乳類の遺体と推定される。

こい科の1種は、第9号住居址覆土より、左主鰓蓋骨が1点検出されている（図版52－1－a）。

イノシシは、第9号住居址覆土より、臼歯の歯冠の破片が少量検出されている（同52－4）。

シカは、第9号住居址覆土より、左中手骨の近位端1点（同52－1－b）、包含層より基節骨の近位端1点（同7－a）、鹿角片9点（同53－1－a）、中節骨の近位端1点（同b）が検出されている。

なお包含層168として検出された資料は、人骨の疑いもある（同53－12）。

3．植物遺体（図版54～58）

検出された植物遺体は、次の4種である。

1．くるみ科オニグルミ　*Juglans mandshurica* subsp. *Sieboldiana* MAXIM.

2．ぶな科クリ　*Castanea crenata* SIEB. Et Zucc.

3．ぶな科コナラ属　Querqus. Sp.

4．種不明球根類

1・2はほとんど破片のみであり、それらの重量は第19・20表に示すとおりである。

3はいわゆるドングリ類である。それらの計測値は第21表に示すとおりである。表中の双・半の記号は、双子葉植物であるコナラ属の子葉の双方があるものを双、片側のみのものを半として記したものである。

いずれも縄文時代の重要な食料資源であり、次にそれぞれの検討結果について記す。

球根類の数量は、第23表に示すとおりである。

3－1）オニグルミ（図版54～57）

オニグルミは川沿いや適湿の地に群生する落葉高木で、東北日本の落葉樹林帯の代表的な樹木である。その核内の種子は脂肪に富み美味であり、9～10月に熟す。材も有用である。

炭化した核の破片が、諸磯b～c式期の第9号住居址、33号土壙、および包含層より検出されている。それぞれ合計237.99g、123.82g、1.48gである。ただ1点の完形品（図版56－10）の重量2.54gで割れば、それぞれの最少個体数は、94、48、1となる。

３－２）クリ（図版58－１～７）

山野に普通にある落葉高木で、東北日本の落葉樹林帯の代表的な樹木である。その種子は甘く美味であり、９～10月に熟す。材も有用である。

炭化した種子の破片が、包含層より少量検出されているにすぎない。

３－３）ドングリ類（図版58－８～18）

ドングリ類の炭化した子葉は、１・８・９号土壙、および包含層から検出されている。それらは破片が多く、計測できるものは少ない（第21表）。

俗にドングリ類と総称される堅果類は、ブナ科のコナラ属・シイノキ属・マテバシイ属などの種子類である。これらにはアク抜きをせずにそのまま食べることのできる種類と、アク抜きをしないと食べられない種類とがある。そして種の違いや食べ方の違いなどによって、アク抜きの方法にも差異がある。これらに基づいて、筆者はドングリ類をＡ～Ｄ類に４大別している（第22表）。

Ａ類は、ドングリまなこの語源となった、まんまるいクヌギなどの仲間である。日本ではあまり食べられていなかったが、韓国ではこれらがドングリ食の主体であった。これらは粒のまま食べる場合は加熱処理＋水さらし、粉食の場合は製粉＋水さらしのみによってアク抜きをし、加熱処理は伴っていない。

Ｂ類はナラ類で、楕円形を呈す。東北日本ではよく食べられていた種類であり、アク抜きの方法はＡ類と同じである。

Ｃ類は、Ａ・Ｂ類と異なり西南日本に多いカシ類である。側面形はＢ類と同様に楕円形を呈し、子葉だけになると区別は困難である。これらは粒食でも粉食でも水さらしのみでアク抜きはできる。

Ｄ類は、アク抜きのいらないシイの実の仲間であり、カシ類中例外的にイチイガシもこれに含められる。C類同様西南日本に多い。シイ仲間の形態は、ツブラジイは小型円形、スダジイは先の尖った水滴形、そしてマテバシイは太くて長いマテガイ形を呈している。

したがってアク抜き不要のD類は西南日本の照葉樹林帯に、加熱＋水さらしの方法も伴うＡ・Ｂ類は東北日本の落葉広葉樹林帯に分布するなどの地域差はあるが、製粉＋水さらしの方法は種の違いには影響されず全国同一なのである。従来ともすれば種の違い、しいては森林帯の違いによってのみアク抜きの方法の違いが言及されてきたが、近年ではそれ以上に食べ方の違いも重要であることが判明してきたのである。

また上記の形態差はごく大まかな見方であり、特に種皮がとれて中の実（子葉）だけになると分類は困難である。しかし種の同定までは困難であっても、食用化という観点からみて、Ａ～Ｄ類の大別ぐらいは可能になって欲しいところである。

本遺跡出土資料には、Ｄ類は含まれていない。形態の明らかなものは20点のみであるが、11点は円形（図版58－８～13）を呈し、９点は楕円形（14～18）を呈している。

前者はＡ類に、後者はＢ・Ｃ類とイチイガシの可能性がある。そしてＣ類とイチイガシとはある特徴から明らかに区別できるのであるが、本遺跡資料にはイチイガシは含まれていない。したがって本遺跡の場合は、Ａ～Ｃ類のドングリ類とみなされる。

これを食べ方からみれば、すべてアク抜きをしなくては食べることのできない種類なのである。その場合にＢ・Ｃ類よりＡ類がやや多いのであるから、水さらしのみでなく加熱処理が重要であった可能性が強い。そしてこれらの問題は、石皿などの製粉具をも含めてさらに総合的に検討を深めていかなければならないであろう。

３－４）球根類（図版58－19～31）

直径１㎝程度にしか残存していない球根類が、包含層より24点検出されている（第23表）。それらの種の同定は困難である。しかし類似資料は埼玉県川越市荒川第１地点遺跡から、諸磯ｂ式土器の底部に付着した状態で検出されており、今後さらによく検討される必要がある。

謝　辞

最後に、調査の機会を与えられ種々御教示下さった山梨県埋蔵文化財センターの長沢宏昌氏、資料整理に御協力下さった豊蔵資料館学芸員の齊藤基生氏、名古屋大学学院学生の久保和士氏に対し、衷心より謝意を表する次第である。

第18表　骨類一覧表（単位ｇ）

番号	ラ　ベ　ル	重　量	図版番号
1	9号住	40.79	52－1
2	9号住Ａ　10～15cm	0.66	52－2
3	9号住Ａ　10～15cm	0.	—
4	9号住	0.81	52－3
5	9号住Ｂ　25cm～頂上	1.83	52－4
6	86G	16.70	52－5
7	89G	11.90	52－6
8	90G	34.72	52－7
9	91G	45.37	53－1
10	92G	15.91	53－2
11	96G	15.29	53－3
12	105G	10.52	53－4
13	包含層168	8.35	53－5

第19表　オニグルミ一覧表（単位ｇ）

番号	ラ　ベ　ル	重　量	図版番号	番号	ラ　ベ　ル	重　量	図版番号
1	9号住	25.48	54－1	19	〃　10～15cm	3.23	55－5
2	〃	29.95	54－2	20	〃　15～20cm	10.32	56－1
3	〃	28.43	54－3	21	〃　20～25cm	3.73	55－6
4	〃	26.20	—	22	〃　25cm～頂上	0.78	—
5	〃	20.94	54－4	23	9号住Ｃ　0～5cm	0.07	—
6	〃	27.88	55－1	24	〃　10～15cm	0.34	—
7	〃	23.25	55－2	25	〃　15～20cm	1.82	55－4
8	9号住Ａ　0～5cm	0.19	—	26	〃　20～25cm	2.07	55－7
9	〃　5～10cm	1.86	55－3	27	〃　25～30cm	3.16	55－8
10	〃　〃	0.70	—	28	〃　30～35cm	0.28	—
11	〃　〃	0.66	—	29	〃　35cm～頂上	0.25	—
12	〃　10～15cm	0.75	—	30	9号住ｃ－1	0.80	—
13	〃　15～20cm	0.12	—	31	〃　ｃ－2	0.44	—
14	〃　25～30cm	0.17	—	32	〃　ｃ－3	0.72	56－2
15	〃　45～50cm	0.06	—	33	〃　ｃ－4	0.62	—
16	〃　50～55cm	0.12	—	34	〃　ｃ－5	0.50	—
17	9号住Ｂ　5～10cm	0.96	—	35	〃　ｃ－6	1.45	56－3
18	〃　0～5cm	0.25	—	36	〃　ｃ－7	0.96	56－4

番号	ラ　ベ　ル	重　量	図版番号	番号	ラ　ベ　ル	重　量	図版番号
37	9号住ｃ－8	0.58	—	51	9号住ｃ－25	1.43	56－12
38	〃　ｃ－9	0.62	56－5		小　　計	237.99	
39	〃　ｃ－10	0.80	—	52	33号土壙	17.40	57－1
40	〃　ｃ－11	0.34	—	53	〃	20.41	57－2
41	〃　ｃ－12	0.52	—	54	〃	26.76	—
42	〃　ｃ－13	0.42	—	55	〃	21.95	57－3
43	〃　ｃ－14	0.34	—	56	〃	14.44	57－4
44	〃　ｃ－15	1.51	56－6	57	〃	22.86	—
45	〃　ｃ－16	1.39	56－7		小　　計	123.82	
46	〃　ｃ－17	1.45	56－8	58	74G	0.19	—
47	〃　ｃ－20	0.47	—	59	79G	0.48	—
48	〃　ｃ－21	0.81	56－9	60	90G	0.46	—
49	〃　ｃ－23	5.60	56－10	61	92G	0.35	—
50	〃　ｃ－24	2.20	56－11		合　　計	363.29	

第20表　クリー覧表（単位ｇ）

番号	ラ　ベ　ル	重量	図版番号
1	71G	0.58	58－1
2	72G	0.15	58－2
3	73G	0.42	58－3
4	78G	0.06	—
5	92G	0.77	58－4
6	95G	0.24	58－7
7	105G	0.40	58－5
8	106G	0.50	58－6
合　　計		3.12	

第21表　ドングリ類一覧表（単位cm及びｇ、カッコを付したものは現存値を示す）

番号	ラ　ベ　ル	分　類	残存状態	計　測　値				図版番号
				長　さ	幅	長さ／幅	重　量	
1	1号土壙	A	双	1.40	1.45	0.97	(0.69)	58－8
2	8号土壙	B	半	1.76	0.81	2.17	(0.17)	58－14
3	9号土壙	B	破片	—	—	—	0.24	58－15
4	〃	B	破片	—	—	—	0.14	〃
5	〃	B	破片	—	—	—	0.12	〃
6	70G	?	破片	—	—	—	0.04	—
7	71G	?	破片	—	—	—	0.15	—
8	71G	B	破片	—	—	—	0.09	—
9	72G	?	破片	—	—	—	0.39	—
10	72G	A	破片	—	—	—	0.27	58－9

番号	ラベル	分類	残存状態	計測値				図版番号
				長さ	幅	長さ／幅	重量	
11	73G	B	破片	—	—	—	0.31	58－16
12	〃	?	破片	—	—	—	0.63	〃
13	〃	B	破片	—	—	—	0.86	—
14	〃	?	破片	—	—	—	0.25	—
15	73G	A	破片	—	—	—	0.32	58－10
16	74G	?	破片	—	—	—	0.67	—
17	76G	A	破片	—	—	—	0.19	—
18	77G	A	破片	—	—	—	0.46	—
19	78G	?	破片	—	—	—	0.08	—
20	〃	?	破片	—	—	—	0.22	—
21	78G	?	破片	—	—	—	0.23	—
22	79G	A	破片	—	—	—	0.46	58－11
23	85G	A	破片	—	—	—	0.18	—
24	86G	B	破片	—	—	—	1.11	58－17
25	87G	A	双	1.40	(1.51)	—	(0.86)	58－12
26	88G	?	破片	—	—	—	0.34	—
27	89G	A	破片	—	—	—	0.45	—
28	90G	?	破片	—	—	—	0.28	—
29	91G	?	破片	—	—	—	0.45	—
30	92G	?	破片	—	—	—	0.06	—
31	〃	?	破片	—	—	—	0.11	—
32	94G	A	破片	—	—	—	0.23	—
33	95G	A	半	1.49	1.49	1.00	0.64	58－13
34	96G	?	破片	—	—	—	0.22	—
35	包含層228	?	破片	—	—	—	0.06	—
36	包含層227	B	半	1.49	1.08	1.38	0.44	58－18

第22表　ドングリ類の分類

民俗分類	属		種（出土例のみ）	森林帯
A．クヌギ類 製粉または加熱処理＋水さらし	コナラ属	コナラ亜属	クヌギ カシワ	落葉広葉樹林帯 （東北日本） （韓　国）
B．ナラ類 製粉または加熱処理＋水さらし			ミズナラ コナラ	
C．カシ類 水さらしのみ		アカガシ亜属	アカガシ・シラカシ アラカシ・ツクバネガシ	照葉樹林帯 （西南日本） （韓国南海岸）
D．シイ類など			イチイガシ ツブラジイ・スダジイ	
	シイノキ属			
	マテバシイ属		マテバシイ	

第23表　球根一覧表

番号	ラ　ベ　ル	数量	図版番号
1	23号土壙	2	58－19
2	74G	1	58－20
3	78G	1	58－21
4	78G	2	58－22
5	87G	1	58－23
6	87G	1	58－24
7	91G	6	58－25～27
8	92G	8	58－28・29
9	94G	1	58－30
10	95G	1	58－31
合計		24	

第３節　水呑場北遺跡出土土器付着球根状炭化物の識別について

松　谷　暁　子

１）はじめに

縄文時代に食糧として利用された植物にはどのようなものがあったかについて遺跡出土植物遺残から知ろうとするとき、果実や種子にくらべて球根類というのはきわめて出土例が少ない。

この度山梨県三珠町水呑場北遺跡と花鳥山遺跡から縄文中期の土器付着炭化物が出土し、同定を依頼された。双方の平面は径１センチくらいの同心円状の構造物が密着して存在しており、同じ植物と予想される（図版59－１～３）。しかし、付着炭化物の厚さが異なり、後者は厚さが１～２ミリと薄いのに対し、前者は厚さが約10ミリもある。これは前者、すなわち水呑場北遺跡の炭化物は、土器の両面に挟まれた形で出土し、土器中で貯蔵または煮沸されていたことが推定されるという好条件によるもので、きわめて貴重な例である。

同心円状の構造をもつ球根類としては、ユリ科の一部やヒガンバナ科の鱗茎が考えられる。鱗茎の巾１センチくらいで、普遍的に存在するものとして、一番可能性が高いのは、ノビルの鱗茎（図版60－５・６）である。しかし、ユリ科の中のアサツキやツルボ、ヒガンバナ科のキツネノカミソリ、ヒガンバナなども横断面では同様の構造（図版60－７・８）を示すことも考慮にいれなくてはならない。

そこで出土物と、ノビルその他現生植物の鱗茎の細胞構造の比較を試みた。

２）走査型電子顕微鏡による観察

花鳥山遺跡の付着物は前述のように厚さが薄く鱗片部を取り出して観察するのは無理であるが、水呑場北遺跡のほうは、厚みがあるため、炭化物の部分が容易に分離できるので、その一部分および炭化物に付着した土の水洗過程で分離した鱗茎の中心部かと考えられる部分について、走査型電子顕微鏡（SEM）での観察を行った（図版61）。

まず、中心部と考えられる部分の外形は卵形を示している。鱗片を構成する細胞の形は、平行にならんだ長い細胞（図版61－11）と中央部のへこんだ六角形の細胞（図版61－12）である。別の破片（図版61－13）では、中央部のへこんだ四辺形の細胞（図版61－13）と一つの細胞の輪郭はあまりはっきりしないが、四角形と思われる細胞に多数のしわ状の平行線が認められる（図版61－14）。

３）現生植物の走査型電子顕微鏡による観察

炭化したノビルの鱗茎の細胞を見ると、細胞の端の方がやや先細りになった長方形（図版62－16）と４～５角形の細胞（図版62－18）が認められるが、六角形とは認めにくい。また、アサツキの細胞ではもっと角張った長方形をしている（図版62－20）。ツルボでは丸みを帯びた多角形の細胞が顕著である（図版63－22）。ヒガンバナ科のキツネノカミソリでは、長方形の細胞（図版63－23）の他に四角形で細胞の側辺に７本くらいのしわ状の構造（図版63－24）が認められ、これは出土物の構造の一部（図版61－14）に似ているようにもみえる。ヒガンバナの細胞は、長方形の細胞（図版63－25）の他に六角形をした細胞（図版63－26）が認められるが、出土物の細胞に比べると大きさが二倍くらいもあり、中央部もへこんでいない。

このように細胞の形を見ても、ユリ科とヒガンバナ科のどれにも似ている点があるようでいて、どれも一致しないところがあり、それらの中から一つに的をしぼることは困難である。そこで、土器の中で煮炊きあるいは加熱するという用途の面から何か示唆されるところがないか考えてみた。

４）各植物の用途

ノビルは、現在でも春には日本各地で葉と鱗茎を食用にする。生でも食べられるが、さっとゆでて食べるところもある。しかし、黒こげになるまで加熱するのは、食用としては考えにくい。しかし、薬用として喉の痛みや

せき止めに黒焼きにして内服する（金沢大学薬学部御影雅幸氏私信）というのは注目される。

これまで縄文時代の遺跡からノビルの報告は東京都から二例（渡辺1975）あり、そのうちの一例は、土器内部の炭化物の写真が示されている（直良1974）。同心円状をしているが、大きさが示されていないので水呑場北遺跡の炭化物との比較はできない。

アサツキは、ノビルと同じように食用に利用している。薬用については不明である。

ツルボの用途については日本では、沖縄以外には食用にされた公式の記録はないが、豊かな澱粉をふくみ救荒植物として利用されたことは十分ありうるし、沖縄では、救荒植物として伝承されており、さらに韓国では鱗茎を煮て食用にしていた（野田1973）というのは興味深い。薬用については、いろいろな民間用法に用いられてきた（野田1973）が、黒こげになるまで加熱するかどうかはわからない。

キツネノカミソリやヒガンバナは、有毒アルカロイドを含むため、食用には毒抜きが必要であり、通常水で晒すようであるが、加熱での毒抜きも可能かも知れない。キツネノカミソリと同定された炭化球根が上ノ入遺跡（神奈川県平塚市）から報告されている（小島・浜口1977）。

このように、用途の面からみてもあまりはっきりしたことは言えない。大きさを重視すると、ノビルやアサツキが有力のようにも考えられる。

5）外形の比較

鱗茎の外形がわかれば、範囲が狭まるかもしれないと考えているところへ、ごく最近、山梨県釈迦堂遺跡の出土炭化物の中から球根状をした炭化物が発見された（図版59－4）。径が約1センチくらいという大きさが、水呑場北遺跡や花鳥山遺跡からの土器付着球根状炭化物と同じくらいであり、同じ植物という可能性がある。この釈迦堂遺跡出土炭化物の外形は卵形をしており、水呑場北遺跡出土物から取り出された小さな芯の部分と外形が似ている。従って水呑場北遺跡の球根状炭化物も同じと仮定すると、ヒガンバナ科のキツネノカミソリやヒガンバナは、大きさもより大きいが外形も釈迦堂遺跡の炭化物よりもっと丸い。ユリ科の方も広卵形のツルボや球形のノビルの外形とは異なるように思われる。外形からするとユリ科のギョウジャニンニクが似ている。ギョウジャニンニクは北海道では利用度が高く、根を粥にするという（辻1983）。山梨県での分布や利用法がわからないが、長野県諏訪地方ではヤマネギとよばれ、山菜として利用されている（諏訪教育会1985）ので、今回細胞構造の観察を行うことが出来なかったが、この植物も考慮にいれておいた方がよいのではないだろうか。

これまでに報告された類似の出土球根類には、ノビルやキツネノカミソリと同定された上記の他にも、福井県鳥浜貝塚から出土した炭化球根や土器に付着した炭化物がユリ科の球根と同定されている（西田1979）。写真を見たところ、土器付着物は、水呑場北遺跡や花鳥山遺跡のものとよく似ているが、炭化球根の外形は、円形をしており、釈迦堂遺跡のものとは異なってみえる。今後類例の出土が増えれば、もうすこしはっきりした結果が期待できよう。

6）おわりに

今回の分析結果はまだまだ不十分であるが、今後もこの方面の研究は続けたいと考える。

この報文のため、多くの方にいろいろとお世話になった。とりわけ、炭化物を熱心に採取された山梨県埋蔵文化財センターの長沢宏昌氏ならびに現生のユリ科やヒガンバナ科の鱗茎の入手に御尽力いただいた東京大学大学院生天野誠氏に感謝の意を表します。

参考文献

諏訪教育会　1985　諏訪の植物―身近に見られる植物を中心にして―

辻　　秀子　1983　可食植物の概観、加藤晋平・小林達雄・藤本強編「縄文文化の研究２」、雄山閣。

直良　信夫　1974　古代人の生活と環境、校倉書店。

西田　正規　1979　植物遺物、鳥浜貝塚１。
野田　昭三　1973　植物と人間のある関係―ツルボの場合、大阪学院大学通信３巻12号。
渡辺　　誠　1975　縄文時代の植物食、雄山閣。

写真説明

図版59　水呑場北遺跡、花鳥山遺跡、釈迦堂遺跡出土鱗茎状炭化物の実体顕微鏡写真
　1　水呑場北遺跡出土土器付着鱗茎状炭化物破片１
　2　水呑場北遺跡出土土器付着鱗茎状炭化物破片２
　3　花鳥山遺跡出土土器付着鱗茎状炭化物
　4　釈迦堂遺跡出土鱗茎状炭化物
図版60　現生ユリ科およびヒガンバナ科の植物の鱗茎の実体顕微鏡写真
　5　ノビル（ユリ科）の鱗茎の外形
　6　炭化したノビル（ユリ科）の鱗茎横断面
　7　炭化したツルボ（ユリ科）の鱗茎横断面
　8　ヒガンバナ（ヒガンバナ科）の鱗茎横断面
図版61　水呑場北遺跡出土鱗茎状炭化物の走査型電子顕微鏡写真
　9　鱗茎状炭化物の中心部と思われる部分の外形
　10　９の右上面部拡大写真
　11　９の左上面部拡大写真
　12　10の上面部拡大写真
　13　土器付着物の別の部分
　14　13の中央部拡大写真
図版62　炭化した現生ユリ科鱗茎の走査型電子顕微鏡写真
　15　炭化したノビル鱗茎の縦断面
　16　15の拡大写真
　17　炭化したノビルの鱗片
　18　17の中央部拡大写真
　19　炭化したアサツキの鱗茎
　20　19の上方部拡大写真
図版63　炭化した現生ユリ科とヒガンバナ科の走査型電子顕微鏡写真
　21　炭化したツルボ（ユリ科）の鱗茎
　22　21の左上部拡大写真
　23　炭化したキツネノカミソリ（ヒガンバナ科）鱗片の細胞
　24　キツネノカミソリ鱗片の別の部分の細胞
　25　ヒガンバナ（ヒガンバナ科）鱗片の細胞
　26　ヒガンバナ鱗片の別の部分の細胞

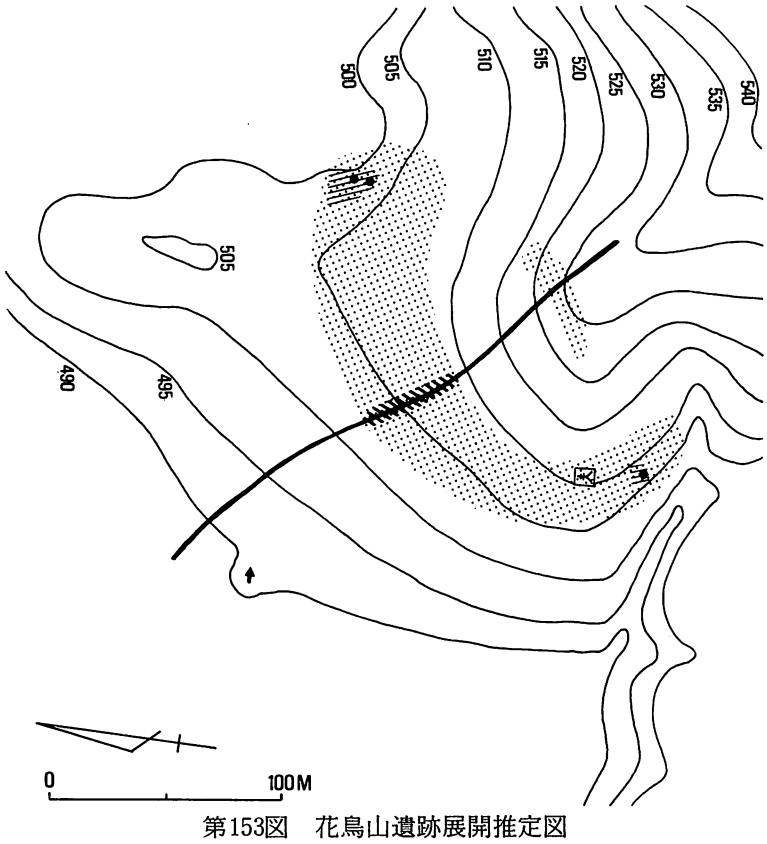
第４節　花鳥山遺跡の諸問題

前述したように、今回の調査は国学院大学の調査以来およそ30年振りの調査である。大規模な諸磯期の集落であるということは推定されていたものの、具体的内容は不明な部分が多かった。その意味で今回得られた成果は多大であったと思う。

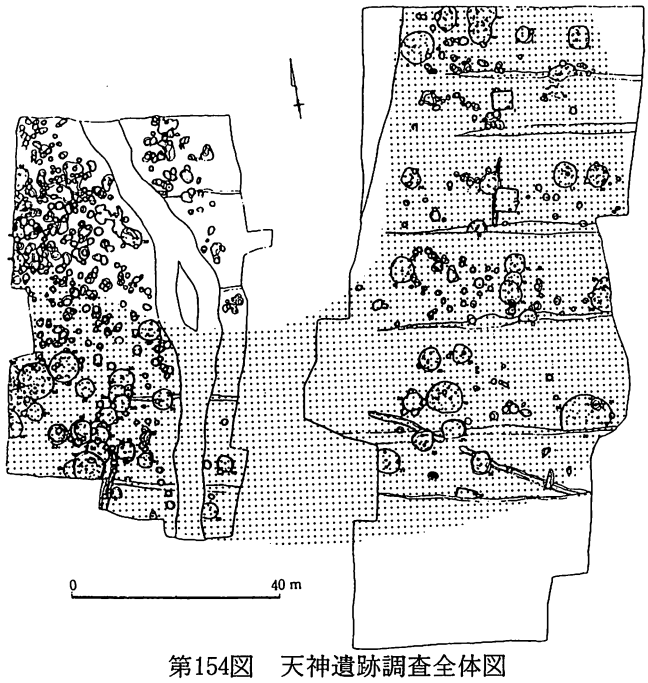
この事について、様々な視点から検討をすべきであるが、今回の調査ではとくに食生活部分に重点をおいて炭化物・骨片等の検出に時間を割いたため、当然行われるべき検討が不充分であることは否めない。そこで、ここでは発掘調査中あるいは整理段階で気付いた２・３の点について、若干の私見を述べつつ、問題点の整理としたい。

まず第１点として、集落の広がりであるが、国学院大学の住居址確認例からして、標高500～510mにかけての住居址群の展開が予想される。第３図に示された等高線によって、花鳥山丘陵は、北側に張り出しをもつものの基本的には舌状台地であることが明らかである。この状態で等高線に沿うようなかたちで住居址群が展開することは、必然的に集落全体とすれば馬蹄形を呈することとなる。今回の調査では、標高525mの位置でも１軒だけではあるが住居址が確認されており、環状集落となる可能性も比定できない。ただ、環状集落であるとしても遺物の出土量や遺構の集中度などから上部に行けば行く程住居址の数は少なくなるものと予想される。前回と今回の調査からは、第153図に示したように楕円形に住居址群が展開することが明らかにされたと言えよう。

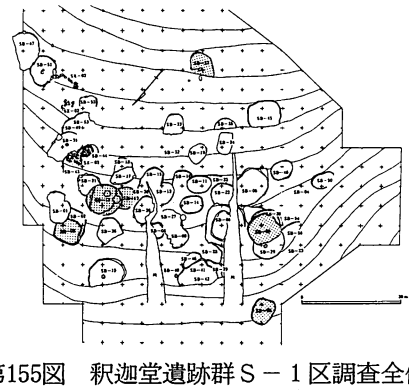
この時期の集落が確認された例としては、大泉村天神遺跡が知られている[1]。



第153図　花鳥山遺跡展開推定図



第154図　天神遺跡調査全体図


第155図　釈迦堂遺跡群Ｓ－１区調査全体図

ここでは諸磯ｂ・ｃ式期の住居址49軒、土壙480基以上が調査されており、住居址群の内側に土壙群が位置する傾向があり、馬蹄形あるいは環状集落となることが推定されている。この調査は広い面積を対象としているが、集落総てを調査した訳ではなく、本来広がる部分の南東側の半分を調査したという状況である。調査区域は大きく東西に分かれ、環状の内径は80〜90m程度と推定される。また集落の西側は浅い谷となっており、それによって制限される部分まで集落の展開が想定され、外径は120〜150m程度と考えられている。個々の住居址を見てみると、直径４m程度の円形の住居址が最も多く、４ないし５本柱が一般的である。なお、調査の制約上、中央部の広場と思われる部分が不明なままである。発掘状況から推定した集落の広がりを第154図に示した。未掘部分の南西側にさらに集落が広がると思われる。

一宮町・勝沼町にまたがる釈迦堂遺跡群[2]では、諸磯式期の住居址のうち、黒浜式と明確に判別しきれないａ式期を除いて、確実にａまたはｂ式期とできる住居址が６軒確認されている。諸磯ａもしくはｂとされるもの２軒、確実にｂとされるもの４軒である（第155図）。これらの殆どが隅円方形を呈し、柱穴は４〜６本、長軸5.5〜6.5mのものが多い。確認された炉は総て地床炉である。しかし、この６軒の「まとまり」による集落形態ははっきりしたものと言えない。このうちの１軒だけが離れており、これを除くと、３軒と２軒のまとまりとすることも可能で、その場合、距離はあるが５軒の住居址が弧状に展開すると見なすこともできる。勿論、花鳥山や天神に比べると遺構数が少ないため、集落構造を明らかにするほどの材料がないという状況であろう。

以上の２遺跡がこれまで山梨県内で発掘された前期後半の集落例である。花鳥山遺跡はこの２遺跡に比べると発掘面積が格段に少ないため集落の全体像を明らかにするにはさらに悪い状況と言わざるを得ないが、前回とは調査地点が離れていることと、今回の調査が遺跡を縦断するかたちで行われたこともあっておよその規模は推定が可能である。前述した２回の調査による住居址の分布からは、馬蹄形を呈するとした場合の直径は160m程度と思われる。また、今回の調査で最も住居址が集中した60m程の部分には、不確実のものも含めて19軒の住居址が確認されている。この集中度は異常に高いものと言うことができ、この状態で馬蹄形集落が営まれたとするなら、軽く100軒を超える住居址が存在することになる。ただ、国学院大学の調査では住居址の切り合いは全く見られないことから、あるいは今回の調査区域が花鳥山遺跡全体でも最も遺構が密集する部分であるのかもしれない。個々の住居址について見てみると、全掘した住居址がないため、規模・形状ははっきりしないが、概ね円形ないし楕円形を呈するようである。最小と思われる住居址が７号住居址で長径４m、最大のものが５号住居址などで６m程度と推定される。天神遺跡に比べると大きく、釈迦堂遺跡群に比べるとやや小振りである。また、本遺跡が比較的急傾斜地に立地するため、傾斜下部が不明なものが多く、柱穴はその逆側に集中する傾向があるのも特徴と言える。

第２点として、包含層の問題がある。これについては既に八代町誌に樋口博士が指摘している。樋口博士の記述には「地表下15cm以下に包含層をなして埋没し、包含層の厚いところは70cmにも及ぶところがあった。しかし、その層の中において遺物の上下による新古などを判定し得るような状態で遺物は出土せず…」とある[3]。今回の調査でも第85図に示したセクションで明らかなように、最大１mに及ぶ包含層が確認されている。また、樋口博士の指摘のように、包含層の主体を成す諸磯ｂ式・ｃ式土器は明確な上下関係を示しての出土ではない。ただ、包含層全体での出土量ではｂ式に比べｃ式が遙かに多いという事実がある。包含層が形成されていることは何を意味するのであろうか。第85図に示したように、包含層は遺構集中部分の途中から形成され始め傾斜下部に行くほど厚くなる傾向がある。単純に傾斜だけを見れば、これが上部から流れてきたものとするのが妥当であろうが、前述したように、今回の調査結果からは上部には遺構が集中するとは思いにくく、これだけ膨大な量の遺物が上部から流れて堆積したとは考えられない。また、土器片には摩滅はなく、ほぼ完形に復元されるものが多いことも上部からの流れ込みでないことを示している。そして、包含層下の遺構群と包含層出土土器に時間的な差はない。住居址の床面直上土器と包含層の接合資料は見られないことから両者は本来区別（遺構の居住者と包含層の土器製作者）されるべきものであろうし、上層の包含層と下層の遺構という関係からもそれは当然であろうが、前述したように両者に時間的な差はない。そこで問題となってくるのが、第85図から明らかなように、包含層を

切って存在する遺構が全くないことで、遺構には確実に諸磯ｃ式期のものが含まれることから、少なくともこの包含層が諸磯ｂ式期に形成されたことはあり得ないことになる。諸磯ｃ式期の遺構廃絶後、同じ諸磯ｃ式期中に短期間で形成されたものと推定するのが妥当であろう。今回の調査区域上端より上部はさらに急傾斜となっており、居住は不可能である。とすれば、今回の調査区域以外で、遺構集中部より上部の部分に、諸磯ｃ式期を中心としたさらなる遺構集中部が存在することを考えるべきであるかもしれない。

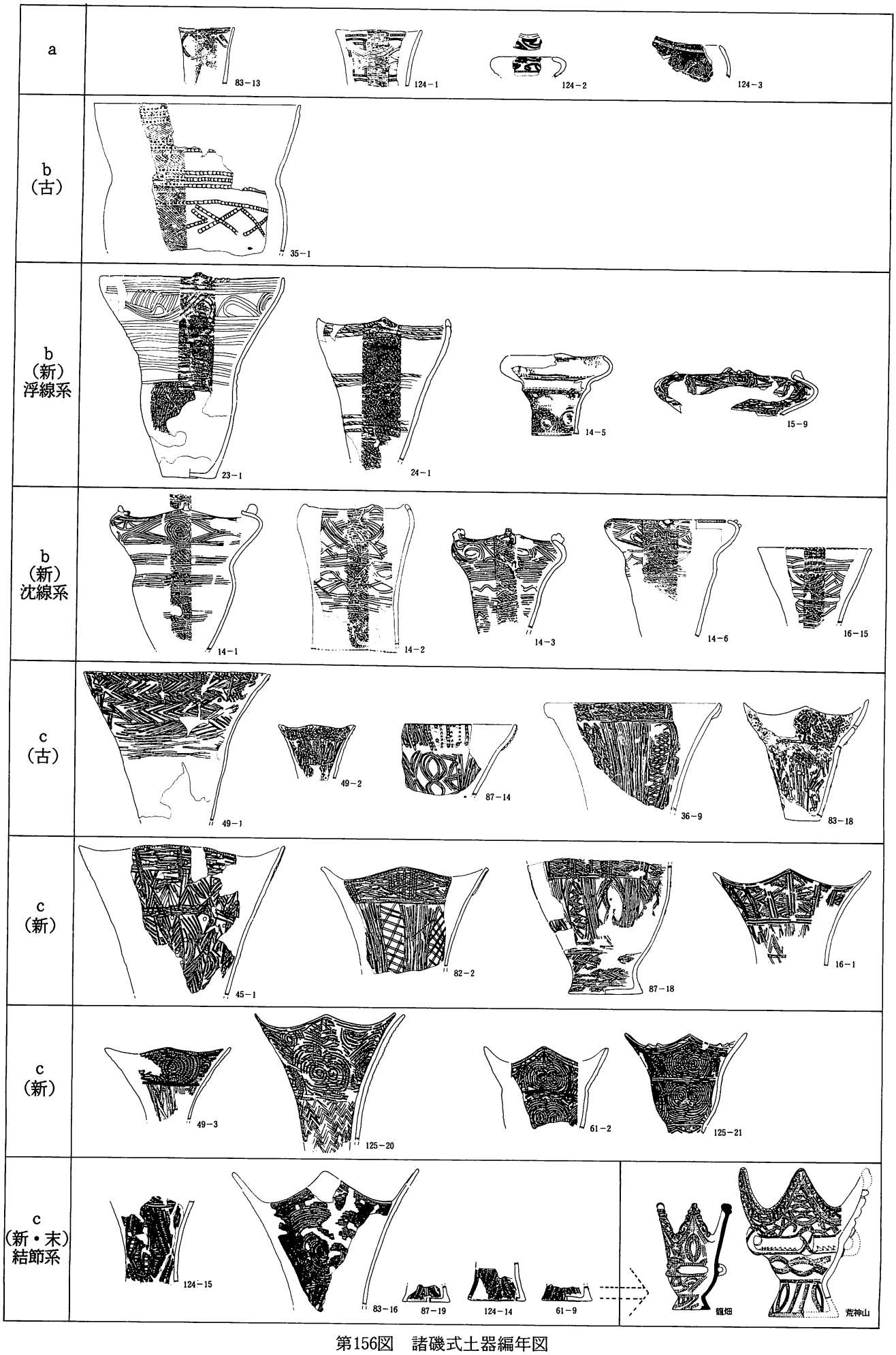
第３点として、土器を取り上げる。今回の調査で出土した、図上復元可能な土器は100 個体を超える。その殆どが諸磯ｂ式・ｃ式で、僅かに諸磯ａ式などを含む。また、小破片ながらも東海・関西系の土器群がこれらに伴って出土している。ここでは、諸磯ａ式・ｂ式・同ｃ式および東海・関西系土器のそれぞれについて概観することとする。

諸磯ａ式土器は、復元可能な資料は非常に少ない。遺構から出土したものは第83図13に示した１点だけである。縄文を地文とし、弧状に沈線を施文したもので、その一部は爪形文となっている。このほかではグリッドから数点出土しているだけである。第124図の１～５を諸磯ａ式土器としたが、１～３は沈線を弧状に配するもので、４は胴部下半に縄文が施されている。５は全面に結節の羽状縄文が施されるもので、図中には結節のラインが２本見られるが、結節と結節の中間までが１単位となり、この図中では２単位を異方向に施文して、単位の接する部分が羽状縄文状に見られる状況となっている。ただ、本資料は口縁部が内湾していることからｂ式とすべきであるかもしれない。

諸磯ｂ式土器は４号・５号・６号・10号住居址と９号住居址の一部、土壙・包含層およびグリッドから出土している。特に４号住居址の一括資料は実測可能な資料が31個体を数え、良好な資料と言えよう。有孔土器や浅鉢を除いた有文深鉢で見てみると縄文を地文とし沈線を主文様とするものが主体を成す。４号住居址では殆どがこのタイプである。ここではこの一群をＡタイプと仮称する。一方、５号・10号住居址では縄文地文でヘラ切り浮線文を有するものが主体を成す。これをＢタイプと仮称する。また９号住居址の資料である第35図１は前述の２タイプとさらに違い、縄文地文に連続爪形文を施すものである。これはＣタイプと仮称する。今回の調査では各遺構の切り合い関係が今一つはっきりしないこともあって、遺構に伴う土器という面からこれらの前後関係を判断することができないため、土器自体の状況から見て行くしかない状況である。現在諸磯ｂ式土器は３ないし４段階に分けられているが、今回の調査でも唯一例のＣタイプは、爪形文の状況から諸磯ａ式とすべきか判断に迷うところであり、諸磯ｂ式とすれば最も古く位置付けられるものであろう。また、それぞれの主文様であるヘラ切り浮線文と沈線文では、前者が古く位置付けられていることから、Ｂタイプがやや先行することになろう。一応、ここで得られた資料からはＣ→Ｂ→Ａという諸磯ｂ式土器の流れが想定される。ただし、４号住居址の一括資料中にはＡタイプだけでなく、第15図９のようなＢタイプも含まれており、ここでの時間差はあってもごく僅かなものと思われ、諸磯ｂ式のバリエーションとすべきものであろう。したがって、ここでは大まかな区分として、爪形文主体の古段階（Ｃ）と浮線文・沈線文主体の新段階（Ｂ・Ａ）とに分けておくこととする。

諸磯ｃ式は９号住居址の一部と13号・14号・15・18号・16号・23号住居址と土壙・包含層およびグリッドから出土している。全体的な出土量はｂ式土器より遙かに多く、また、住居址の位置からは遺構集中区の傾斜上部にｂ式がみられ、ｃ式は包含層が形成され始める９号・13号住居址以下の部分に集中している。さて、今村啓爾氏によれば、ｃ式は３細分されており、おおまかに貼付文（ボタン状・棒状）の発達の著しい古段階と結節状浮線文の発達する新段階、さらにはｃ式の終末として結節状浮線文が発達し過ぎたために結節状沈線文を代用した一群などを挙げている。本遺跡出土の諸磯ｃ式土器を今村氏の細分[4]に照らしながら概観すると以下のようになる。

古段階；本遺跡の資料では棒状貼付文とされる、口縁部に縦方向に粘土紐を張り付け、爪形の刺突を施すものが多く見られる。住居址の資料では15・18号住居址がこれに相当する。第49図に示した有文深鉢７点のうち、６点までがこのタイプである。その他の遺構では一括資料としては見られないものの、９号住居址の第36図９、包含層では第87図14・21、第88図27・29など散見される。ただ、本文中でも述べたように、長野県の下島式に代表される、貝殻状や円形の大型貼付文を有するものは皆無である。この傾向は本遺跡のみならず、本県の傾向とも



第156図　諸磯式土器編年図

言えるものであろう。

新段階；本遺跡の資料では、新段階として位置付けられると思われるものが非常に多いが、古段階の棒状貼付文に比べて細い棒状貼付文（連続爪形文が施されているので、結節状浮線文と言うことができよう）が数条１単位として施されるものが多い事が挙げられる。14号住居址の第45図１、16号住居址の第52図３、23号住居址の第61図４、３号土壙の第82図２などがあるが、包含層には多く、第87図17・18、第88図22・24・26・28などがここに含まれる。これと同程度の割合で、今村氏が終末とした結節状沈線文の土器が出土している。住居址の資料で復元実測されたもののうち、前述の結節状浮線文と同一住居出土とすることができるものは16号住居址の第52図４と23号住居址の第61図１の２点だけであるが、破片資料ではかなり多くの伴出例があり、この２者に時間的な差を見いだすことは不可能と思われる。むしろ、基本的には同じ施文であり、連続爪形文を施文する部分に粘土紐があるかないかの差に過ぎず、結節状浮線文のバリエーションとして、結節状沈線文をとらえるほうが妥当性があると思われる。包含層出土資料で示した第87図13や15は、口縁あるいは胴部の横方向の連続爪形文は粘土紐上に施文されるが、それ以外のものは器面に直接施文されているのであり、結節状浮線文と結節状沈線文の併用と言えるものである。

今村氏がやはり新段階としたなかに見られる、渦巻き状の結節状浮線文を主文様とした土器が多くみられる。図示したものは第49図３、第61図２・５・９、第83図16、第87図19、第124図13〜15、第125図20・21の11点に過ぎないが、破片資料では非常に多い。これらの資料は口縁部だけに結節状浮線文が施されるものと、底部まで結節状浮線文が施文されるものとに大別される。第49図３、第125図20が前者に、それ以外が後者となる。前者では、渦巻き状の結節状浮線文が口縁部〜胴部上半に施文され、下半は縦方向の綾杉状沈線と円形貼付文が施される。後者には第61図２・第125図21のように口縁部と胴部の２段に渦巻き状の結節状浮線文が施文されるものがみられる。第125図の20と21は、95グリッドの包含層下において並ぶように出土しており、前者と後者には時間的な差はないものと思われる。さて、後者のなかで、特に底部に結節状浮線文の施文される第61図９、第87図19、第124図14などは非常に細密な結節状浮線文となっており、中部高地で見られる、籠畑式のトロフィー形土器の底部文様と極めて類似するものである。トロフィー形土器の半截竹管による連続爪形文は器面に直接圧し当てて施文するものであるが、これには半截竹管の半截面を用いたものと、その逆に背面を用いたものとの２種類が存在する。後者は爪形文の施文部分が凹んでいるため一目瞭然であるが、前者では非常に幅の狭い竹管状工具（２㎜程）を用いているため、連続爪形文の中心部分が盛り上がることとなり、あたかも粘土紐を張り付けたごとくである。これらの底部ちかくは縦方向に数条の連続爪形文を直線と弧状に組み合わせたもので、前述した本遺跡出土の底部の文様配列と同じである。このことから、第61図９、第87図19、第124図14などが諸磯ｃ式のなかでも終末期に位置付けられ、十三菩提式につながるものであろう。なお、これらの上半部になると思われるものが第83図16や第124図15であろう。

第120図に示した関西・東海系土器では、１を羽島下層式もしくは清水ノ上Ⅱ式とした。１は２枚貝の貝殻を縦位に刺突したもので、羽島下層式に見られる表裏条痕はなく、清水ノ上Ⅱ式[5]の横位の貝殻刺突とも合致するものではない。したがって、厳密にはこれらのいずれにも含まれないかもしれないが、鳥浜貝塚で羽島下層式の搬入品の可能性があるものと分類されている一群には条痕の見られないものも含まれており[6]、バラエティーがあるのは当然であろう。本資料は前述した二者に類似するものであり、東海地方以西の搬入品あるいはその影響下で作られた前期後半の資料と言えるものであろう。

遺構からの出土資料としては、35に示した資料がある。ここでは、羽状縄文地文と沈線施文から、この一群を、北白川下層Ⅱ式の範疇に入るものとしておいたが、これは４号住居址の一括資料中に含まれていたものであり、これが、関東地方の諸磯ｂ式と併行関係にあることが窺われる。なお、36以降に示した凸帯文を有する一群は、本文中でも述べたように、本遺跡は勿論、県内でも出土量が比較的多くかなり活発な交流が窺われるわけであるが、その併行関係についてはもうひとつはっきりしないままである。

第４点として、生業の問題がある。今回の調査では、大型・小型の炭化物、骨片、魚骨片などが出土している。

個々については先生方の詳細な報告があるので各節を参照していただくこととして、ここでは、報告を基に出土遺物との拘わりと生活の一端に触れてみたい。

石器では石鏃と石皿が非常に多いことが、今回の調査の特徴と言えるものであろう。また、打製石斧や磨石、第10表に示したように刃器としての利用の考えられる加工痕あるいは使用痕のある剝片も多く出土している。

石鏃は実測図には273点を示したが、実際にはこれより遙かに多く存在したと思われる。一般に前期段階では石鏃が多いとされているが、今回の調査幅、面積でのこの出土量は正にこれを裏付けるものである。獣骨ではシカ・イノシシが確認されている。

石皿は総計で39点である。やはり調査面積からすれば非常に多いと言えよう。板状石皿と凹みをもつ中期的石皿の2種類が見られるが、板状石皿は4点に過ぎない。また完形は板状の2点と凹みをもつものの1点だけで、凹みをもつものではさらに1点が完形に復元されている。他は総て半分以下の破片である。さて、本文中でも述べたが、板状石皿の磨り面には微妙な凹みの小区画が存在する。これらが磨りによるものであるとすればごく限られた範囲での磨りを何回か繰り返した結果ということになるが、むしろ「トチ剝きの台石」のようにタタキによって面が形成されたとするほうが妥当であろう。中央に凹みをもつ中期的石皿にはこのような使用方法を当てはめることは無理があると思われ、製粉具とする解釈が最良であろう。板状石皿とされる一群は、中期的石皿と伴出することからも両者に全く同様の使用方法を想定する必要はないと言うことができ、「タタキ」のための台石として、区別すべきであろう。当然、板状石皿という呼称も考え直すべきである。

この石皿、台石とセットを成す磨石や敲石も出土量が多い。磨石は113点以上を数え、敲石は明らかなものは2点である。磨石と呼称するものについても、頻繁な敲きによって磨り面と同様な状況になったものが含まれていると思われ、敲石の実際の量はかなり多くなると考えられる。本文中で（ハ）と分類した稜磨石はやはり多く25点を数える。この一群も使用頻度の高いものが多く、元々の半分ちかくになったものも存在する。これらの道具類に拘わる植物性遺物として、クリ・クルミ・ドングリ類が出土している。この中でもとくにクルミが多い。また、ドングリ類はアク抜きの必要なコナラ亜属が主体である。さらに、4号住居址から出土した炭化種子塊は栽培種のエゴマであることが確認された。本県内では初めての確認例であり、また、台地上の住居址からの出土例としては最古の例と言えるものである。エゴマについては、重要な問題であるため別稿にまとめることとした[7]。なお、エゴマ同様の栽培種としては、アブラナ類が確認されている。

この他、炭化球根類が30点以上出土しており、また土器内面のオコゲとしても確認されている。球根類のオコゲは水呑場北遺跡でも良好な状況で出土しており、これについては松谷氏による電子顕微鏡での観察結果が前節に報告されている。炭化球根類の同定は非常に困難とされているが、電顕での細部にわたる観察が行われた貴重な例である。これまで球根類では、平塚市上ノ入遺跡で中期の住居址から出土したものが報告されている。形状・大きさ・断面の状態などからキツネノカミソリに類似するという報告がある[8]だけで、詳細は不明なままである。本県内でも花鳥山、水呑場北遺跡以外にも中道町上の平遺跡[9]および釈迦堂遺跡群から出土している。全国的規模で見ればかなりの量が確認されていることと思われるが、もともと非常に残りにくいものであるうえに、種の同定が困難なことや一遺跡での出土量が多くないこともあって、なかなか報告されないのが実情であろう。縄文時代の生業を考えるうえで「採集」は最も重要な柱と言えるものである。採集の中には根茎類が当然のことながら含まれ、その中でも球根類は重要な位置を占めるものである。しかし、その割りにはあまりに不明な部分が多い。堅果類と違い、どうしても遺存率の悪いものであるから、僅かな出土資料であっても報告は徹底しなければならない。

僅か1点だけではあるが、コイ科の主鰓蓋骨（エラ）の一部が確認された。本県のような山間地域では、どうしても漁労にかかわる部分についての究明が遅れがちである。今回の調査では、土器片錘が4点出土している。重量は4～6ｇ程度である。漁網錘としては軽いものであり、流れのある部分での漁に適するとは思われないが、いずれも長軸の両端に抉りを入れて土器片錘としたものである。県内でも、土器片錘や切目石錘などの魚網錘は散見されるが、量は多いものでない。本県で最大級の縄文遺跡としてすぐに思い浮かぶ釈迦堂遺跡群でさえも、

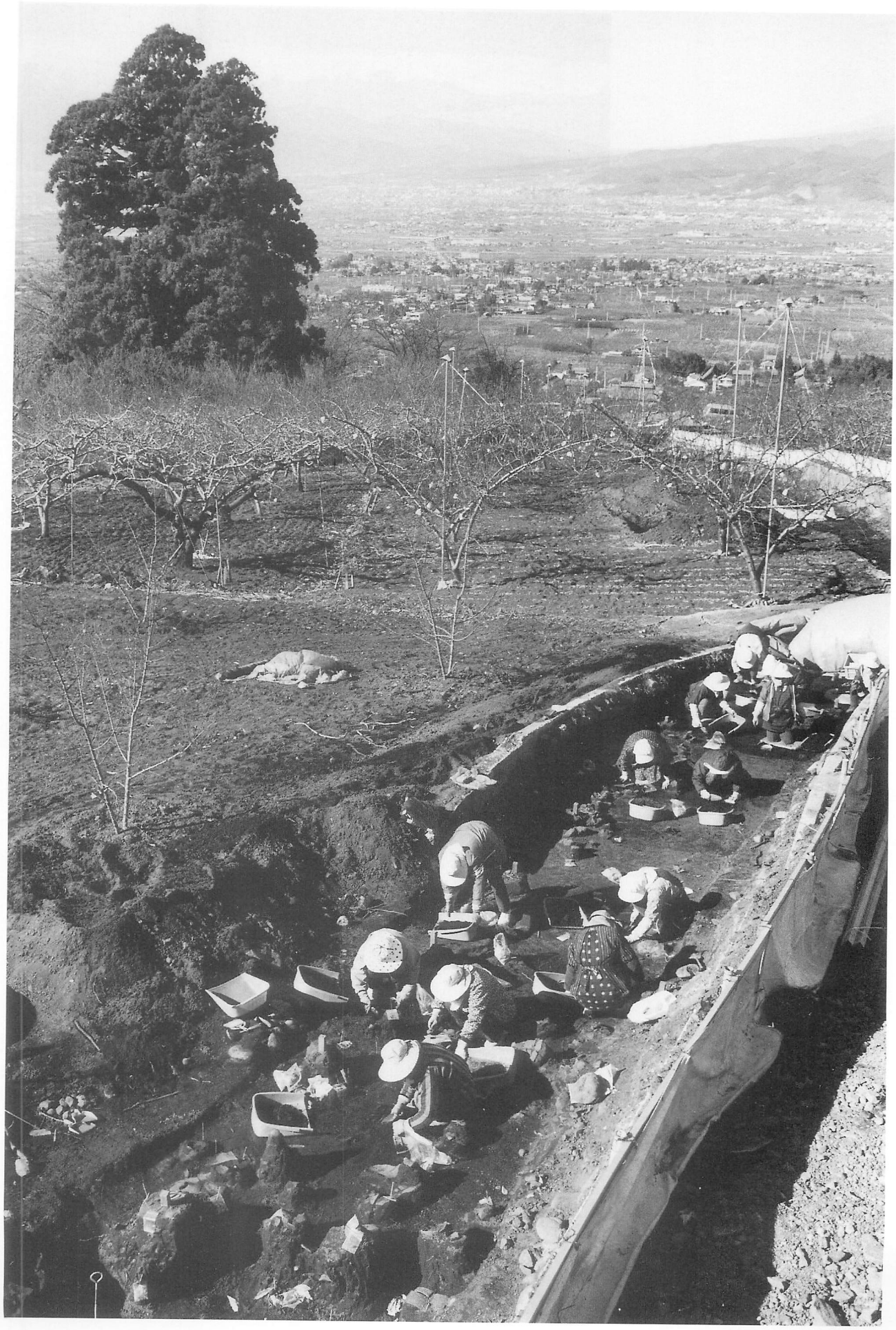
土器片錘は僅か5点に過ぎない。また、筆者は以前県内の石錘について触れたが[10]、そのうち、魚網錘である切目石錘は9遺跡で確認されているだけである。そして、土器片錘、切目石錘を問わず、魚骨と伴って確認された例はない。本遺跡の今回の確認で確実に河川・湖沼での漁が行われ、魚を捕食していたことが確認されたことになる。

以上のように、今回の調査では様々な動植物性遺物と、その捕獲・採集に拘わる遺物が出土している。本遺跡では早期の押型文期から居住の痕跡が見られるが、遺構は大規模な集落が形成される諸磯b式・c式期に限られている。つまりはごく短期間に営まれた台地上の集落と言える。この時期に居住した人口を具体的に算出することは不可能であるが、該期の遺跡としては有数の規模であることは確かであろう。水の確保については第2節で述べたとおりであるが、遺跡周辺部での堅果類や球根・根茎類の採集、シカ・イノシシの捕獲、河川・湖沼での漁労とともに、エゴマに代表される家庭園耕的栽培（農耕とは区別すべきものである）が行われ、食生活において極めて安定した状態であったと推定されるのである。

註

1）新津健・米田明訓　1985　「大泉村天神遺跡」『日本考古学年報』35　日本考古学協会
2）小野正文　1986　『釈迦堂Ⅰ』　山梨県教育委員会
3）樋口清之　1975　「花鳥山石器時代遺跡」『八代町誌上巻』　八代町
4）今村啓爾　1982　「諸磯式土器」『縄文文化の研究3』　雄山閣
5）杉崎章ほか　1976　『清水ノ上貝塚』　南知多町教育委員会
6）森川昌和・網谷克彦　1979　「土器」『鳥浜貝塚』　福井県教育委員会
7）拙稿　1989　「縄文時代におけるエゴマの利用について」『山梨考古学論集Ⅱ』　山梨県考古学協会
8）小島弘義・浜口哲一　1977　「上ノ入遺跡・炭化球根」『どるめん13号』　JICC出版局
9）渡辺誠　1987　「山梨県上の平遺跡の植物遺体」『上ノ平遺跡』　山梨県教育委員会
10）拙稿　1986　「石錘について」『一の沢西・村上・後呂・浜井場』　山梨県教育委員会

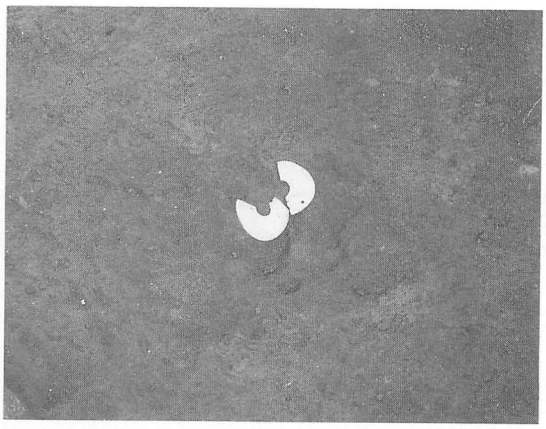
図　　版



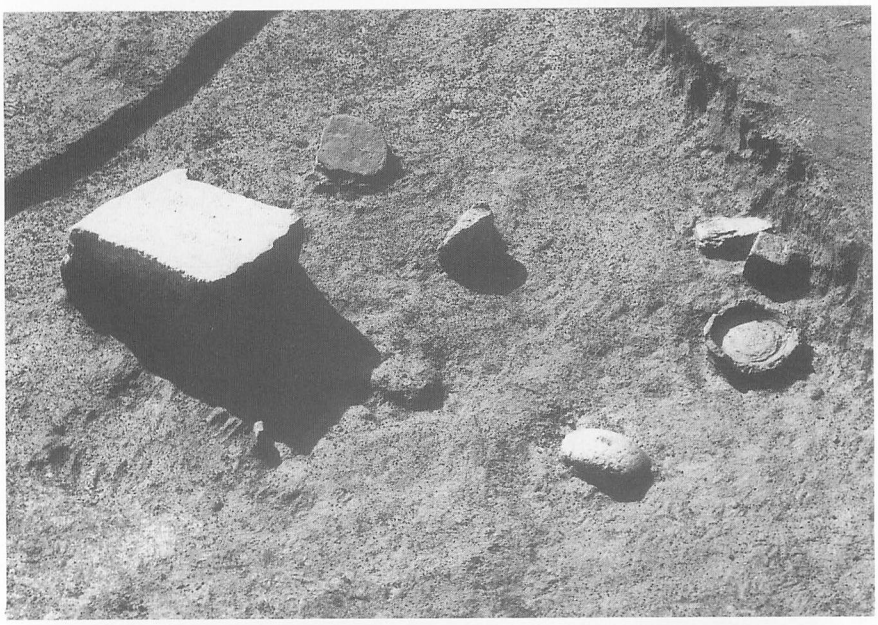
図版1　花鳥山遺跡と一本杉

図版2　1号住居址

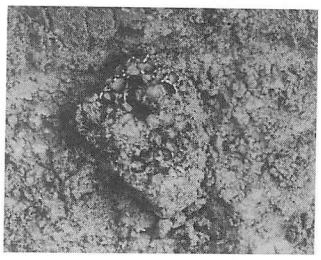
図版3　上　1号住居址　下　2号住居址

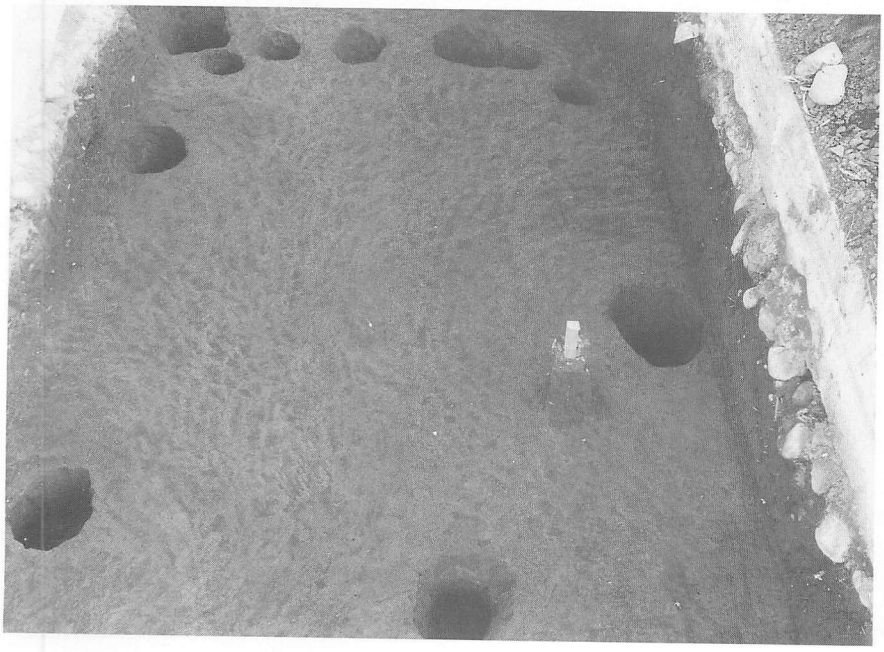


図版4　3号住居址



図版5　4号住居址

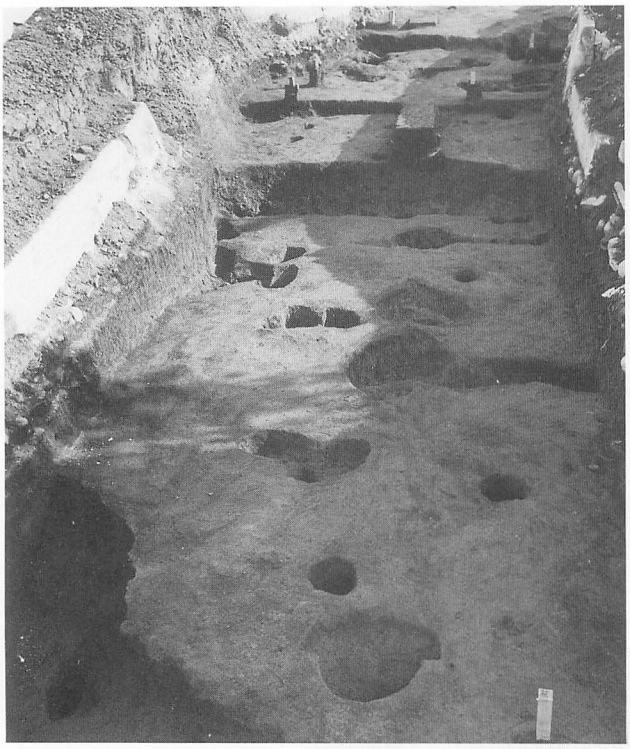


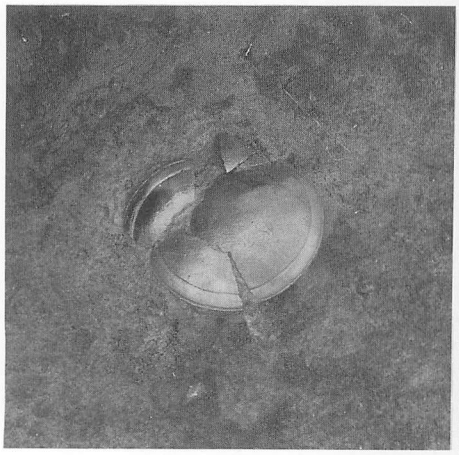


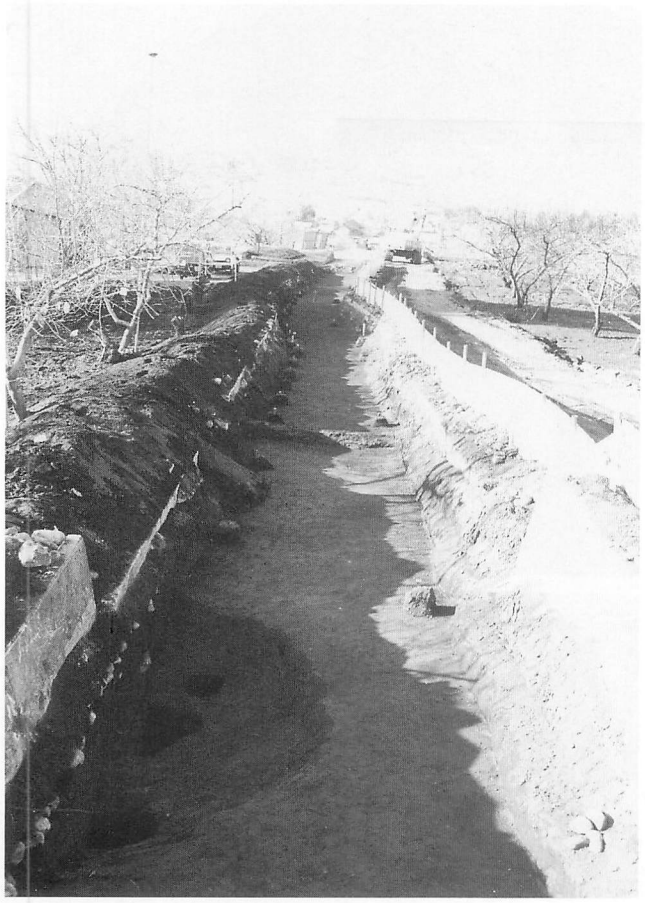
図版6　上　6号住居址・13号土壙　中・下　7号住居址

図版7　上　8号住居址・14号土壙　中　9号住居址遺物出土状況　下　8号・9号住居址

図版8　上　5号・10号住居址　中　11号・12号住居址　下　15号・18号住居址遺物出土状況





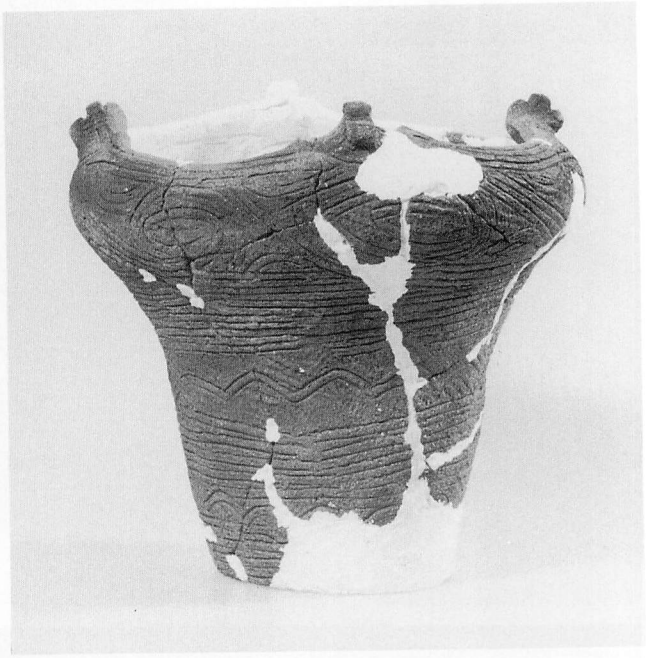


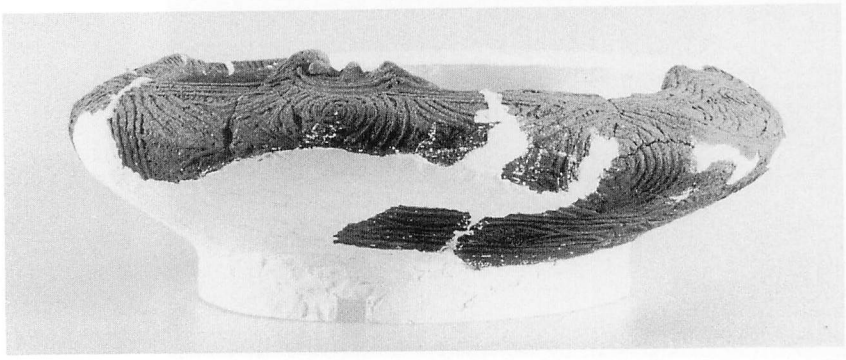
図版9　上　17号住居址　下左　17号住居址から下部　下右　20号・21号・23号住居址

図版10　上　1号土壙　中　3号土壙　下　1号～6号土壙

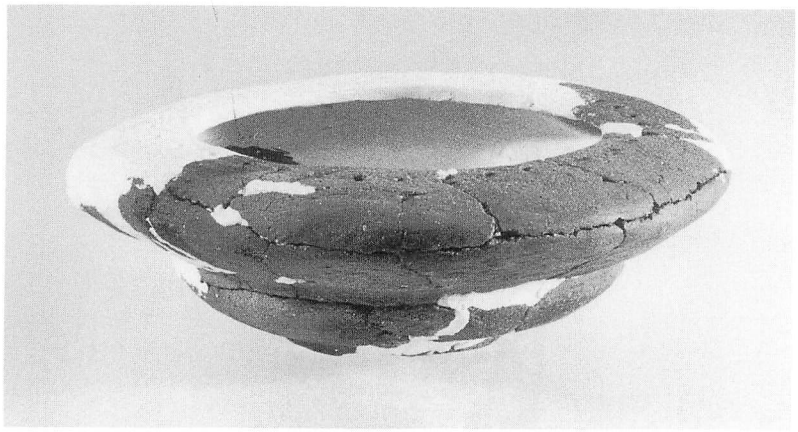
図版11号　上　18号土壙　中　32号土壙・グリッド包含層下土器出土状況　下　33号土壙

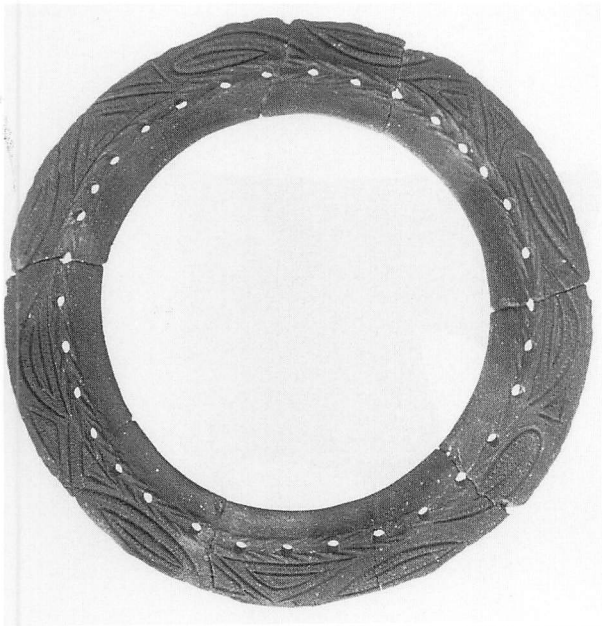
図版12　4号住居址出土土器

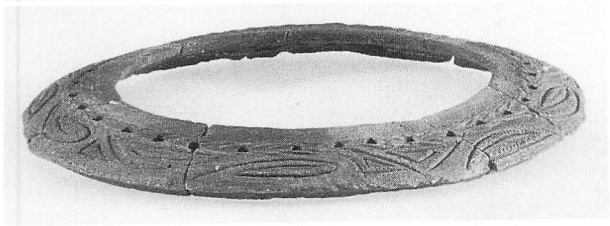


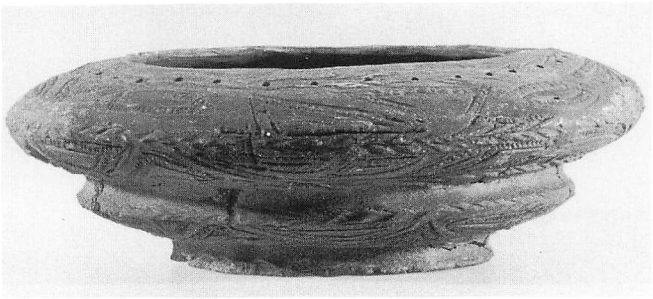


図版13　4号住居址出土土器

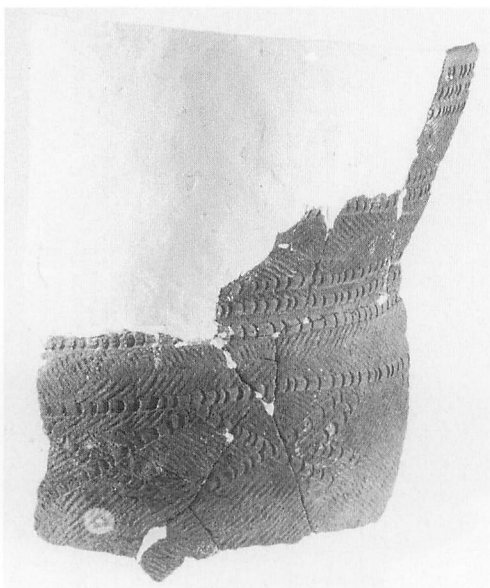


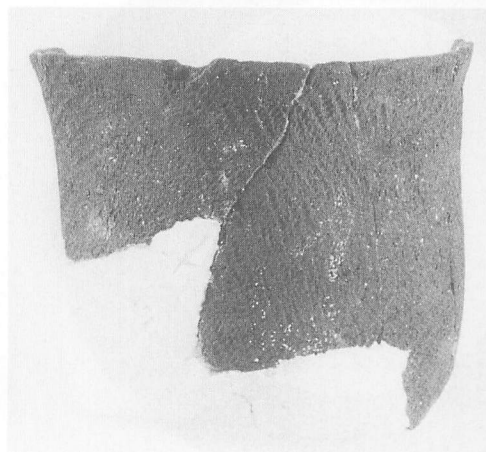




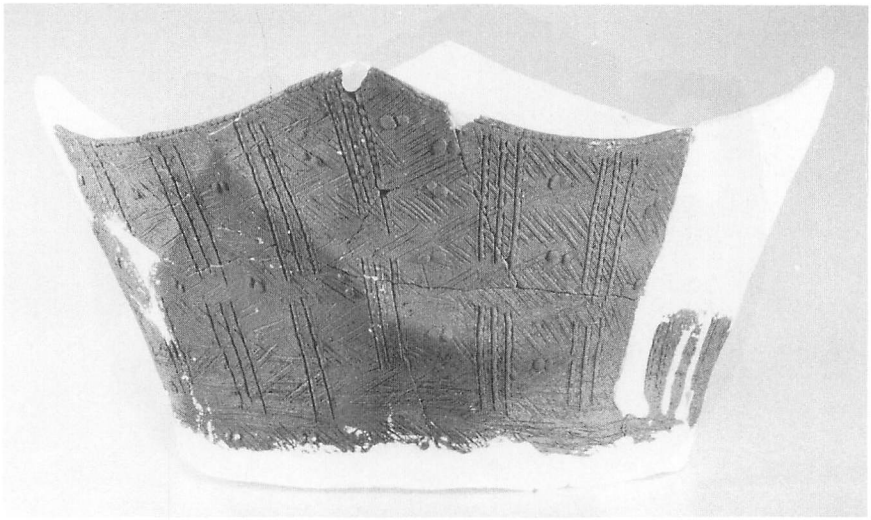


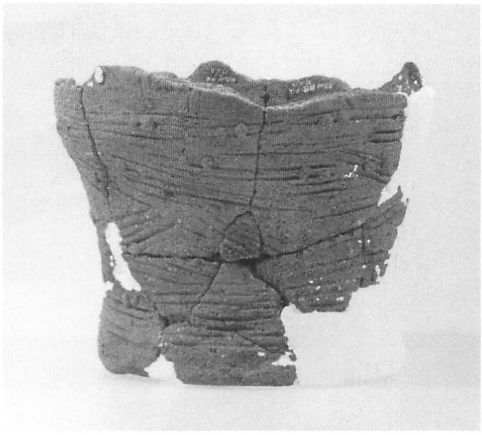
図版14　上　5号住居址出土土器　中　9号住居址出土土器　下　10号住居址出土土器



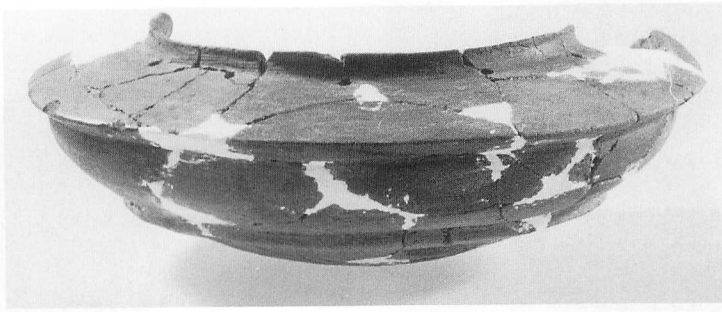


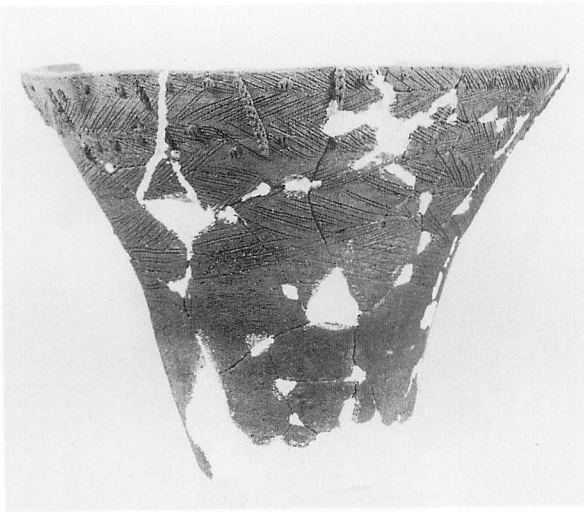
図版15　上・中　13号住居址出土土器　下　14号住居址土器

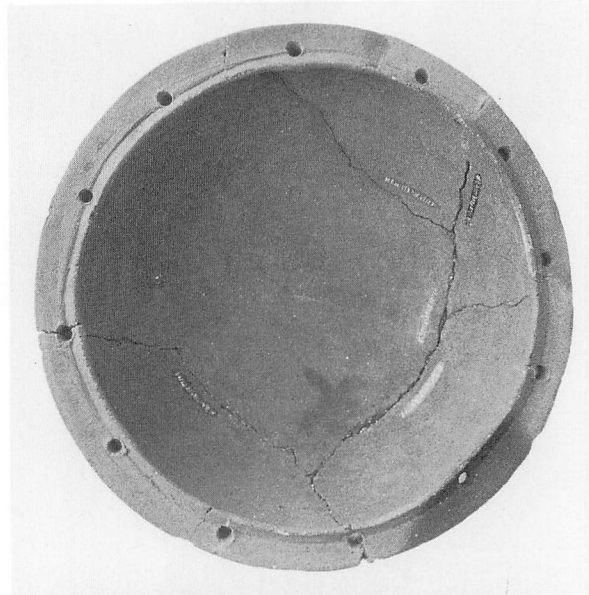


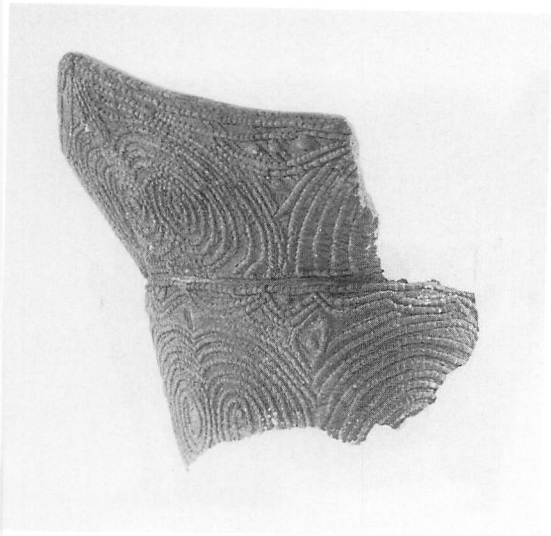


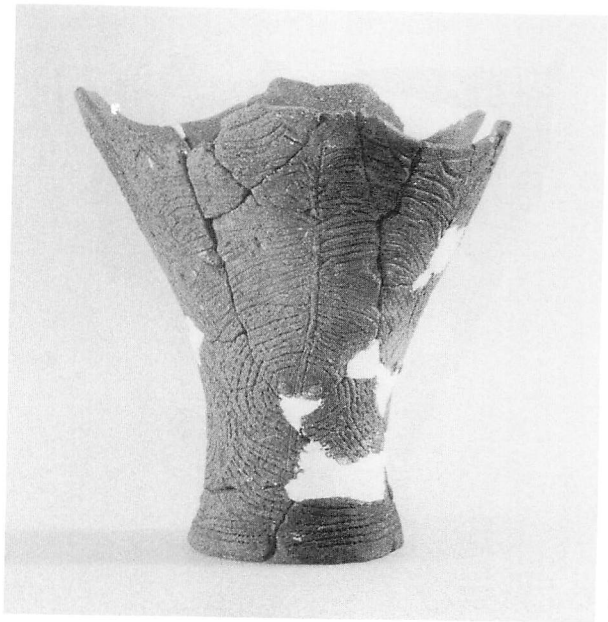
図版16　15号・18号住居址出土土器

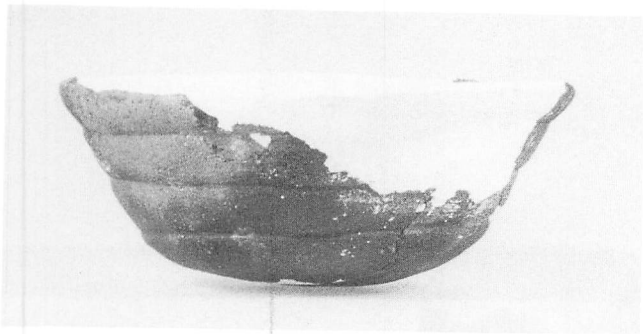






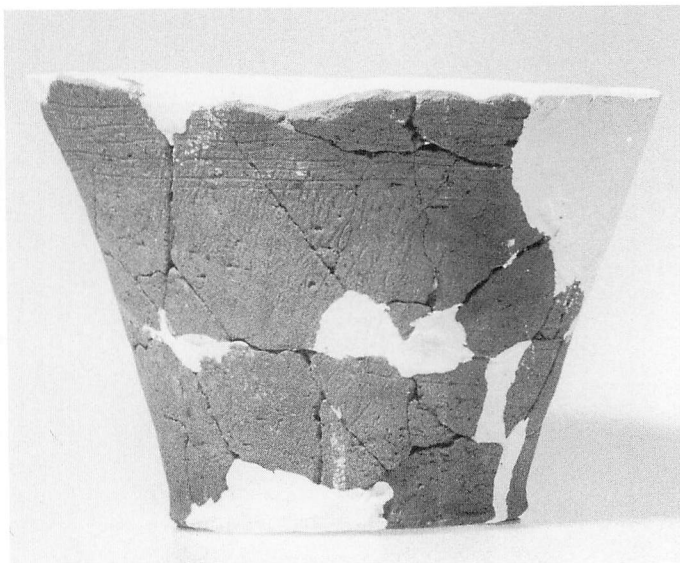




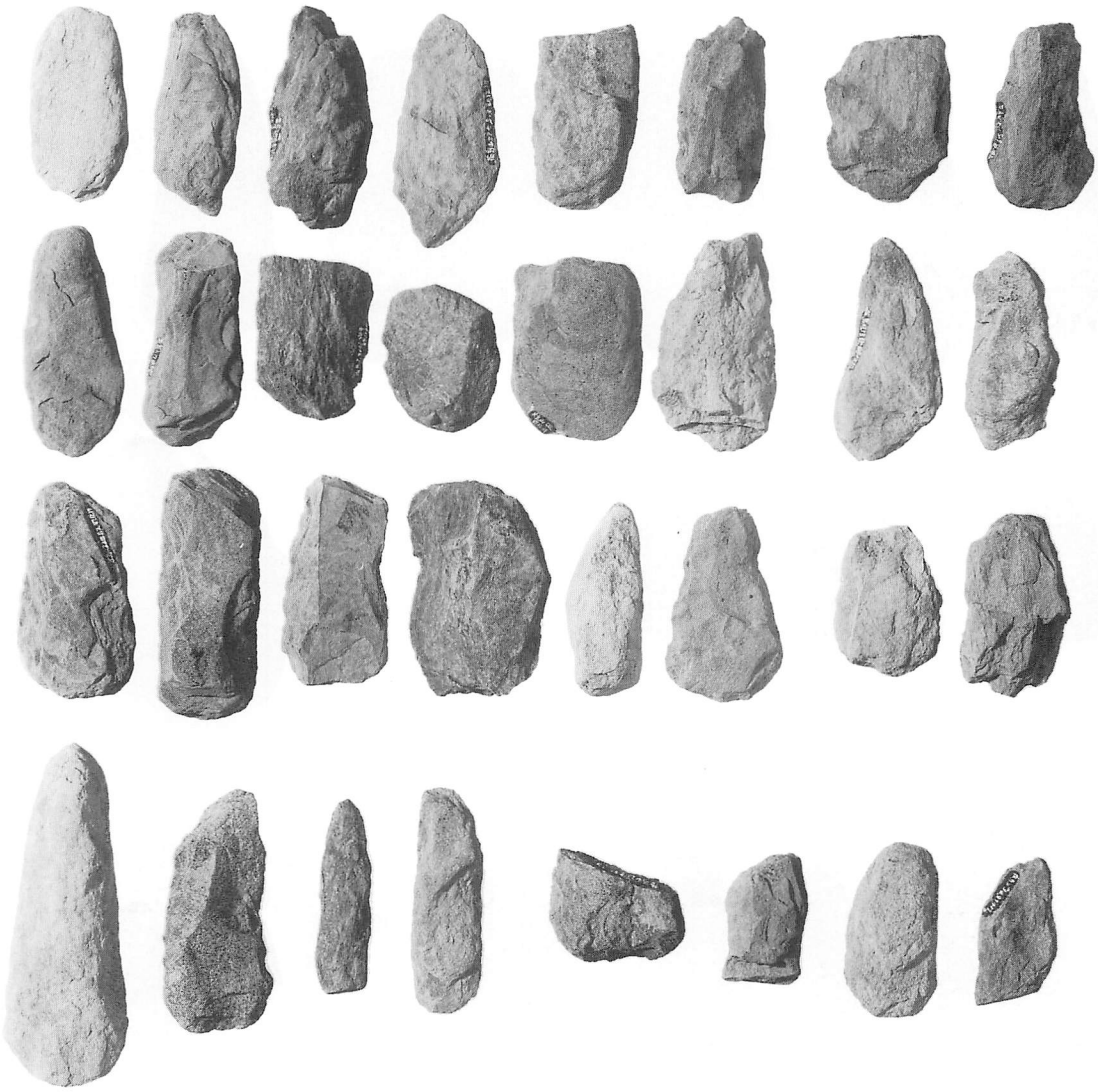


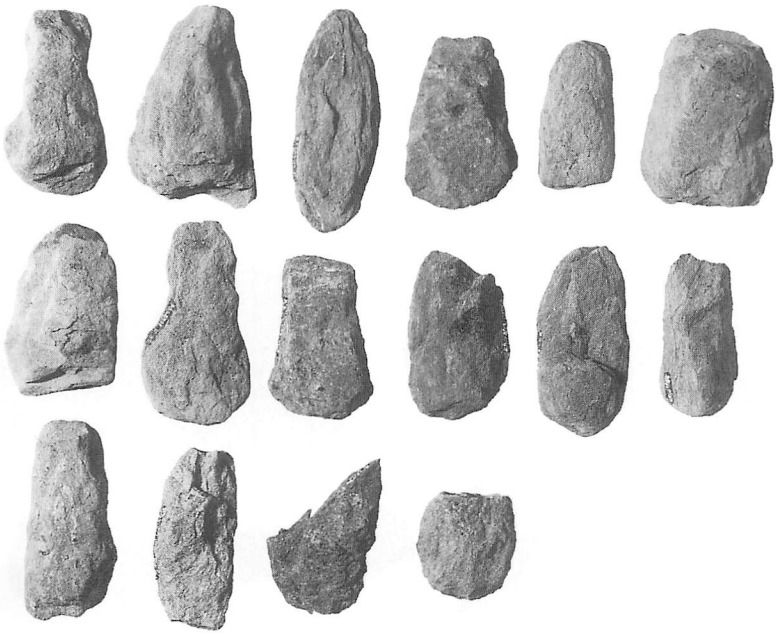
図版17　上左　23号住居址出土土器　上右　1号土壙出土土器　中　16号土壙出土土器　下左　18号土壙出土土器　下右　32号土壙出土土器

図版18　上　包含層出土土器　中　96グリッド包含層下出土土器　下　グリッド出土土器

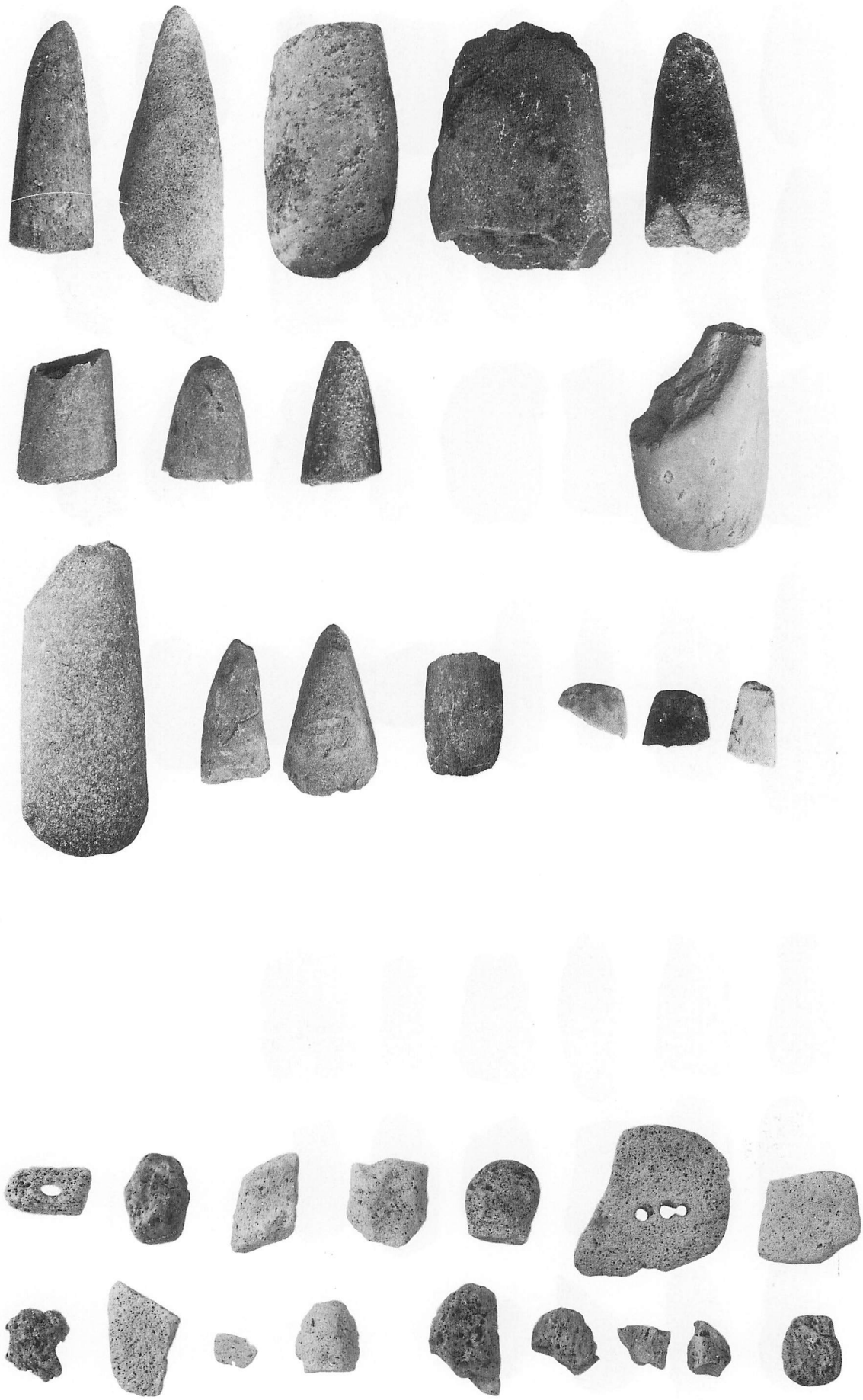


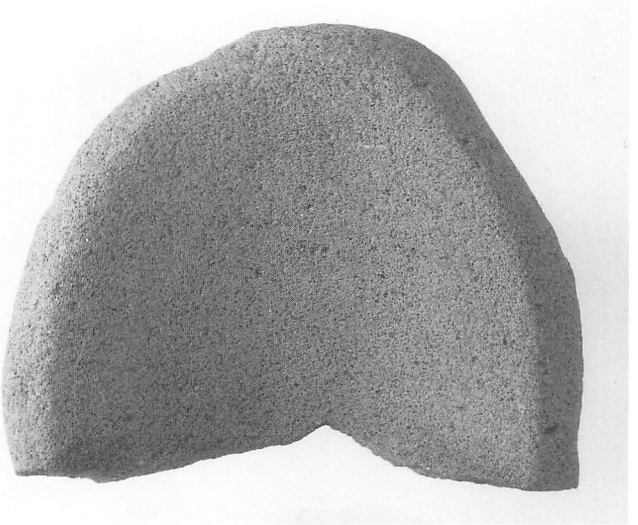
図版19　打製石斧（上　住居址　下　包含層）

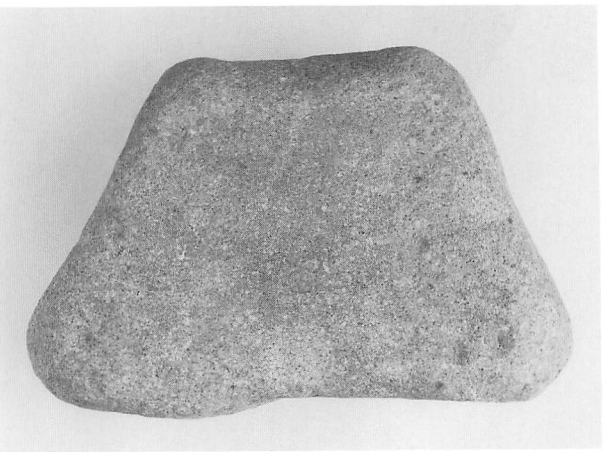


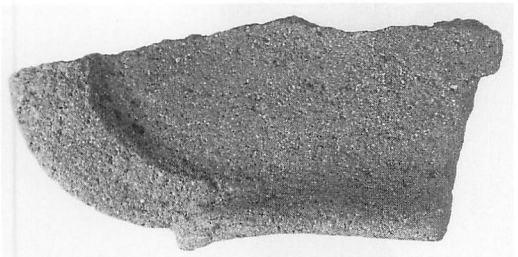


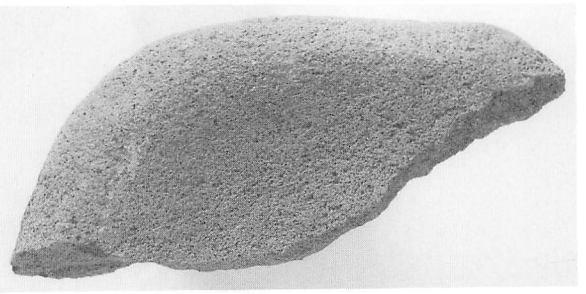
図版20　磨製石斧（上・中　住居址　中右　土壙　下　グリッド）　軽石製品

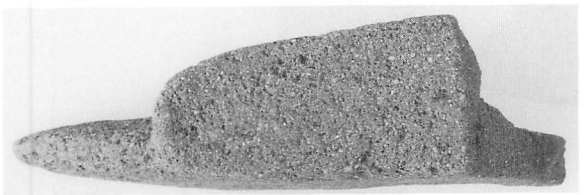


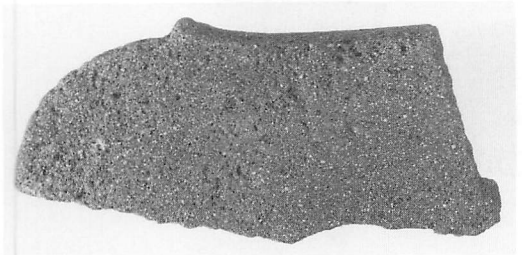






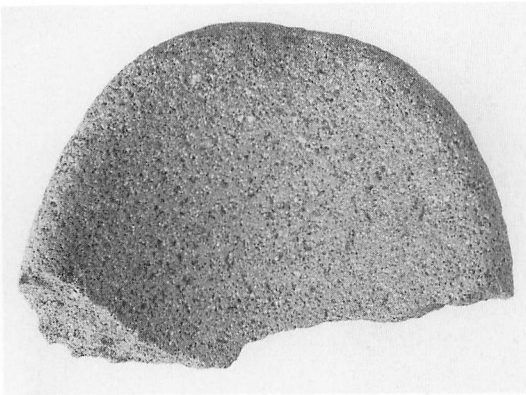


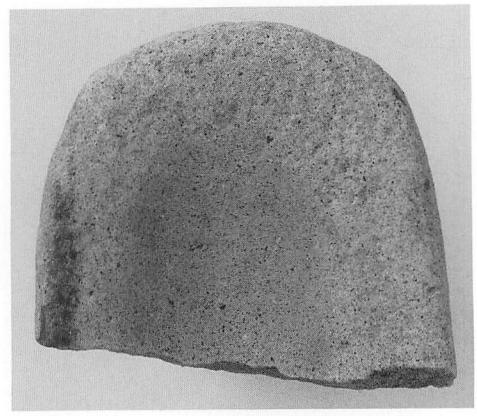


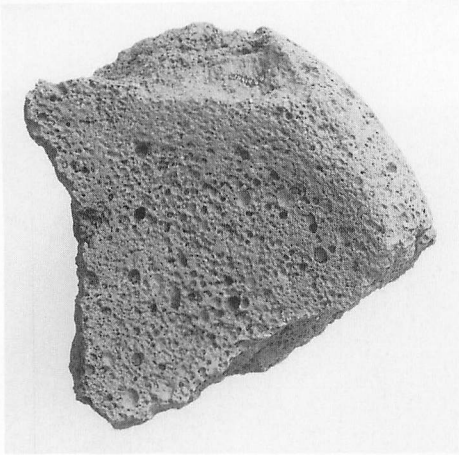


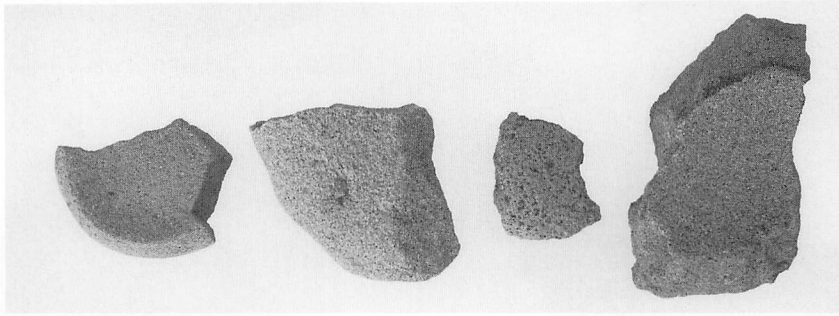
図版21　石皿（上左　5号住居址　上右　7号住居址　中　9号住居址　下左　12号住居址　下右上　13号住居址　下右下　28号土壙）

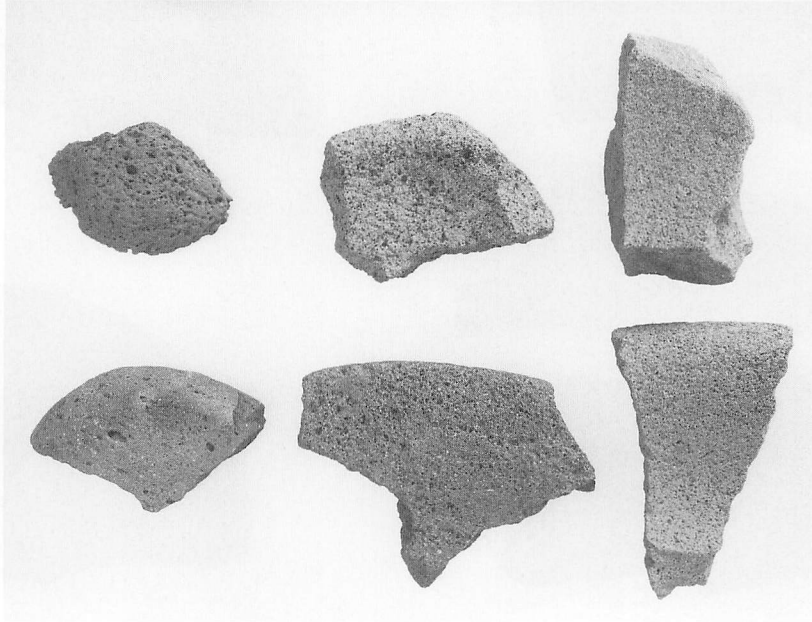
図版22　石皿（右上　包含層　その他　グリッド・表採）

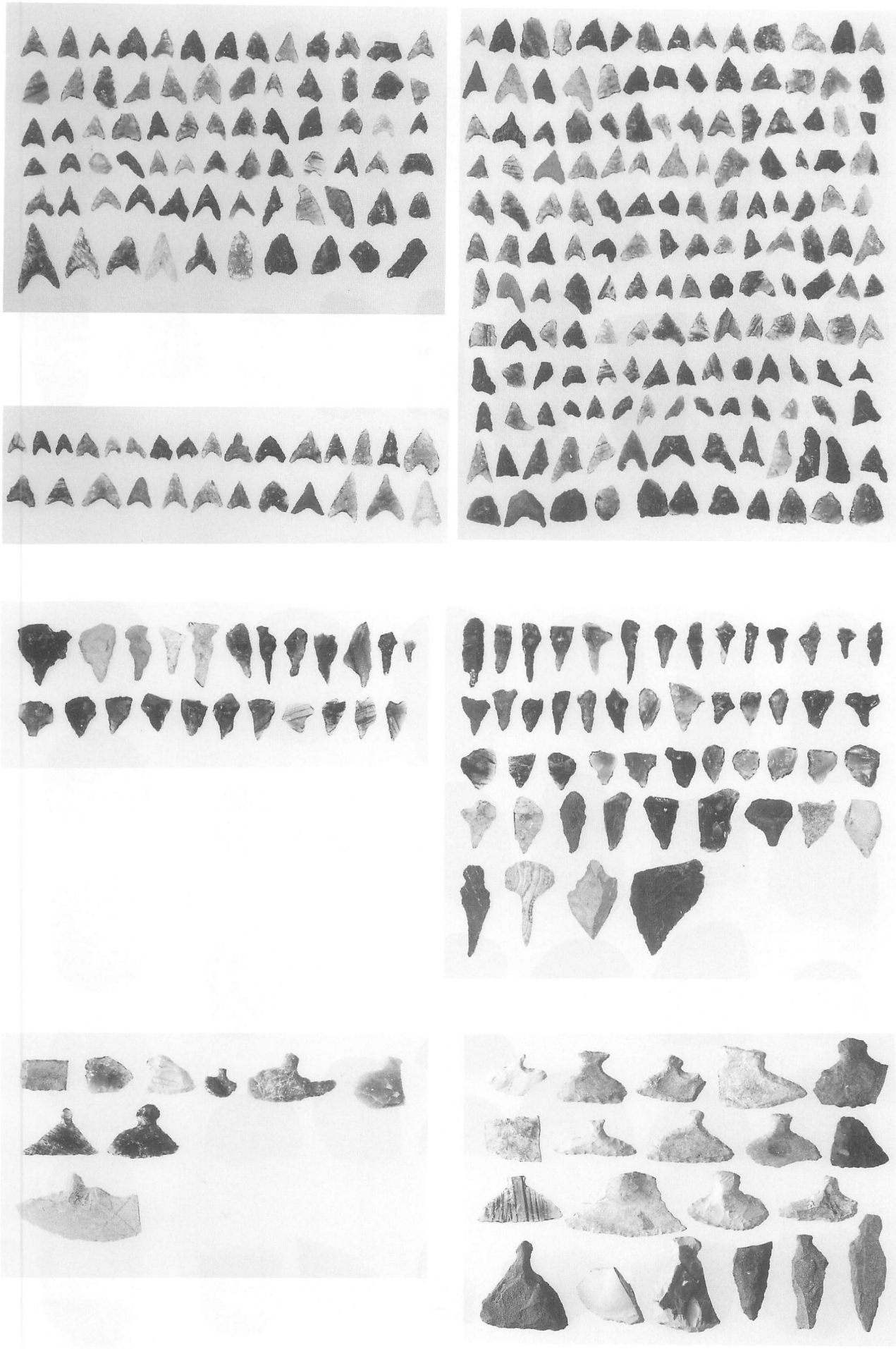






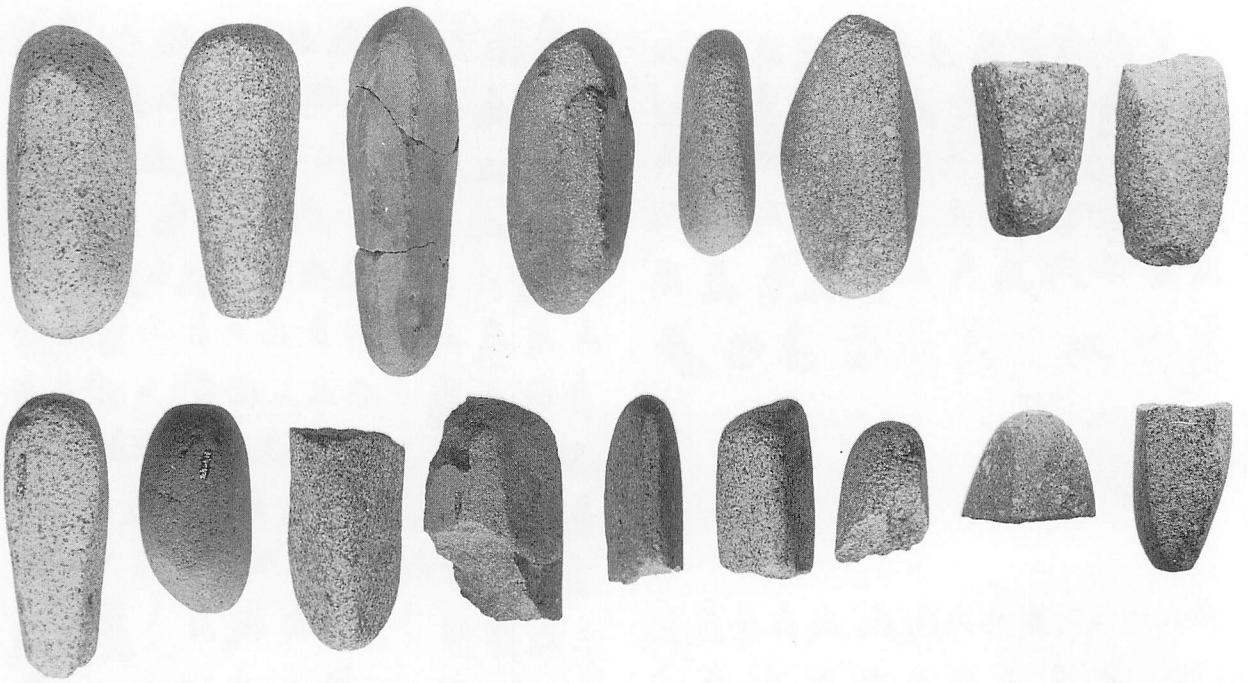


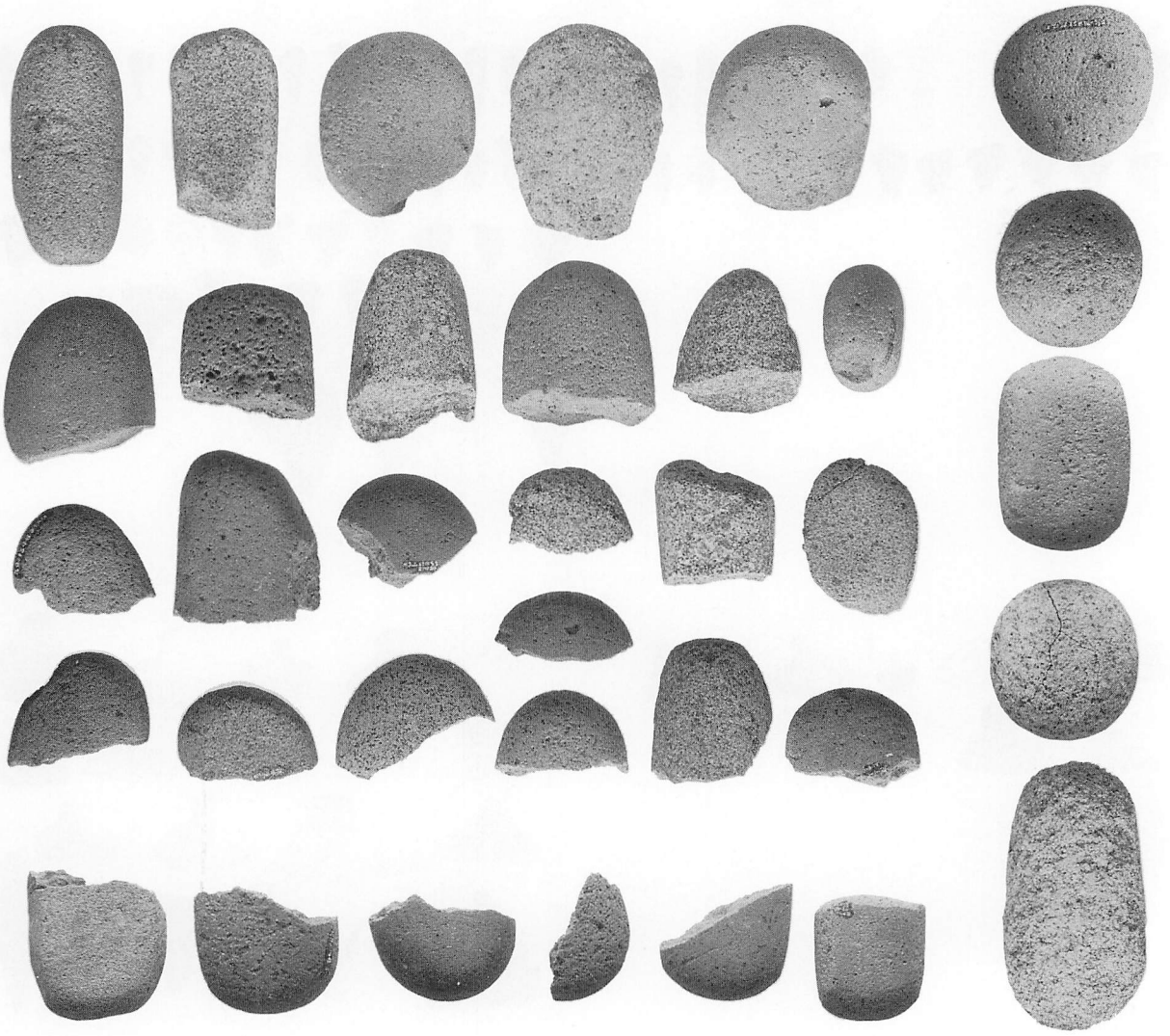


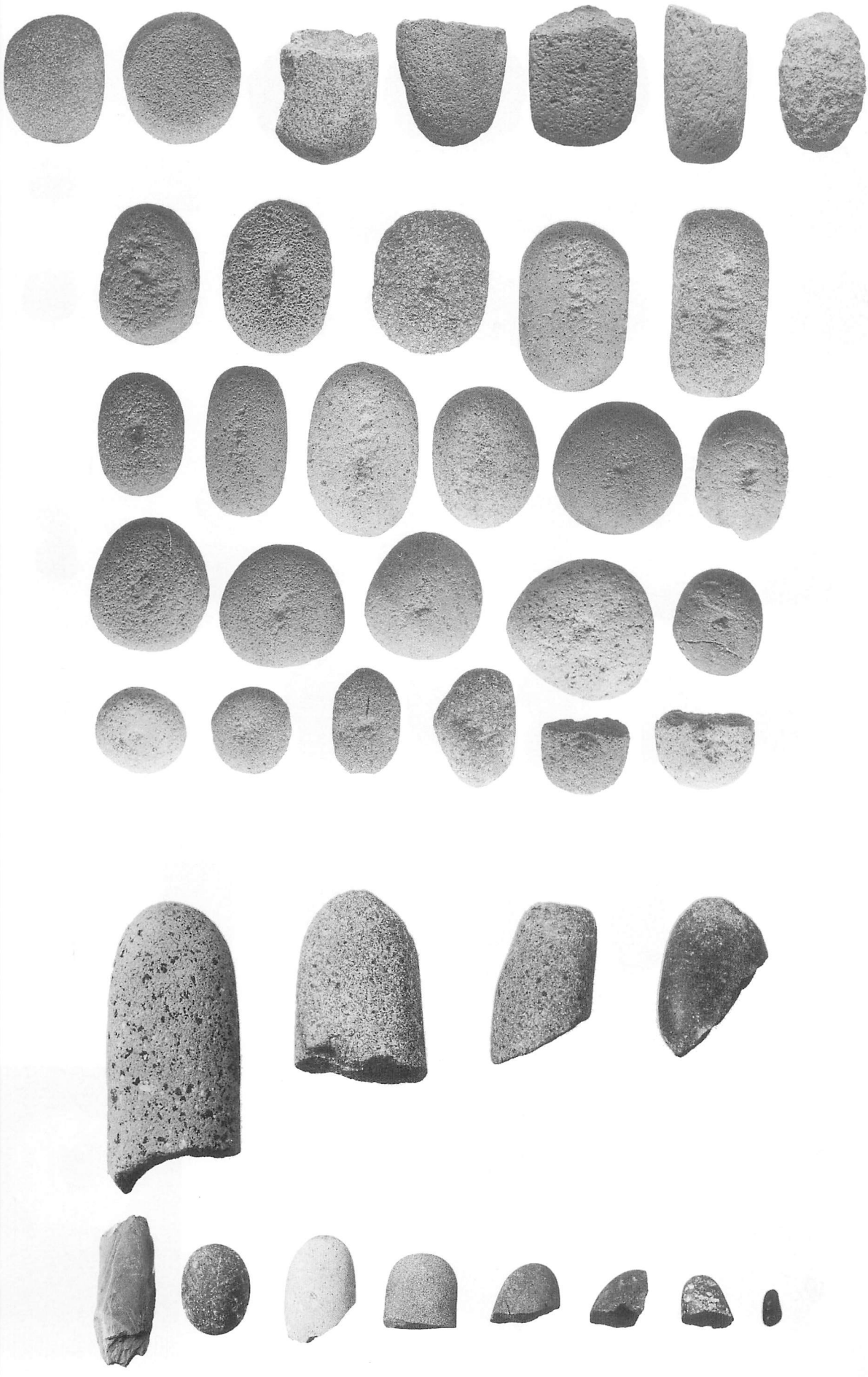


図版23　石鏃（上左　住居址　下左　包含層　右　グリッド）　ドリル（左　住居址　右　グリッド）　石匙（左　住居址　右　グリッド）

図版24　磨石（上　稜磨石　下　磨石）

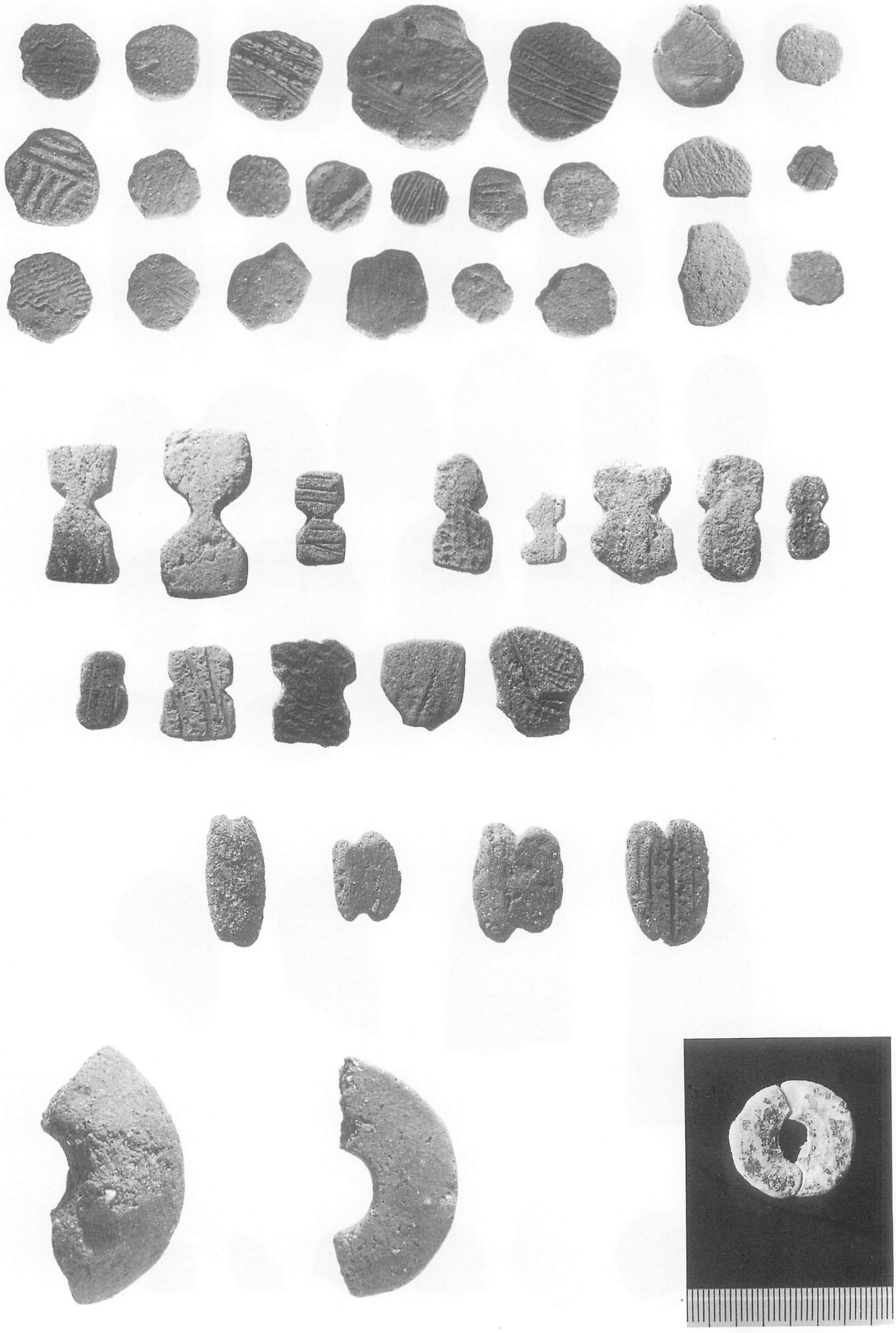




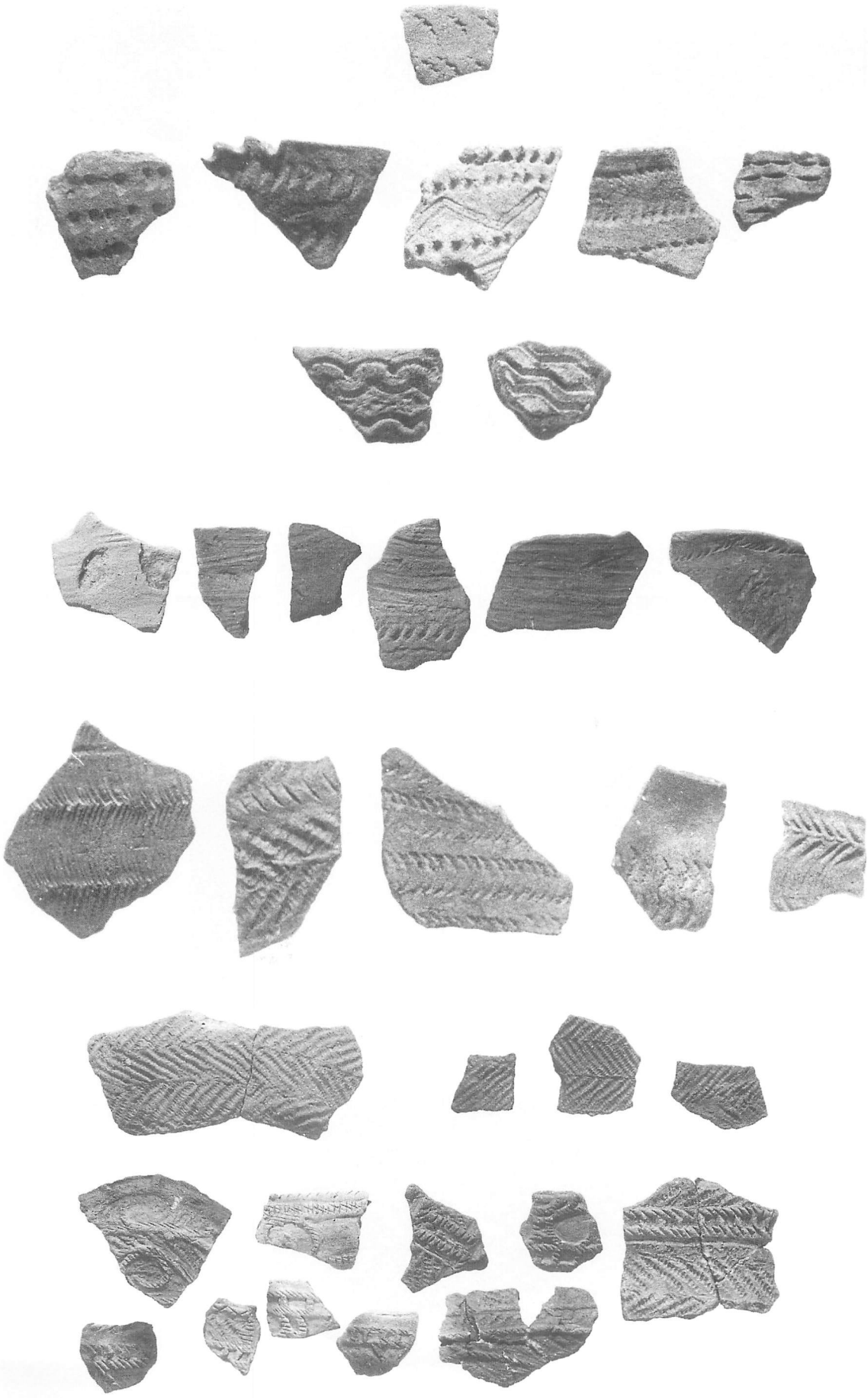


図版25　磨石（凹石）　小型磨石　その他の石器

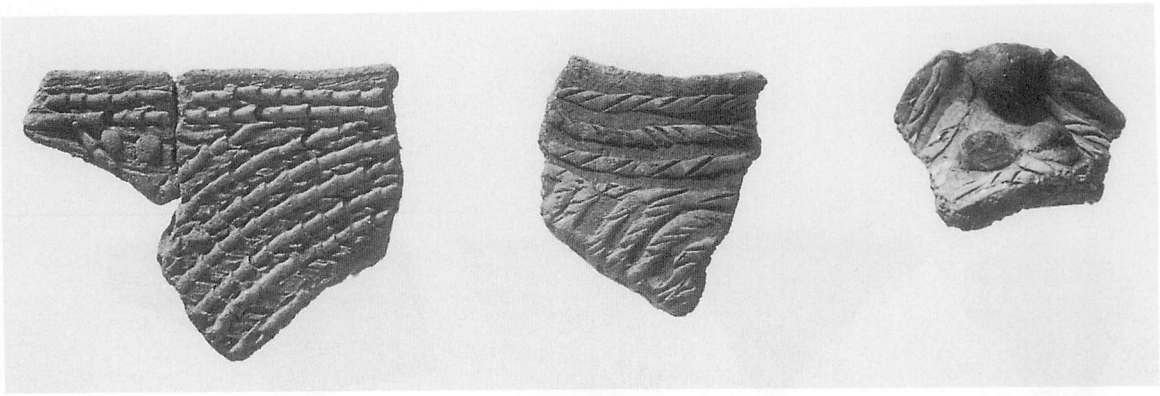
図版26　上　土製円盤　中上　人形状土製品　中下　土器片錘　下左　土製玦状耳飾　下右　ボタン状貝製品

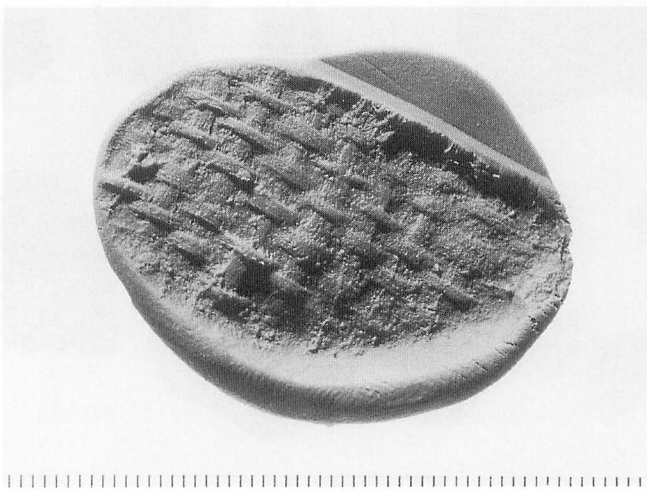


図版27　関西・東海系土器

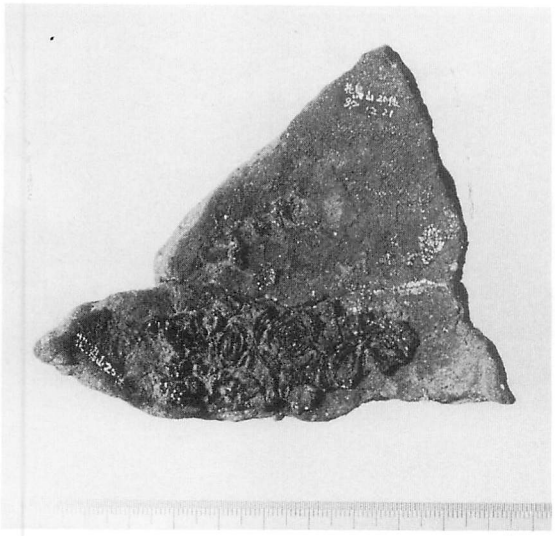


図版28　上　黒色粘土使用土器　中　石製品　下　網代痕モデリング陽像





図版29　土器内面オコゲ


1

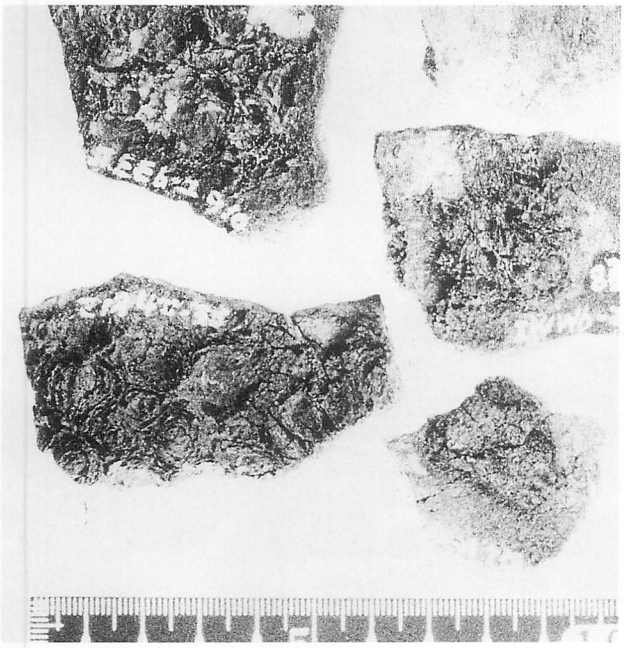
2

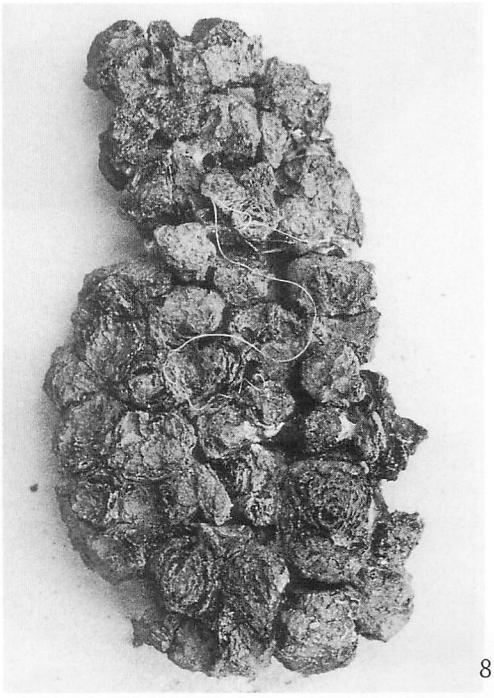
3

4

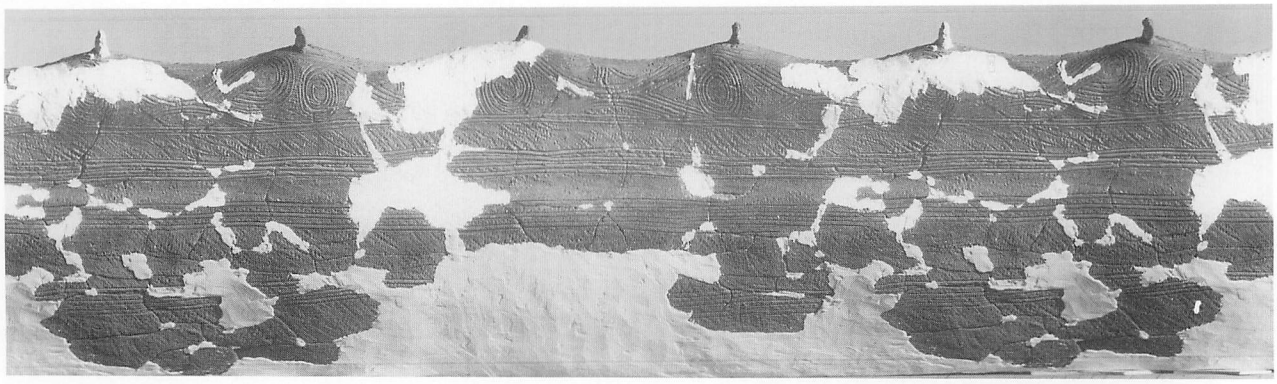
5

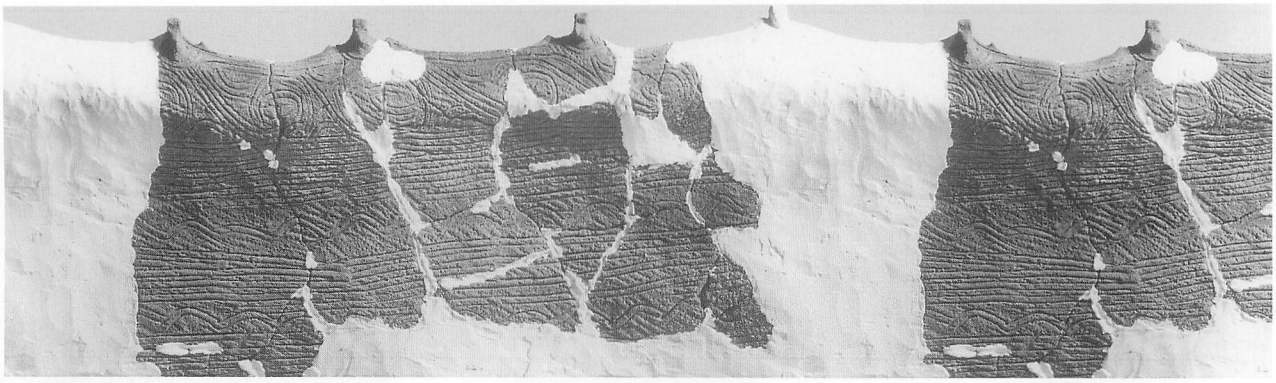
6

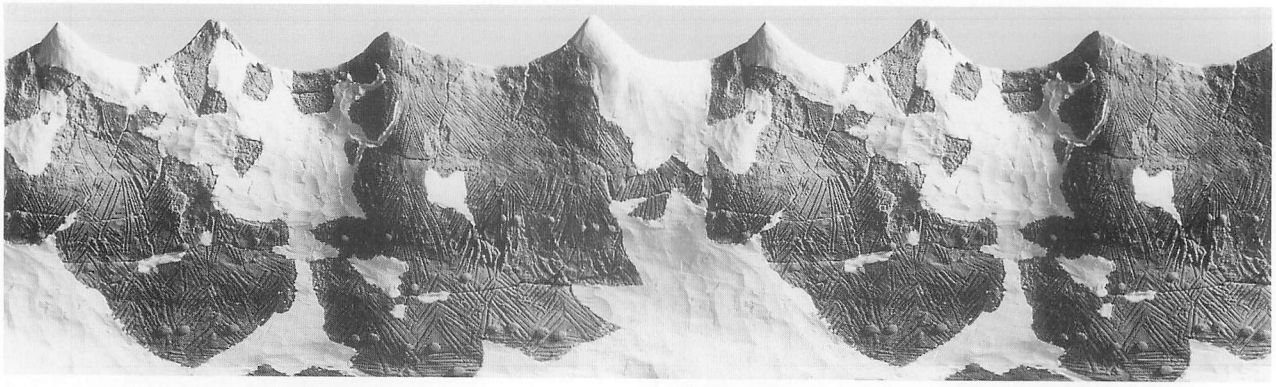

7

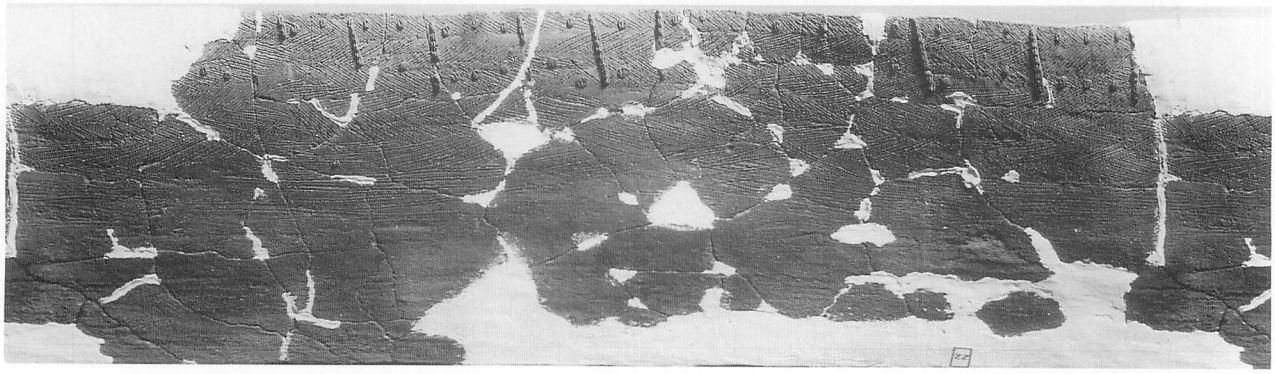

8

図版30　展開写真

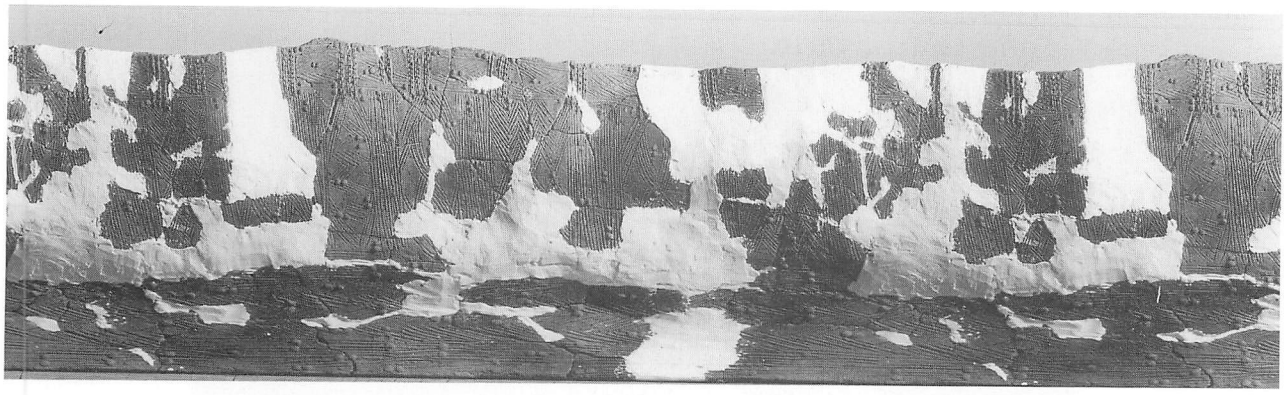


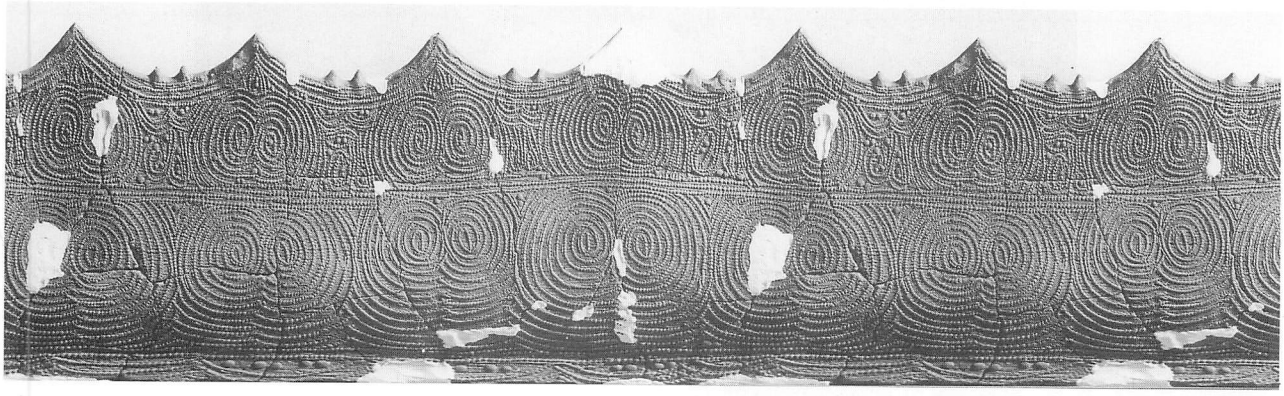


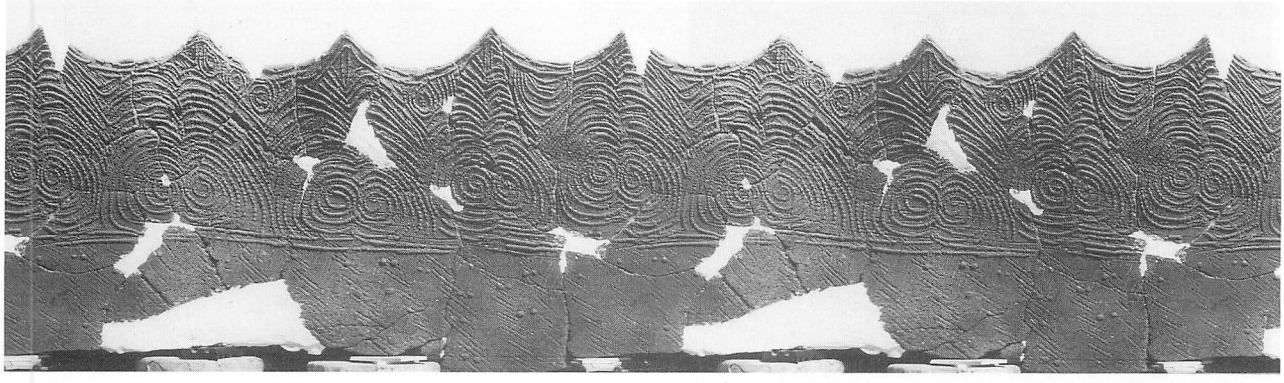


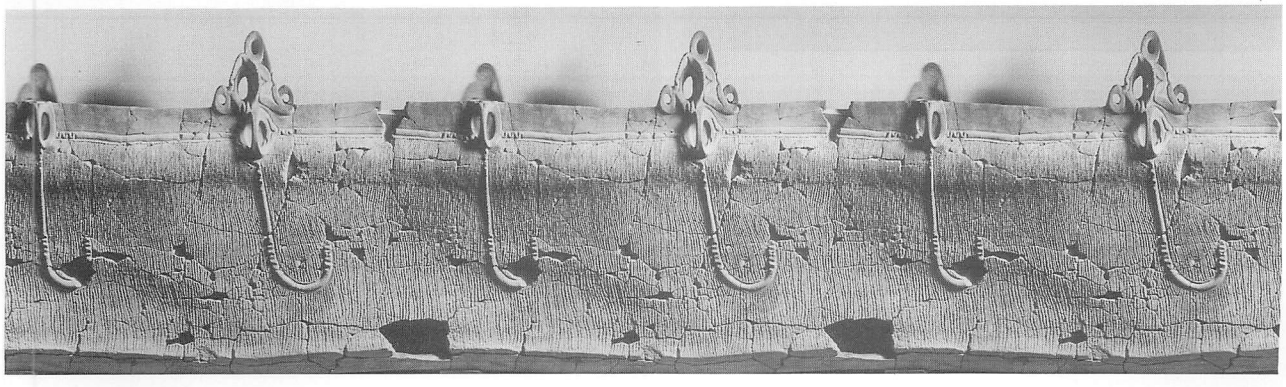


図版31　展開写真

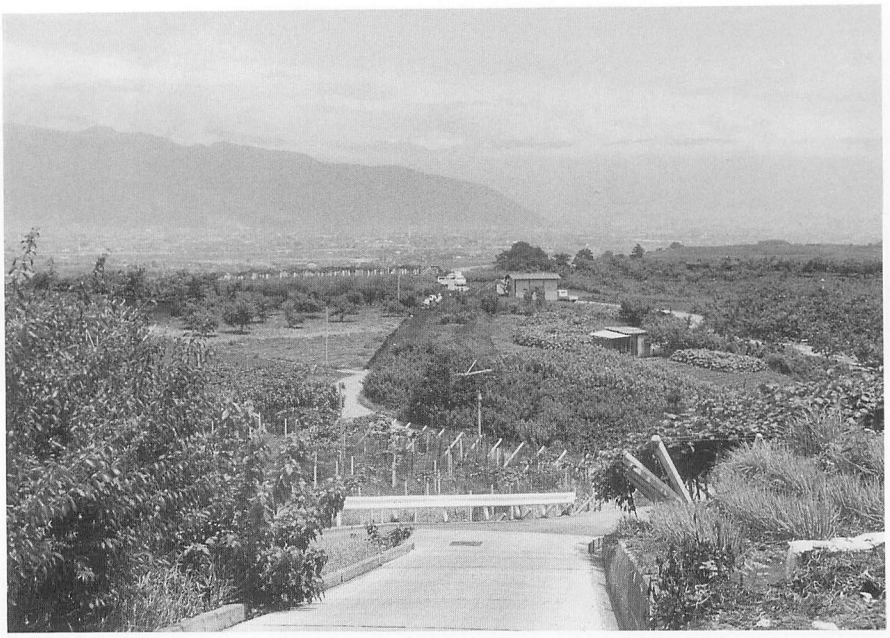






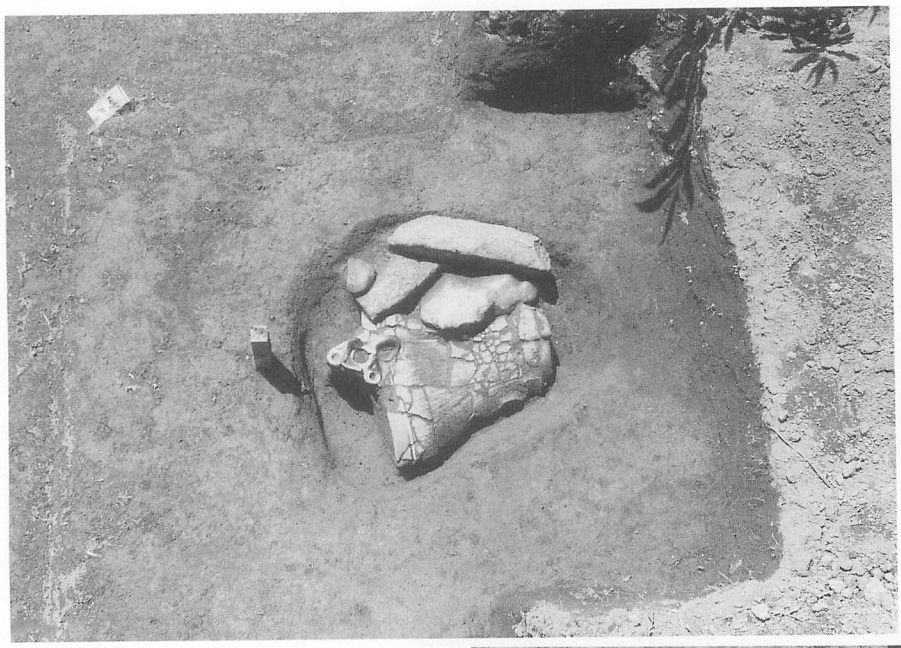


図版32　水呑場北遺跡全景



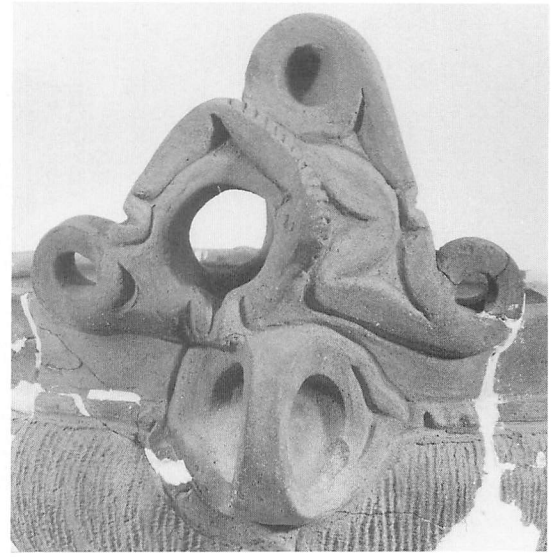
図版33　上・中　1号住居址　下　1・2号土壙

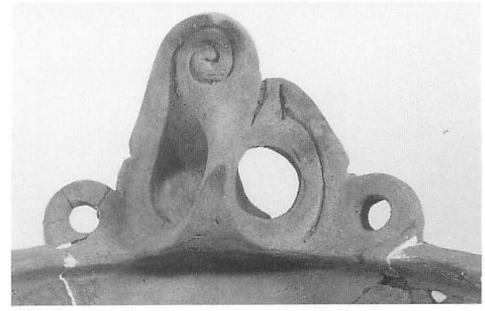
図版34　3号土壙

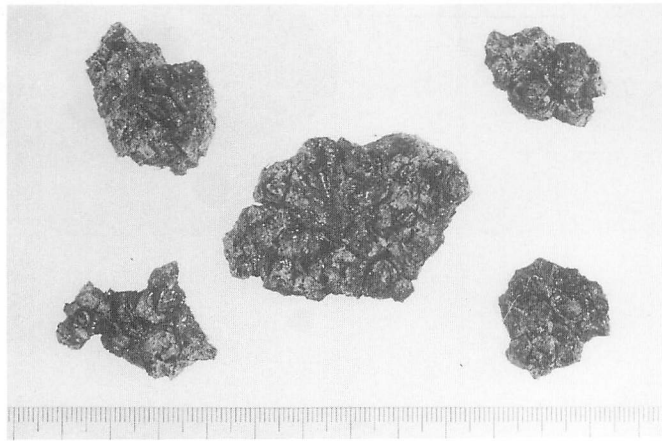


図版35　上左　5・6号土壙　上右　7号土壙押型文土器　中　8号土壙　下　9号土壙

図版36　上・中　1号溝　下　2号溝・4号土壙

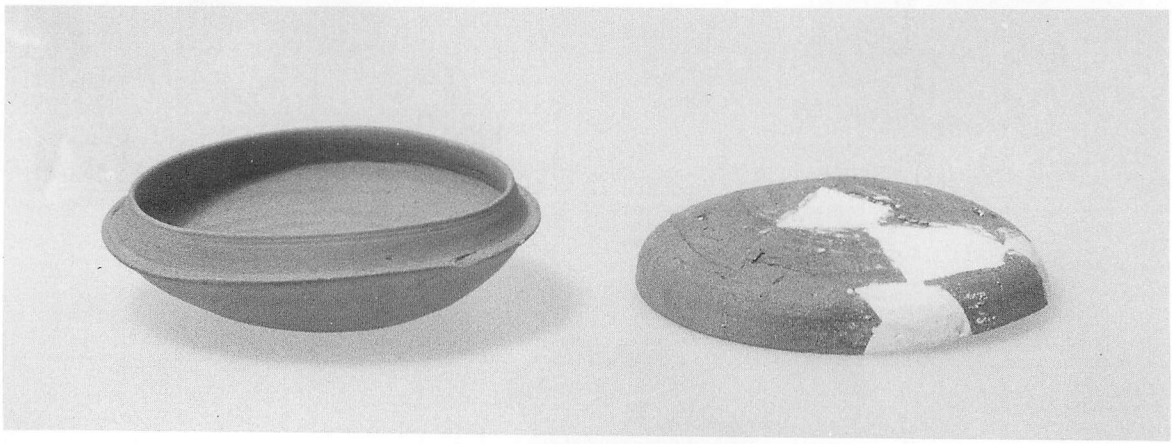




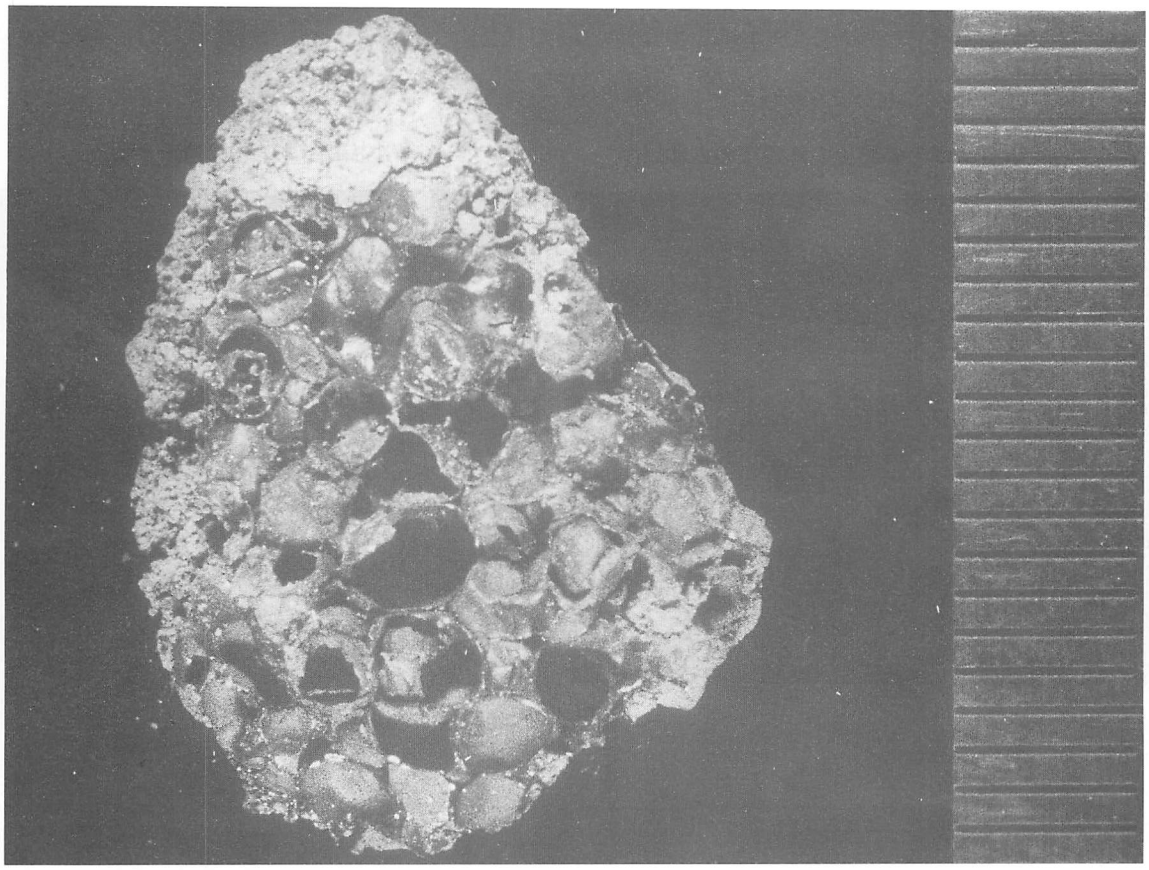


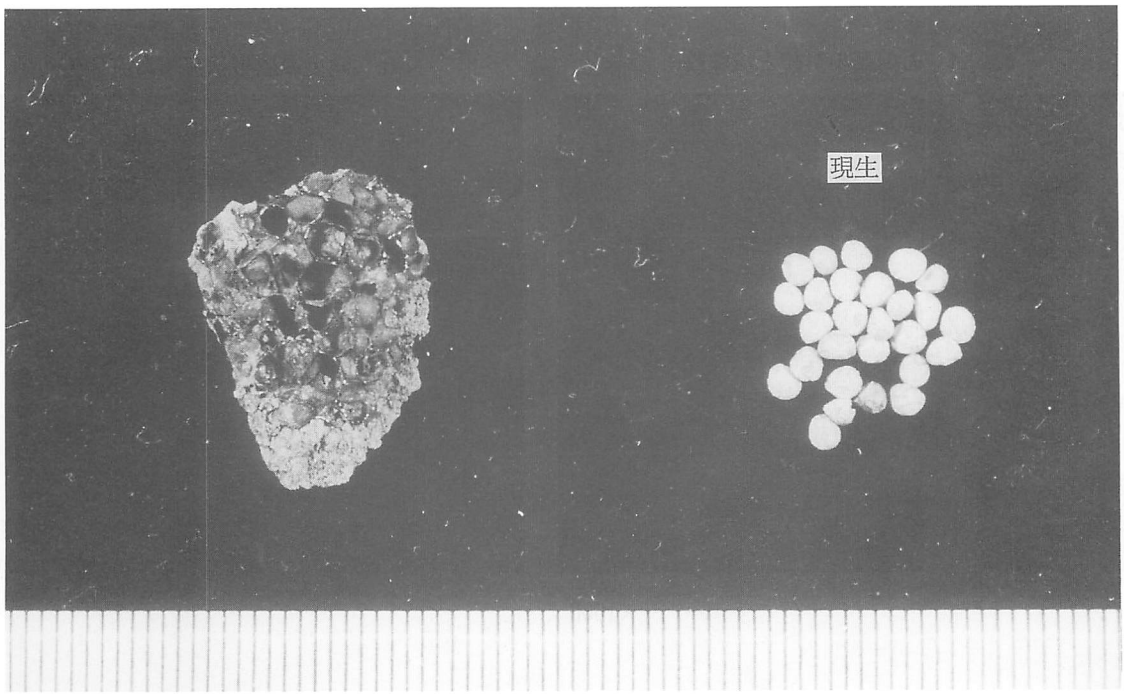
図版37　上　3号土壙出土土器　中　同内面オコゲ　下　5号土壙出土土器

図版38　1号溝出土須恵器・土師器



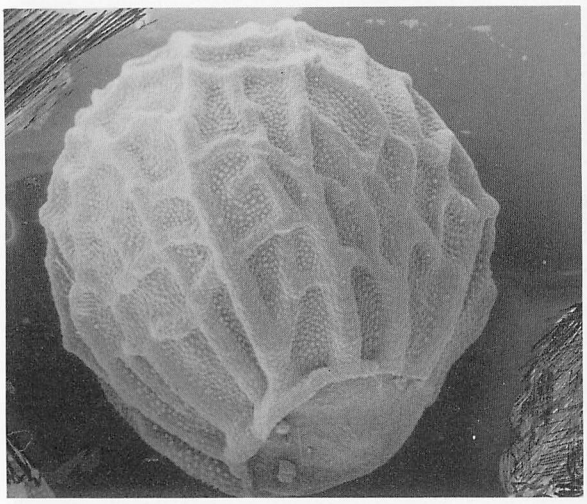
図版39　花鳥山遺跡（縄文前期）から出土の炭化種実塊





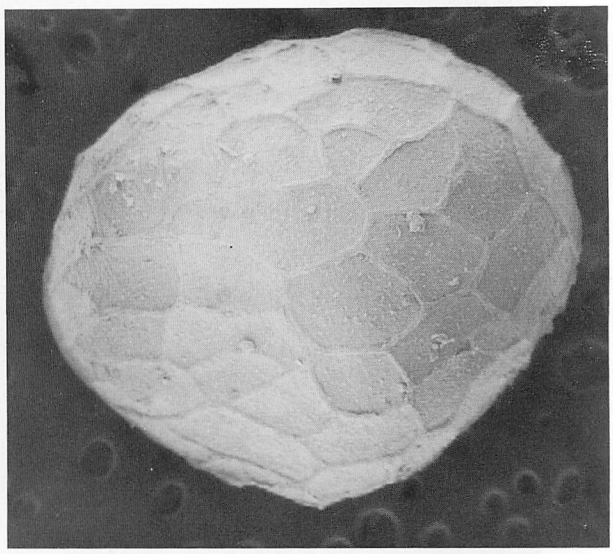
図版40　現生エゴマ

a　現生白エゴマの果実の外表皮の大網目



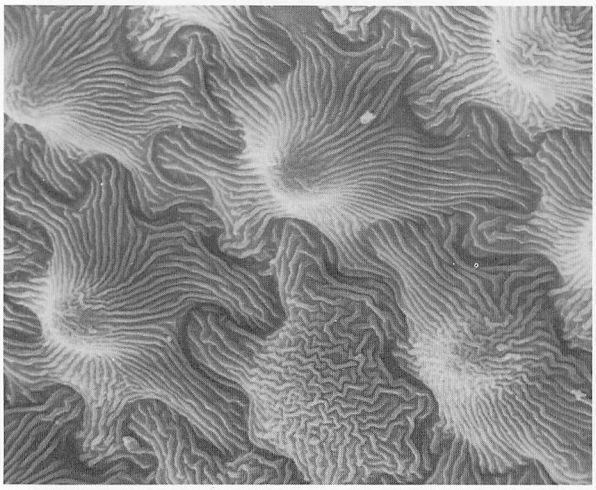
×40

b　現生褐色エゴマの種子と種皮



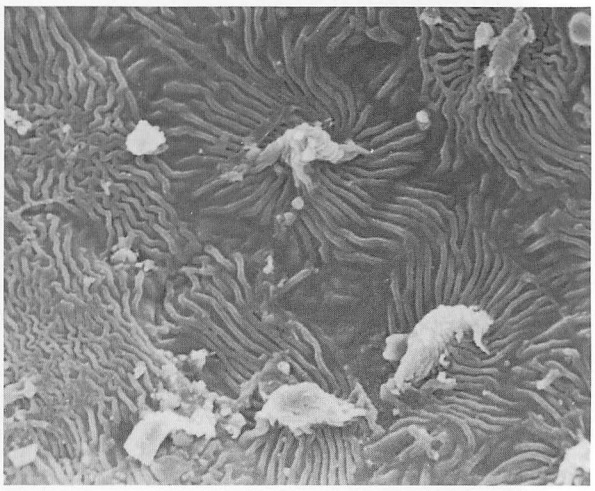
×40

c　同上の円頭小突起と流線紋



×1000

d　同上の屋根状突起と流線紋



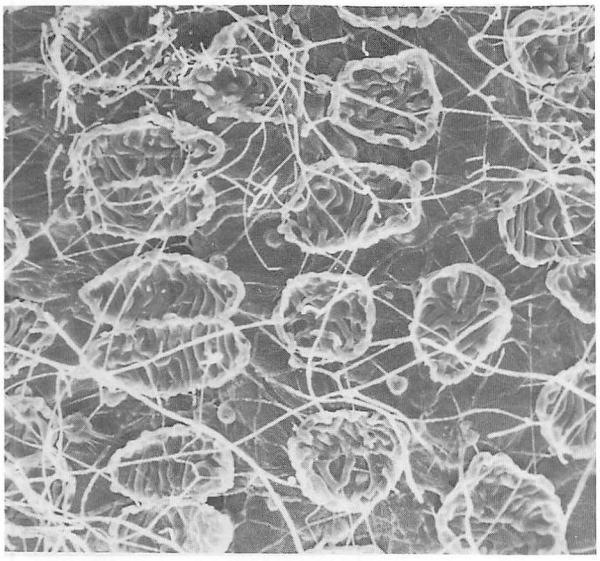
×1000

図版41　現生エゴマ

a　現生褐色エゴマの種子の外表皮の網目

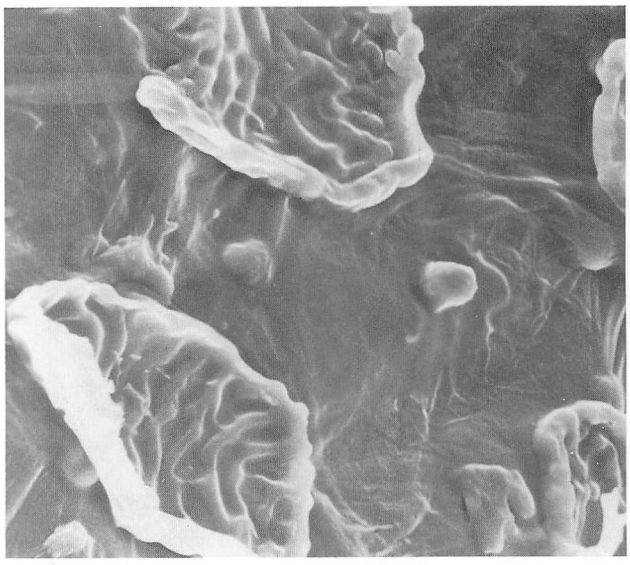
×40

b　同上の“わらじ状”細胞と細線



×400

c　同上の“わらじ状”細胞および細線と小点

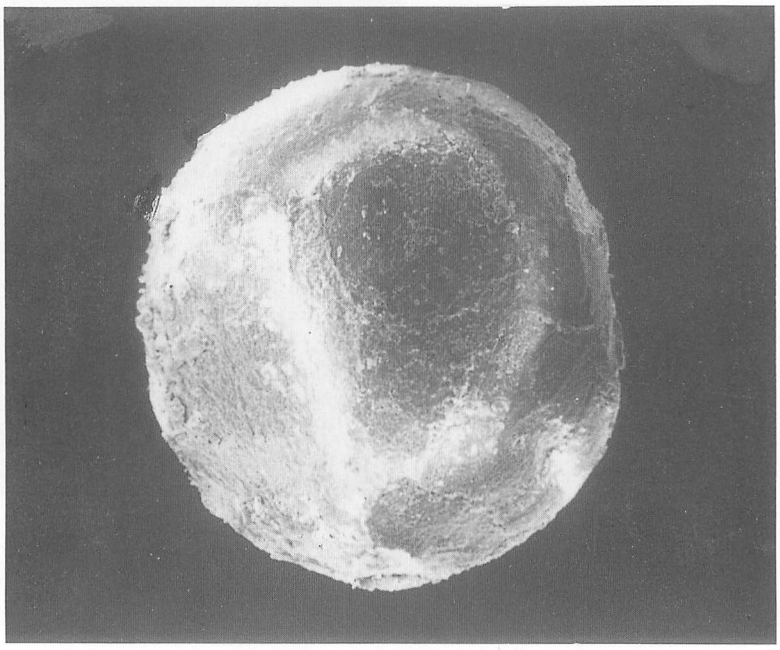


（種皮にある脂油線らしい）

×1000

図版42　出土エゴマ（種実塊より取り出した種子）

a



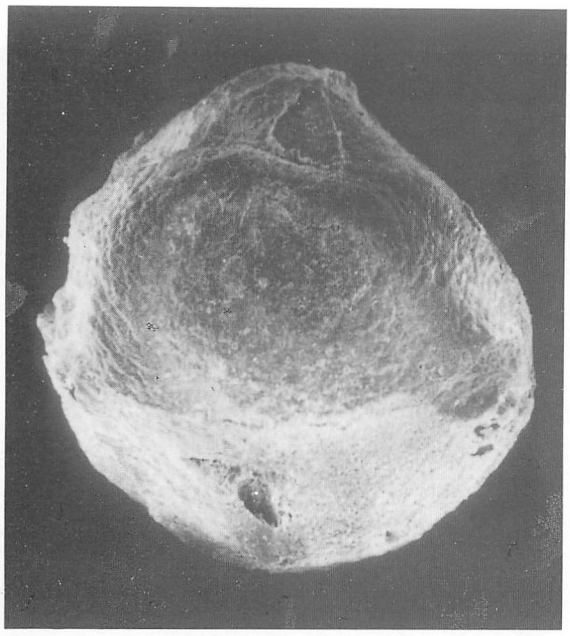
種　子　　×30

上の拡大　　×800

上の拡大　　×1000

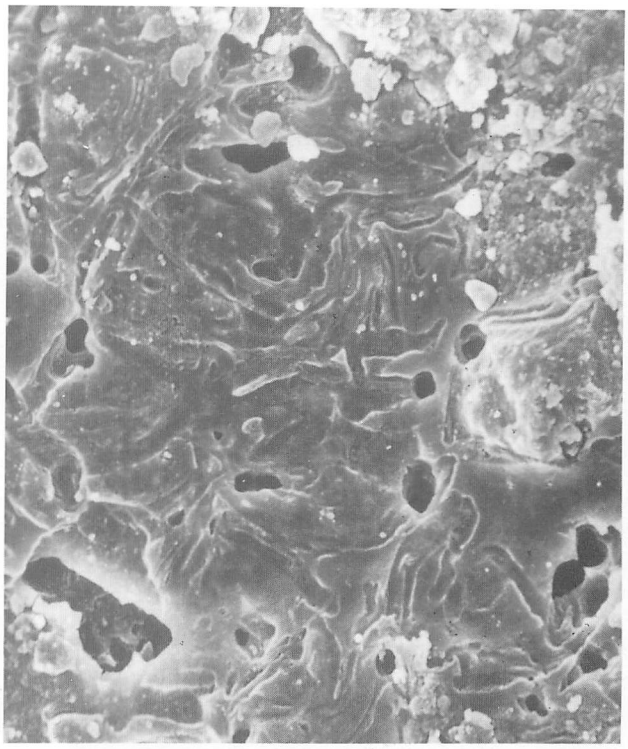
図版43　出土エゴマ（種実塊より取り出した種子）

a



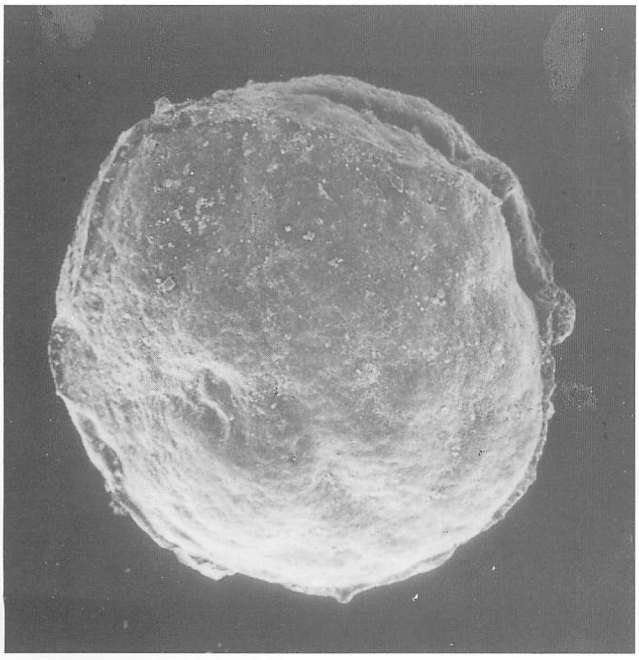
種子　×40

b



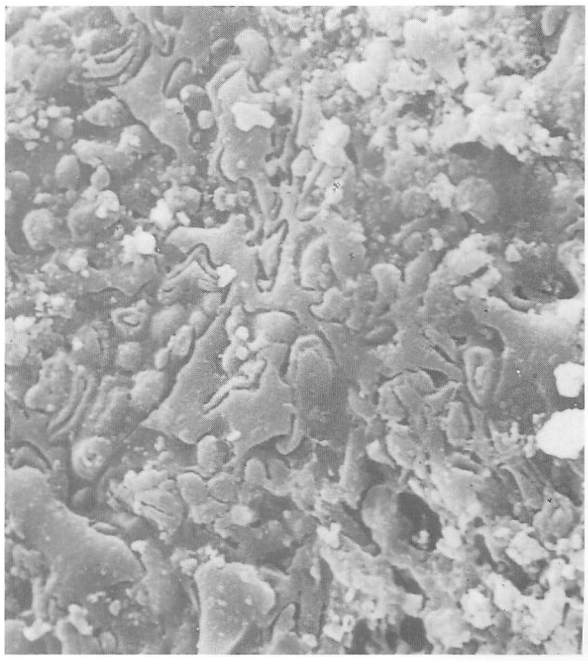
左の拡大　タール状となる　×100

c



種子　×40

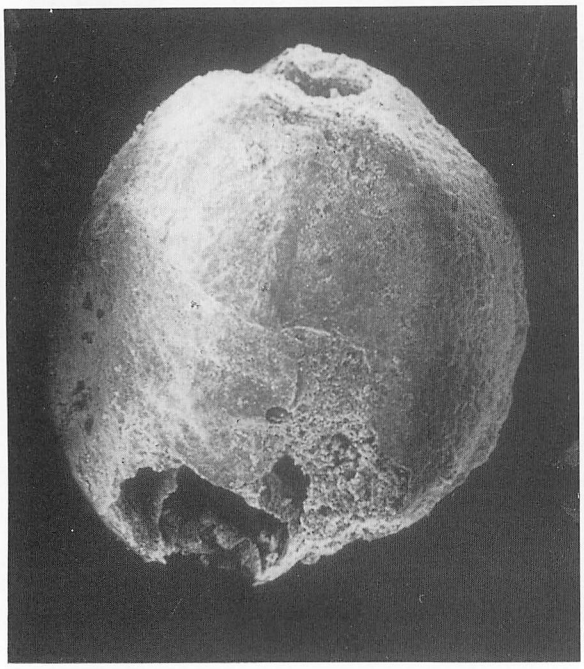
d



左の拡大　×2000

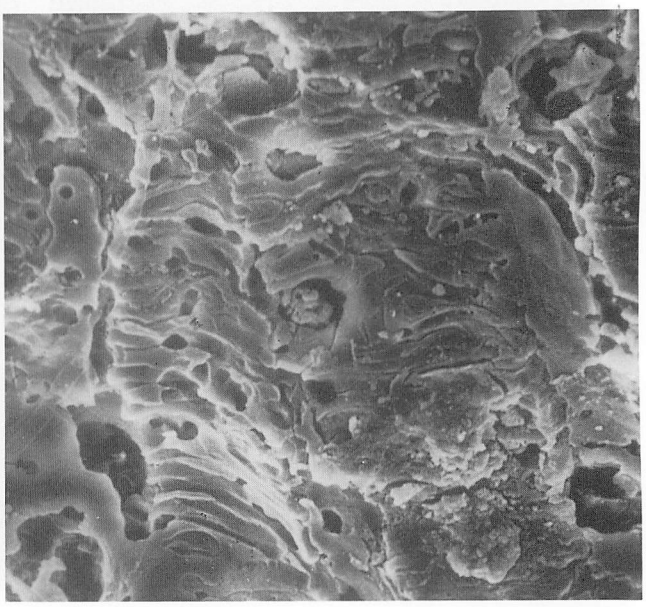
図版44　出土エゴマ（種実塊より取り出した種子と果実片）

a



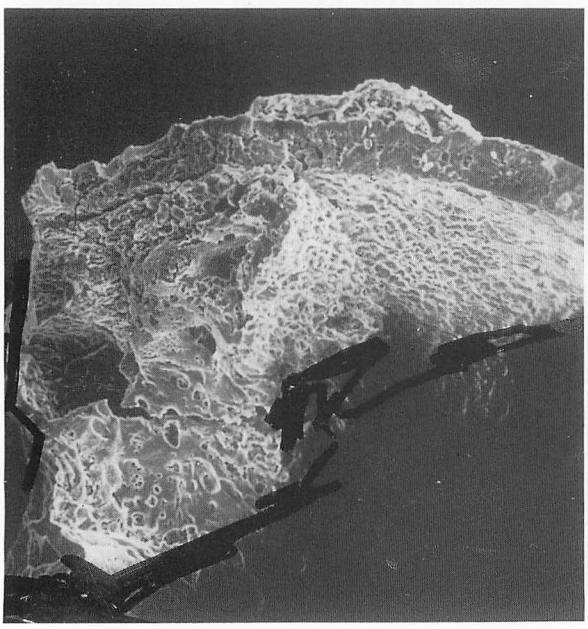
種子　　×40

b



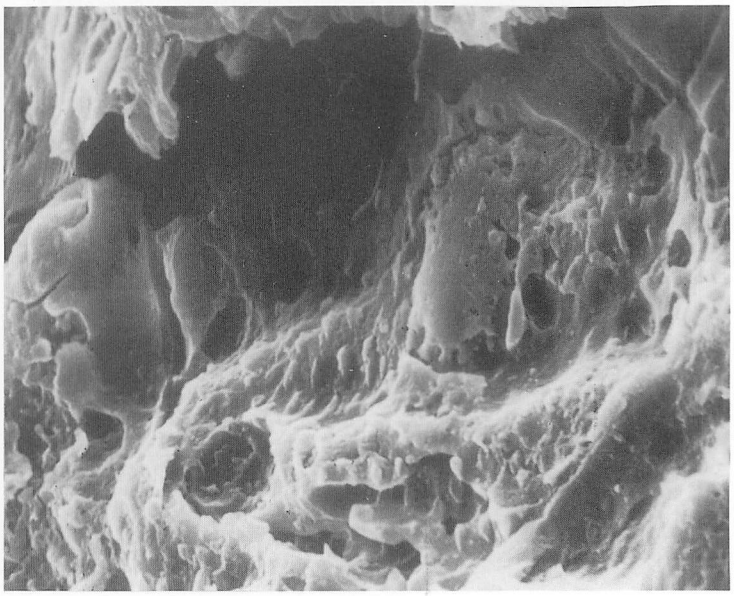
左の拡大　タール状となる　　×1000

c



果皮断面と種皮の表面　　×100

d



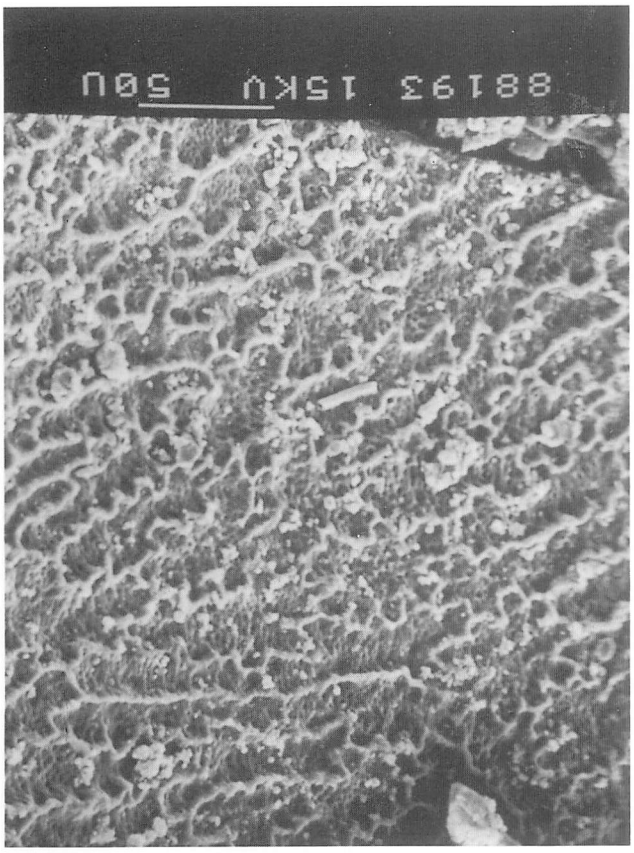
果皮断面の直下の種皮の拡大　　×2000

図版45　出土エゴマ（種実塊の破損片：a・b・c松谷氏提供）

a

出土エゴマ

b



上の拡大

c

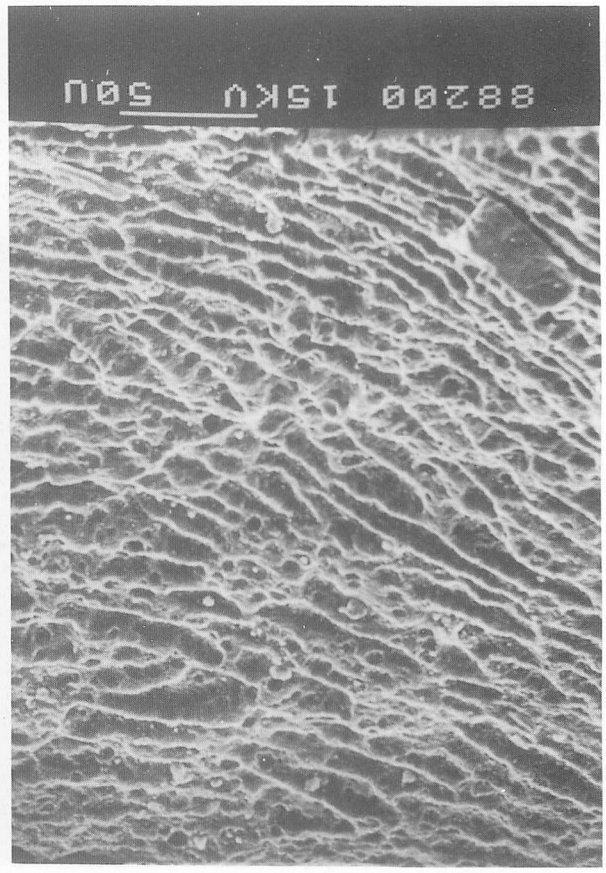
左の拡大

図版46　出土エゴマ（種実塊の破損片：a・b松谷氏提供）

a

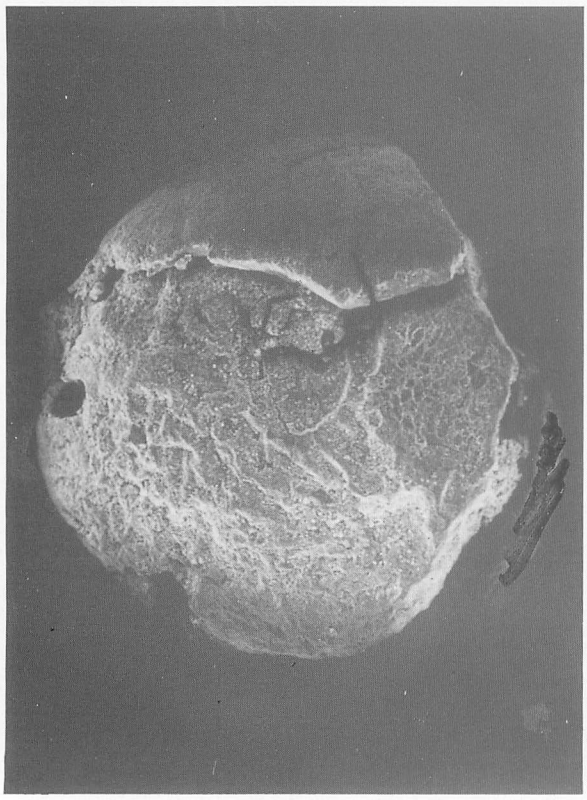
出土エゴマ

b



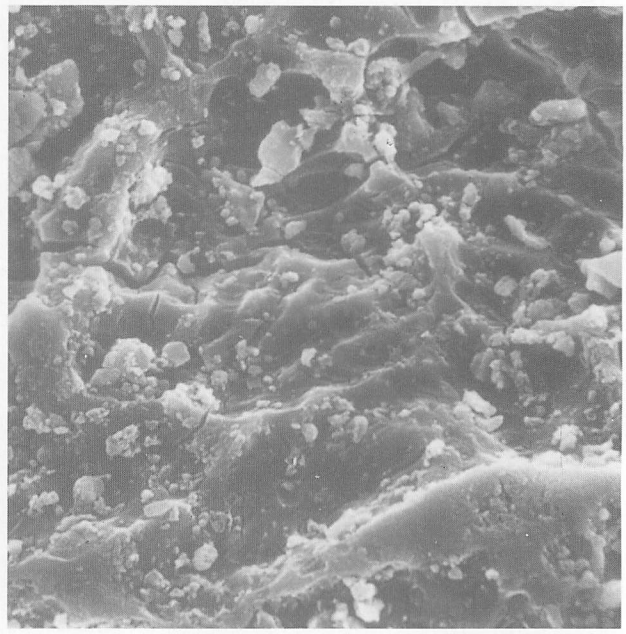
左の拡大

c



シソ種皮　一部欠ける　　×60

d



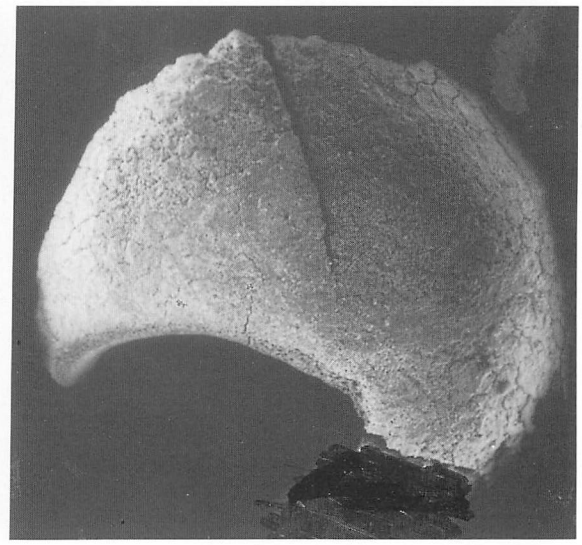
左の拡大　　×2000

図版47　出土ミズキまたはクマノミズキ

a

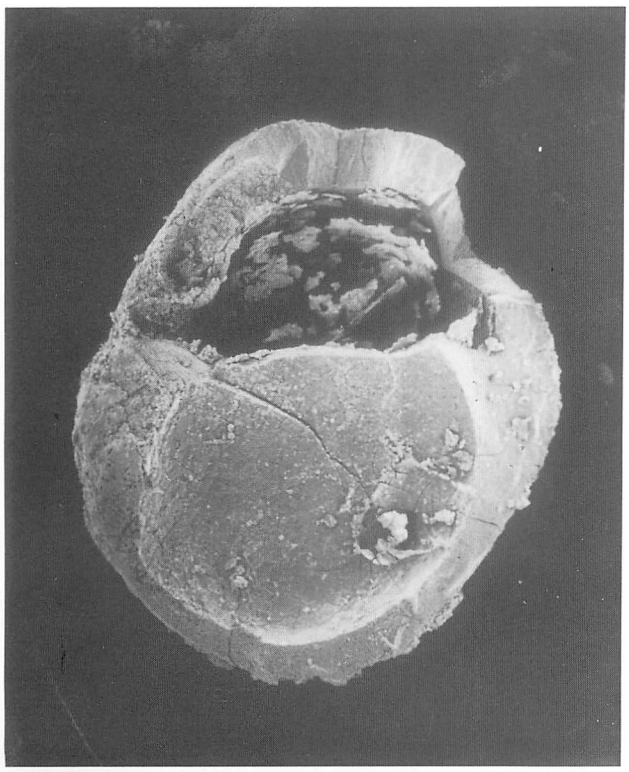
クマノミズキ半欠　　×25

b



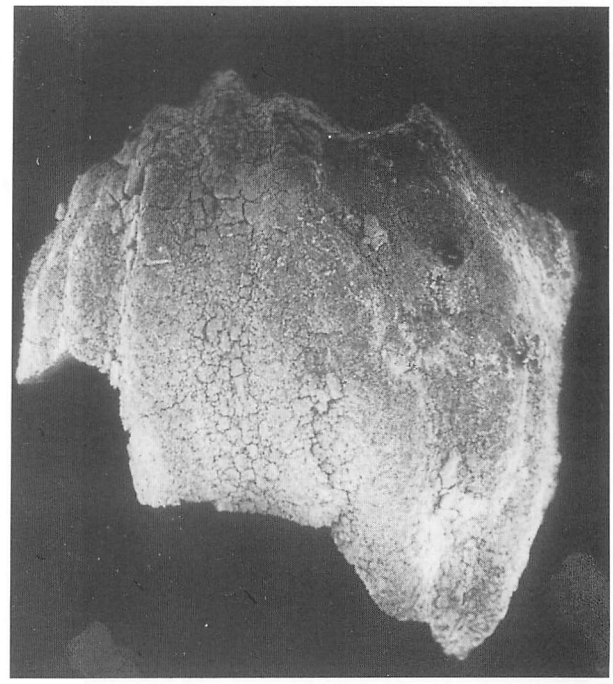
ミズキの半欠　　×20

c



ミズキ中の隔壁　　×20

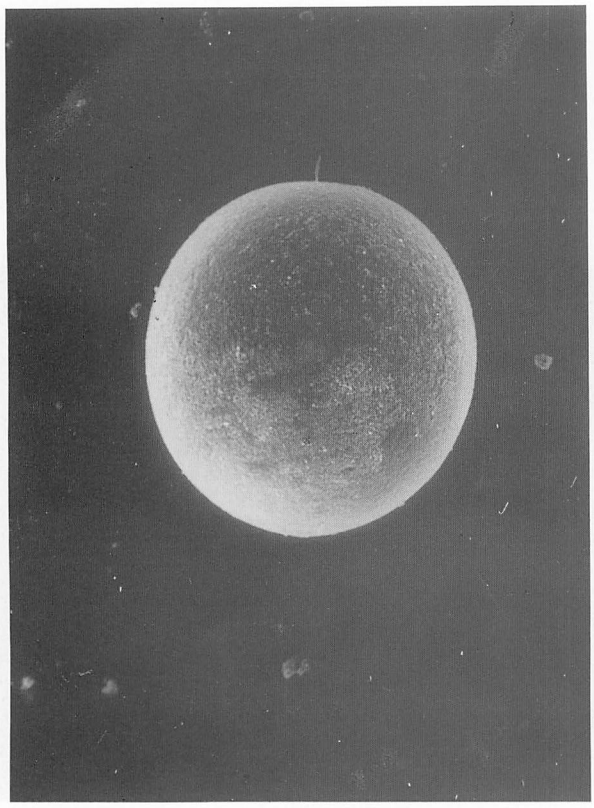
d



ミズキ　　×25

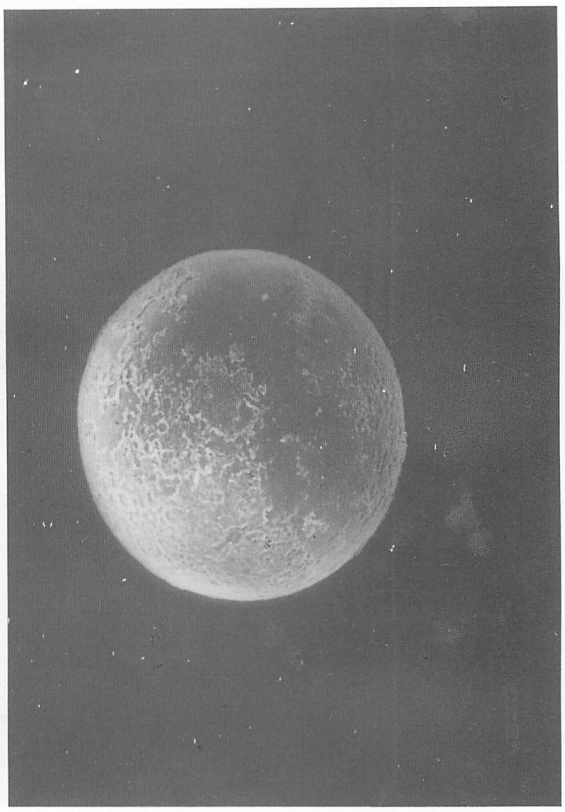
図版48　出土アブラナ類

a



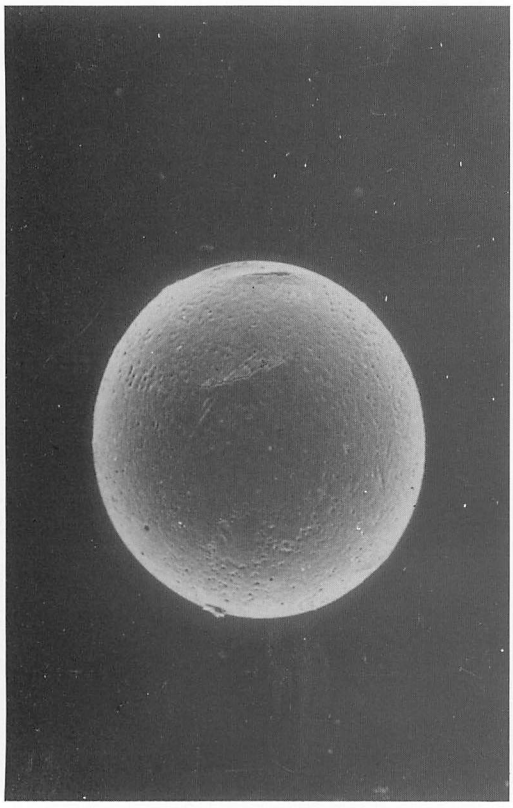
×100

b



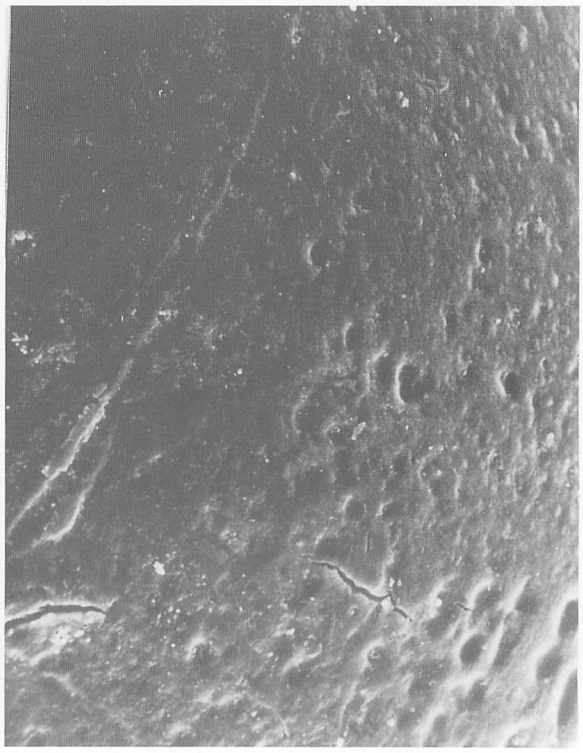
×100

c



×100

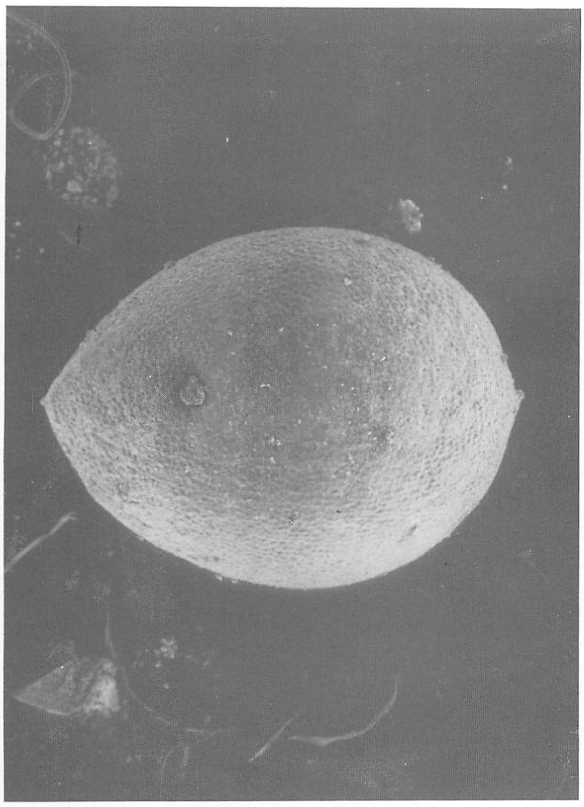
d



左の拡大　×600

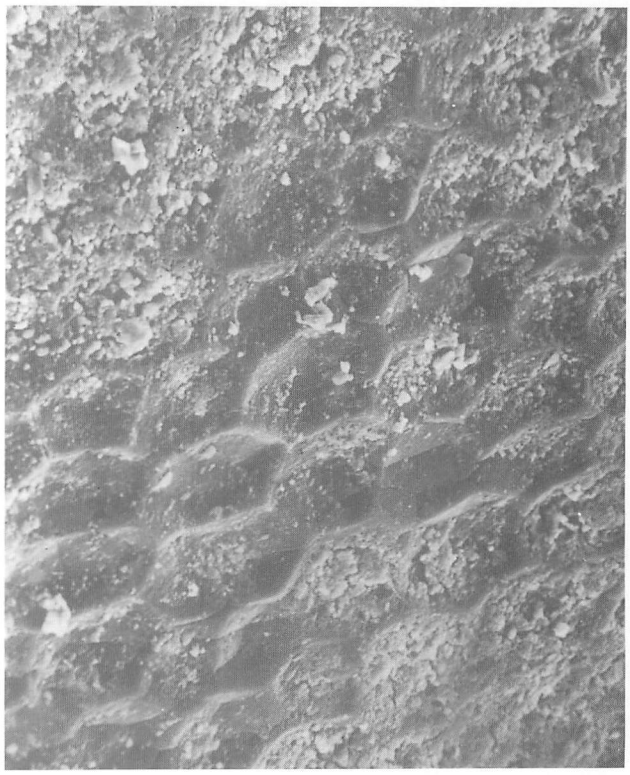
図版49　出土エノキグサとシロザ

a



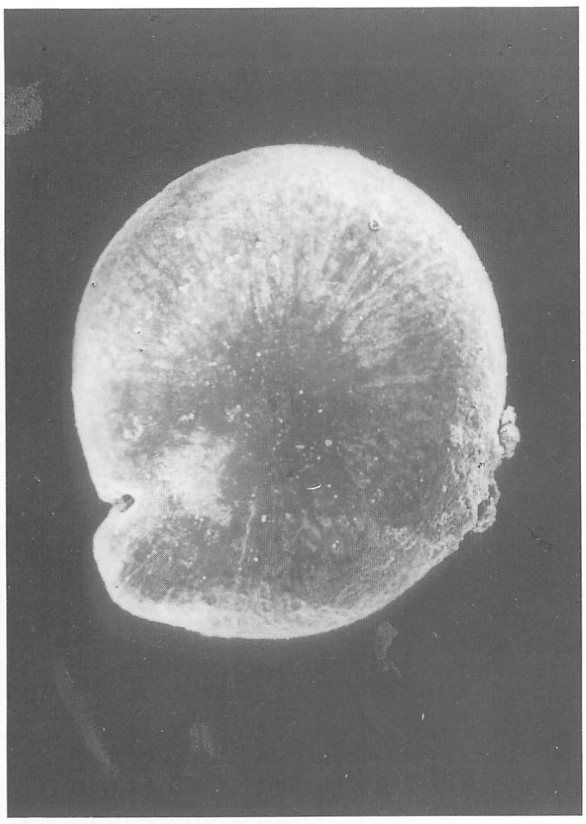
エノキグサ　×40

b



左の拡大　×600

c



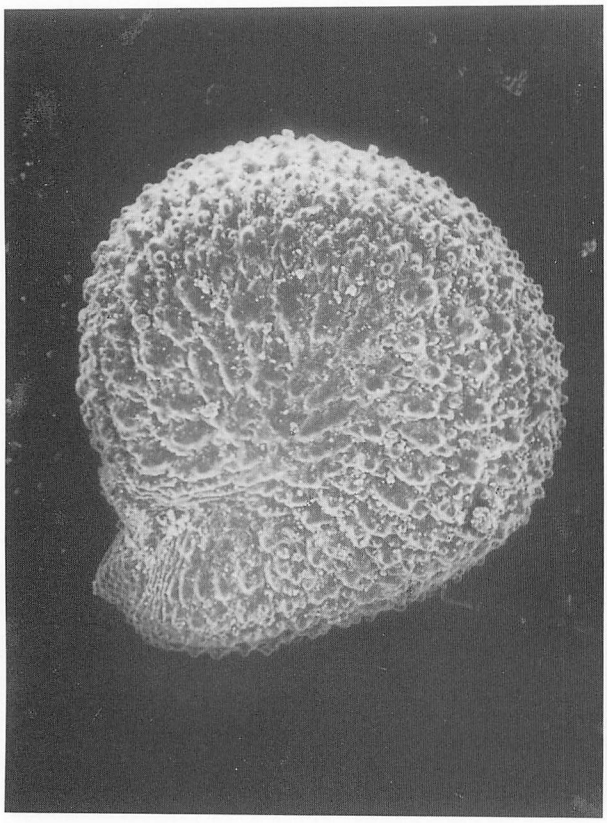
シロザ　×80

d

左の拡大　×600

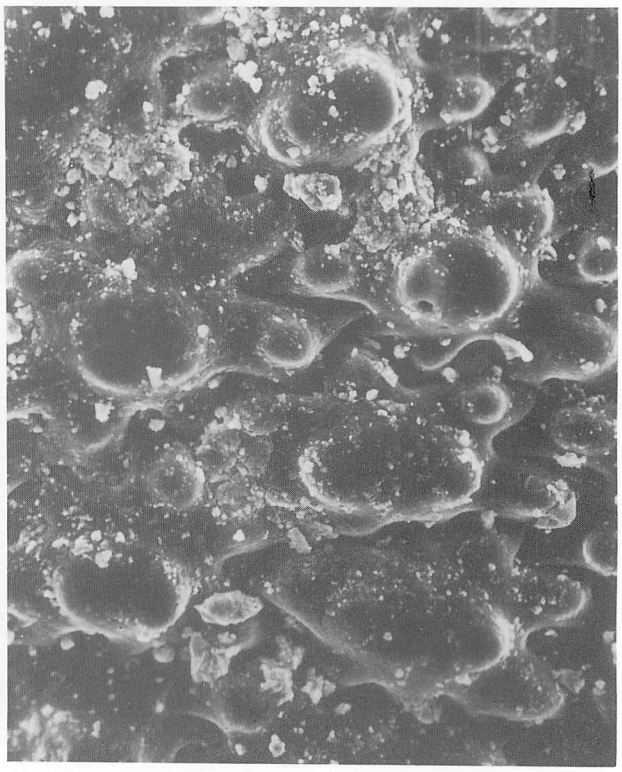
図版50　スベリヒユとニワトコ

a



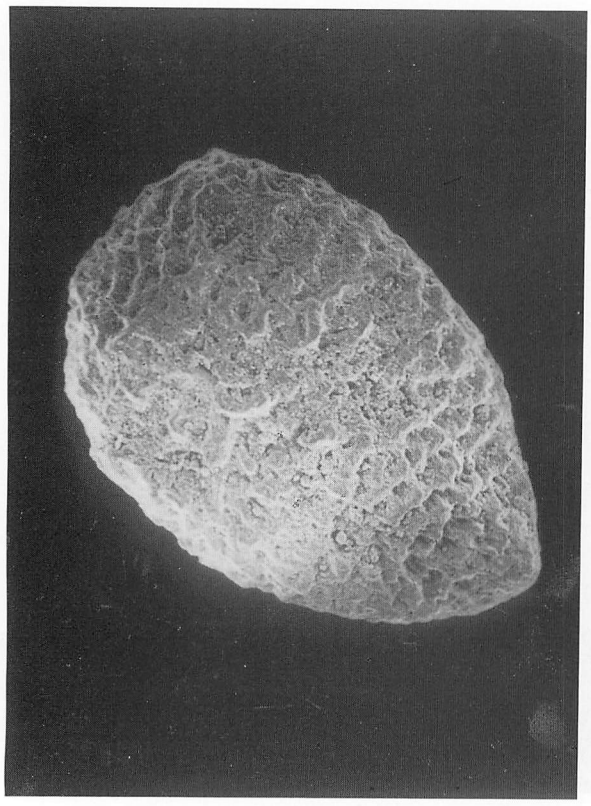
スベリヒユ　×100

b



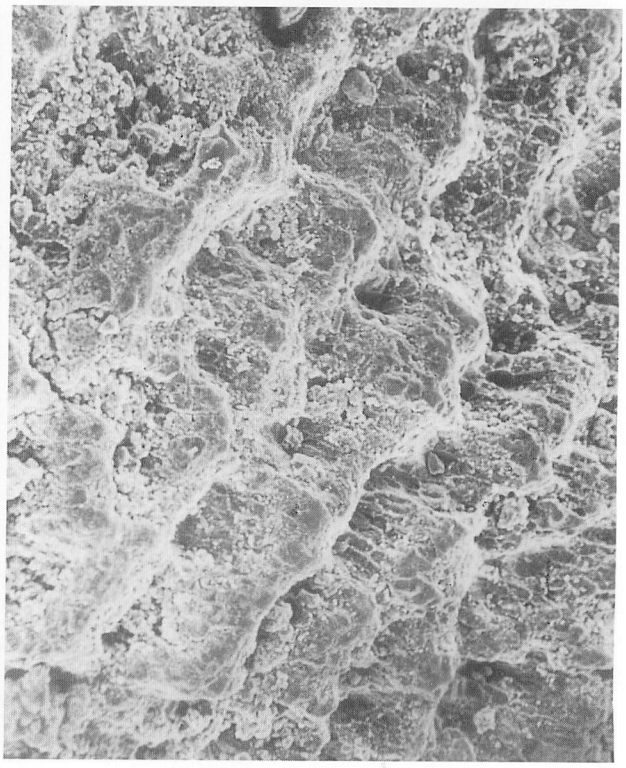
左の拡大　×500

c



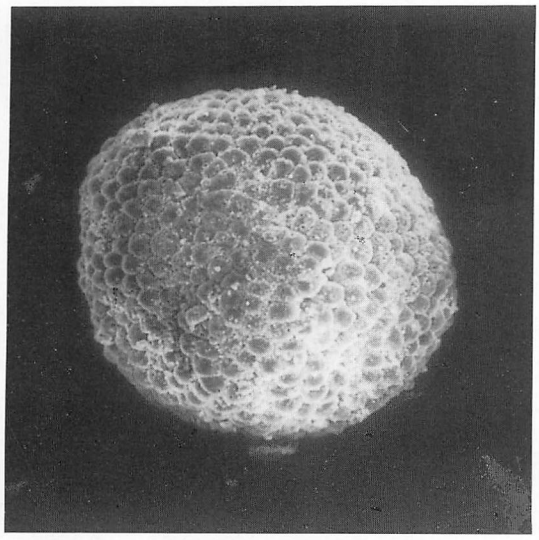
ニワトコ　×30

d

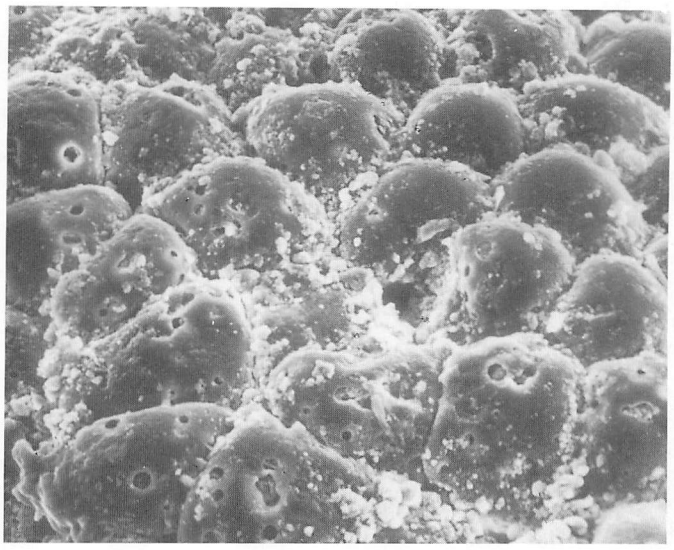


左の拡大　×150

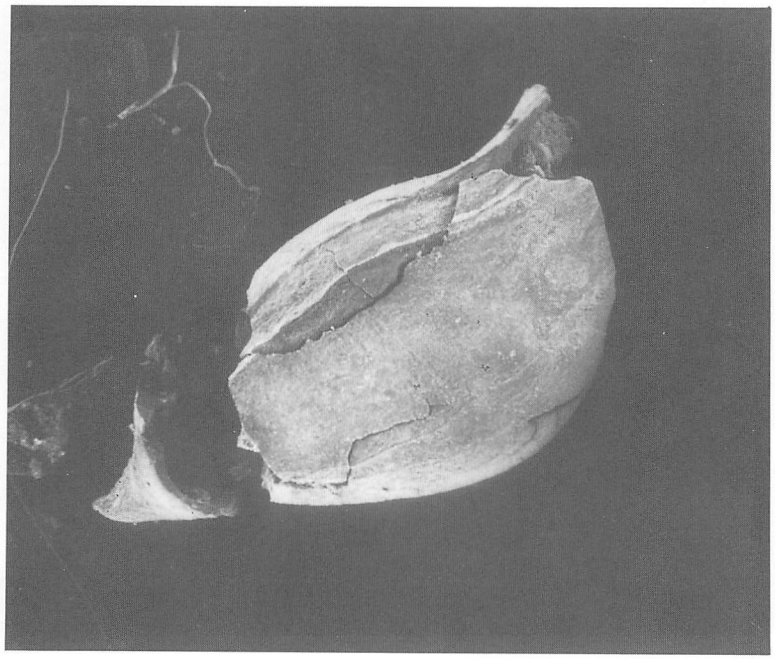
図版51　出土シダの胞子？とスゲ類？



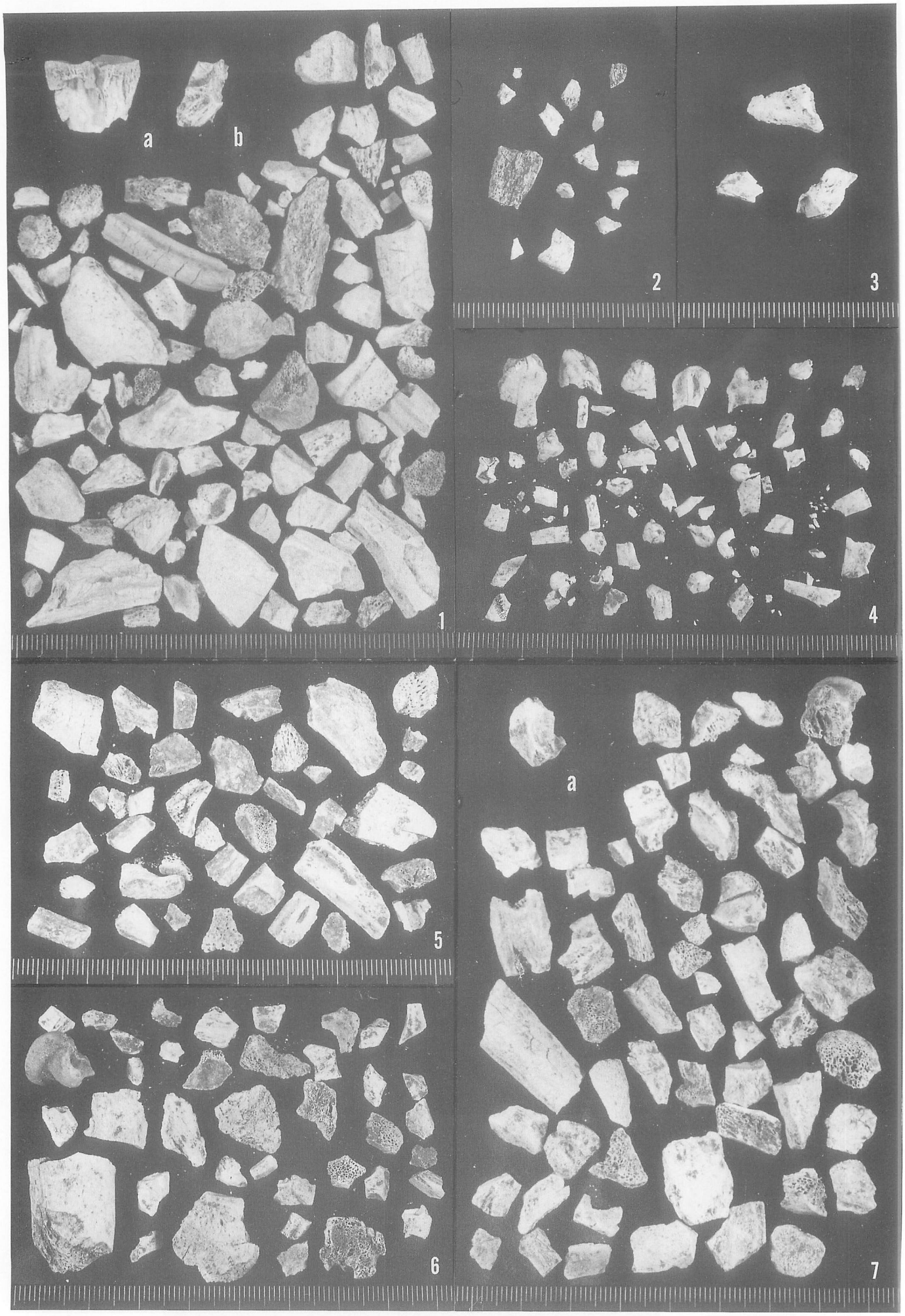
胞子？　×100



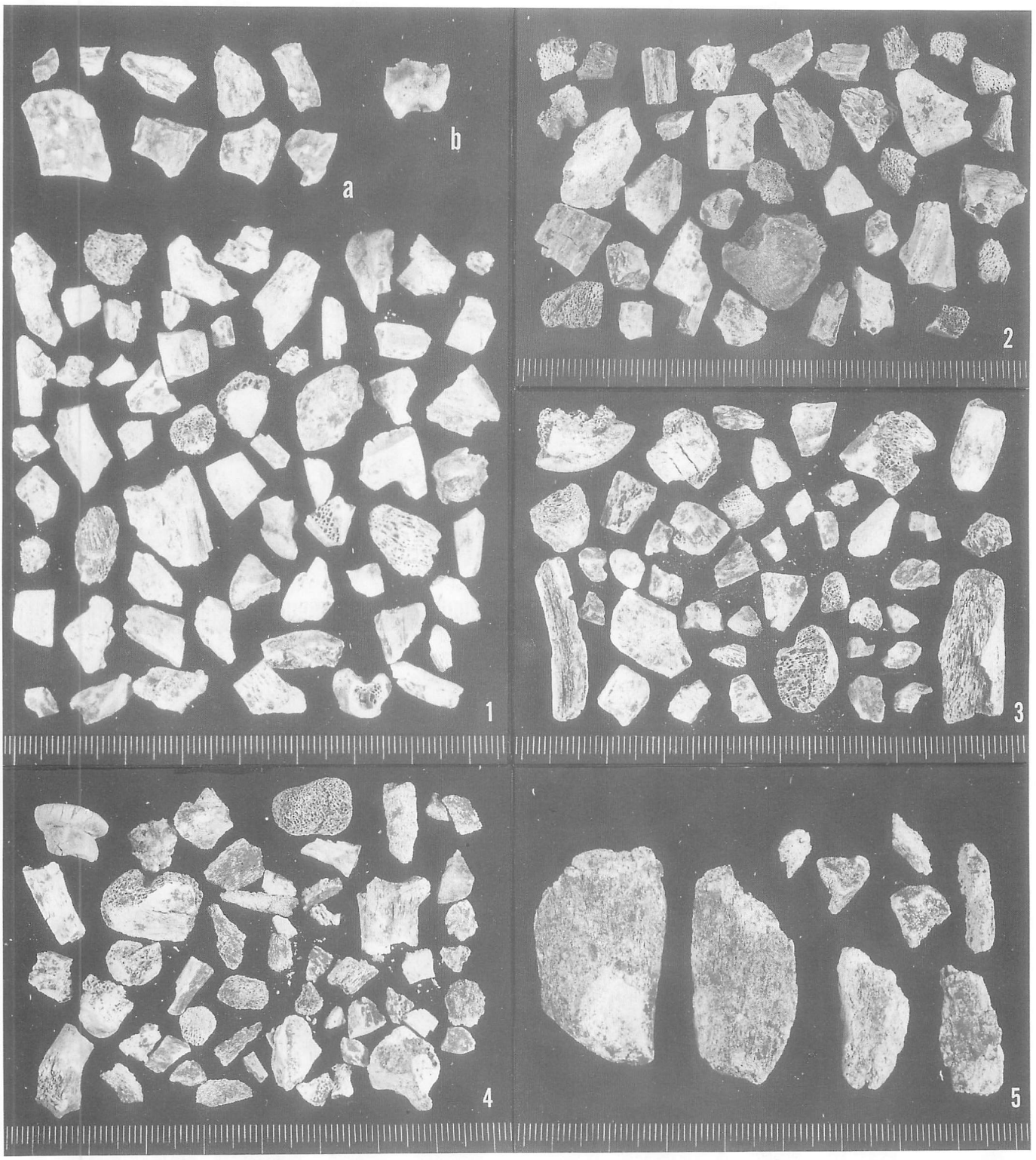
×600



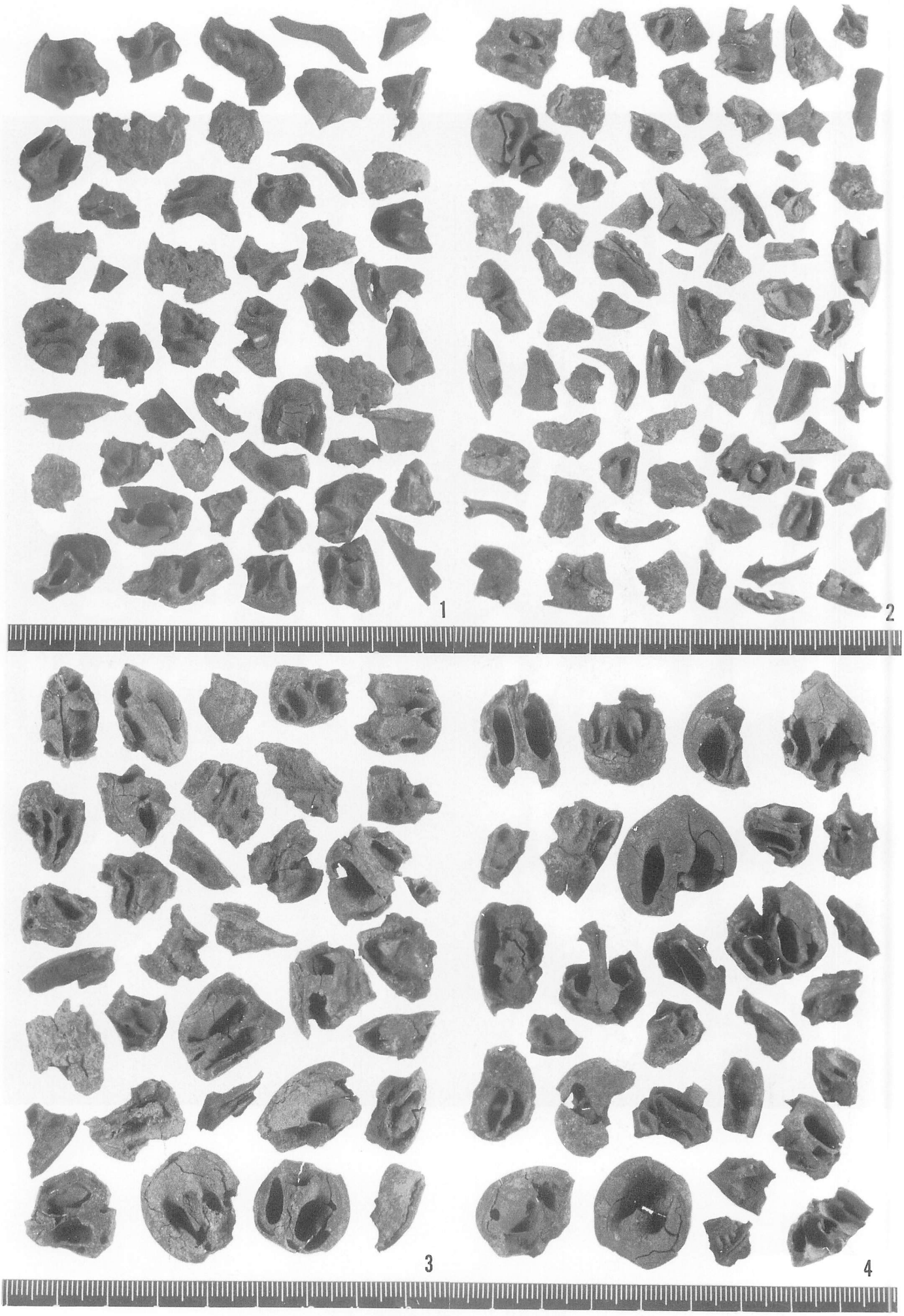
スゲ類？　×30



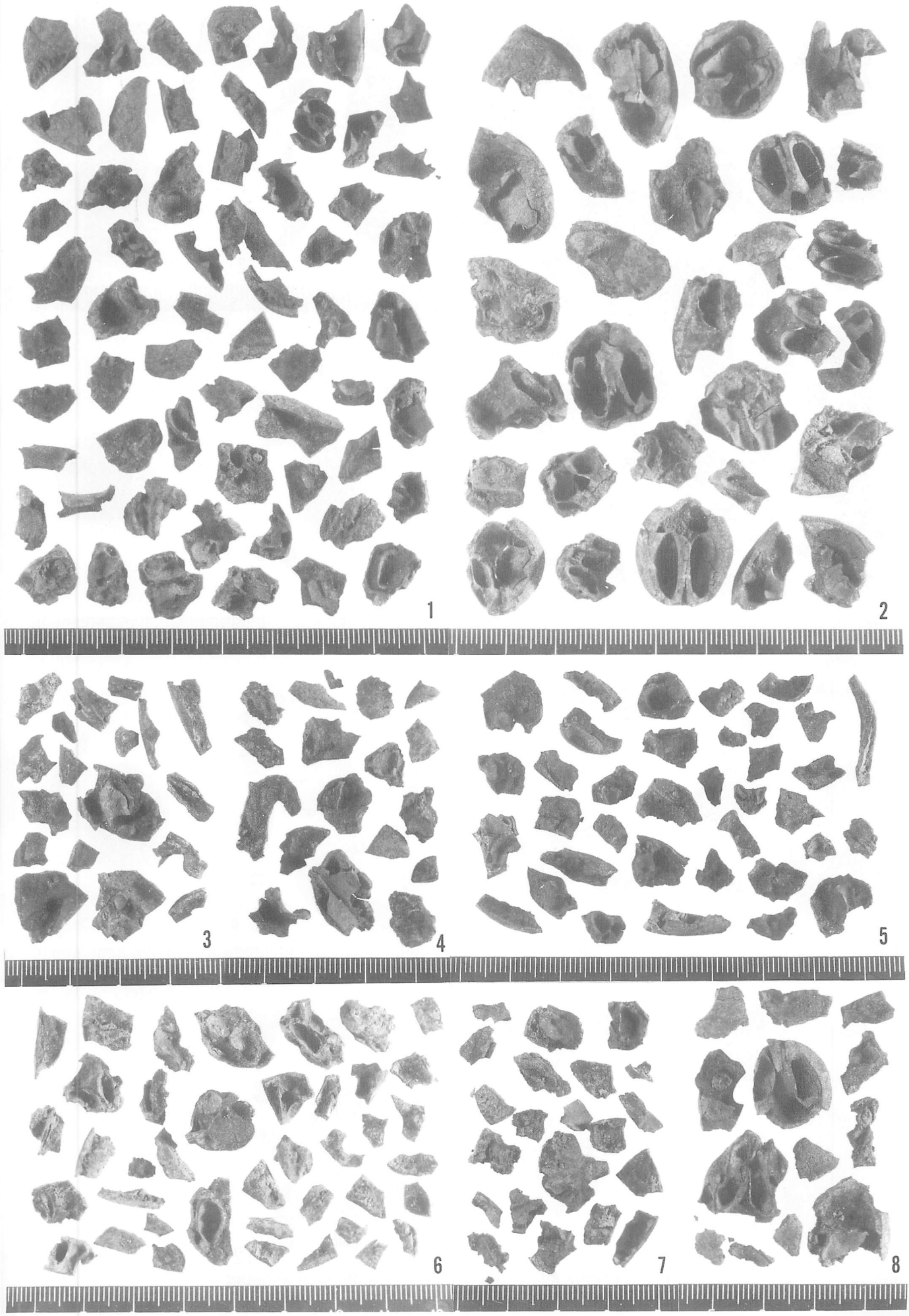
動物遺体１　（第１表参照，実大）
１－ａ：シカ左中手骨近位端，１－ｂ：こい科主鰓蓋骨，４：イノシシ臼歯歯冠，
７－ａ：シカ基節骨近位端



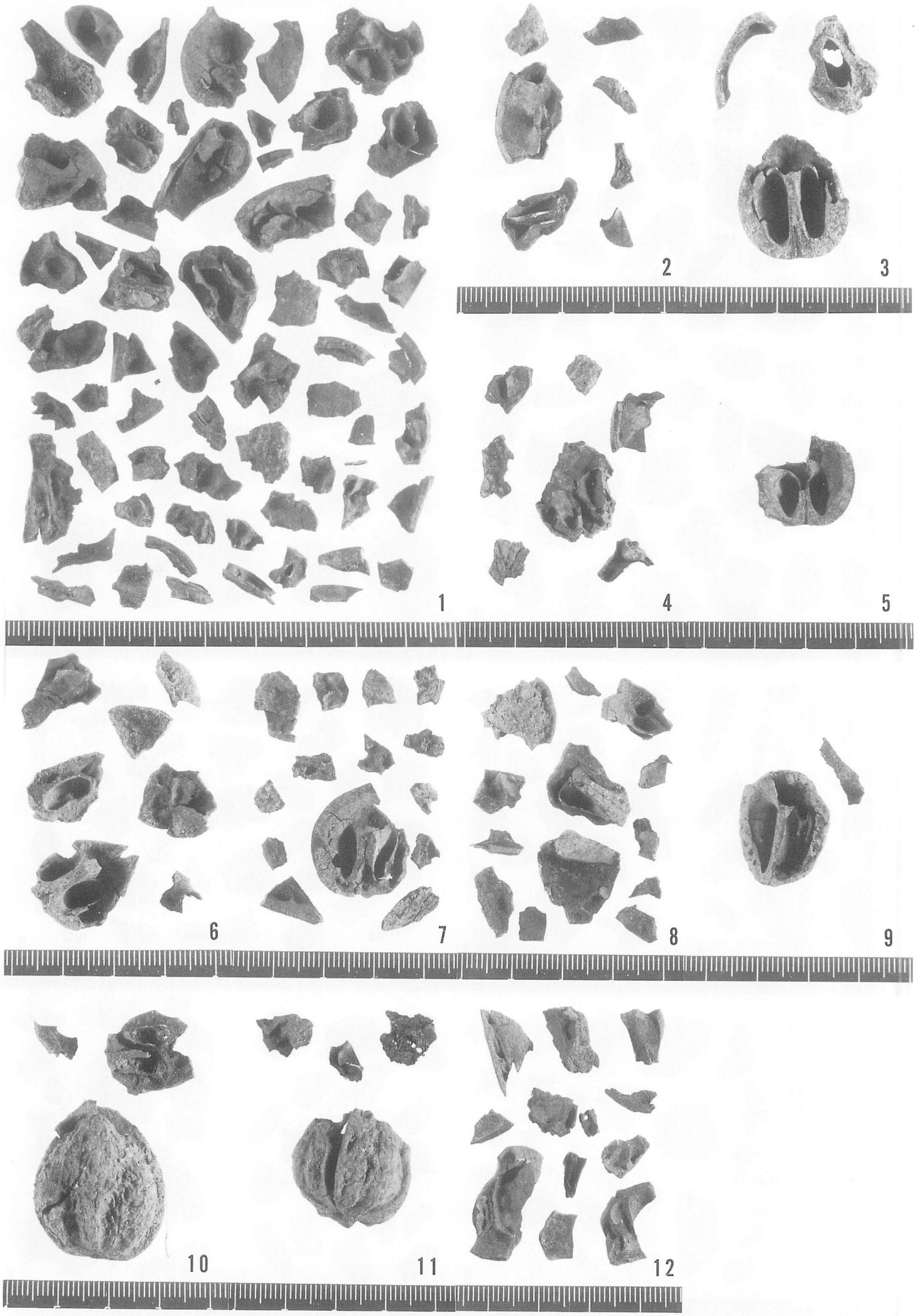
動物遺体２　（第１表参照，実大）
１－ａ：鹿角片，１－ｂ：シカ中節骨近位端



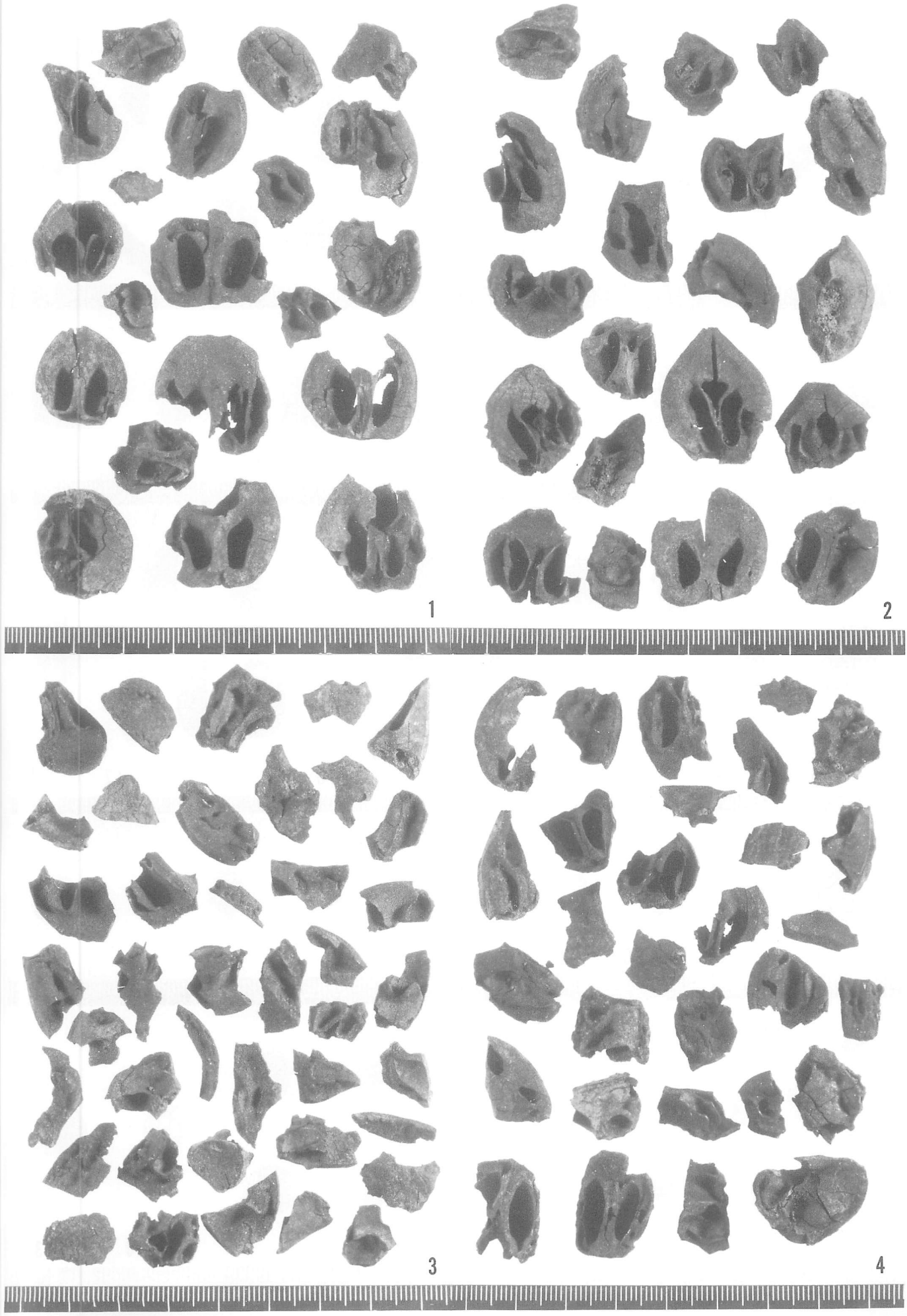
植物遺体１　オニグルミ１（第２表参照，実大）



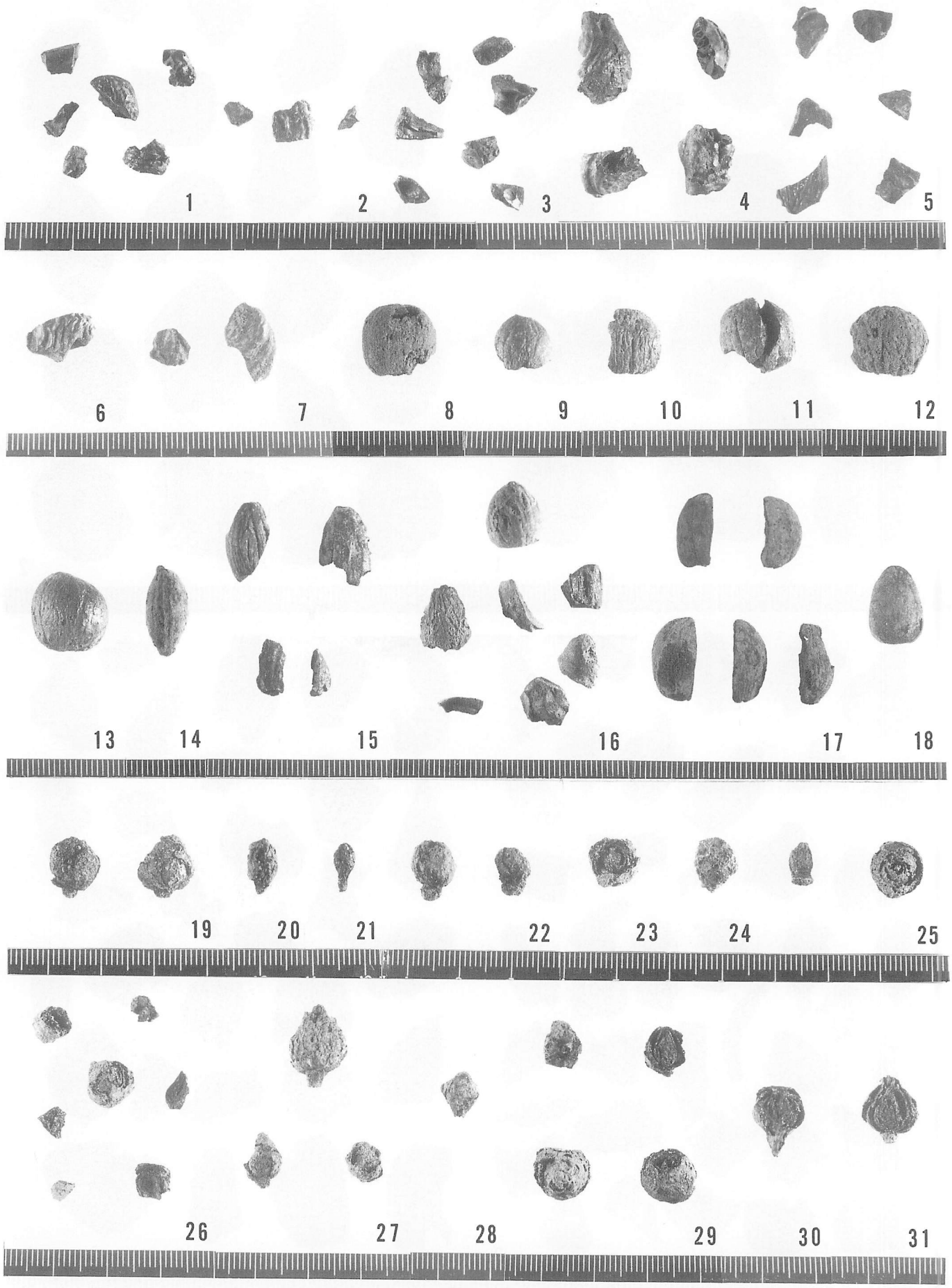
植物遺体2　オニグルミ（第2表参照，実大）



植物遺体３　オニグルミ（第２表参照，実大）

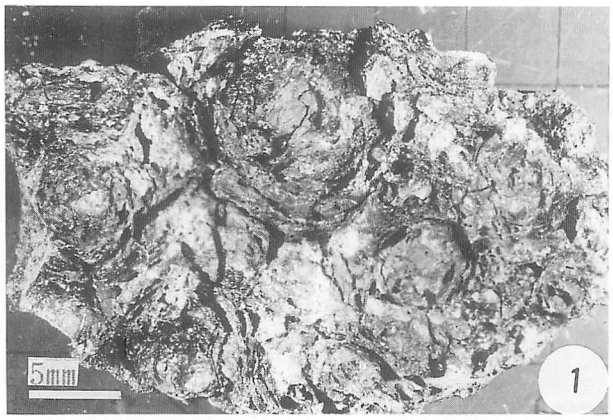


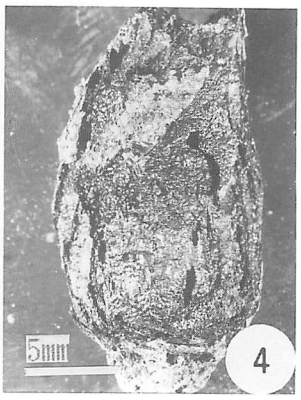
植物遺体4　オニグルミ4（第2表参照，実大）



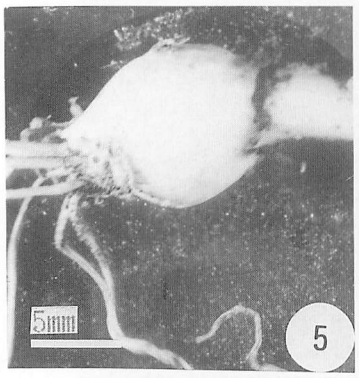
植物遺体５　（第３・４・６表参照，実大）
１～７：クリ，８～13：ドングリ類Ａ類，14～18：同Ｂ類，19～31：球根類

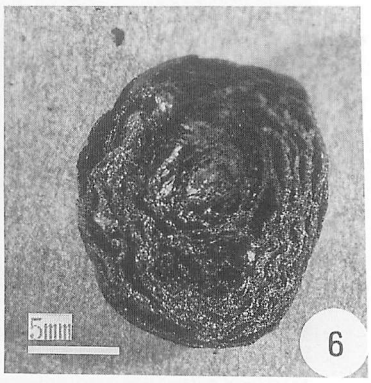
図版59　水呑場北・花鳥山・釈迦堂遺跡群出土鱗茎炭化物の実体顕微鏡写真

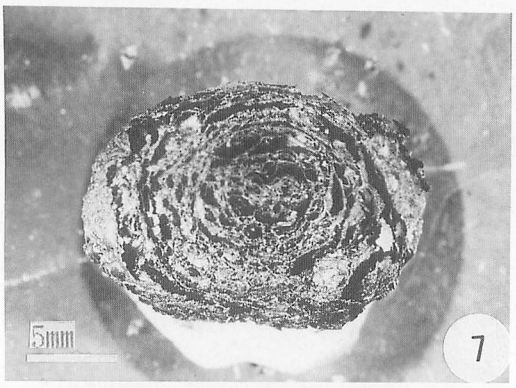


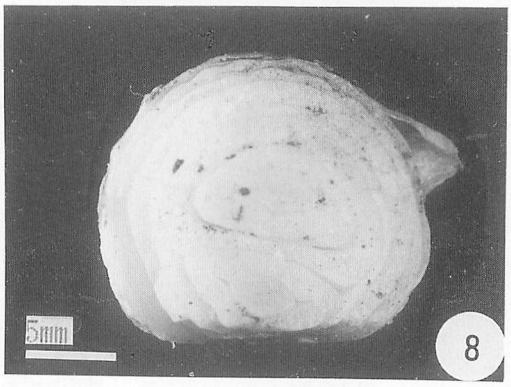


図版60　現生ユリ科およびヒガンバナ科植物の鱗茎の実体顕微鏡写真

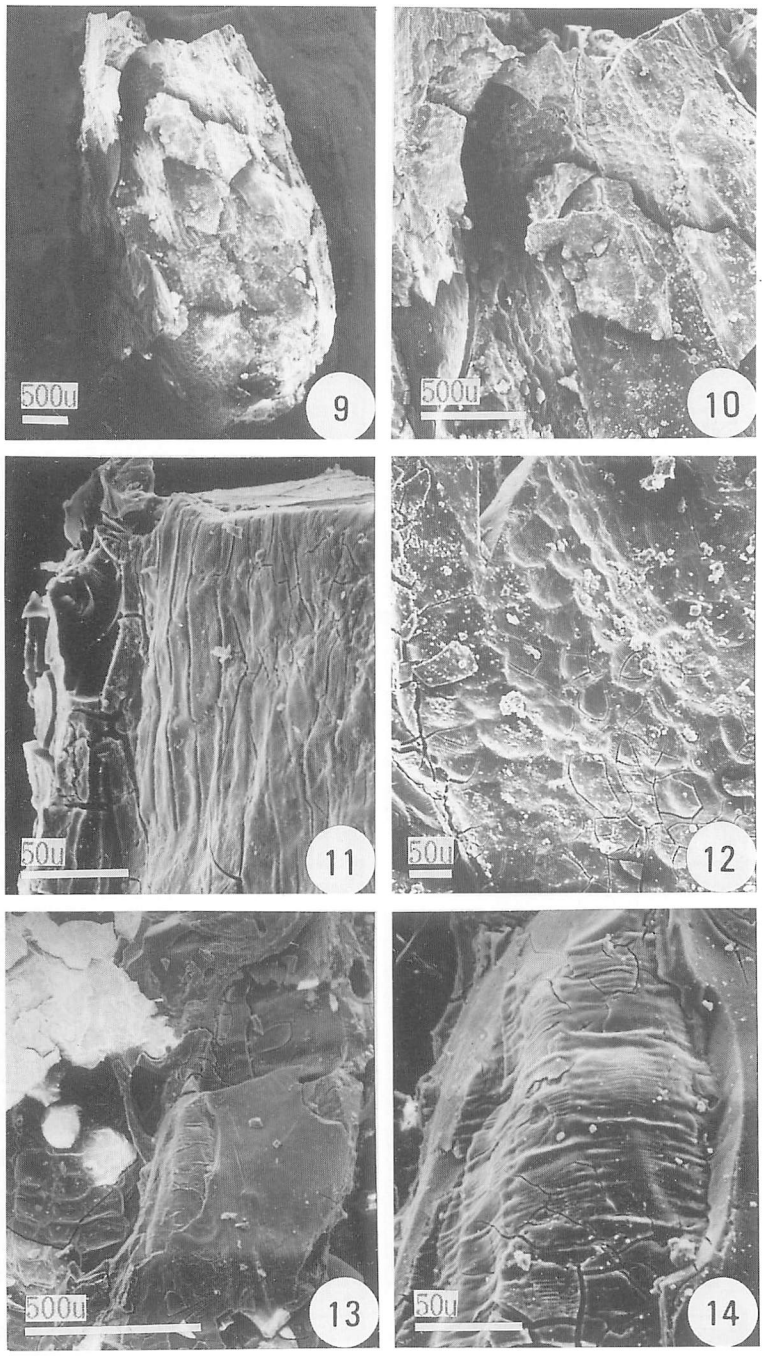




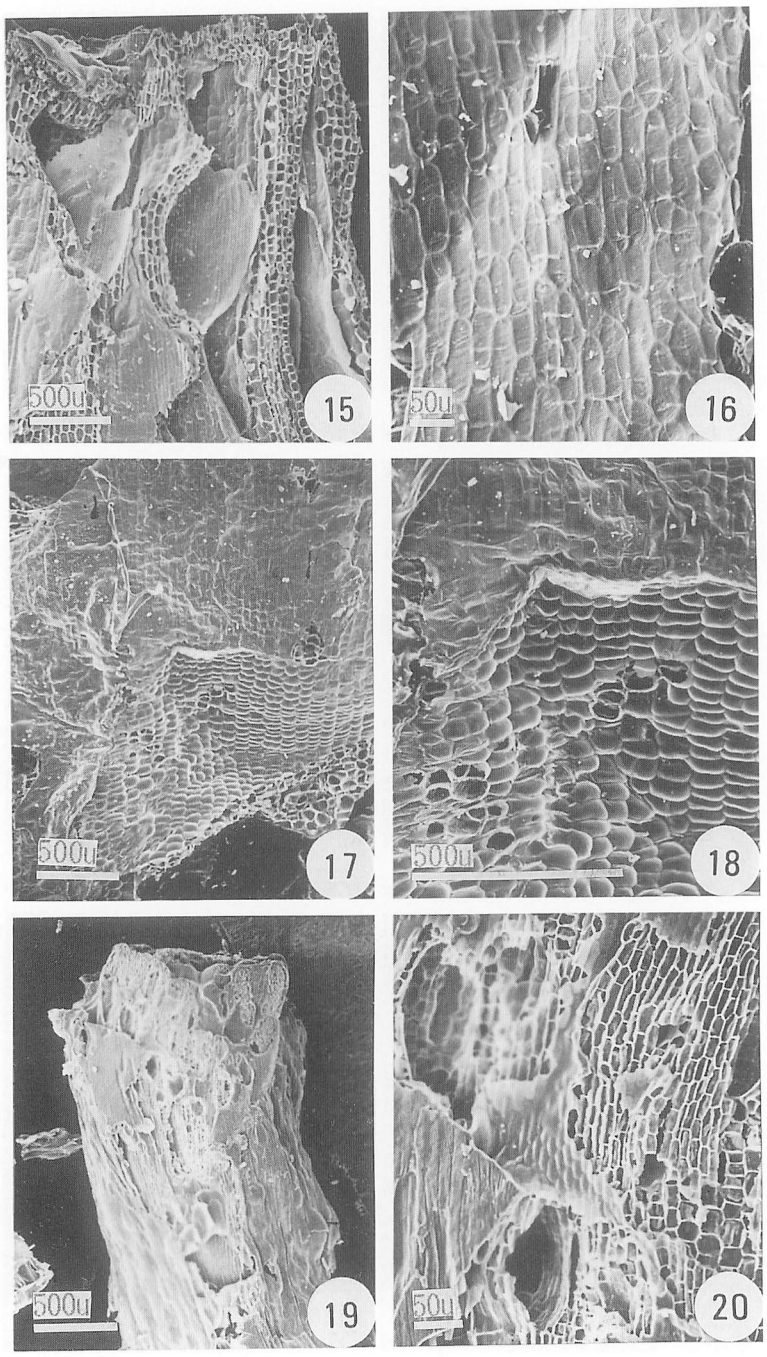




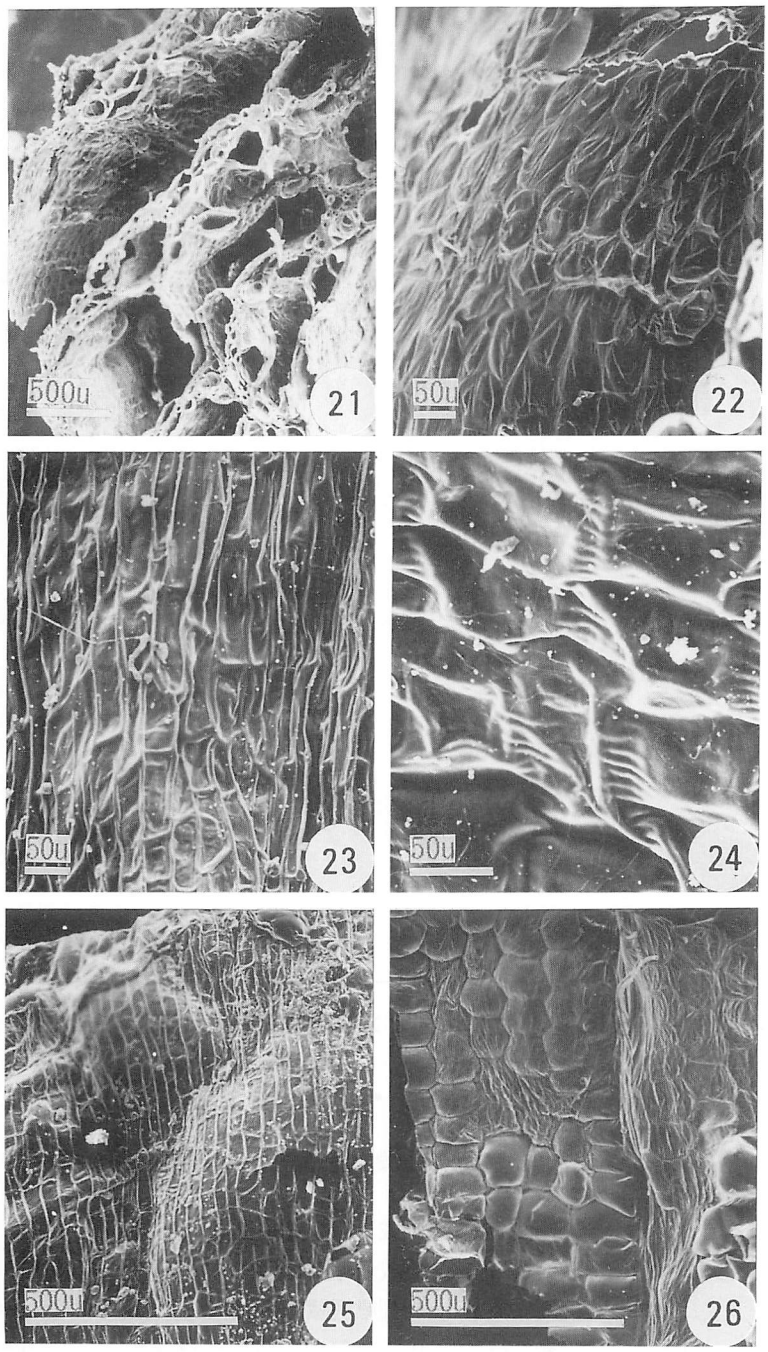
図版61　水呑場北遺跡出土鱗茎状炭化物の走査型電子顕微鏡写真



図版62　炭化した現生ユリ科鱗茎の走査型電子顕微鏡写真



図版63　炭化した現生ユリ科とヒガンバナ科の走査電子顕微鏡写真



山梨県埋蔵文化財センター調査報告　第45集

花鳥山遺跡・水呑場北遺跡

笛吹川農業水利事業に伴う発掘調査報告書

印刷日　平成元年３月10日
発行日　平成元年３月15日
編　集　山梨県埋蔵文化財センター
発　行　山梨県教育委員会
印刷所　㈱峡南堂印刷所